評議員

文學博士　萩野由之
文學博士　黑板勝美
文學博士　松本愛重
文學士　笹川臨風
文學士　菊池謙二郎
文學博士　三宅米吉

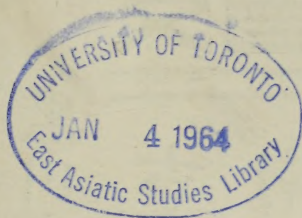
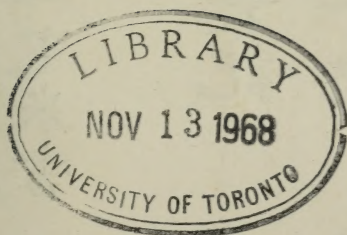
（イロハ順）

黑川真道編

國史叢書

古今武家盛衰記　二

南島變亂記　全

國史研究會藏版

解題

古今武家盛衰記　三十卷（一卷より廿五卷迄は之を前編に收め廿六卷以下を後編として本編に收む）

本書解題は、前編に詳なり。

南島變亂記　三十卷

本書は、寛永十四・五年に於ける肥前國天草・島原の騷亂を記したるものにして、此の一揆の騷動たるや、耶蘇宗徒を煽動して、以て事を擧げたるにより、宗教の團結力を以て、容易に平定すること能はず。幕府西國大名に令して、翌年遂に平ぐることを得たり。

其の原因は、此の國に流浪せる慶長浪人と稱するもの、時世を憤慨し、耶蘇宗徒を引入れ、領主に抵抗を企てしかば、領主百方之を鎮撫すと雖も、其の命に從はず、代官を殺し、遂に反抗するに至れり。是に於て領主如何ともする能はず。幕府西

國大名に命じて、兵力を以て之を平ぐるに至れり。耶蘇敎の嚴禁、今後益其の度を高めたり。

本書は、其の騷亂の始末を詳細に記したるものにして、變亂の濫觴及耶蘇敎の事より筆を起し、一揆大將分六人、所謂天草甚兵衞・天草玄札・大矢野作左衞門・葦塚忠右衞門・千々輪五郎左衞門・赤星內膳の經歷及家筋等、右六人の煽動により、五十三邑の鄕民悉く一揆に加はり、茲に大騷亂を起したる事、又其の騷亂に於ける諸大名の奮鬪、一揆の防戰の巧妙なりし事、立花勢・有馬勢の敗北、鍋島勢の勳功、あるは板倉內膳正の討死、松平伊豆守の出張等、普通一揆討伐の軍に非ず。伊豆守の智慧も、惡評を受けしは此の時なりき。然れども衆寡敵する道理なく、さすが一揆の奮戰も遂に叶はず、總大將天草四郞の父母は細川勢に捕はれ、城中十二人の評定頭山田右衞門の返忠あり、大將分も度々の戰爭に負傷し、或は戰死し、立籠れる一揆、勢日一日と迫れり。然れども彼の團結力は毫も變らず、依然抵抗を繼續せり。然れども黑田勢・鍋島勢の爲め、遂に城は陷落の悲慘となり、數萬の殺戮は

行はれ、茲に戰鬪は落着となり、夫々論功に筆を擱きたるなり。
本書に、附錄三卷あり。然れども此の役に直接關係なければ省略したり。讀者之を諒せよ。

本書作者詳ならず。但書き振の大膽なることは、卷一に、德川家康を指して慶長の老將軍といひ、又同書に、「忽ち西海に耶蘇の一揆起りて、暫く難城、慶長の餘燃を上ぐれども、何ぞ八島の治れる海水に敵せんや。然れども俊才奇士多く出でて、一隅に二年の動亂をなす。是又天下の盛事なり」と記せる如きは、德川時代に於て、幕府を憚るべき文章なり。然るを斯く思ふが儘に記せるは、大膽なる作者を想像せらるゝなり。されば作者も其の名を揭げざると、作時代をも記さゞりしならんと推察せらるゝなり。然れども本文一九四頁の條に、「千々輪五郎左衞門伊勢正宗の大太刀を打振り、寄手近藤仁兵衞が高股切つて打倒したる所に、作者の按文を加へたり。其文に云、「近代に神田白龍子が新刀銘盡井上和泉守國定、法體して井上眞戒といふ。俗是を大坂正宗といふとある。然る時は千々輪が家に

秘藏して、伊勢正宗といへるが、此類なるべし」と見えたり。本書作者が、神田白龍子を近代云々と記せれば、白龍子に少し後れたる人なることを知らる。白龍子は享保時代有名なる兵學家なり。されば是に依りて推察する時は、本書の作者は享保以後にして、凡そ元文以下寶曆時代の作ならんと考へらるゝなり。猶此の事は、諸君の敎をも竢つて決定すべし。

大正三年十月

黑川眞道識

例言

一、本編には、古今武家盛衰記後編並に南島變亂記三十卷を採收す。

一、古今武家盛衰記原本三十卷中、廿五卷迄を前編として採收し、本編には、廿六卷以下を收めて、其後編とせり。

一、古今武家盛衰記校訂上に就ては、前編既に詳述せる所なるを以て、再び之を錄せず。

一、南島變亂記は、原本片假名なるを、本編には悉く平假名に改めたり。

一、原本寫本にして魯魚の誤多く、眞字假字の記載亦亂雜にして、讀誦の平易を計らんが爲め、要せし勞力に至つては、實に容易ならざるものありき。加ふるに本書類本に乏しく、全く他書を參照するの外、同書の異本と校讐するの途なきを以て、今本編の如く晦澁の跡なきに至る迄には、校訂の反覆數回に及べるものもあり。就中第十七蜃樓の說中引用文(三一二頁)の如き、五雜爼の本文に據つて、先輩の意見に相

俟ち、辛うじて通讀し易きに至れり。

一、第十二の終末本文を缺けり。思ふに其の缺文は、數行の短きに止まるべしと雖も、對照異本の皆無なる、遺憾乍ら遂に之を補足するを得ざりき。

目次

古今武家盛衰記 二

南島變亂記

目次終

古今武家盛衰記卷第廿六

百二萬石餘　蒲生飛驒守氏郷

奥州會津若松城主從三位參議氏郷は、文武に達せし良將なり。先祖は天兒屋根命十九代の孫大職冠鎌足大臣より八代、俵藤太秀郷なり。秀郷は江州勢多橋に於て、龍神の爲に蜈蚣を射殺し、其謝禮に、龍宮城より十種の寶を贈らる。所謂太刀一腰・鎧一領・飛來達矢(ひらるし)と名付く旗一流・幕一走・卷絹一本・早小鍋一つ・首結俵一つ・庖丁一箇・童一人・鐘一箇なり。此時迄は田原藤太といひしが、爰に田原を俵と改む。鐘は三井寺へ納め、今猶あり。又露と名付し重代の硯を、竹生島の辨財天に奉納す。其外の寶物は、秀郷の子孫の家々に相傳ふ。先づ龍宮より來りし童龍太郎・龍次郎と、飛來達矢の鎧は、下野住人佐野家に傳はる。彼童が子孫は、必ず身に鱗ありて、力強し

となり。太刀は伊勢住人赤堀家に傳ふ。卷絹は衣裳にすれども盡きざりしに、末を見んとて卷解したりしより、延ぶるといふ事なく終に盡きぬ。早小鍋は、飯を煮るに忽熟す。是江州の住人蒲生家に傳はりしが、後鍋の底かけ計り殘りぬ。首結俵は、中なる米取れども〳〵、乏しき事なかりしに、承平年中秀郷敕を蒙り、平貞盛と共に逆臣將門を誅伐し、鎭守府將軍從四位下兼武藏守に敍任す。其合戰、秀郷の陣營にて、婢彼俵の底を叩き、米を開きしかば、俵の底より、一尺計りの小蛇出でて逃失せけるが、其より後は米更に出でず。今の世に至る迄、俵の底を叩かぬものとは、此因緣と言傳ふ。是よりして秀郷の末流は、陣中に堅く女人を禁制す。秀郷は朝に事へて卒す。勢多に一社を建て是を祭る。彼門葉勢多橋を過ぐるには、笄・小刀・鞭・扇子の類を水中に投入れ、禮拜して通るに、必ず黑雲起り、雨少しなりとも降らずといふ事なし。誠に奇特といふべし。其末葉國々に多し。先づ下野には小山・長沼・佐野一黨、上野には結城、奧州に秀衡が一族・佐藤・伊達、越後に內藤、伊勢に赤堀、近江に蒲生、其外尾前・須前・松田・井田・武藤・須藤・大友・川村・波多野等なり。此家々へ彼寶物

傳はれり。抑秀郷に子四人あり。嫡千國・次郎千種・三男千晴、是小山・長沼・結城の祖なり。四男千常と號す。千常より六世の孫惟俊は、平相國全盛の時に當りて、始めて奥州より上洛し、故あつて江州蒲生郡を領し、始めて蒲生太郎と稱す。弟五人あり、和田次郎・小谷三郎・室木四郎・儀俄五郎・松田六郎といふ。惟俊は、日野の牧音羽といふ處に城居し、幕の紋は立鶴を嫡家とす。一族の輩は、鶴の丸を以てす。惟俊が嫡蒲生太郎俊賢は、右大將源君頼朝に屬し、一族共に繁昌し、俊賢七代の孫秀朝は、建武年中將軍尊氏に屬し、屢戰功を顯し、其弟蒲生將監高秀・儀俄彈正秀村は戰死す。明應の頃蒲生貞秀と聞えしは、秀朝に七代の孫なり。入道して智閑と號し、武道の外、和歌に名を知られたる人なり。其子左衞門督賢秀、其子忠三郎と號し、後蒲生參議從三位兼飛驒守氏郷と稱するは是なり。足利代々、蒲生累世日野牧音羽に城居し忠勤し、後信長・太閤に屬す。中にも飛驒守氏郷は太閤に屬し、無雙の忠節あるに因つて、天正十二年十萬石加增、勢州松が島城を賜ふ。是迄舊領八萬石たり。一説、本領六萬石加增八萬石、凡て十四萬石云々。都合十八萬石となる。同十八年小田原合戰にも大功あり、太閤

甚だ感賞して、奥州會津若松城六十萬石を賜ふ。同十九年同州九の部修理亮といふ者、一揆を起す故、太閤へ訴へ是を討つ。同州佐沼城主木村伊勢守は、九の部に從はず氏郷を賴む。氏郷是を救ひ、大に苦戰して是を破る。太閤彌其功を感じ、米澤をも加增し、凡て會津・仙道・米澤・白川を合せ、百二萬餘石を賜授し、官從三位宰相に昇進す。委細蒲生盛衰記に見ゆ。爰に石田三成、心中に豫め企つる故、氏郷の武勇天下に輝き、且太閤の愛賞あるを猜み、密に上杉の老臣直江山城守兼續と相譚じ、瀨田掃部方へ、氏郷を茶の湯に招き、食物に毒を加へ是を進めしかば、氏郷是より煩ひ付き、遂に文祿四年二月七日、帝都に於て逝去、時に齡四十なり。辭世に、

秀郷毒殺せらる

限あれば吹かねど花は散るものを心短き春の山風

紫野大德寺和尙を請じ火葬し、法名昌林院殿前參議從三位高岩忠公大禪定門と號す。紫野に一寺を建て昌林院といふ、今にあり。息鶴千代丸、此時十三歲にて家督を嗣がしめらる。且蒲生の家臣會津十五人の城持、幷に五手組・六手組・七手組の士迄、銘々御朱印を賜はり、亦隣國の諸侯へ御敎書下り、鶴千代大切に守立つべき旨命

せらる。斯くて鶴千代丸家督の謝禮の爲め上洛。太閤其館に赴かれ元服せしめ、羽柴藤三郎秀隆と號す。後秀行と改む。幼少の時秀倶といふ。母儀は右大臣信長の女なり。今年秀行飛驒守に任ず。翌慶長元年從四位下侍從に進む。時に十四歳。太閤自ら媒し家康公の聟とし、且隣國なれば、若輩の秀行の爲め、國政家法萬事相譚然るべき旨命ぜらる。石田是を聞きて彌愁へ、先づ秀行を倒さんと謀を回らし、彼老臣米澤四萬石の城主蒲生四郎兵衞鄕安を呼上せ、密事を語り、會津の家中國政等、其方心任にすべき旨上意ありと申渡し、太閤此時病中なれば、潜に御朱印を盜出し、鄕安に與ふ。蒲生悅び會津に歸り、權に驕つて大に邪威を振ひ、家老物大將の隔なく、己が心に忌嫌ひ、不和の者は罪に行ふ。殊に百々八右衞門といふ大將をば、會津城内にて闇討す。偖こそ家中騷動し、蒲生源左衞門を始め、數代の老臣評定し、鄕安が惡行を、家康公へ言上すれば、驚き給ひ、家中の諸士を召し御詮議あるに、思々に黨を組み、御思案にも餘る程なれば、此公事、内々にては分け難しとて、太閤に訴へ給ふ。太閤卽會津の諸士を召し、一々糺明あるに、四郎兵衞が惡行紛れなかりしかば、

加藤主計頭淸正に預けらる。淸正此時朝鮮在陣なれば、彼國へ渡海すべしと命ぜらる。其外の諸士も、罪の輕重次第を糺さる。亦秀行へは、前田德善院玄以を以て、氏鄉數度の軍忠を感じ、家督相違なく嗣がしめらるゝ處に、家中大に擾亂す。會津の守護職覺束なし。依つて秀行幼少の內は、先づ會津若松百二萬石召上げられ、野州宇都宮へ移し、十八萬石を賜ふ。成長の後、取立つべきの旨演說す。秀行宇都宮へ移り年月を送る。太閤薨後、家康公へ忠節を勵まる。因つて慶長六年八月、再び會津に移り、六十萬石を賜はり、從三位宰相に進み、同十七年五月十三日卒去、齡卅なり。嫡男下野守家督を嗣ぎ、秀忠公より忠の御字と松平氏を賜はり、松平下野守忠鄉と號し、從三位參議に進み、御一門の部に列りしが、疱瘡を煩ひ、療治叶はず、會津にて卒去、時に廿五歲。法名見樹院殿得譽玄光と號す。是時に寬永四丁卯年正月四日なり。

令嗣なき故、會津六十萬石沒收。然れども此家斷絕すべき儀にあらずとて、舍弟蒲生中務少輔を召出され、豫州松山城廿萬石を賜はり、是も忠の御字と松平氏を拜領し、松平中務大輔忠知と號す。忠鄉と忠知の母儀は、家康公の御女故、御一門の

部に列す。是より先慶長十八年、諸大夫となり、元和元年中務少輔に進み、同九癸亥年八月十八日、從四位下中務大輔となり、寛永三丙寅年八月八日侍從に昇り、翌年二月十日、豫州廿一萬石拜領あり。寛永十一甲戌年八月十八日、卅歳にて卒す。興靈院殿華譽宗榮と號す。忠知の內室は、內藤左馬助政長の女にて、寛永四丁卯年七月五日緣組調ひ、翌年戊辰七月五日婚禮あり。此內室懷胎の旨言上す。是に因つて其子男子ならば勿論、たとひ女子たりとも、家督相違なく賜はるべしとありければ、家人等喜悅し、月日を送りて女子出生す。諸臣勞はり守立つるに、三歳に及んで早世し畢ぬ。爰に至つて蒲生の子孫、永く斷絕しけるぞ痛はしけれ。忠知の室は長壽にて、正壽院と號し、內藤能登守より合力を受け、江戶百姓町に住し、元祿十三庚申年六月廿六日、八十五歳にて卒す。蒲生家の事、委しく蒲生盛衰記に見えたり。

評に曰、蒲生家は累世朝廷公方に仕へ、殊に氏鄉に至つて武名大に輝き、諸人羨み歎じけるに、斯く斷絕しければ、皆驚き惜み、樣々に評論す。或人曰、是元祖秀鄉、平親王將門を討ちし報なり。將門、秀鄉に謀殺されしを憤り、秀鄉が門葉悉く取殺さん

と、其靈大に祟をなせしかば、勅して神田大明神一說津久土明神云々と武州に崇む。爰に於て其靈少しく憤を止むと雖も、蒲生家繁榮に隨つて、必ず障碍をなすと言傳ふと。又或人曰、秀鄕の末葉多し。何ぞ蒲生家に限つて其祟を得ん。案ずるに氏鄕は、一己の勇に誇つて、曾て仁心なし。天正十二年、信雄・太閤國を爭はるゝ時、信雄の味方濃州加々井城主加々井駿河守重宗・其子彌八郞秀望父子を攻めんとて、太閤大軍を率し、同年五月五日是を圍まる。城兵善く拒ぐと雖も、大軍に氣を屈し、加々井父子、諸士と相談し降參を請ふ。太閤許さず。城兵是非なく必死と定め大に戰ひ、寄手多く討たれ、退いて遠く圍んで城を攻む。五六日を經けり。加々井父子每度勝利を得ると雖も、籠城長からざる事を察し、諸將と相議し、敵陣に夜討し立退かんとて、先手は嶺久次郞・千種三郞左衞門・林新右衞門・上木淸九郞、其次には楠十郞・神戶與五郞・濱田與右衞門・嶺與八郞・小泉甚六・小坂彥九郞・加々井父子は後陣を押へて、旣に天正十二年五月九日子の刻、大手の門を出で敵陣に火を掛け、火急に攻入る。諸將思ひ寄らず、高鼾かいて寢ねたる者共大に驚き、闇さは闇し、周章する事斜ならず、同士討

しけり。斯る中にも氏郷の陣中計り、靜り返つて音もせず。松明數百燃し立て、白晝に異ならず。氏郷を始め家臣上坂左文・小坂甚助、其外諸卒に至る迄、物具堅め相詞相印を定め、大に戰つて敵を破る。此事後に聞けば、夜討の先手千種三郎左衛門は、氏郷の爲には母方の叔父なれば密に內通し、氏郷待儲しけるとなり。此時諸人評しけるは、氏郷誠に忠を思はゞ、是を諸將へも告ぐべきに、一人の功を思ひ、若干の味方を殺させ、剩へ大將加々井父子を落す事、氏郷の所爲なり。此人の子孫長久ならじと、擧つて誇り合へり。又同年六月十三日、氏郷江州より勢州松戸島の城を賜はり六萬石加增、都合十二萬石（本知六萬石といふ）となり、入部する時法令を出して、路次の行粧列を亂さず、且つ馬を駐めて、沓打替ふべからずといふ。爰に福滿次郎兵衛といふ者、屢軍忠を盡し、氏郷も愛し厚く恩賞を與へしが、此日福滿立駐り馬の沓を替ふ。橫目の者氏郷に告げしかば、法は重し人は輕し。其儘差置くべきに非ずとて、外池甚五左衛門に命じて、是を斬らしむ。福滿が妻子是を聞きて、氏郷を大に恨み死しけるが、氏郷・秀行・忠知の代迄、夜々福滿が妻子幷に鬚男一人來り、邪魔をなしけると

ぞ。此鬚男の事は、天正十八年春、太閤、北條氏政父子を攻めんとて、諸侯を引率し向はる。此時氏郷は、自ら先陣より後陣へ往行し、其行粧を下知す。然るに先祖秀郷より、數代相傳はる鯰尾の甲あり。其甲を甲立に立てさせ、中間男に持たせしが、彼れ定めし居所に違へり。氏郷怒りて、いかに汝は下臈なりとも、敎令を聞覺えよ、其掟を守れとて、自ら其居所を指南せしに、彼亦私用ありて、少し居所を違へたり。氏郷大に怒りて、其私用を重んずる大科、萬人の見懲にせんとて、自ら太刀を拔きて是を斬殺す。彼甲といふは甚だ重く、殊に甲立に立てさせたれば、手替り三四人もあらば、法令も善く調はん。瘦男一人にて、長途を經來りしなれば、少しは居所も違ひなんに、仁心なき主人やと訇りて死しけるが、是亦數代恨を含みけるとぞ。又秀行も仁心は曾てなかりしとぞ。秀行會津を再び領し、入部して、領內の只見川といへる大河に至り、いかなる所存にや、領分の土民に下知し、川上より毒流しせしめしかば、彼川に棲みし生類、大小となく悉く死し、或は毒に醉うて流るゝもあり、中にも恐しき毒蛇數多死して川下へ流る。此毒流しあつて三日目、會津領六十萬石の內計り、

七日の間打續き暴雨大地震雷電す。此時民家多く倒れ、人馬夥しく死すといへり。又會津にて大科の者あれば、毎度釜煮の刑に行ふ。夫れ釜煮の刑は、大臣將軍すら、憚ありと愼み給ふとなり。文祿四年の頃、石川五右衞門といへる奥州石川の者、大重科人にて、後京都へ登り、猶諸人を苦しむ。太閤京都所司代諸國の守護に命じて擒にし、其母幷に同類廿餘人迄搦捕り、三條河原に於て烹殺さる。是をだに釜煎の事、公卿の官にて、太閤其憚を知らずと、世人呵き嘲哢せりとかや。況秀行、斯様の古實も辨へず、我威に任せ法を知らずと、人多く誹れりとぞ。亦忠知は、豫州松山城を賜はり、入部して領內を巡見す。城下近所に眞言宗の大寺あり。忠知其寺に入り、眞言祕密の經を披見し、講釋を望む。住僧答へて、是一宗の祕經講釋、猶更祕事なれば、其事叶はずといふ。忠知怒りて、彼住僧を追放し、家人の內七官といふ唐人を移し居らしむ。然れども彼れ日本の法事を知らず、後に不行迹して逐電せり。忠知又國政に非法ありと諸民疎じ、いつか此守護斷絕せよかしと、潛に訇り願ひしとなり。數代斯様の不仁を行ひし報にて、蒲生家永く斷絕しけるにやと評しけり。

一萬五千石　鍋島和泉守正茂

是は鍋島加賀守直茂の次男にて、駿河守淸房の孫なり。和泉守幼名伊平太といふ時、家光公へ召出され、總州にて五千石を賜ふ。亦兄信濃守勝茂より內證にて、一萬石を合力す。卒後子孫平太家督を嗣ぐ。病身故實子なからん事を恐れ、信濃守勝茂の四男刑部少輔勝繼を養子とせしが、仔細あつて孫平太勝茂と不和になり、父の代より合力の一萬石を添へ、養子勝繼を信濃守方へ返し義絕せり。其後孫平太老年に及んで實子出生すれば、寬文四年十二月廿七日隱居して、兒帶刀に五千石を讓り、今專ら勤仕す。

私に曰、孫平太勝茂と不和になり、且義絕の事、諸人普く知れり。其上遠慮の事あつて態と記さず。

廿四萬石　鳥居左京大夫忠恒

忠恒は、左京大夫忠政の長男、彦右衛門元忠の孫なり。祖父元忠は、天下御草創の始より、忠戰武功を盡す中にも、景勝御退治として、關東御發駕の節は、元忠を留めて伏見城を守らしめ給ふ。元忠、石田が大軍を引受け、千變萬化の勇を振ひ戰死す。家康公、其忠死を憐惜あり、長男忠政に御懇の上意あり。忠政亦父に劣らず忠を勵み、關原にて戰功あり。因つて十萬石を賜ふ。私に曰、父元忠は、上總國矢佐城四萬石を領す。然れば今度六萬石の御加增か。元忠は伊賀元信の子なり。其後羽州山形城主となり、大坂兩御陣に戰功あり。因つて十四萬石の御加增、奥州岩城郡平城を賜はり、凡て廿四萬石となる。寛永三年八月十九日、從四位下侍從に昇り、同五年九月五日、六十二歳にて卒す。息左京大夫忠恒家督を嗣ぎて、程なく卒す。令嗣なきに因つて領地沒收。然れども舍弟主膳正忠春を召出され、信州高遠城三萬二千石を賜ふ。忠春卒後、息左京亮家督を嗣ぐ。然るに近代仔細あつて所領減少し、高遠城も召上げらる。諸人普く知る故、其次第を記さず。誠に殘多き事共なり。

十五萬石　本多上野介正純

正純は、野州宇都宮城主、御當家累代忠節を盡す中にも、父佐渡守正信は、家康公隨一の寵臣、天下國家の御政務御議譚、嘗て預かり聽かずといふ事なし。正信の忠言を集めし、本佐錄といふ書あり。見つべし。正信は本上總廳南にて、一萬石を領しけるが、股肱の忠臣たるに因つて、累りに御加恩を蒙りて卒す。正純亦父と共に忠勤を盡す故、奉行職仰付けられけるに、何なる天魔の入替りたるにや、異心の企露顯して、所領歿收、出羽州由利へ流さる。後又同州秋田へ移し、佐竹修理大夫義隆に預け給ひしが、一生厚免なく彼地に蟄死す。正純配所にて一男子を儲く。此事上聞に達し、憐み給ひ、頓て召出され、本多忠左衞門と號し、數俵を賜はり、剩へ程なく諸大夫に進み、御加增賜はり、駿府御定番仰付けらる。

私に曰、上野介所領歿收逆意の次第、當時遠慮ある故に識さず。

五萬石　德永左馬助量重

父下總守壽昌入道は、信長取立の人、後太閤に屬し、軍功を以て三萬石を賜ふ。後家康公に仕へり。息左馬介と共に會津へ供奉し、其より關が原に向ひ戰功あり、二萬石御加增、濃州高須城を賜ふ。卒後左馬介家督を嗣ぎて、大に淫酒に耽り、公勤を怠り家務を知らず。家臣等樣々諫むれども用ひず。我れ聞く魏武帝短歌行に、人命幾程もなし、酒を飮んで歡樂すべし。一生は朝露の如し、去る日は知り難しと。夫れ愁勞を忘るゝ物は酒なり。我も父と共に辛苦戰功して、五萬石を領す。今太平の日に樂んで、昔の疲勞を忘るゝなりといふ。其年左馬介、休息の爲とて在所への御暇賜はり、高須へ歸り猶婬酒に長じ、不利といふ愛妾に戲れ、參勤の節を失し、且遊覽に月日を送り、彌放縱の行迹果して上聞に達し、所領悉く沒收。爾し乍ら息下總守昌勝に、新規に千俵賜はり、量重此時に當つて、後悔すれども甲斐ぞなき。昌勝卒後、息賴母家嗣を嗣ぎけり。

一萬石　池田又八郎董時

是は越前守薰影が長男、內藏介重政が孫なり。重政が時、播州新宮一萬五千石を賜はり卒す。其子越前薰影家督相續の時、願うて舍弟帶刀長政に五千石を配分す。薰影卒後、又八郎薰時、寬文三年二月家督を嗣ぎて、同十年疱瘡にて卒す。令嗣なく領地歿收。此時同氏治左衞門尉召出され、新規に三千石賜ふとぞ。

一萬五千石　內藤石見守信廣

是は豐前守信成の次男、初め主稅介と號し、五千石の配分を得、大番頭を司りしが、慶安元戊子年二月三日一萬石御加增、大坂御定番となり、彼地に赴き、與力廿五騎同心百人を支配しけるが、其節召抱へたる與力椎名七兵衞といふ者、切支丹宗なりと訴人あり。上聞に達し椎名を捕へ、江戶へ來り御詮議あるに、切支丹宗門に紛れなかりしがば、信廣不吟味の罪に座し、御役召放され、御加增一萬石も歿收。又彼椎名は、

岡田淡路守口入なりしが、岡田も御勘氣を蒙り、信廣と共に閉門す。斯る折節信廣の居宅より出火あり、數十箇所燒亡すれば、其科猶重く、保科肥後守正之に預けられ、奥州會津に赴く。其後程經て厚免ありしが、江戸に歸らん事を恥ぢて、會津を離れず、遂に正之の家人となる。信廣二子あり。嫡子は內藤伊勢守信充、二男は松平縫殿頭乘次の養子となり、松平左近大夫乘直と號す。乘直其性淸直なり。縫殿頭の養子となつて後、乘次に實子出生して、則縫殿頭直次と號す。因つて父乘次末期の時、御恩祿七千石の內四千石は、嫡養子左近大夫へ、三千石は二男縫殿頭へ配分を願ふ。願の通り仰付けらるゝと雖も、左近大夫御受申さず。臣は養子なれば三千石賜はり、尤庶子に仰付けられ、四千石をば實子縫殿頭に賜はるべしと願ふ。縫殿頭亦言上すらく、臣實子たりと雖も、一度兄とし事へし左近大夫を、庶子にせん事勿體なし。殊には亡父遺言も背き難し。唯々父乘次願の通り、仰付けられ下さるべしと。乘直又曰く、さあらば配分の四千石を直次へ讓る。我は出家して養父の菩提を弔はん。直次曰く、兄出家せられれば、我れ亦忽出家せん。所詮兄弟の配分七千石を獻上せん

と、互に爭ひ讓り御請せず。將軍家御感淺からず。兩人が所存神妙なり。然らば三千石を嫡左近大夫乘直、四千石をば縫殿頭直次に賜はる。尤直次は庶子分たるべしと仰出されければ、兩人の願一つづつ叶ひ、難有しとて共に御請せり。偖左近大夫は、慶安元戊子年十二月廿二日、御扈從組番頭となり、寬文九己酉年七月廿七日二千石御加增、駿府御城代となり、延寶四丙辰年四月廿八日、老衰の願に因つて御役免許。同十二月十一日肥前守と改め、同五丁巳年三月七日、家を息內匠頭乘綱に讓り隱居し、同十一月二日、六十八歲にて卒す。江戶赤坂淨土寺に葬す。乘綱は御書院番頭を司り、是も御役免後、貞享五戊辰年五月廿三日卒す。其子小五郎家督を繼ぎ、專ら勤仕す。

縫殿頭直次は、御扈從番頭より、御書院番頭となり、程なく移りて大番頭となる。此時御役料二千俵を御加增、地方として賜はり、凡て六千石となる。其後御留守居年寄となり、又貞享元年二月、大坂御定番仰付けられ、一萬石御加增。然るに同四丁卯年八月朔日、御城中にて卒す。時に齡五十七といふ。息左七郎家督を嗣ぎ、從五位

下左近大夫に任ず。其後石見守、玄蕃頭と改め、後又縫殿頭乗成と稱し、元祿七甲戌年九月、大坂御定番仰付けられ、今専ら勤仕す。

内藤石見守信廣の嫡伊勢守信充は、五千石にて召出され、延寶三乙卯年五月廿三日卒す。三子あり、嫡市之助は、内藤豐前守信良の養子となり、紀伊守信勝と號す。二男吉十郎は家督を嗣ぎて、主膳正信清と號す。三男は三彌信之といふ。後靭負、又兵庫と改め、兄主膳正卒し、實子なき故、信之養子となり家を嗣ぐ。是も元祿二年十一月十日卒し、實子なく、兄紀伊守信勝の子勝之助を養子に願ひ、家督たらしむるに、同七甲戌年十一月五日早世し、爰に至つて石見守信廣の家永く斷絕せり。世人如何なる報にやと惜み合へり。

古今武家盛衰記卷第廿六終

古今武家盛衰記卷第廿七

松平陸奥守綱宗逼塞の事

松平綱宗隱居

松平陸奥守綱宗は、常々の不行迹上聞に達し、萬治三年七月十八日閉門仰付けられ、同八月廿五日、酒井雅樂守忠淸の館へ、保科肥後守正之・阿部豐後守忠秋・稻葉美濃守正則、御目附には兼松下總守政之會合し、陸奥守親類立花飛驒守忠茂・伊達兵部少輔宗勝・田村隱岐守宗良・太田備中守資宗、幷に家老片倉・茂庭・原田・大條・奥山等を召し、上意の趣申渡されけるは、綱宗常々の不行迹不屆千萬、今度領地召上げらるべしと雖も、父正宗忠勤を抽んでし故を以て、息龜千代に家督相違なく賜はり、綱宗は隱居逼塞仰付けらる。伊達兵部少輔・田村隱岐守は、龜千代幼少の間後見として、國政家法に預かるべし。最家老等龜千代を能く輔佐すべし。誓紙差上ぐべき旨申渡さ

る。衆僉謹んで命を受く。其起請文に曰、

陸奥守儀病者に付、逼塞被仰付候處に、幼少の龜千代に、大分之領知無相違被下置之。家來之者共別而難有奉存候。然者龜千代儀大切に存、家老之者共萬事申合せ、守立可申候。隨成人御奉公之筋目忘却不仕樣に、連々可申聞事。

乍恐奉對公儀毛頭表裏別心仕間敷事。附不依何時御目付被遣候節、萬事申談疎略仕間敷事。

雖爲勿論公儀御仕置御法度書之趣違背仕間敷事。

萬一御隱密に而被仰聞儀御座候者、聊以他言仕間敷候事。

右之條々雖爲一事於致違犯者

罰文

萬治三年庚子十二月六日

片倉小十郎

原田甲斐

茂庭周防

奥山大學
右各血判

酒井雅樂頭殿
松平伊豆守殿
阿部豐後守殿
稻葉美濃守殿

斯くて寛文九年十二月九日、龜千代は御前に於て元服し、松平氏と綱の御字を賜はり、松平陸奥守綱基と號す。之に依つて父綱宗は、若狹守に改む。爰に後見伊達兵部少輔宗勝邪威を振ひ、非道の政事甚だ多し。此宗勝は、正宗の十男にて、家光公正保元年十月召出され、三萬石を賜ふ。又田村隱岐守宗良も、正宗の息綱宗の舍弟なる故、後見仰付けられけり。時に里見十左衞門といふ忠士あり。扈從頭（始は目付役たり）を勤めけるが、書狀に數十ヶ條を記し、宗勝を諫むれども、其返書の趣、嘗て用ひざる旨なれば、一封の條目を認め、宗勝が惡行を具に原田甲斐に告げ、猶宗勝を諫むと雖

も聞かず。剰へ原田をも語らひ、里見を惡人にいひなし、死刑に行はんと評議すれば、家中彌騷動し、種々の流言止む時なし。又伊達安藝宗重は、陸奥守の一族なりしが、是を聞きて再三書狀を贈り、是を諫むれども聞入れず、却て怒りければ、宗重熟思すらく、宗勝内々にて諫むとも聽入れじ。所詮御老中へ言上し、諸人安座せしめんとて、委細に訴狀に記し、寛文十一年二月是を訴へければ、板倉内膳正宅にて、土屋但馬守列座し、彼訴狀披見し、安藝を召して其詞を聞き、其後陸奥守家老柴田外記・原田甲斐を召して詮議あり。猶又仙臺より古内志摩を召寄せ、三月廿七日酒井雅樂頭館にて、御老中殘らず列座、陸奥守公儀申次の島田出雲守・大井新左衞門尉も、家老共の案内者として一人づつ呼出し、其席に列す。然るに伊達兵部と原田甲斐心を合せ、惡行せしに詮議究り、家老共退出し、次の間に居りしが、原田甲斐は惡行露顯し、罪科遁れ難く、是偏に安藝が言上せし故とや思ひけん、重ねて申上度事ありとて、御老中の前へ出でけるが、立歸りて何の仔細もいはず、伊達安藝を只二刀に斬殺し、直に進んで御老中の前へ斬つて掛る。柴田外記是を見て、太刀を拔いて原田を一刀

斬るに、原田怯まず、外記にも深手を負はせたり。此時陸奥守聞番蜂屋六左衞門其席に在り、走寄りて後より甲斐を組留むれば、雅樂頭臣石田彌右衞門・太田伊兵衞、其外當番の諸士、驚きて座中へ馳出でけるが、敵味方の分を知らず、周章誤りて六左衞門を斬る。蜂屋深手を蒙り、原田を突放せしかば、島田出雲守馳出で、甲斐を忽ち斬止む。古内志摩は是を知らず、御老中の前に居たる故、其場へは出合はず。御詮議彌原田が所爲に究れば、外の者共は申分立ちて皆退出し、家中忽靜謐す。私曰、原田深き所存ありて、家中を騷動させし事、且同類亦雅樂頭館にて剛臆ありし輩、遠慮ありて茲に記さず。同年四月三日、綱基の後見伊達兵部少輔宗勝・田村隱岐守宗良、上使を以て評定所へ召さる。宗勝をば立花飛驒守と妻木彦右衞門・大井新右衞門同道。宗良をば伊達遠江守宗利・島田出雲守守政同道す。時に御老中諸奉行列座にて、宗勝へ申渡されしは、前陸奥守不行迹たる故、一門共并家來の輩、願に因つて隱居仰付けらる。其節兵部少輔と隱岐守は後見して、諸事家老共と相談し、當陸奥守を守立つべき旨仰付けらるゝ處、兩人不和にして、家中の政事宜しからず。年々刑罰絶えざる故、家中の輩安座せず。殊に今度原田甲斐が惡事共、畢竟兩

人不覺悟故なり。尤兵部は年寄り、前代の儀も知り乍ら、一入不屆なる條、松平土佐守へ御預けの旨、戸田伊賀守・大岡佐渡守・宮崎若狹守申渡す。次に宗勝嫡子伊達東市正宗興は、小笠原遠江守長眞へ預けらる。大岡・宮崎・立花・妻木・大井等父子を案内す。田村隱岐守宗良へは、兵部に先達つて書付を以て仰渡さる。是病氣に因つて、出座なり難き故なり。隱岐守は常々病身にて、在所へも罷越さず、兵部に從ひ諸事を沙汰すと雖も、家中の騷動、兵部・原田が惡行も知らざる段、油斷至極不屆なり。急度仰付けらるべけれども、病者故御宥免、閉門仰付けらるとなり。偖兵部少輔室幼少の子供は、陸奥守臣石川民部へ預けらる。因つて陸奥守より合力あり。市正妻子は、陸奥守臣伊達彈正へ預けらる。後伊達宮内少輔宗純願を達し、是を引取るといふ。斯くて同六月、陸奥守綱基・伊達遠江守宗利・立花飛驒守鑑茂を殿中へ召し、御老中列座、陸奥守事、今度領知召上げらるべけれども、若輩にて兵部・隱岐幷に家老共に任せ置き、委細を知らざる故御免あり。向後家政自ら沙汰すべしと、上意の旨演說あり。抑今度惡行を巧みし原田甲斐宗輔が先祖は、筑紫の住人原田次郎種直が苗

裔なり。往昔伊達の元祖山陰中納言より十世、朝宗といひし人、源君賴朝へ忠節あり、常陸國を賜はり、中村といふ所に住す。其子常陸介宗村が時、甲斐が祖原田與次郎といふ者、故あつて筑紫より常州に來り、始めて宗村に仕ふ。後宗村奥州に移り、伊達郡に住す。因つて伊達を氏とす。原田も隨從して累世忠勤す。彼與次郎より甲斐迄は十七代なり。斯く數代忠あるを以て六百貫を領し、奥州船岡に住しけるが、甲斐に至つて無道の惡意を巧みし故、子孫門葉迄悉く幸せられし、天罰の程ぞ恐しき。斯くて原田が惡行を、陸奥守幷一族衆詮議し、其族を刑す。尤公儀へも伺はる。所謂甲斐が嫡原田帶刀切腹。檢使には仙臺の番頭片平伊勢、者頭に郡山七左衞門、目附桑折甚右衞門なり。次男飯坂忠次郎切腹。檢使者頭大松澤喜右衞門、步行目附章地理右衞門なり。三男平度喜平次切腹。檢使者頭關勘兵衞、步行目附伊藤佐五左衞門なり。四男劔持五郎兵衞切腹。檢使者頭大枝伊勢、步行目附黑田利右衞門。右四人の子供も、同年六月九日仙臺城下にて切腹。又帶刀が子原田釆女五歲・同伊織二歲、是は高野靭負が領所平津といふ所にて殺す。檢使には者頭永沼總太左衞

門、歩行目附に片平一郎兵衛なり。又甲斐が母をば、伊達千代松へ預けられしが、後食を斷つて死すとなり。甲斐が妻は、伊達上野へ預けらる。帶刀が妻幷に女一人ありしかば、茂庭主水へ預けらる。飯坂忠次郎妻幷に女一人、古内主膳へ預けらる。又飯坂出雲は逼塞。平渡清太夫・劔持五左衛門は閉門。是等は甲斐が子供を養子としたる故なり。尤公儀御指圖に依つてなり。其外茂庭主計（原田帶刀が妻の兄にて千五百貫を領す）・津田玄蕃（甲斐が妻の弟八百貫を領す）・同七之助（玄蕃が弟三百を領す）・高泉布月（玄蕃が爲には叔父にて隱居なり）其外渡邊金兵衛が諸親類、各切腹追放閉門逼塞、其罪科の輕重に因つて、悉く罪に伏せしかば、家中忽靜謐し安堵せり。偖伊達安藝宗重先祖は、伊達左京大夫植宗の十二男、兵庫頭元宗なり。元宗は兄晴宗に從ひ、弟を盡し、六十五歲にて卒す。其子安藝定宗、其子二人あり。嫡左衛門宗實・二男信濃宗重、是後安藝と改む。斯く正しき親族なれば、諸士も尊崇す。宗重亦節を守り、兵部・隱岐を諫むれども承用なき故、江戸に至り委細を言上し、御老中を始め、皆神妙の所存と思はられしに、計らず原田が爲に橫死すれば、諸人遍く惜み合へり。此時酒井雅樂頭が門に、何者がしたりけん、落書立てたりし。

兵部方甲斐々々しきに安藝果てゝ雅樂てや末の陸奥かしき哉
陸奥かしや仙臺ものゝ出合にやどするからに雅樂てかりけり

伊達安藝宗重

言分けて勝ちたるものを油斷して腕立もせず安藝果てにけり

伊達兵部少輔宗勝

きのふまで奢りにほひし兵部卿けふは御預けみだてなし土佐

島田出雲守定政

たのみなきてがらを今度島田どの出雲こゝろに油斷なきゆゑ

大井新右衞門尉政重

大井人切つて回れど手にあはで新右のほむら身をこがすなり

原田甲斐宗輔

さかひ公事非分になれば原田てゝ甲斐なき死をいたす哀れさ

柴田外記朝意

亂逆の狂ひとしらば斯くあらじされどもあとは能き柴田なり

古內志摩茂利

古內やをさめやあしき奥州の家のさわぎの志摩りだにせず

蜂屋六左衞門尉某

さし出でてさへもさへたり蜂や手を負ひぬる六左知らで本望

其外落書流言伊呂波歌等樣々ありと雖も、近代の事にて、人普く知る故に、爰に略書す。

古今武家盛衰記卷第廿七終

古今武家盛衰記卷第廿八

七萬三千六百石　永井信濃守尙長

尙長は、丹後宮津城主、先祖は平城帝に四代、從三位參議左大辨兼左衞門督大江音人の七男、從四位上兼式部大輔千古に十世の孫、正四位下兼陸奥守中原朝臣廣元なり。廣元は治承四庚子年關東に下向し、建久年中右大將家の執權を司り、承元年中別當職に補せられ、建保四丙子年四月七日、命に依つて中原を改め、本姓大江に返る。同五丁丑年十月十日、剃髮して學阿と號す。嘉祿元乙酉年六月十日卒す、齡七十八となり。廣元六男四女あり。二男永井右衞門佐時廣は、三浦若狹前司泰村が妹婿なり。因つて北條時賴の評定衆となる。然るに三浦泰村謀反の時、讒せられて時廣も流罪せられ、仁治二辛丑年五月廿八日、配所に於て卒す。後時廣は罪なかりし旨聞え、其

子永井甲斐守宗光召出され、越後に於て三千貫の地を賜はり、正五位下に任ず。北條家斷絕して、宗光が子孫も流浪して諸國に渡り、主を求れども得ず。宗光より十一代の孫、長田平右衞門尉重元に至りて、參州大濱村へ來り、近鄉を討隨へ武威を振ひ、敵を破り鄕民を撫育し、終に村の庄官を司る。其頃家康公の御嫡男岡崎三郎信康卿は、甚だ踊を好み、町々村々に命じて踊らしめ、且男色を好まる。時に大濱村の庄官長田平右衞門重元が長男傳八直勝、此時十五歲、村中の土民を引連れ、岡崎三郎信康卿の城中に入りて踊りけるに、直勝顏貌甚艶麗なり。殊に太鼓の上手にて、其拍子感に堪えたり。信康卿、傳八が踊り樣其風姿を怪み、近く招いて問はるゝに、先祖の次第具に申す。されはこそとて是より召出され、長田は主に敵し不吉の氏なりとて、本氏永井を稱せしめらる。後信康卿故あつて生害あれば、家康公へ召出さる。傳八智勇備はり恩寵を蒙る。天正十二年尾州長久手軍には、池田庄三郎信輝入道勝入の首取つて、名天下に著し。頻に御取立あつて、六千石を領す。天下太平後、勝入の二男池田三左衞門尉輝政は、父勝入を、永井傳八といふ小冠者に討たせ、世間の稱

恥かしと思ふてや、或時家康公へ歎き願はれしは、御旗本に、永井傳八直勝といふ者候べし。彼は武勇の若者なり。願はくは大名となし賜はれかしとなり。家康公も尤と、輝政の心を察し給ひ、頓て傳八を召し、奥州笠間城七萬石を賜はり、從五位下右近大夫に任ず。後總州古河城に移り、老衰に及びて卒す。嫡永井信濃守尙政家督を嗣ぎて、亦善く忠勤す。寬永十癸酉年三萬石御加增、山城淀城を賜はり、凡て十萬石となる。其後執權職に補せられ、正保元年十二月晦日、從四位下侍從に昇る。然るに家光公薨御あり、御厚恩を蒙りし輩殉死せり。信濃守は御厚恩第一の身にて、殉死せざるとて諸人誹謗す。其節落書に、

永井して人の誹やなほまさる出羽におくれて信濃わるさよ

內田出羽守殉死せる故に、斯くは讀みたるならん。尙政は如何思ひけん、萬治元戊戌年二月廿八日隱居を願ひ、剃髮して法名信齋と號す。寬永八戊申年九月十一日、八十二歲にして卒す。息五人あり、遺言の願に因つて、二男伊賀守尙庸へ二萬石、三男大和守尙保へ七千石、新田六千二百石を四男外記へ、三千石を五男甲斐守尙冬に

永井尙長
横死

配分す。　嫡子右近大夫尙征は、七萬三千石餘の家督を嗣ぎて、寛文九己酉年二月廿五日、丹後宮津城へ移り、延寶元癸巳年十一月十一日、武州に於て卒す。　息三人あり、嫡越中守尙房・二男傳三郎尙長（後號土佐守又改信濃守）・三男萬之允といふ。　嫡越中守は家を嗣ぎしが、程なく遊里吉原に於て横死す。　然れども家人等深く祕し隱して、頓死せりと言上せし故、相違なく舍弟傳三郎家督を嗣ぎて、延寶二壬寅年十二月廿七日、從五位下土佐守に任じ、同三乙卯年十二月十五日信濃守と改め、御奏者役を司る。　尙長は秀才智發なりと雖も、其性好く人を慢る。　因つて翌年六月十五日、殿中に於て水野監物忠善と大に座論して、上聞に達せしかば、其席の次第を仰出さる。　一は大久保出羽守忠增、二は安藤對馬守重治、三は永井信濃守尙長、四は水野監物忠善、其次は誰々と定め給へば、諍論は忽止みにけり。　然るに同八庚申年五月八日、家綱公薨御、東叡山寛永寺に於て御葬送、亦增上寺に於て、六月廿四日より御法事あり、永井尙長御名代たり。　諸將諸役人嚴重に勤番す。　然るに如何なる天魔の所行にや、同廿六日尙長は、內藤和泉守忠勝の爲に横死す。　時に廿六歲。　法名齊宮院殿大江尙長大居士

と號す。此内室は、青山因幡守宗俊の女なるが、實子なく、爰に領地歿收。爾れども數代武勇の忠家、斷絶せん事を憐惜あり、舍弟萬之允を召出され、新規に一萬石を賜はりぬ。

三萬五千二百石　内藤和泉守忠勝

是は志摩州鳥羽城主飛驒守忠種の次男なり。先祖は大職冠、曾祖父内藤仁兵衞尉忠政は、家康公天下御草創の時分より、數度軍忠を盡し、一萬七千二百石を領し、一統の後、從五位下飛驒守に任じて卒す。其子志摩守忠重は、寛永十一甲戌年三月、二萬石御加增、志州鳥羽城を賜はり、凡て三萬七千石を領して卒す。其子飛驒守忠種家督を嗣ぎ、延寶元癸丑年七月卒す。此時願を達し、舍弟虎之助忠和に、二千石を配分す。忠種二子あり、嫡仁兵衞尉忠次・二男左兵衞尉忠勝なり。嫡忠次は、嚮に萬治二己亥年十二月廿八日、從五位下志摩守に任じけるが、亂心不行迹なりしかば、家人評議を凝し、忠次は病身勤仕なり難き旨言上し、所領鳥羽へ隱居せしめ、二男忠勝を家

內藤忠勝切腹

督とす。是より嚮寛文十一辛亥年十二月廿八日、從五位下和泉守に任じ、延寶元癸丑年九月十一日、父の家督を受け、同十月朔日御詰衆となる。然るに同八庚申年五月八日、家綱公薨御、六月廿四日より增上寺に於て御法事あり、忠勝其奉行たりしが、同廿六日御佛殿に於て、永井信濃守を、和泉守の短刀を以て、唯一太刀に討斬る。因つて時の人狂歌に、

昔より和泉守はきれもので永井命をたんだ一うち

其席に居りし諸將大に驚き、忠勝を取圍む。外に手負死人なし。諸役人各評定し、忠勝亂心に因つて、信濃守を討ちしと言上すれば、翌廿七日、青松寺の隱居靑龍寺にて切腹仰付けらる。時に齡廿七歲。法名諍邦院殿行譽直心大禪定門と號す。私曰、諸役人和泉守を取掠めし時、剛臆の批判、遠慮あつて爰に記さず。抑和泉守、今度永井尙長を討ちたる宿恨、何故ぞと尋ぬるに、初め寛永寺に於て御法事の節も、今度の諸將に奉行勤番を仰付けらる。其時信濃守は、御名代たるに驕りて、法外の事多く、且和泉守に對し、無禮頻に甚し。然れども時といひ所といひ役目といひ、內藤は憤の胸を撫でて堪忍しけるが、亦增上寺にて

は、剰へ永井・內藤、役所を弁べ勤番す。既に六月廿五日には、御老中增上寺へ參詣あり。此時永井尙長の家人等、見損じて番所を下りず。和泉守の家人等、御老中とは見定めたれ共、永井の役所にて下座なければ、此方にても無用とて、共に番所を下りず。之に依つて御目附衆甚怒りて、永井・內藤へ其無禮を咎むるに、尙長は御名代を勤むるに因つて、何人へも下馬はせずと返答す。又和泉守は大に驚き、信濃守に對面し、今日貴殿と予が家人等、御老中へ無禮せし故、御目附より咎めらる。如何せんやと相談す。信濃守聞いて、我は御名代を司る故、何人へも下座はなし。御邊の無禮あることも、定めて思案あつての事ならん。其心底をば、信濃守嘗て知らずと、傍若無人の挨拶して、大に恥辱を與ふ。剰へ其日は甚だ雨降り、諷經の諸僧へ傘を渡すべしと、御老中より和泉守役所へ申渡さる。然れども俄の事といひ、殊に多くの傘なれば、其支度少し延引す。永井是を見て、誰の差圖もなきに、傘數百本取出し諸僧へ渡し、再び內藤を辱かしむ。和泉守も今は腹に据ゑ兼ね、如何せんやと思ふ折節、御奉書來る。永井は御名代故、第一に拜見して後、外の諸奉行諸役人次々に至

りしが、和泉守には見せず、直に永井方へ返る。時に內藤和泉守は、信濃守の前に近寄り、其御奉書、某は拜見せず。いかなる御用にや、少し拜見せんといふに、信濃守の曰、此御奉書は、御邊拜見せらるゝ物にこれなしとて、押卷きて懷中す。和泉守忠勝憤怒に堪へ兼ね、立ち乍ら和泉守の新身短刀を拔きて、信濃守を一太刀に斬る。餘り快く斬れて、暫あつて首は落ちたり。一座の輩大に驚き、忠勝を取押へ、亂心せりと言上せしに、內藤亂心は御不審あり、定めて仔細ぞあらん。樣子御尋あるべきなれども、嚴有院殿薨御間もなく、殊に御法事の節といひ所柄といひ、たとひ如何なる宿憤ありとも、遠慮すべき事なるに、斯る狼藉、言語同斷の不屆、何程道理ありとも御尋に及ばずとの上意あり。忽切腹仰出さる。又永井は御名代を司る身なれば、如何なる狂亂の者をも馴愛し、和儀を以て勤仕すべきに、不和にして內藤に討たるゝ程の恨を受くる。是亦至極の不屆者なりと御氣色損じ、雙方共に領地悉く歿收せらる。

內藤忠勝永井尙長を斬る

或老士二人打寄り評すらく、和泉守私の宿意を含み、彼場に於て信濃守を斬る事、不

忠不孝甚し。又信濃守も、縦令日頃は內藤に不和なりとも、和談して能く勤仕すべき事なるに、他人を非に見て、己が邪智を高ぶり、不慮の横死を招き、剰へ所領殁收せらるゝ事、忠孝一つとしてなき闇將なり。往昔元龜三年の頃、家康公未だ參遠兩州の主として、濱松御在城の時、武田信玄約に背き、家康公を攻め奉り、參遠二州をも掠め奪はんと、二萬餘の大兵を率し、旣に遠州へ着陣すれば、家康公も織田家へ加勢を乞ひ給ひ、德川・織田の兩勢合せて一萬餘、手配を定めて是を拒ぐ。時に家康公の御家人成瀨藤藏・鳥井四郎左衞門、共に先陣後陣を諍ひ互に怒り、旣に討果さんとす。諸人宥め賺して雙方へ引分け、和睦せしめんとすれども、互に思ひ詰めて堪忍せず。時に鳥井は成瀨に向ひ、明日已に信玄と御一戰に究り、織田家の加勢も來る斯る時節は、士一人も大切なり。然るに御邊と我れ、今私の意趣を以て討果さん事、君への不忠、身に取つての不覺なり。勇士二人狗死せんより、如かず明日の軍に、御邊と我れ共に勇を角べ、共に骸を戰場に曝さんと思ふは如何に。成瀨聞いて莞爾と笑ひ、善くも申されたり。我もさこそ存ずれとて、互に和睦し、此世の餘波惜

まんと、朋輩大勢招き集め、夜更くる迄最後の酒宴せり。家康公は斯くとも知り給はず、成瀬をば織田勢の軍鑑とし、新井・本坂へ向はしめ、鳥井は濱松勢の軍鑑と、手分已に定め給ふ。然れども昨夜相議しける事故、鳥井は忍んで荒井・本坂へ馳せ向ひ、成瀬と一所に控へたり。明くれば元龜三年十二月廿二日、既に軍始まり、敵味方白刄を交ふ。時に鳥井・成瀬は、甲州二萬餘兵の中へ、面も振らず一文字に破つて入り、四角八方へ斬つて回るに、其鋒先に當る者、切つて落されずといふ事なし。理なるかな此二人は、徳川家にて一人當千の勇士、殊に今日を最期と定め、互に勇を諍へば、甲州の數萬騎、備あらけて四度路になる。鳥井は甲首三級太刀に貫き、成瀬に見せんと尋ぬる處に、藤藏も首三つ提げて、彼も鳥井を尋ねしが、互に行逢ひ首を見て、相高名と打笑ひ、其首共を投捨て、共に又敵陣へ馳入りけり。成瀬は信玄の侍大將山縣三郎兵衞を討たんと、只一騎、備の中を打破り斬つて懸るに、討留むる者なく、すはや既に山縣討たると見えしかば、武田左馬介・穴山梅雪・馬場美濃等、横合より助け來り、眞中に取籠め、漸く成瀬を討留めたり。是をば知らず、鳥井は又首取つて、藤

藏を尋ぬるに見えず。味方の兵に問へば、皆答へて、成瀨殿は唯今討死あり、首早敵の手に渡れりといふ。鳥井聞いて淚を流し、誠に成瀨は勇士なり。詞を違へず、善く討死す。我れ武藤に先をせらるゝ口惜さよ。汝等命を全うし、此趣を朋輩共に告ぐべしと、下人共に言含めて、直に進んで信玄の旗本へ斬つて入るを、武田の近臣土屋右衞門尉直村、討留めんと是を圍む。鳥井元來强力の猛士なれば、容易く討留むる事能はず。土屋は鞍上に伸上り、敵一人を討止めぬ事やある。押並べ組めや〳〵と下知に隨ひ、百餘人鳥井を圍ひ、我れ組止めんと爭うたり。鳥井は三尺五寸の野太刀を眞甲に差翳し、近付く敵を斬拂ひ、土屋を目懸け馳寄せて、直村が甲を、破れよ碎けよと、力に任せ打ちければ、白星の甲の星かけ、眉間を腦の出づる程打込みしかば、さしもの土屋も目暗れ、茫然として持ちたる長刀を取直す事も叶はず、馬より逆樣に落ちたりける。是を見て信玄の旗本より數千人馳せ來り、四方より取圍み、鎗ずくめにして漸く鳥井を討留む。此兩士が猛勇の忠戰義死をこそ、敵味方共に遍く感じ、今の世迄も武名を殘せり。今永井・內藤の兩將は、斯樣の先例をも辨へ知らざ

る故にや、詮もなきに實の命を捨て、且末代迄に、不忠不孝の惡名を受けらるゝ事の淺猿さよとぞ。

古今武家盛衰記卷第廿八終

三萬五千二百石　內藤和泉守忠勝

古今武家盛衰記卷第廿九

一萬二千石　稻葉石見守正休

正休は、美濃青墓に居す。父伊勢守正能は五千石を領す。正休、幼字權之助と號す。家督を續ぎて、延寶二甲寅年正月十五日、御小性組番頭となり、十二月廿七日、從五位下石見守に任じ、同五丁巳年四月十四日、御書院番頭となる。同七己未年八月十二日御側衆となりしが、翌八庚申年五月八日、家綱公薨御に因つて當君に奉仕し、天和元辛酉年七月十九日、二千石の御加增、同二壬戌年三月廿二日、五千石御加增にて若年寄となりし處、故あつて貞享元年甲子八月廿八日、殿中に於て一族堀田筑州正俊を刺殺して死し、家永く斷絕す。其日正休は、筑前殿に少し面謁の事ありとありければ、筑前守は、如何なる事にやと、何心なく出でられけるを、正休立ち乍ら、兼房

稻葉正休堀田正俊を刺す

の新身脇指を抜いて、右の脇下より、左の肩先迄突通し回し斬る。大久保加賀守忠朝是を見て、狼藉人よと呼ばはり、馳せ來りて石見守を斬る。續いて戸田山城守忠昌・阿部豊後守正武も馳出で、二三の助太刀するに因つて、堀田・稻葉忽に同死せり。既にして石見守は亂心と上聞に達し、世上へも同じ沙汰なりしが、正休書置あり、其書に、

私親伊勢守、先年於駿府不慮之横死仕候處、家督無相違被仰付、其上嚴有院樣御側にて被召仕、御厚恩に奉預、且亦御當代に罷成、猶御加恩拜領仕、生々世々此御厚恩共難報故に、筑前守を討果し候以上。

とありければ、是を見し人々、偖は亂心にてはなく、忠臣なりけりと、嘆察せしとなり。然れども石見守、筑前守に私恨あつて、殿中にて是を報ふともいふ。尤世人の評論區々にして、其是非分ち難し。抑堀田・稻葉の兩家は、深き由緒ある親族なり。先づ石見守が先祖は、河野の苗裔稻葉鹽塵通富なり。美濃に住す。（此始終、稻葉淡路守譜中に記す。）通富に七男子あり、其六男を林白雲と號す。力量あつて、善く輕捷の術に達す。是故に

十人切をして、世人の剛膽を試む。濃州七條に住す。白雲一子あり、林總兵衞といふ。始めは齋藤山城守道與入道道三に仕へ、後信長に事ふ。總兵衞は同州伊賀伊賀守が一族、安藤馬之平次入道宗岩が聟なり。總兵衞に二男子あり、嫡林新九郎・次男林八右衞門といふ。新九郎は稻葉兵庫頭重通の聟なり。（兵庫頭は、一鐵の二男、一鐵卒後、美濃淸水城に居し、二萬石を領す。）然るに新九郎は早く卒し、其妻孕み居しかば、父總兵衞命じて、二男八右衞門に再嫁す。此八右衞門は、後稻葉佐渡守正成と稱す是なり。斯くて其妻男子を產む。是稻葉八左衞門正次といふ。春日局の由緒を以て、後台德院殿へ召出され、五千石賜はり、御書院番頭となる。當時の稻葉八左衞門・同次右衞門が父なり。其後亦彼妻女、一男子を產んで死す。是亦稻葉七之丞正定といふ。尾張前亞相義直卿に仕ふ。其子孫今に勤仕す。偖林八右衞門尉正成は、妻に離れ鰥居しけるが、齋藤內藏助利三が女を、迎へ取つて妻とす。抑此齋藤利三は、田村利仁將軍の末葉にて、母は明智日向守光秀が妹なり。然るに天正十年六月二日、光秀は信長父子を弑して後、山崎合戰の時、利三は光秀が甥なる故、其先陣に進み勇を振ひしが、光秀が行末知れざる故、

利三は大軍を斬拔け落行きしが、終に擒となり太閤の爲に殺さる。此內藏助利三に四子あり、嫡子は齋藤與總右衞門尉三存、後に秀忠公へ召出され、五千石を賜ふ。今の齋藤攝津守三友が父なり。其子美作守三賢に實子なく、齋藤作之進が子宮內を養子とし、今飛驒守三光と號し勤仕す。二男は齋藤伊豆守利光と號す。父內藏助死後、入道して立本と號し蟄居す。後秀忠公へ召出され、五千石賜はり、與力十騎・同心五十人預けらる。當時賴母利重が祖父なり。三男は齋藤角右衞門尉といふ。四は女子にて、是則ち八右衞門尉正成が妻となる。此女子容顏美麗にして、其名世に高けれども、父內藏助歿後零落して、京都に幽居す。正成是を聞きて、迎へ取り妻とし、男子二人を生む。所謂嫡子稻葉宇右衞門尉正勝、後丹後守に任ず。次男稻葉外記正利、是は駿河亞相忠長卿に仕へ、書院番頭を司りしが、忠長卿生害後、細川越中守に預けられ、肥後州に下りて卒す。細川越中守忠興は、明智光秀の聟なり。又外記は、光秀の再甥なれば、此緣に因つて細川氏へ預けられたるならん。其後正成が妻は、故あつて家光公の御乳母となり、春日局と稱す。三千石の化粧料賜はり、恩顧甚だ

厚し。寛永二年秋願を達し、江戸本郷に一寺を建立し、天澤寺と號し菩提所とす。家光公寺領三百石を寄附し給ふ。開山は前の妙心寺渭川和尚なり。春日局卒去の後、爰に葬す。法名麟祥院殿從二位禪尼と號す。此時、家光公も臨駕あり。春日局の廟前へ御詣あり。誠に例少なき事共なりき。偖又春日局の夫たりし稻葉八左衞門尉正成は、局の由緒を以て家光公へ召出され、二萬石賜はり、佐渡守に任ず。是より嚮は、金吾黄門秀秋に仕へ、與力共に四萬石を領す。然れども秀秋闇將たるを以て、故あつて彼家を立退く。此時鐵炮に火繩を掛け弓に弦張り、前後の備嚴重、偏に戰場に向ふ如くして、白晝に筑前城下を立退きしに、手指す者もなかりけり。正成が妾腹に一女あり。秀秋の臣堀田勘左衞門正利に嫁す。（正利は五百石を領す。）堀田も舅正成と共に立退きけり。此勘左衞門正利は、堀田加賀守正盛の父なり。勘左衞門も、春日局の嘆に因つて召出され、七百石を賜ふ。父齋藤内藏助が三男角右衞門尉も秀秋へ仕へ、五百石領せしが、正成と共に筑前を立退きたり。此人は春日局の兄弟なれども、兎や角と首尾違ひ召出されず、伏見に住し、後は材木を商ひ、終に彼地にて浪死す。

女子五人あり、一は藤堂和泉守高虎の家臣梅原頼母（千石領す）が妻となる。二は堀式部少輔に嫁す。三は川窪越前守信雄に嫁す。（川窪後改ニ武田一。）四は秋山十右衛門に嫁す。五は稲葉佐渡守家老松原五左衛門が妻となる。是皆春日局の方へ引取りて、斯く計らはれしとぞ。　偖稲葉佐渡守正成は召出されて、本多佐渡守と同名を憚り、内匠頭と改む。其後越前宰相忠昌卿の附臣となり、越後糸魚川城に居す。此時忠昌卿家臣長見某が女を娶り、一子を産みて後、其妻死す。　其子稲葉出雲といふ。　内匠頭正成は、陪臣たる事を深く歎き、春日局を以て歸參の事を願ひしかば、忽召歸され、野州直岡に於て二萬石賜はる。（内匠頭歸參の時、越前守に對ひ、某御家に仕へたる験には、一子を殘し置き申たし。未だ幼少なれば母方の祖父長見某に預け置候。召出し賜はらば忝かるべしといひて歸參せり。因て其子出雲成人して、稲葉八右衛門正房と號し、三千石賜はり、越前家に勤仕し卒す。其子釆女家督を次ぎて、當越前守の家老となり、今専ら勤仕すと云々。）　春日局の夫たる故、諸人の疑論を避けん爲め、松平（本氏山内）土佐守妹を迎へて一子を生む。　稲葉權之助といふ。召出され千石賜はり、從五位下伊勢守正能と號す。　御書院番頭を司る。　正能に一子あり、權之助といふ。　是則ち後石見守正休と號し、堀田筑前守を刺殺したる人なり。正休にも一女あり、當時町野壹岐守方に住居すとなり。　然れば石見守は、春日局の

稲葉正能横死

繼孫、筑前守は局の繼曾孫、内匠頭正成には石見守は孫、筑前守は曾孫なり。爾れども筑前守は局の養子となり、稲葉正則の女を娶り、春日局の家督たれば、重縁の親族なり。稲葉石見守が父伊勢守正能も、不慮の横死せり。頃は明暦元年未の九月、正能御書院番頭たる故、駿府御城在番す。時に家老安藤甚五左衛門、正能寵愛の小性松長喜内と密通して、斷金の契を約す。此事何としてか伊勢守が耳に入る。二人後の罪科を恐れ、共に謀りて、同二年申七月三日の夜、正能が寝處に忍び入りて、喜内、主人伊勢守正能を弑して後、伊勢守亂心し自害し給へりと、相番の輩へ披露すれば、各驚き其體を見るに、右の手に脇差を持ち、喉吭を掻斬つてあれども、死後に持たせたる脇差なれば、握る事能はず。相番の輩不審に思ひ、此段先刻付を以て江戸へ注進す。其狀に曰、

稲葉伊勢守事、夜前致亂心自害之由に御座候。然共其儀實正難計奉存候之間、追而承屆註進可申上候。恐惶謹言。

七月四日　　駿府在番　相番中

斯りしかば伊勢守が家人共、殘らず江戸へ召し、一々御詮議あり。然るに松長喜內、其夜主君を弑し、己が部屋へ歸る時、天罰にやありけん、茶坊主に行逢ひたり。時に喜內が帷子に血甚だ付きたりければ、茶坊主此旨を言上す。是に因つて稻葉美濃守正則の宅へ、喜內と甚五左衞門を召して推問あるに、堅く隱して共に白狀せず。因つて喜內が母を目前にて引張り、樣々に强く責めければ、喜內見て大に悲しみ恐れ、終に其罪に伏す。爾れども安藤は更に白狀せざりけり。爰に美濃守の家人黑田利左衞門といふ者あり。共に安藤を預かる。番人の列なりしが、何とぞ術を回らし問落さんと思案して、安藤に對ひ種々勞り、物語して後いふやうは、今度の御詮議は、貴殿と喜內が所爲に究り、喜內已に白狀す。此上は貴殿、何と陳じ申さるゝとも益なし。若し白狀延引あらば、罪なき父母門葉を、喜內が母の如く、明日殘らず責めらるべき御用意なり。今貴殿一人明に白狀あれば、大勢の親類其難を遁る抔と、小聲になつて諫めければ、甚五左衞門も、理とや思ひけん、今は何をか包むべきと、其夜

の次第、密談の品々具に語り、萬事は黑田殿宜しく賴むと申しけり。黑田悅び、此旨詳に、美濃守へ言上すれば、日本無類の大罪人なりとて、安藤・松長の二人をば、稻葉權之助が下屋敷へ引行き、共に火炙の罪科に處せらる。又安藤が父は、改田圖書とて、是は正則の家臣にて七百石領し、士大將たり。甚五左衞門が兄も、改田何右衞門とて三百石領し、足輕大將たりしが、今度安藤が不義に因つて、改田父子も切腹せしむ。何右衞門には男子三人あり、未だ幼少なれども、殘らず首を刎ねられけりとぞ。黑田利左衞門は、今度の褒美として、新知百石、正則より賜はりしとぞ。稻葉丹後守正勝（字は右衞門）は、春日局の爲には嫡男故、常陸國柿岡にて、五千石新規に賜はりしが、父内匠頭卒すれば、家督を續ぎ、其遺領二萬石共に賜はり、後又六萬石の御加增にて、相州小田原城を賜はり、都合八萬五千石を領して卒す。時に齡卅八。正勝に二子あり、嫡美濃守正則、（字鶴千代）二は女子、酒井日向守忠能室となる。美濃守此時未だ幼少なりし故、春日局御內意を伺ひ、舍兄齋藤伊豆守利光を小田原へ遣し、諸士に下知を加へ、正則の後見たらしむ。利光は與力十騎・同心五十人を從へ行き、小田原

城中揚土といふ所に居り、諸事を差圖す。此伊豆守利光は、若年より武勇の譽あり。往昔山崎合戰の時、十六歲にて、父内藏助と共に先陣に進み、味方既に敗走すれ共、齋藤父子は、手勢三千餘人を堅く備へ、自餘の敵には目も懸けず、瓜の紋付きたる赤旗は、織田三七信孝なるぞ。引組んで討取れと下知し、馬を一文字に步ませ、山崎の總構へ、東の川を隔てゝ控へたり。大河にはあらざれども、頃日降續きたる雨に、水增し濁れ流る。爰に信孝の士野々掛彥之丞、唯一騎にて進み、大音揚げて、齋藤內藏之助と見るは僻目か。主君の敵遁さじと討つて懸る。是を見て齋藤伊豆守十六歲と名乘り、馬を川に馳入れ、川中にて二三合戰ふと見えしが、無手と引組み、共に川中へ岸波と落ち、上になり下になり、一反計り流れたり。內藏助が士卒共見て、伊豆守を救はんと、大勢馬を馳出せしかば、利三怒りて、凡そ勇士の子、十六歲に及んで敵一人を討ち得ず、他人の力を借る程ならば、存命すとも何かせん。唯捨てゝ討死させよと制する內に、伊豆守は野々掛が首を取りて、下の瀨より騰りしが、水を大に飲みしとかや。父利三大に喜び、共に大音聲を揚げ、是は田村利仁將軍の末葉、齋藤內

の次第、密談の品々具に語り、萬事は黑田殿宜しく賴むと申しけり。黑田悅び、此旨詳に、美濃守へ言上すれば、日本無類の大罪人なりとて、安藤・松長の二人をば、稻葉權之助が下屋敷へ引行き、共に火炙の罪科に處せらる。又安藤が父は、改田圖書とて、是は正則の家臣にて七百石領し、士大將たり。甚五左衞門が兄も、改田何右衞門とて三百石領し、足輕大將たりしが、今度安藤が不義に因つて、改田父子も切腹せしむ。何右衞門には男子三人あり、未だ幼少なれども、殘らず首を刎ねられけりとぞ。黑田利左衞門は、今度の褒美として、新知百石、正則より賜はりしとぞ。稻葉丹後守正勝（字は右衞門）は、春日局の爲には嫡男故、常陸國柿岡にて、五千石新規に賜はり召出されしが、父內匠頭卒すれば、家督を續ぎ、其遺領二萬石共に賜はり、後又六萬石の御加增にて、相州小田原城を賜はり、都合八萬五千石を領して卒す。時に齡卅八。正勝に二子あり、嫡美濃守正則（字鶴千代）、二は女子、酒井日向守忠能室となる。美濃守此時未だ幼少なりし故、春日局御內意を伺ひ、舍兄齋藤伊豆守利光を小田原へ遣し、諸士に下知を加へ、正則の後見たらしむ。利光は與力十騎・同心五十人を從へ行き、小田原

城中揚土といふ所に居り、諸事を差圖す。此伊豆守利光は、若年より武勇の譽あり。往昔山崎合戰の時、十六歲にて、父內藏助と共に先陣に進み、味方既に敗走すれ共、齋藤父子は、手勢三千餘人を堅く備へ、自餘の敵には目も懸けず、瓜の紋付きたる赤旗は、織田三七信孝なるぞ。引組んで討取れと下知し、馬を一文字に步ませ、山崎の總構へ、東の川を隔てゝ控へたり。大河にはあらざれども、頃日降續きたる雨に、水增し濁れ流る。爰に信孝の士野々掛彥之丞、唯一騎にて進み、大音揚げて、齋藤內藏之助と見るは僻目か。主君の敵遁さじと討つて懸る。是を見て齋藤伊豆守十六歲と名乘り、馬を川に馳入れ、川中にて二三合戰ふと見えしが、無手と引組み、共に川中へ岸波と落ち、上になり下になり、一反計り流れたり。內藏助が士卒共見て、伊豆守を救はんと、大勢馬を馳出せしかば、利三怒りて、凡そ勇士の子、十六歲に及んで敵一人を討ち得ず、他人の力を借る程ならば、存命すとも何かせん。唯捨てゝ討死させよと制する內に、伊豆守は野々掛が首を取りて、下の瀨より騰りしが、水を大に飮みしとかや。父利三大に喜び、共に大音聲を揚げ、是は田村利仁將軍の末葉、齋藤內

藏助父子と、三度別れて三度逢ひ、喚き叫んで馳せたりしかば、さばかりの大軍、備亂れて四度路になる。齋藤父子勝鼓を打ち勢に乘つて、終に圍を討破り、戰場を斬拔けたり。されども利三は、光秀が行衞覺束なく、江州堅田へ落行き、民家に忍び居しが、晝夜三日寢ねざれば、彌軍の疲催して、痛く寢入りけり。主の男是を見て、落人と推量し、太刀脇指を奪ひ隱し、大勢催し押入りて搦捕り、太閤へ獻せしかば、感悅あつて、彼等に黄金十枚づつを賜はり、其後明智光秀が死骸には首を繼合せて、幷に齋藤内藏助、共に粟田口の日の岡峠に、磔にこそ梟けられける。然るに其夜何者の所爲にや、彼磔を盜み取れり。太閤怒りて、主を弑する八逆の大罪人が死骸、萬人懲惡の爲め磔罪に行ふものを、盜み取りたるこそ不審なれ。其盜人を尋ね捕へよとて、洛中洛外はいふに及ばず、五畿七道迄觸れ搜す。爰に齋藤が從弟に、鄕の意密といふ者あり。此觸を聞きて、粟田口の磔は、内藏助が子齋藤立本といふ者盜み取り、美濃國へ持行き、百姓の屋敷にて葬れりと訴ふ。太閤大に怒りて、伊豆入道立本を搜し捕へ、汝何故ぞ、磔骸を盜葬せしや。其代りに今日汝を彼所に梟くべしとありければ、立

本大に驚き答へて、某嘗て知らず、何者が某所爲と讒訴せしや。跡形もなき僞なりといふ。太閤彌怒りて、汝何と陳ずるとも、盜み取りたる事歷然なり。いで其證人を出さんとて、鄕の意密を呼出さる。立本は元來盜取らぬ事なれば、少しも騷がず、其虛實を評論す。爾れども互に證據なき事故、實否分ち難く、奉行頭人も退屈せり。太閤も是を見て、拷問して見んと思はれしが、所詮北野天神の廟前に於て、鐵火を取らせ、實否を糺さんとて、其旨奉行人を召して命ぜらる。是に因つて大なる鐵丸を、蹈鞴にて朱の如く燒き、神前に三方を二つ備へ置き、彼鐵丸を立本・意密互に一つづつ、熊野の牛王唯一枚手に敷きて是を取り、三方の上へ持參し置くと等しく、三方は忽猛火となる。斯くて翌日二人に命じて、荒繩を綯はしむるに、意密が手は燒爛れて、繩を綯ふ事能はず。立本が手は燒けず、本の如くにて、繩を綯うて是を出せり。誠に奇特の事共なり。因つて鄕の意密は忽首を刎ねらる。是立本に如何なる遺恨やありけん、一族の好を捨て虛言を訴へ、剩へ己も斬られしぞ淺猿しけれ。立本は武勇の譽あり、且名ある者の末葉を惜み、太閤へ願ひ、加藤淸正申預り、一萬

石を與へ家臣とす。此時又伊豆守と改稱す。其後春日局の願に因つて、將軍家へ召出され、五千石賜はり、與力十騎・同心五十騎を預けらる。此伊豆守には、男女の子數十人ある故、三男助左衞門をば、町野長門守養子となし、後壹岐守と號す。然るに利光數人の子、悉く早世して家嗣なし。爰に寵愛の小性右馬助といふ者あり。武の器量あつて、且其心直なる故、利光、氏を授けて齋藤右馬助と號し、其上女を嫁して聟とせり。右馬助に二子あり、嫡賴母・二男作之進といふ。是に因つて彼賴母を利光養子とし家督を讓り、父右馬助は、伊豆守利光取持ちて、堀田加賀守正盛へ出す故、彼家にて大名分と尊敬せられ、五百石を領す。偖伊豆守利光は、慶安二年八十三歲にて卒す。養子齋藤賴母利重家督を嗣ぎ、後定火消役を司り、今專ら勤仕す。又右馬助が二男齋藤作之進は、不運にて、一生浪人にて死す。爾れども其子宮内三光は、齋藤美作守養子となり、飛驒守と號し、當時御扈從に仰付けられ勤仕す。

一萬二千石　加々爪土佐守直淸

直淸は、甲斐守直澄が養子にて、民部少輔忠澄には孫分なり。忠澄は御譜代の人故、始め江戸町奉行職を司り、裁許分明なりし故、頓て大御目附となり、又番頭となり、段段御加恩あり、九千五百石に至つて卒す。子次郎右衛門尉直澄家嗣たり。又五百石御加增、凡て高一萬石となる。實子あり、隼人と名付く。早世するを以て、石川播磨守綱長が二男を養子とす。是より先直澄は、寬文五乙巳年十二月廿八日、從五位下甲斐守に任ず。同八年十二月廿六日、三千石御加增、寺社奉行となる。同十庚戌年十二月十一日閉門仰付けらる。其仔細を尋ぬるに、去る臨時の寄合に、松平因幡守信具を上使として、出座の輩へ、寒氣の疲勞御尋、御菓子を賜はるとの上意あり。列座敬んで拜賜するに、甲斐守は睡眠して御禮儀ならず。剩へ上使へ無禮なりしかば、此旨上聞に達し、仰渡されけるは、甲斐守儀、今度に限らず、寄合の度每に睡眠し、公事訴訟聞く事なし。不忠不義重科に行はるべけれども、譜代の臣たるを以て厚免あるとなり。是より先先非を悔み勤仕しけるが、老衰に及び、連々隱居を願ひ、延寶七壬寅年六月十八日、養子土佐守直淸に家を讓る。直淸は、先に寬文二壬寅年十二

月廿二日、從五位下土佐守に任じき。然るに延寶九辛酉年二月九日、父子共に御勘氣を蒙り、所領悉く召上げらる。其故は初め父甲斐守御加增、二度に合せて三千五百石を賜ふ。其時御代官伊奈左門が下代に賂する故、三千五百石の所を三千石の高にし、又千石の所を五百石の高にして相渡す。此事何としてか露顯しけん、伊奈左門は、上杉彈正大弼綱憲へ御預け、彼下代は遠島に坐せられ、又甲斐守は、松平土佐守へ預けられ、息土佐守も、實兄石川若狹守へ預けらる。是今度土佐守と成瀨吉右衛門と領地爭論に付いて、事顯はれしとなり。委細遠慮ありて記さず。

古今武家盛衰記卷第廿九終

古今武家盛衰記卷第三十

十三萬石　堀田筑前守正俊

此人は、總州古河城主にして、堀田加賀守正盛の三男、幼名久太郎と號しけるが、春日局の養子となり、三千石を續領す。剩へ局の願に因つて、稻葉美濃守正則の女を嫁して聟とす。其後父正盛遺言の一萬石の配分を受け、從五位下備中守に任ず。寛文七丁未年六月、上州安中城を賜はり、五千石（或謂七千石）御加增、同十年二月廿二日、若御老中となり、延寶六戊午年十二月廿九日五千石御加增、同七年己未七月十日、一萬五千石御加增にて、御老中に移り、同十二月廿七日、從四位下に敍し、當綱吉公御代となり、恩寵彌厚く、同八庚申年十二月十八日侍從に進み、同九年辛酉二月廿五日、五萬石の御加增にて、筑前守に改むべき旨仰出され、總州古河城を賜はり、凡て八萬八

千石を領す。其後大老職に補せられ、加判を免許あり、猶亦五萬石を加へ賜はり、少將に昇進す。斯く龍の雲に騰るが如く、官祿日に增し月に數ふれば、本朝の大小名營中に充滿し、門前市をなし、世人普く其富貴を羨み歎ず。然るに月滿つれば虧くるの習、幾年も過ぎざるに、殿中に於て稻葉石州が爲に橫死せらる。其是非決し難し。誠に如何なる宿業にや、稻葉石見守父子堀田氏三代、共に刃死するぞ不審なれ。抑筑前守正俊の祖父は、堀田勘左衞門正利とて、黃門秀秋に仕へ、五百石領しゝが、舅稻葉佐渡守正成と共に立退きしを、春日局の願に因つて召出され、七百石を賜はりぬ。一子あり、堀田權六と號す。家光公へ召出され、加賀守正盛と稱す。御小性を勤む。隨一の寵臣たり。寬永十二乙亥年三萬石賜はり、初めて武州川越城主となる。同十五年四萬石の御加增、信州松本城を賜ふ。同十九年壬午年七萬石御加增、下總佐倉城に移り、凡て十四萬石を領す。是より嚮寬永十甲戌年閏七月廿九日、從四位下に進み、同十七庚辰年十二月廿九日、侍從に昇る。諸人其榮を羨む。正盛亦善く忠勤す。然るに慶安四辛卯年四月廿日、家光公薨御、正盛大に恐悲して、同廿二日殉

死す。時に齡四十六。世人甚だ憐れみ歎ず。正盛に五男子あり、嫡子は與一郎正信、（後號二上野介一）二男は脇坂淡路守安吉の養子となり、中務少輔安吉と號す。三男は久太郎正俊、是後堀田筑前守と稱するなり。四男内膳正英、五男虎之助（後號二對馬守一）と號す。正盛殉死の時、願うて三男久太郎へ一萬石、四男五男へ五千石づつ配分す。嫡與一郎正信は、十二萬石の家督として、元保元甲申年十二月晦日、從五位下上野介に任じ、父に劣らず忠勤を勵みしが、萬治三庚子年十月八日、家綱公の御吝惜なるを以て、天下困窮の基なりと歎き、一通の訴狀を認め、同九日保科肥後守・阿部豐後守兩家へ持參し、直に居城佐倉へ身を退く。兩將披見して大に驚き、安藤對馬守・同市郎兵衛尉を召して、今度差上げられし訴狀の趣、其城に居られては上聞に達し難し。脇坂中務・堀田備中此兩人の領內へ、先づ相越さるべし。其上にて上聞に達せんと申送る。上野介悅んで兩使に對面し、共に出城す。斯くて同十一月三日正信を召して、上野介儀訴狀差上ぐるとて、御暇をも言上せず、殊に御不例の內といひ、佐倉城へ立退く事、彼是以て不屆の至極、且訴狀の趣上覽あるに、一つとして取るべきなし。因之舍弟

脇坂安吉へ預けられ、尤所領殘收あり。併息帶刀正職に、御合力米一萬俵賜はると上意の趣、御老中演說あり。（訴狀の文詞爰に略す。其時世の政事を譏謗せるなり。）因つて脇坂の領分信州飯田城近所守谷といふ處に蟄居す。息帶刀は、從五位下豐前守に任ず。寬文十二壬子年五月十四日、脇坂安吉、播州瀧野へ所替仰付けらるゝに因つて、同十八日上野介をば、若狹城主酒井修理大夫忠直へ御預け、斯くて延寶五丁巳年三月、上野介忠直に願ひ、京都清水寺へ參詣す。此旨忠直言上す。因つて忠直及び堀田豐前守正職閉門す。上野介は、松平阿波守綱道へ預けらる。同六戊午年七月晦日、綱道卒す。然れ共家嗣淡路守綱矩に其儘預けらる。斯る處に延寶八庚申年五月八日、家綱公薨御、堀田正信も之を聞き、大に哭泣して前後を失ふ。殉死せんと欲すれども刀なし。然れども鋏は御免にて、日頃より所持なれば、思案して鋏の肢を左右に引延し、一方を扇子の骨に結付け、手拭を以て扇の骨と鋏の本を卷添へ、五月廿日申の下刻に、吭へ突通し搔切つて忽自害す。番人共暮に及んで見て大に驚き、傍を見るに一通の書あり。其文に曰、

（堀田正信殉死）

私儀廿一年以前、乍恐書付を以て寸志を申上候處、御取上不被遊、上意の上はい

かやうにも可レ被二仰付一處に、御用捨被レ仰出一、其後四年以前、勿論是以一命差上候覺悟にて、八幡淸水寺へ參詣仕候。其時酒井修理大夫方迄言上仕候樣に申遣候へ共、早速達二上意一の處に、不屆に被二思召一候得共、親加賀守筋目有レ之者との思召候との上意にて、又候哉一命御助け被レ遊、松平淡路守へ御預け被レ遊候。重々御厚恩難レ有奉レ存候。其節も於二若州一上使土岐十左衞門殿申す如く、命差上罷在候間、何れの道にも同事に存候。併身の爲め少も命を保申度心得御座なく候得共、遠國にてなりとも、暫く存命仕候て、御機嫌も伺候段難レ有奉レ存候。結句切腹被二仰付一被レ下候はゞ、忝可レ奉レ存候得共、上よりの御用捨を御訴訟申上候は、不足の心を持候樣に有レ之、慮外可二罷成一と存、今日迄も存命仕、淡路守方より每度御機嫌の御容體を奉二承知一罷在候。向後者御機嫌伺ひ申儀無レ之候故、存命は無レ詮事に候條絕命仕候。御勘氣にて罷在、御供などと存候事無二御座一候間、萬一斯樣に申置候所者、近年追腹御法度故、子孫をかばひ候かと、不レ知者は評判も可レ申候哉。御用に差上候子孫共に候へば、彌以て冥加に相叶ひ候事と、大望至極に候得共、御科御赦免不レ被

遊に御供仕候は、道理に背き、却て不禮と存候に付、只無用の命故、相果候迄にて候。加樣の體にても、何なる國の端に不慮の儀も出來、御奉公に一命不差上候事、時節と申ながら殘念至極奉存候。日頃の所存候事、天道に御座候間、末々可被聞召候。

右之趣委細に御老中迄、被仰達可被下賴入候以上。

五月廿日　　　堀田上野介正信判

松平淡路守樣

淡路守是を披見し、急ぎ御老中へ差上ぐる。因之閉門程なく赦免、諸人樣々流言す。倩或人筑前守橫死を評すらく、是兄上野介の魂魄、石見守に入替り、殺さるゝならん。其故は、兄正信は、御旗本諸番頭諸役人衆の困窮を歎き、我が所領を差上げて是を濟ひ、且拜借金あらん事を訴へて、流人となり自殺せらる。此故にや段々拜借金御役料ありし處を、筑前守大老職となりしより、拜借金上納御役料無用となる。誠に兄正信、舊領一命に替りて願ひ置かれし事を、少しは思はるべき事なるに、性得不弟

なる人故、上野介の靈憤を蒙り、橫死ありしにやといへり。又此家、如何なる宿業にや、三代の最期、皆世の流言にあへり。又加賀守殉死の時も、其辭世の歌を評す。

行末は闇くもあらじ時を得てうき世の隙をあけぼのゝ空

さりともと思ひし事も夢なれや何言の葉も形見ならまし

此歌浮世の隙を曙と詠める惡し。うき世の闇とあらば可なり。又さりともと思ひし事も夢とは、其心底甚だ不審なりといひあへり。

三萬石　井上主計頭正就

是は常陸笠間城主なりしが、是も寛永八辛未年八月十日、御使番たる豐島刑部が爲に、殿中に於て同死す。此時御小性組青木小右衞門は、豐島が主計頭を突放すを見て、豐島に無手と組む。時に刑部は持ちたる脇差を逆手に取直し、青木を突かんとしけるが、聊思慮ある體にて、世倅め放すべしといふ。其聲を聞きて、御番衆大勢馳せ來り、兩人を斬る。刑部は死し、青木は未だ死なず。御老中馳せ寄つて、仔細を尋ね

らるゝに、青木は朋輩の爲に斬られし事をいはず、唯今如何なる宿意にや、豐島刑部、主計頭を突殺すに因つて、某走り掛り、刑部と組まんとするに、却て斯く深手を負ふ。然る處を御番衆大勢出合ひ、終に刑部を討止められたりと、言終つて死す。御老中是を聞き、其體を見らるゝに、手疵の次第、刑部が所爲に非ず。朋輩共周章誤りて、斬りたる事顯然たれども、人多く滅びん事を思ひ、其事といはざりしにやと、甚だ感惜し詳に言上あり。跡式相違なく仰付けられけり。抑此度豐島刑部、井上を突殺す意趣を尋ぬるに、島田越中守直時彈正忠兄なりが女を、主計頭の息河内守時に十四歲に嫁するに因つて、豐島刑部媒たり。首尾已に調ひ、互に支度しけるを、井上忽ち約に背き、鳥井土佐守成次が女に緣組を究む。之に因つて主計頭は刑部を招き、內々御邊の媒にて、島田氏と緣組を定む。然る處に上意を以て、鳥井土佐守が女を賜ふ。固辭すれども叶はず、是非なく御請すと語る。豐島之を聞き、此段更に實と存ぜず、右の仔細言上あらんに、約を變じ、などか强ひて仰付けられん。今按ずるに島田は小身、鳥井は大名たる故、舊約を變ずるならん。甚だ無道なりと恨み怒りて座を立歸り、直に

書狀を以て、島田方へ其旨をいひ送る。島田見て、主計頭が不義言語に及ばず、共に堪忍なり難き旨返報す。之に因つて刑部は止む事を得ず、主計頭を刺殺すとなり。島田越中守は、去る寛永五年泉州堺政所奉行仰付けられ、一萬三千石領しけるが、病氣に因つて御免を蒙り、水野河内守に代り、引込みて暫く保養しける内に、此緣組を相談す。然るに豐島刑部は、島田が返狀故に、井上を刺殺すと聞きて大に歎美し、此上は我も死なんとて、脇差を拔きて腹に突立つる。近習の士輩大に驚き、前後より押へて是を留む。其内に一族老臣集り寄りて仔細を問ふに、島田答へて、我れ持病の積大に張りて身を苦む故、積の虫を突殺すといふ。因つて外科を招いて是を見するに、腸大に拔出でしかば、腸を手にて漸く押込み、腹を卷きて藥を貼る。諸士之を見て如何あらんと問ふ。外科答へて、療治なるべし。御氣遣ひ莫れといふ。島田又聞きて外科に向ひ、汝は上手なり。尤是にては死すべからず。能く治療すべしと。是に外科も彌力を得、養生の品々を差圖して歸る。因つて近習の輩も、主人の刀脇差を隱し勤番す。時に島田は番人共が隙を窺ひ、腹卷を潛に解いて、息强く張る故

に、膓又悉く拔けしかば、手を以て殘らず引出して終に死す。家人等驚き、番人の怠を怒れども詮方なく、共に評議を凝し、公儀へは頓死と言上すれども、此事上聞にや達しけん、領地悉く殁收せらる。所謂島田淡路守是なり。然れども程經て越中守二男を召出され、甲府宰相君へ附けさせらる。又一説に、井上主計頭女を、豐島媒して、島田越中守直時が息男へ嫁を究む。然るを井上忽ち約を變じ、家光公の寵臣酒井山城守へ契約す。豐島是を怒り、主計頭を刺殺すと云々。

三萬石　酒井山城守重隆

重隆は、實には金森前出雲守の子なり。故あつて酒井雅樂頭忠世の養子となり、酒井と稱す。家光公へ御小性に出で、恩寵甚だ厚く三萬石を領す。其頃堀田加賀守正盛も寵臣たれば、酒井・堀田は車の兩輪なりと、諸士尊崇せり。然るに山城守は、如何なる所存ありしにや、病氣と稱し登城もせず。放逸不行迹にして、剩へ美女多く集め求め、淫亂にして、其中二人懷胎して、男子一人づつを生ず。本妻にも、右衞門八・

權兵衞とて、子二人あり。此事上聞に達し、御憤深く、已に病氣甚だ重く、奉公なり難しとて、療養の爲に引込み乍ら好色に耽り、子數多を儲け、剩へ不行迹を盡し、氣隨虛病、偏に上を輕しむるの罪、甚だ重しと雖も、數年の勤功を以て死刑を免され、所領歿收し、水野日向守勝重に預けらる。之に依つて山城守は、備後福山へ赴く。其時節堀田正盛は七萬石となり、信州松本城拜領せし由、重隆配所に於て之を聞き、正盛と我は兩輪の寵臣と尊崇せられしに、我は不行迹故此有樣、誠に口惜き次第かなと後悔する內に、正盛又十四萬石となり、佐倉城へ移ると聞きて、大に歎激して、終に自害せしとなり。其後息男酒井右兵衞尉重照を召出され、俵數を賜ふとぞ。堀田加賀守正盛・酒井山城守重隆は、共に家光公の寵臣にて、所領も共に三萬石づつ賜はり、甲乙更になかりしに、寬永十四年冬、酒井は配流せらる。同十五年正月二日の夜、正盛不吉の夢を見たりとて、氣色甚だ惡し。家臣等諫めて、夢は空虛にして、善惡共に正體なし。御心に懸け給ふべからず。如何なる御夢にやと問ふ。正盛答へて、我れ昨夜の夢に、我宅中及門々に立雙べたる飾松、殘らず中より折れ倒ると見たり。我

れ熟此夢を思ふに、山城守と我は、何事も牛角にして、門松二本の如く甲乙なかりしに、一本の酒井は既に倒亡す。今度我れ又倒れ滅びん事を、天告げさせ給ふならんと、家人等之を聞き、皆尤と思へども、何とぞ吉事の夢に申なさんと、各手を握り口を閉ぢて按ずれども、惡を善に取なす詞なく、惡夢は善に歸る、誠に目出たしと賀しけれども、正盛嘗て喜ばず、登城もせず食事を斷ちて、心甚だ是を惡む。家人等打寄り、如何せんと相議する處に、正盛の鎗持に戸平といふ者あり。彼無筆なりしが、此事を聞きて、廣間へ來り申しけるは、君頃日惡夢を御覽あり、御氣惡あしゝと承る。某敬んで相考ふるに、誠に目出度御夢なりといふ。諸士悅んで是を問ふに、戸平答へて、今度君の御夢、御家中の飾松、殘らず折れたりと御覽の由、某考ふるに、松折るれば本殘る。新春の初夢なれば、信州松本城は、近年主なく番城なれば、今年中君必ず彼城主になり給はん瑞夢なりといふ。諸士皆感得し、新春の事を、信州と覺えたるは無筆故なり。門松折るれば本殘るといふ儀、皆考へ得ず。誠に目出たき考なりとて、加賀守へ披露す。正盛感じて、戸平を居間へ呼寄せ、汝卑賤の身として、我夢

を判せし事道理に叶へり。若し我れ信州松本城主とならば、汝に三百石を與へんと契約し、心解け甚だ喜べり。其年果して四萬石御加增にて、信州松本城を賜はりしぞ不思議なる。之に因つて先づ一番に彼戶平を呼出し、三百石與へ士となす。其後又七萬石御加增、都合十四萬石となり、佐倉城へ移る時、又三百石加增しければ、彼者曰く、臣は元來至賤の身故、先年三百石賜はり士となり、御恩甚だ厚しと雖も、其作法も知らず、甚だ苦勞に候へば、今日より御掃除坊主に仰付けられ賜はるべし。三百石の御加增より、此願叶へ給へかしと申しければ、正盛を始め諸士皆打笑ひ、兎も角も汝が所望に任せんとて、剃髮せしめられしが、程もなく病死せり。妻子もなく其迹斷絕す。卑賤の者には珍しき心底ぞと、諸人惜み合へりしとぞ。

家光公御代に、酒井・堀田出頭し、酒井は御勘氣蒙り、堀田は榮ゆ。當御代にも喜多見と牧野出頭し、喜多見は御勘氣蒙り、牧野備後守は繁榮なれば、斯樣の事は御吉例なりと唱へけり。

完

二萬石　喜多見若狹守重政

重政先祖は、畠山庄司次郎重忠が一族、江戸太郎重長が二男、田見小次郎武重が末葉なり。武重より五代を、江戸彥次郎常元といひ、北條左京大夫氏康に仕へ、武州川越城夜軍の時戰死す。其子刑部丞賴忠家督を嗣ぎて、猶北條家へ忠を盡し、其子攝津守朝忠は、天正十八年小田原戰に、伊豆下田城へ父子共に籠り、大に戰つて自殺す。賴忠が二男喜多見若狹守勝重は、小田原に籠城せしが、氏政は自害し、氏直は高野山に赴く故流浪せしを、家康公聞き給ひ、武功舊士の家、斷絕せん事を憐惜あり、召出し御家人とし、武州多摩郡喜多見村五百石を賜はり、元和四年には、堺の政所并に和泉・河內・攝津三ヶ國の奉行職を仰付けられ、千石の御加增を賜はる。勝重に數子あり、嫡主水正早世す・二男五郞左衞門尉重恒・三男久太夫重勝・四男隼人重長、五は女子にて、伊丹大隅守勝政が室となる。六男茂兵衞重治と號す。勝重卒後、二男重恒家督を續ぎて勤仕し、寬文十二壬子年正月十四日、隱居して宗幽と號し、嫡子五郞左衞門

尉重政に家督を讓る。重政勤仕して、當御代御書院番頭となり、後御側衆に召出され、天和元辛酉年十二月廿八日、從五位下若狹守に任じ、御加増ありて一萬石となる。又貞享三丙寅年正月十一日、一萬石の御加増、凡て二萬石を領し、牧野備後守成貞と共に、兩輪の寵臣にして、門前常に市をなす。斯る處に親族の出入に付御勘氣を蒙り、勢州桑名城主松平越中守定重へ預けらる。盛衰時ありとはいひ乍ら、殘り多き事共なり。或曰、重政は重恒の養子といふ。

一萬石　坪内總兵衛尉貞重

坪内の先祖は、右大將家の臣加賀國主富樫權佐重純が末葉なり。往昔文治元年の頃、頼朝、義經と不和、密に義經を誅せんと計らる。義經之を聞き、寵臣十二人を率し、山伏の姿に樣を變へ、奥州へ赴き秀衡を頼まんとて、夜中忍んで堀川の御所を出で、北陸道を落行く。此事鎌倉に聞えしかば、諸國に關所を構へ、義經至らば討留むべしと下知あり。既にして義經加州に至るに、富樫介關を構へ大兵を列ね、往來の

者を改む。義經是を見て、雜人輩が手に掛らんよりは、爰にて自害せん。汝等我が首取りて關守に渡すべし。汝等罪なければ、奥州へ赴き、秀衡と共に亡跡を弔ふべしと。時に辨慶是を止めて、一先づ僞り見侍らん。若事ならずとも、臣に任せ給へとて、唯一人關守の前に進み、是は如何なる新關ぞや。我々十二人は、南都東大寺より、毎年奥州羽黑山へ詣づる山伏なり。速に關所を開き通すべしと、叫ぶ聲雷の如し。若し否といはゞ、一文字に走り入り、大將富樫介を誅せんと思ふ顏色鬼神の如し。關兵之を見、是は鎌倉殿よりの仰、義經朝臣山伏の姿となり、從臣十二人を牽し、奥州へ落行かる。討留むべしとの御下知なり。然るに客僧達十二人なれば、是ぞ判官殿なれ。討留めんと引包む。龜井六郎重淸・片岡八郎經治・伊勢三郎良盛・駿河次郎淸茂・左近藏人兼房・源八兵衞廣綱・備前平四郎氏盛・熊井太郎秀經・鷲尾三郎武猛・鎌田七郎正包等之を見て、今は陳ずるとも叶はじと、必死の顏色天狗の如くなれり。富樫介思へらく、彼等は無雙の勇士、殊に必死と定め戰はゞ、軍兵多く討たれん。所詮鎌倉殿と、一旦其中不和なりと雖も、連枝の間、終には和睦あるべしと思案し、座

を起ちて辨慶に對ひ、東大寺の山伏ならば、勸進帳所持あらん。それを披見し、彌羽黑山參詣の山伏に決定せば、通し參らせんといふ。辨慶悅び、勸進帳所持せり。貴邊披見せらるゝとも、其文辭分明ならじ。所詮愚僧讀誦せん、聽聞あれとて、笈の中より廻文狀を取出し、逆樣に取持ち、元より辨慶は、南都・叡山・高野等にて學文執行し、覺えし事なれば、風情を顯し誦上げたり。富樫介大に感じ、羽黑參詣の山伏衆に紛れなしとて通しけり。此事鎌倉に聞え、富樫介は臆病にて、義經と知り乍ら討洩したる過失とて、加州を沒收し、忽ち漂泊す。義經奥州にて是を聞き、我故浪人せし不便さよ。彼れ、我を通せし深き思慮ある心底、義經前に推察せり。其厚情忘るべからずとて、秀衡に告げて富樫介を奥州へ呼び、前野といふ所三千町を賜ふ。然れども鎌倉の聞を恐れ、前野勝九郎と名を改め、義經に仕へしが、後秀衡卒し、義經も自害の後は、再び流浪して死す。勝九郎より七世、前野勝右衞門尉長康が時、奥州より尾州に來りて、始めて太閤に事ふ。（太閤此時木下藤吉郎と號す。）武功を盡し、殊に江州志津が嶽合戰には、四番の軍列にて功を顯す。太平後太閤數度の其功を感じ、三萬石（或謂五萬石）賜はり、

但馬出石城主となり、從五位下但馬守に任ず。後關白秀次の附臣となりしが、文祿四年秀次生害の後所領沒收し、駿州府中城主中村式部少輔一氏に預けらる。然るに家康公の御代となり、中村は前野が家系を言上す。之に因つて長康が男を召出され、御家人とし給ひしが、故あつて前野を改め、坪內總兵衞と稱し、屢戰功あるを以て、一萬石を賜はりしが、一族門葉へ配分し、今の總兵衞は六千石を領し、定火消役を司る。

私に曰、坪內先祖は前野に非ず、富樫なり。富樫對馬守より五代を、富樫喜太郎と號す。是は前野勝左衞門尉長康（後號二但馬守一）養子となる。然るに但馬守流浪の後、仔細あつて坪內喜太郎と改め、家康公へ召出され軍忠あり。六千石を賜ふ。此喜太郎、子四人あり。嫡總兵衞・二男太郎兵衞・三男加兵衞・四男佐兵衞といふ。今總兵衞は、四千三十六石を領す。喜太郎外三人の子は、千五百石配分を受く。如何なる由緒にや濃州に住し、御奉公もせず、美濃衆と號し、代々今に彼地に住居すとなり。

附言

右武家盛衰記は、無量山の藏中にあり。拙有緣に便りて幸に借之、拜誦せんと欲す。元來卷中の實記、猥に不許他見と云々。雖然不得止事借之、拜誦する事數日なり。誠に卷中の實記、古今の盛衰、積善の家には有餘慶、積不善の家には有餘難。有隱德則有陽報。偏に其例亦少からず。爰に於て密に書寫し、一子に授之とす。不顧愚筆して、于時文化十一甲戌仲夏始筆、同十四丁丑季夏終筆。數日の願全く成就す。世々の大人得一覽たまはゞ、卷中書寫の誤、御加筆偏奉希而已。

文化十四丁丑季夏　　大島正德謹言

古今武家盛衰記卷第三十終

南島變亂記第一

南島變亂濫觴の事并耶蘇天人華の事

慶長の老將軍日の本を掌握し給ひ、二代目秀忠公、元和九年に隱居ましく、世は三代家光公、寛永と改む。此九年先將軍御他界ありて、三縁山増上寺に靈堂建つる。武威佛法盛の治世、世以て人の知る所なり。萬民廿年の華美に誇り、逆浪遠く隔りて、濱松の音靜になりしに、忽ち西海に耶蘇の一揆起りて、暫く難城、慶長の餘燃を上ぐれども、何ぞ八島の治れる海水に敵せんや。然れ共後才奇士多く出でて、一隅二年の動亂をなす。是又天下の盛事なり。抑肥前國、今西南の僻地乍ら、西海道第一の大國にして、本高繩六十萬石十一郡にして、四方は五日半の路、今納辻新田共外運上計り難し。朝鮮にも近く島の往來自由にして、人民別してたゞ繁華の府八ヶ所、

所謂佐賀・小城・蓮池・唐津・島原・大村・神崎・富岡、何れも城主あり。大湊は名古屋・火の浦・七つ堂・瀨戸等なり。天草島よりは長崎へ十八里、島原領の湊へは三里半、凡て肥前は海を西南に受け、左は薩摩潟、右は肥後、後は筑前・筑後を並べ、西は五島平戶の沖に差出し、南表は天草なり。硫黃が島・敷島・種が島抔あり。浮島には桂の內侍の歌を止め、和田の原八十島かけて漕出でぬも入るなり。八十島の內にては、天草島は大島なり。知行高五萬石餘、鄉村百ヶ邑の內、六十八ヶ村は大村なり。富岡といふは天草の城下にして、唐津の寺澤兵庫頭の領地なり。福分の所、但地は肥後に屬す。土地厚くして廣し。南受にして田畑の實のり早く、火土田米出來能し。一年の內に、兩度稻を刈る所もあり。山林廣き故、材木多く金山あり。惣じて此島々になしといふ物あらず。凡て寺澤領十二萬三千石の內、天草五萬石と雖も、半は天草受納なり。富岡へは唐津より城代に三宅藤兵衞・同藤右衞門、其外諸役人相寄る。又島原といふは、四萬八千石の所領。主は松倉豐後守島原高久（高宗といふ）の城主にして、天草とは、海を隔てゝ向合したる所なり。此邊慶長の浪人、土民に混じて住む者多かりし。其

中に六士あり、天草甚兵衛・天草玄札・葦塚忠右衛門・大矢野作左衛門・千々輪五郎左衛門・赤星內膳、右の輩他事なく語らひ、共に由緒正しき者の末なり。當時は共に貧窮にして、渡世に難儀し、常に天草の磯に出でて釣を垂れ、魚を得て食にあへども、元來漁夫にあらざれば、骨のみ折れて、其の飢を凌ぐにも足らず。既に斯くの如くひつまりては、飢死は必定なりと、銘々歯を噛んで憤りしに、一日此六人、小舟一艘才覺して打連れ立ち、人の住まぬ離島に乘着けて、岩の上にて釣竿を揃へて、暫く居る折節、潮合惡うして一疋の魚も得ず、性盡きて六人一所に差集ひ、物語しける時に、大矢野いふ樣、扨々口惜き事なり。銘々我々父祖、代々の武門にして、勇功の譽を顯はしたる者の子孫として、斯の如くの有樣、偏に飢ゑて死するを待つ計なり。とても死する命ならば、何某が子孫ともいはれたきものなり。大丈夫の士、榮を萬代に輝かさずんば、嗅き事を百世に殘すべし。惡に付け善に付け、仕方のあるまじき樣なし。各如何思はるゝ。存寄承りたしといひも敢ぬに、天草玄札進み出でて、されば我れ常々此事を思ひて止む事なし。併常體の儀にては、中々捗行くべからず。案

ずるに此島の先領主寺澤志摩守は、武功高く德ありて、領分仕置正しく民百姓善くなづみ、自ら業を勵み、福分に暮せし所、今の兵庫頭は、政事以の外惡うして、年貢の外新規の課役を當て、不時の步役諸運上を增し、年中貪り取りて飽く事なし。是に依つて諸百姓次第に困窮して、地頭に恨み深く役人を惡んで、前代をのみ思ひ慕ひ、只一人として忝なしと思ふ者なし。此虛に乘じて百姓原を進め、一揆を起させ騷動に及ばゝ、我々一度は貧苦を遁れ、萬一運をも開かば、各萬代に名を上ぐべし。よし又調はずとも、道路に飢死せんよりは、先祖の武名を顯し、相揃うて弓矢の街に枕を並べて討死せん事、本望たるべし。此儀相談あられよといふ。天草甚兵衛を始め、千々輪・赤星の輩、皆尤々と喜ぶ。其時葦塚忠右衞門いひけるは、成程能き思付、幸當所種が島に近く、鐵炮最初の所なり。凡そ村々を集めなば、五六百挺の鐵炮はあるべし。常々百姓等手練して、鹿猿を皆打ち、獵師にして下針を爭ふ手垂の者多し。此者共を嗾かし、一揆徒黨させ給ふべしと申談ず。其日彼者共每日々々漁に事寄せ、此離島へ集りて、談合評定區々なり。故に今に爰を名付けて談合島といふ。然

るに葦塚軍道に思慮深き者故、工夫して申しけるは、以前異國より切支丹宗門渡り、西國に普く、別して此島の人民等、彼の宗門を信じたる由、當時は公儀の御法度に、信ずる者甚だ少し。此節宗門の不思議を顯して、愚民の心を迷はし、然して後辯舌を以て引入る時は、早速事調ふべしといふ故に、葦塚忠右衞門、今年の運氣を考ふるに、甚日照と見極めければ、彼の楠木が天王寺の未來記に倣ひて、斯く言辯を作りて、密にあちこちといはせければ、時至りてや、事の外言廣がりて、其詞に曰く、慶長の末年に、天草上津浦に伴天連一人ありしが、異國へ追放せらるゝ時、人々に言殘しけるは、五々の年に當つて、日域に仙童あらん。習はずして諸道に通じ、東西に雲赤く、海燒け枯木花咲く。諸人の頭にくるすを立て、野山に白旗を靡けんと、未鑑を殘すといひ傳へける。果して其詞一も違はず、終に天下二年の動亂を引出す。古語にも、海も枯るれば底を見る、人は死すれども、心を知らずといへり。されば心程計り難き者はなし。故に一人亂を起せば、忽ち敵味方十萬人の命を亡すに至る。恐れても怖るべきもの、誠に人才にてぞありける。抑日本へ、西域の佛法始めて渡りしは人王

耶蘇天人華の法

卅代、今の世に至つては、十宗八派分ると雖も、皆殊勝の正法なるに因り、嘗て耶蘇宗門を用ひず。近代は新宗立つる事さへ禁制なり。然るに耶宗天人華の法といふは、遠く南蠻國より始まり、唐土・朝鮮にても、文學聖賢の道を守る國々は、嘗て信用せず。西洋國ろうま・呂采・阿蘭陀等、無智無學の夷共、是を用ふ。されば文明の日本、何ぞ是を用ひんや。貿船さへも、今亞媽港・呂宗・いすはにや・えけれす此四ヶ國は、日本渡海近代停止なり。切支丹・伴天連・伊留滿等は、元島の號なり。彼の宗の本尊といふは、金玉にて造りたる佛像なりといふ。又天子を本尊に立つる故に、一名天主敎といふ。畵像は、十八歲の女子、二歲計の小兒を抱き立てり。此小兒天帝の子なり。是を賴むといふ。皆愛執執念の姿を以て本體とするなり。悉くは知り難し。本像を名付けてでいうすといふ。又こんだつといふものを手に掛けて、せんすまるは〳〵と唱ふる由。又像にさんだまりといふものあり、法具等數品なり。又文字にでいうすを天帝子といへり。此文字は、後代に至りて中華の人に學びて、密に天地人生育の理を加へて、天人華といふ。是は宋朝末年の事にして、古來は如何なる仔

細にて、號へ初めたるや、元より繩を結んで文字とする蠻人共の所行、誰か知るべき。彼宗の本國は、金砂澤山にして、雨の降る時は、籠の類を以て谷水を受くるに、黄金溜りて常の砂の如し。國人五穀を作らず、獸蛇の類を狩取り食とす。常に他國を窺ひ望む。其國を奪ひ取らんと欲する時は、先づ黄金其他至極の器財を渡し、珍物を慾深き民百姓に與へて本心を奪ひ、又魔術を以て眼を掠め、吉利支丹に勸め込む。其國自然と末國になるといふ。恐るべし。日本へも磁石又自鳴鐘、或は鳥銃等渡せしは、皆此切支丹なり。近年に至つて、煙草・加留多の類、食を斷ちても、是を好む人まゝ多し。是皆愛念執着を以て作る所なり。島燒の者に、髮德利といふものあり、面あつて手口あるものなり。是は切支丹の天帝の守護神なりといふ。蓋は冠の像の體なり。四天王護法兩金剛の類なり。加留多の十を本尊といへり。鏡の裏に像し、此鏡に奇特多し。由井正雪常に用ひしは是なりと、樗蒲の馬切といふ者を見ても、常に軍戰を必ず要とする事を知るべし。又煙管の柄をらふといふ、皆彼が國語、我國にも此執言止まれり。故にこそ天正の頃の軍將、此爲に身を過れる者多し。上

古は知らず、日本保元・平治の間、始めて彼の惡徒渡ると雖も、具法高達の僧多くありて、朝雲の間用ふる人なき故、伴天連共術盡きて、本國へ歸りしといふ。其後應仁の亂後、日本始めて戰國となり、君臣の禮を失ひ、親子の和朋友の信もなく、王法神道共に衰へ、天子將軍もなきが如し。此節邪宗又渡り、信ずるもの略多かりし。就中豐後國主大友宗麟、深く此宗に傾き、其外九州の諸將あまた歸依あり、土民に流布して信ずる者多し。夫に付困窮する砌、宗門に歸依すれば、金銀等珍物を贈る故に、一時の急を助けんとて、此宗に陷る人も亦多かりし。夫より段々上方筋へも、伴天連共入込み、肩廣に宗門を勸め廻れば、亂世なれば誰咎むる者なく、已に織田信長、荒木攝津守を御追討の時、彼が幕下高山右近を味方に招かるゝ、計略に、切支丹宗門は正法にて國家の便なりと、寺院を下され地を占むる事になりぬ。されば切支丹宗、京都にては四條油小路、江州安土にては淨嚴院村、尾州清洲にもあり、加州金澤にも紺屋坂といひ、公事場の間にあつて、一度寺內に參詣する者は、理不盡に宗旨を勸め込みけるとて、諸人怖れしといふ。何所にても南蠻寺といふ。されども太閤秀吉の御治世に禁

制になつて、悉く追放されぬ。然るに秀吉公は、朝鮮征伐の時、朝鮮國中亂妨騷動して、八道の人民寺院伴天連共來り、明寺へ押入り住持となつて、朝鮮の內三道の寺院は、皆耶蘇宗となつたり。日本人是を知らず、誠の寺僧と心得て、在陣七ヶ年が間、討死又は病死の骸共、流石野山にも捨て難く、親友の者共打寄り、寄々の寺院へ送り弔ふ。夫より何となく馴れ滿ちて、邪宗とは夢にも知らず。慶長三年冬の頃、和軍歸朝の舟に、彼の伴天連を各乘せ來るに、制する人もなし。小西行長を始め、諸將以下在陣の內、彼の宗に勸め込まれし人多く、朝鮮征伐の歸路、又此邪宗、日本へ再び渡る病源なり。然るに東照宮、此宗門を大きに嫌ひ給ひ、日本亡國の基、悉く驅拂ふべしとて、肥前長崎に改所を建て、嚴しく御吟味あつて、伴天連共を追放ち、或は刑罪あつて、其根を絕やし給ふも、又遠慮仔細ある事なり。就中顯露に聞えしにや、八宦といふ唐人の子孫花井氏、越後國に故ありて立身し、其身才覺器用者故、石見守と經上り、三萬五千石を領して、天下諸勘定の本、佐渡の金山を奉行兼帶し、私欲夥しく佞奸積り、死後に顯はれ御糺明、缺所の時居間の下に穴を掘り、黑塗の箱を石の唐櫃に納め

て置きたるを、開いて御吟味なされしに、西洋國の王へ日本の寶物を渡し、彼の國よりは珍しき寶物を受け、耶蘇宗門を以て人を引入れ日本を傾けんと、恐しき密書共露顯故、子供殘らず御刑罪。其以後愈彼宗門を、大きに制禁させ給ふ。凡て日本一州の人別を以て宗旨を改め、寺請狀といふ事始めて、宗門改の奉行を定め、邪宗を拂ひ去ると雖も、良もすれば遠國端々に流行するは、再應渡りたる故なり。其上西國は殊に親み深し。

大久保十兵衞長安といふは、始め武田家の小性にて皷を能く打ち、後に大久保相模守忠隣も、亂舞好にて小皷を打たれし故、此十兵衞を召抱へ、名字を取らせらる。才覺者にて、立身して直參になり、石見守といふ。後に越後の家中の目附役を兼ねて、毎年佐渡の國へ往來し、越後に逗留して、諸事取捌きし程に、忠輝公の家中にも、花井等の一門廣がり、國中に威を振ふ。石見守死後に、妻妾多くありしが、所務別の事より事起り、妾の偏執より、閨の下の唐櫃の事訴へ出づる。是に依つて事大きになり、越後忠輝公の家老二人迄刑罪あり。夫よりして切支丹の吟味

強くなりける。大久保相模守・山口修理亮重政・高山右近大輔長房・里見安房守忠義等御改易なり。皆今度石見守が叛逆の帳にありし故とぞ。越後忠輝公の跡、後に御潰しなされし事も、小栗美作が事といひ乍ら、實は此大事の底意と聞えし。されば耶蘇の一宗は、執着を深くする故にや、一度法に歸せしめぬれば、轉ぶと雖も内心には忘れず。此邊霧島にて、山嶺に熱湯の池ありて山に映じ、紅火の如く花咲く。霧島といふ躑躅は、此山根元なり。熱湯の池、其外温泉が嶽・地獄谷あり。天正年中此上より僧徒を火の池の刑に行ふ。今は多く切支丹歸法の者を罪する所なり吉利支丹の人質、東武へ交代の時、供奉する所の者に此刑を見せて、法に歸する事勿れと戒む。則前に切支丹になりたる者を、此池へ投げたるに、忽ち支體蕩け上り、毛髮分々に湧き散る。是を見て、如何なる人も身を振はし、耶蘇宗にはならじと思ふに、此切支丹を江戸へ伴うて戻る時、必ず二三人邪宗に歸する者ありて、重ねて火の池の刑に合ふ者ありといふ。其謂れを問ふに、伴天連嘗て人を勸めず、朝夕咒を唱へ經を讀む。初の間は耳へも入らざるが如し。二三日を經て、天然と有難く覺え、

少し聞きたき心になつて近づいて聞く。又自ら身を戒めて歸り、斯の如き事二三度して後は、乞願うて佛前に至る。終に邪宗に歸するといふ。是執着の妙なるべし。別して此島原・天草の二所は、諸島蠻路に入交り邊國故に、彼の葦塚忠右衞門が未鑑の一諺にたぶらかされて、忽ち人民皆彼宗門にこそ傾きける。

魁惡六子傳の事并天草玄札密謀の事

天草一揆の六首傳

天草の役、野を掠め城に寄る。此間奇功の輩智勇の働き、百を以て算ふと雖も、其元首たるものは此の六士に出づ。所謂天草甚兵衞といふは地侍にして、本名は阿曾沼なり。先祖は藝州中村の城主阿曾沼中務少輔斷滅の後、子孫五代天草に住し、高家の浪人故、諸人尊敬して、天草を以て稱號とす。妹一人ありし。島原領原村の大庄屋渡邊小左衞門が妻となるが、一揆の總大將となりし四郎太夫時貞といふは、此小左衞門が子なり。然れども今天草四郎と呼ぶを、實は總大將となしたりしは、此甚兵衞を目當とするなり。四郎時貞、發明才覺ありと雖も、其年十八歲にて、何ぞ四萬

に餘る軍民を治むべきや。暫く葦塚が書きし奇代の仙童出でんといふ未鑑に、合せんと欲するのみなり。甚兵衞天性仁心ある故、郷民餓死すれ共、一人も恨むる者なし。天晴一城主の器量ありし者なり。當時は人の敬ふに任せて、歴々となりしが、近年困窮して、久しく持傳へし田畑段々沽却して、此頃は困窮是非に及ばずとなり。同苗玄札、(又玄察ともいふ、)甚兵衞が伯父なり。博學氣慨あり。土民の風に合はざる故に、醫を業とすれども、下手にて流行らず。然れども其人と交はる事よし。宗意・四鬼丹波・駒木根・鹿子木等は、全く玄札が一言に皆々同意す。且森宗意は、六甲六遁の法に達し、忍びに妙を得、妖術に詳しかりければ、老人故、玄札に皆々讓りけるとなり。妖術は、戰場に却て軍心を迷す事あつて、葦塚是を强ひて留めしとなり。由井民部之助(其頃は、高松與五郎といふ。正雪は西國にての變名なり)異人にあひしといふは、森宗意・天草玄札なり。(森宗意軒といふは誤なり。森宗意は、則大坂籠城の森長意が子にて宗意なり。軒號は安龍軒といふ。慶安太平記にも誤といふ。)駒木根八兵衞・鹿子木左京などは、身上稼に出づべき心なりしかども、玄札が交り捨て難く、皆々二言となく、一味徒黨に加はりたり。大矢野作左衞門は、本名は大矢作左衞門というて、本田出雲守譜代相傳の

家人なり。父作左衞門は、大坂陣の時、主人の馬先にて働き、武勇を振ひて御宿越前守に討たれ、當作左衞門も智謀武勇兼備の者なりしが、聊か不足を申立て、本多家を立退きしに、主人大きに立腹ありて、彼者父祖の武功を鼻に懸け、主人を蔑如する不屆者なり。天下へ訴へ、諸國を尋ね求めらるゝ。此由傳へ聞き、今は住むべき所なく、天草に遁れ來て棲む。元來此島は福有の地にして、便よき浪人の隱家に至極の所、幸ひ大矢野といふ島あり。是非先祖の家名に叶ひ、一生住むべき地なりと祝して、名をば松右衞門と改め、名字に野の字を加へ、劔術の指南して、大矢野村に蟄居せり。勿論妻子もなく獨身にて、此一揆の首領大矢野作左衞門と名乘りし。身の長六尺一寸、濶面にして言語明かに大音なり。天晴尾鰭ある男なり。葦塚忠右衞門は、小西攝津守行長が家臣なり。慶長五年小西關が原に陣せし時は、留りて宇土の城を守る。三成小西に種々善諫をいひけれども用ひず。行長捕はれて後、杉野何某共に宇土の城を拔け、浪人して天草に來る。軍術經才武藝天文諸史百家に通ぜずといふ事なく、自ら渡邊勘兵衞に比して見積り、武渠に負けじと勵みし人なり。勘兵衞浪

人せし頃、葦塚も出でて仕へんとせしが、人の讒言に會うて終に身を遁れ、六士の中にて、此人殊に惡意なし。然れども衆の大義を聞きて、止むべきにもあらず。終に弟忠太夫・子息左内、共に逆徒隨一軍配者となり、常々手習讀物の師として年月を送るに、柔なる人なりしが、忽ち六具して軍中へ立出でては、勇壯にして名士なり。其人にあらざるが如し。號令神の如し。希有の勇者なり。土俗葦塚辨慶といひて、萬事賴に思ひしなり。唐土天竺かけて、辨慶より强き者なしと覺えたる土民の稱號なり。誠に邊國愚智の推察すべし。千々輪五郎左衞門、本名は加藤なり。加藤淸正に仕へ朝鮮へ渡り、父五郎左衞門は、所々勇功譽高く、二千石を領せし者の子なり。父死して相續する所に、加藤家斷滅する故、肥後の八代の城下法華寺に暫く蟄居して、幼少の男子あり。彼の寺に預け、其身計り天草の內千々輪ちゝりとも石ともに住む。武藝衆に抽んで、力量人に勝れ、馬上の達者、鑓は一流の極意を極めたる勇士なり。實は加藤淸兵衞が孫なり。鍋島氏其子孫を扶持す。今田原氏と稱す。五郎左衞門、身の長五尺八寸、逞しき男なり。赤星內膳、又主膳ともいふ。浪人の名は宗帆といふ。

先祖は菊池家の子にして、武名九州に高き筋なり。祖父赤星主馬には、岐阜黄門秀信の臣なり。父内膳は、大坂籠城して討死す。其後故あつて此島に住居し、鍼醫を以て業とし、總髮にして名を宗帆と改名す。日頃大坂陣を聞きて、軍術の足らざるを笑ひし程の者なり。其上小細工など器用にして、表具等など、京都の上手と雖も、恥ぢざる程なり。今度第一の奇功の點にぞ合ひける。其後原の城を、俄に巍々然たる要害に見するも、皆此赤星内膳が巧なりけるとぞ知られけり。爰に天草島大郷に、大江村といふあり。庄屋治兵衞といふ者、古來よりの大百姓にて、家富み榮え、家内に召仕の男女多く、其身も律義實體なる者なり。正直の餘り、富貴に着し家居に着する の念より、終に彼邪法を、人知れず信仰し、本像の畫像一幅、深く隱し所持してありしが、常に表具せん事を願ふと雖も、御法度嚴しきに恐れ、志を空しくする事久し。然るに天草玄札は醫師の事なれば、此家に心安く出入せしが、如何して此事を搜り知りてや、其心を知りて、頓て五人の者共に相談し、是屈强の手懸りよと、或夜玄札は、彼宗意に習ひ得し忍の術をなして忍び入り、彼繪像を竊に盜み出し、幸ひ赤星内

膳紙細工に妙を得たり。面々零落乍らも、肌の守袋或は懐劔の袋などの切を集め、成程見事に表具を仕立て、其裏に、夕日雲燒、夏海血流、枯木華開、天帝宗起といふ四句十六字を書きて、玄札又潜に治兵衛が佛壇の內へ、夜の間に入れ置きたり。此始終、主人を初め家內に、嘗て知る者なかりけるこそ不運なれ。其年は、斯る大逆亂起るべき先表にや、夕日大きに照り輝き、夕燒して波紋を流す。又大江村治兵衛が庭前に枯木のありけるが、凌霄花といふもの始めて花咲き、天草島、彼凌霄の花を終に見し事なければ、大きに不思議の花咲きたりと、諸人見物に集りし事なり。其後一日、治兵衛早朝に手水使うて、彼の佛壇の祕匳の箱を明けて見れば、こは思ひも寄らずや、日頃心に信ずる本尊、望の通り表具出來して、見も及ばぬ唐の大和の布を以て、莊嚴輝く計りの裝なり。生得律義正直なる治兵衛なれば、玄札が調略とは夢にも知らず大に驚き、念願成就の喜の淚袖に濕し、扨家內男女殘らず集めて拜ませ、夫より日頃懇なれば、先づ天草玄札を呼びに遣す。待儲けたる所なれば、玄札甥甚兵衛をも伴ひ來り、此樣子を聞き、玄札僞りて先づ信せず、色々と前後の物語を聞き、兩人

共に打驚きし體にもてなし、先づ彼畫像をいと殊勝氣に拜して、誠に末世末法の今日、斯る不思議あるべきとも思はれず。是全く凡人の業にあらず。天帝守護の菩薩の制に疑なしと、玄札敬しく彼繪を下し取廻し見て、扨こそ御表具の裏に、怪しき文字すわれりと驚き押戴き、彼四句の文を讀上げ、感涙を流して十度も戴き、扨治兵衞に向ひ、辯を巧にして說聞かせ、いつの頃よりか、夕日燒けて波紅を流し、又此庭の枯木に不思議の花咲く事、今の文句に悉く合ひて、是則耶蘇宗門繁昌の徵顯然たりと、信實に有難き天帝の御告、宗門再び起るの時至りぬと、身を抛ちて禮拜をなせば、主治兵衞はや天上したる心地して、誰憚る事もなく、重き御法度に氣も付かず香花を備へ、家內上下丹誠を抽んで、異口同音にせんすまるは〳〵と唱へて、更に念はなかりける。斯くて邊近所の百姓原聞傳へ言觸らして、大江村中二百軒計の男女、其外其邊近き在々、追々殘らず治兵衞が方に馳集り、聞定めたる事もなく、彼の本尊を拜して、いすまる〳〵と心身を抛ちて、一度に歸伏拜禮せし有樣、秋の風の稻葉に渡る如く打靡き、異口同音に稱名せしは、傳へ聞く舍利弗身を變ずれば、六師外道が八

千の徒、忽に隨喜感動して、摩騰空に坐し、三千七百の道士邪飜して、一時に出家しける如きも、斯くやと覺えて夥し。

南島變亂記第一畢

魁惡六子傳の事并天草支札密謀の事

南島變亂記第二

大江村群參の事并百姓、越智・中西を殺す事

古書に曰、人氣傾く時は大山を崩し、衆氣凝る所大河を塞ぐといふ。凡て人の應ずるに至つては、理非の差別もなき者なり。已に六人の族は計略調ひ、大江村の樣子聞くと等しく、大矢野・千々輪・葦塚兄弟父子、近鄉五六里四方手分して馳廻り、大江村の珍事觸步けば、內々彼宗門御法度强きに恐れ、外觀は憚ると雖も、內には保つ土民の心、聞き傳へ尾を尾に付けて、普く勸めの心立ちければ、愚なる人心、篤と聞定めたる事もなく、是奇代の不思議かなと、急ぎ參詣申さんと、皆々盲龜の浮木に合うの心地して、騷ぎ罵り打連れて、早速十四五ヶ村の村里の人民、追々に足弱き者共を肩に掛け手を引いて、連綿たる大勢、大江村庄屋が方に群參して、廣き家內居る所な

天草甚兵衛等一揆を企む

くなりにける。所の年寄共評定して、斯樣の奇瑞聞傳へ〳〵に、日を追うて段々參詣募るべしと、若者共に申付け、高藪を切拂ひ、俄に假屋を拵ひ、彼の本尊を移して佛具を集め、香花燈明或は靈具菓物等を捧げ、終日燈明終夜の繁昌、猶翌日より大小五十三ヶ村の男女老若幼少の者四五十人餘り、唯一心不亂に、せんすば〳〵と唱へしは、偏に天魔の所業とぞ知られぬ。日頃分別顏して、所の者に怖れられたる庄屋年寄共、誰一人御法度の氣も付かず、靈佛の開帳場同前、上下袴にて詰掛け、皆々亂雜して、けが無用といひ、參詣の出世なりと、本心うつけて邪宗に醉ひ、一心に世話をやく。大小百姓共、散錢を拋つ事雨の如し。米穀は忽ち山をなし、桶に入れ俵に積む。餅酒は席上に充滿す。彼六人の者共は、目と目と見合せて、天晴潤色なりと心に喜び、此跡は急に一揆を起さんと工夫のみなり。中にも天草玄札は、亭主治兵衛に申す樣、扨是は夥しき米錢かな。是を在俗の身として、貴殿の德分にもなるまじ。出家沙門に施さんも、宗門の違あり。殊に斯樣の事、支配人のなき時は、落着し難き者なり。今我れ急度思付きたるは、幸ひ葦塚忠右衛門・千々輪・大矢野・赤星四人

違なれば、必ず麁末のあるべからず。我れ又何れとも常々懇にして、元來歷々の武士の果、一器量ある輩にて、何事にても賴むに否とは申されまじ。右の面々に當分支配を預け給ふまじやといふ。此節治兵衞は、魂も拔け現の如くなりて、只彼四人の輩、宗門を譽め天帝を尊むが嬉しさに、前後をわかず、兎角然るべき樣にとなり。四人の面々に、天草甚兵衞殿も加へ賴み入る。殘らず引請けて、支配して給はれとの事、異儀に及ばず五人の者共引請け、頭取となつて、米錢を悉く我者にして、一夜檢校の如く得付きければ、行末は兎もあれ、念願の柱立ちて成就せりと、竊に笑を含めり。治兵衞を始め諸百姓は、佛賴みて地獄といふが如く、萬事を只此五人に打任せ、最早日本の號令は空吹く風、現の日をぞ送りける。一言は駟馬も追ひ難し。僅の事迄も仰山にいひなす人情、ましてや是程の珍事なれば、頓て國中に隱れあらざれば、富岡の城代三宅藤兵衞、早く是を聞付けて、大きに驚き怒り、早速大江村へ役人を遣し、頭取を詮議して召捕り、事を鎭めんとす。此富岡の城は、唐津の支配寺澤兵庫頭持分にて、城代三宅を頭とし、大目附・勘定方・奉行方・郡代二人・代官四人・浦方・

支配・山方支配・運上方其外足輕の類、隨分人數減少して在番せり。則郡代役越智茂右衞門・中西十左衞門に、代官三人・足輕十五人・雜人彼是四十餘人引連れ、彼地へ駈付け、百姓原共を引括り來るべし。異議に及ばゝ、打殺しても苦しからず。天下の制禁といひ、奉行所を蔑にする段、甚だ奇怪なりと怒りて下知ありければ、大横目役の三宅藤右衞門、進み出でて申しけるは、暫く怒を止めて御聞き候へ。此度百姓、大江村に男女三四千人も會合の樣子に聞え候。是唯事にも存じ候はず、今年惡作にもあらず、又冬の受納の頃にも非ず、公儀役所をも恐れず、日々に彼の御制禁の宗旨を唱へ申すは、前代にも聞かず。此頃御政道邪にて御課役多く、百姓共兼々恨を含み申す故に侍らんか。若し今强く沙汰に及び、百姓と動亂有之候はゞ、御聞及びの如く、近年大公儀御威勢盛にして、諸國の大小名、少しの動亂にも國改易所領歿收等多く候時節なれば、寺澤家に、若し公儀より御手の入り申樣に成行き候ては、却て不忠に相成候はんか。我等愚案に、今何の顯はれたる事もなく候へば、靜に庄屋役人を御呼寄せ候て、柔に仰渡されば、誰か當時身を亡したき者もなき事なれば、鎭まり

候は治定と存候。其後緩々と、邪宗に傾き候本人御吟味候はゞ、事穩便に治まり申すべしと存候と申しける。此藤右衞門は、三宅藤兵衞が別腹の末弟なり。日頃藤兵衞威勢に高ぶり、民百姓に辛き目見する事を、悔み思ひし所なり。

此藤兵衞は、明智日向守光秀が孫なり。故に細川家に、母方に付いて緣ありければ、大名の一族なりとて、折節は目覺しき事多かりける。寺澤の家中、皆三宅藤兵衞を惡みしなり。

三宅藤兵衞是を聞き、彌怒つて曰、汝若輩の分として推參千萬なり。却て國主御政道を侮し申段、不屆千萬なり。課役の儀、近年諸國の風俗として、江戸の御入用甚だ多ければ、御國下へ御かけの儀、定めたる事なり。今見よ大江村猶福分にして、要らざる事に多くの酒飯を出し、散錢山の如しと聞く。公儀より御申渡の時節は、彼是申立て、今日に至つて、邪宗の事に斯くの如くなる樣子、沙汰の限りなり。急ぎ郡代の面々立越え、異議に及ばゝ、打伏せて引連れ來るべき由下知しければ、郡奉行抔も、日頃痛め付けられたる事なれば、心地よき事に覺え、俄に棒ちぎり・琴柱・捕繩等提げ

て駈行きける。急ぎ大江村に馳付き見てあれば、こは如何に、近邊にも寄付く事思ひも寄らず、大勢集まり、錐を立つべき地もなく、老若男女打圍み居たり。奉行大音上げて道を明けよと呼ばはり、常々は奉行代官といへば恐れしが、此度は少しも憚る事なく、中々下知に應ぜず動かざる故、棒にて打拂へと下知すれば、中間共二三十人立懸り、拂ひ退けんとせしが、元より此者共、他領の者ならず、當島の百姓共にて、領主兵庫頭の苛政に懸り、作り倒れの未進奉公に出でたる者共なれば、親類縁者友達同士多く、流石手痛くも仕り兼て見合す內に、有難き樣子を聞き、近付きて庄屋など聲をかけて、佛前にて狼藉すべからず。本尊へ結緣せよと勸むれば、彼の中間共、棒を伏せて平伏して、いすまる〳〵と唱へて、存の外なる樣子なれば、奉行代官此體を見て、呆れ果て聲を勵まし、扨々不屆なる奴原かな。重き御法度を背くは何事ぞと、群集を押分け踏込んで、彼の本尊の前に行きて見るに、庄屋年寄共、皆上下袴にて並居たり。越智茂右衛門興をさまし腹に据ゑ兼ね、是は如何なる有樣ぞと、彼佛壇に飛上つて、結構に仕立てたる畫像を取つて引下し、三つ四つに引裂きて大地に投

付けて、散々に踏にじり。己等が有難がる本尊是を見よ。何の罰利生あるべきと罵りければ、百姓共大きに泣き怒をなして、こは勿體なや、いで罰あてゝ見せんとて、五六十人立上り、棒千切木を奪ひ取り、ばら〳〵と打つて懸る。中西十左衞門刀を拔放し、手近く廻る奴原二人切倒し、越智茂右衞門も、拔打に二三人切伏せ、四五人に手を負はせ、刀打振り喚きければ、此の威風に恐れ、百姓原ぱつと逃退き、暫く辟易するを見て、大矢野・葦塚・千々輪、兼て期したるは爰ぞと、奧より拔連れて飛んで出で、大矢野一番に進んで、十左衞門を大袈裟に打放し二つになす。茂右衞門をば、千千輪是も唯一刀に切止めたり。二人の代官は、葦塚忽ち打取りけり。此勢に百姓共取つて返し、殘る小役人足輕共を、棒にて叩き鍬にて打伏せ、捕へて括りけるもあり、降參していすまるを稱する者もあり、一人も富岡へ歸る者はなかりけり。百姓共大きに喜び、扨々嬉しや、此年月權威を振ひ、無理非道を働き、樣々の課役をかけて責使ひ、其上せぶり取りたる役人代官等なり。多年の腹癒此時ぞ、呵めと棒鍬鋤を以て、死骸を寸々に切崩す。併ら此後大きに拍子拔け、本尊は引破られ、奉行代官は打

一揆等代官を殺す

殺す。扨淋しくなりて、坐に空恐しく、名主役人の外、平百姓共そろり〳〵と居村へ歸り、たゞ茫然として居たりける。此時に至つて、兼て調略せし事なれば、天草玄札は、亭主治兵衞が側近く座して、先づ庄屋殿寄り給へ。さて是は不慮の珍事、勿論役人代官は、日頃がさつの者と雖も、右了簡しても見給へ。先づ第一、天下一統に嚴しき御法度の宗門を再興する罪、免れ難き上に、所の奉行代官を殺す事、以の外重科、申開き叶ふべからず。今日寄合せられたる村々役人はいふに及ばず、男女老幼、斯く申す醫者の我々迄、一人も殘らず刑罪せられんは眼前なり。是非もなき仕合。されども此上能き思案も候やと、眉を顰めていひければ、其時名主共、夢の覺めたる如く大きに驚き、成程々々尤の心付、一大事になりたるぞや。よし奉行代官を殺したる解死人には、一座の名主共殘らず首を並べ、村々を救はんと願はゞ、濟む事もあるべけれども、御法度第一の切支丹を取立てたる罪は、遁るべからず。扨何とせんと、俄に青息をつき額に皺を集め、降つて涌いたる大難儀、十方に暮れて居たりけるに、忽ち末席より一人腹を叩いて大に笑ひ、今斯く行當りて、何ぞ歎く事かあるべき。

速に我說を聞くべしといふ。一座是を見れば、千束村の庄屋軒山善左衞門とて、始めは浪人なりしが、近年入聟に來れるものなり。

天草島一揆の事并六人の者共智略の事

已に富岡の奉行役人を殺して、事危急に迫りしかば、滿座の人々顏色土の如く、前後に昏れて見えけるに、兼て蘆塚忠右衞門、斯くあるべきを計り、其器量を見立て竊に語らひ、千束村の庄屋軒山善左衞門といふ者に、段々利害を說込み置きしが、此の時に至つて進み出でて申しけるは、先づ以て拙者事、耶蘇宗門の儀は、嘗て信仰せずと雖も、不計参り懸つて、今此一座に連るからは、罪科遁るべからず。安々と成敗に合はん事、近頃殘念千萬なり。さうして物の思案工夫といふは、前方の內斯樣に事破れ、何とすべき樣なし。是即ち陳濤・吳廣が雨に遭うて、期を失する時なり。此上は各心を決して、島中を勸め一揆を起し、領主寺澤兵庫頭、日頃無理非道の仕置共、立所に思ひ知らせ、富岡の城を攻取りて根城とし、他所へも打て出でて働き、運を天に

任せて、宗門の奇特天帝の爲に、諸國に歸依の味方も出で來りなば、不思議の幸を得べし。此外何の分別かあらんといへば、元來此島の生立かたぐにして、世間の廣き事を知らぬ族も多く、殊に今年田の實よく出來食分にあく、百姓の五斗いきりとやらんにて、心浮立ち居る時なれば、若き者共取分勇み出し、島中一統する上は、天下の御下知なりとも、恐るべからずとの心故、片端より如何にも此談合然るべし。先づ當年の夏作も秋の田の實も、作り取りに取入れて、上見ぬ鷲と振廻ふべしとて、島中の百姓共追々聞傳へ、一同に思ひ極めて、最早是迄なり。一日なりとも安樂にして、上天菩薩になるべきなり。憚る所あるべからず。一揆々々と大きに罵り騷ぐ。既に内々の謀略調ひたりと見えければ、五人の面々打揃ひ詞を出し、何れも此座に、庄屋御異念はこれなきにや。靜謐の御代に向ひ、天下に敵することなれば、一向討死の外あるべからず。兎角一揆は御無用なるべし。我等は武士の事なれば、望む所なれども、各は安樂に過ぎ給ふ身の上なれば、分別こそありたき事なりといひければ、大百姓小百姓齒を喰しばり大地を叩き、扨々甲斐なき詞かな。百姓の我々さへ

も、思切つては金鐵の如し。兵庫頭殿仕置にては、迚も立つべき我々でなし。殊に結構なる宗旨に離れられず、何の思出あるべきや。最早此場は斯く至れり。此上は只管御浪人を賴む間、御下知に隨ひ、一日なりとも、心の儘に働くべしといふ。五人の者曰く、さあらば事決せり。天帝の前に誓の辭をなし給へ。中頃より異心生ずべからず。敵の招きに從ふべからずと、誓ひ給へといふ。各同音にて、いすまる〳〵を唱へて、誓の詞をなしにけり。さらば岡方・浦方二手に分けて徒黨を廣め、先づ富岡より、重ねて討手向はぬ先、其用意なすべしと、則亭主治兵衞宅に於て、白木綿を取出し、天帝の旗十流用意し、庄屋共再び評議して、武家の作法・軍立・城攻・陣取等の事、我々は一向存せず候道なれば、五人の面々、由緒正しき究竟の武士と承り、此度の一揆の頭分に賴入り、萬事御下知に隨ひ申したしと、皆一同に願ふ。五人の輩、最早辭退すべき所ならず。卽時に領掌して、成程武道の駈引、我輩兼て手練の上なり。各心易く思はるべし。縱ひ百姓の武器に足らずとも、謀を以て戰はゞ、天下の大軍に向ふとも、やはか犬死すべからず。何事も此方共の下知を守り給へと、猶更敵味

五十三邑の郷民等悉く一揆に加はる

方の量を流へて、庄屋共の心を落着かせ、勇氣怒つて下部共の心を勵まし、愈一揆に事極めければ、十六歳以上の者に、病夫を除いて、其外は老人と雖も、用ふべき程は集め、尤浦方獵師を多く入れ、鐵炮の上手を以て、稽古を始め田夫に敎へ、近郷五十三ヶ邑の人民を勝り立つるに、早一二日の中に、上津・大江邑群集して、人の宿るべき所もなく見えければ、先づ着到を相調へんと、一類支族の輩、他國と雖も、急狀を以て引集め人を集むるに、目に餘る程に見えければ、頓て其次第を配分し、扨諸浪人を選んで、是を天草古老の十七人衆と稱す。其人々には、

天草甚兵衞	葦塚忠右衞門	大矢野作左衞門	千々輪五郎左衞門
赤星內膳	天草玄札	駒木根八兵衞	鹿子木左京
千束善左衞門	森宗意	葦塚忠太夫	葦塚左內
楠木右京	山田右衞門	田島刑部	戸島宗右衞門
有馬休意			

右の十七人は、皆評定衆とて、大頭方の者共なり。扨又百姓を六組に分け、是に其大

將たるべき百姓頭を定め、皆一騎當千の者共なり。其人に、

楠浦八兵衞　大江治兵衞　布津村代右衞門　菅村右兵衞
柏瀨茂右衞門　四鬼丹後

右の外に小頭有レ之、其の人には、

島川八三郎　松竹甚右衞門　三宅治郎右衞門　久田七郎右衞門
井田木工之丞　有馬長助　足津長右衞門　上總助右衞門
小川吉藏　多崎久藏　小刀部甚右衞門　木庭久兵衞
三會仁右衞門　串山太兵衞　小濱治郎兵衞　上津喜内

扨人別村里を到着するに、先づ大鄉には大江邑・布津村・島子村・井村・鹿田村・花崎村・鹽濱村・金谷村・千束村・志岐村、但種が島は離れて、天草・出島・田島・戸島を始めて、大鄉四十三ヶ邑、某外出村小鄉の者共迄、人夫に用ひ軍用に逹すべき百姓八千三百餘人、女子老人共數を知らず、只一日の內に、犇々と固まりて、死を誓うて一揆の色定めたる故、足弱共は一應先づ本村へ返して、其組々を分け、鐵炮三百五十挺・白木綿

の旗卅流、又白布を以て小旗にして相印を付け、六組の次第を連ねて法令を立て、寺寺の太鼓を取集め、竹筒を貝に用ひて、漸く軍用に調へ、先づ當發端の所なれば、大江村を以て、一揆の大會所と名付けて、惣軍一列、誠に蒼海を呑むの勢、時節到來とはいひ乍ら、寔に不思議の所業なり。其根元は、彼六人の者共の肺肝より出で、一時の貧窮に迫りし上、希有の事を調略する、誠に人定り能く天に勝つといふ、恐るべきの謀略なり。されば天下の騷動を引出し、柳營三府（江戸、紀州、水戸、尾州）魂を取拉ぐ。時に寛永十四年八月十三日、是一揆の最初なり。

南島變亂記第二畢

南島變亂記第三

富岡の城軍議の事并阿部備中守殿下知の事

抑も天草一島の在々邑々、一揆蜂起して騷動に及び、殘る所纔に富岡の城下町人、其近邊の村々、少々殘りたる計りなり。是迄も斯樣の節は、內心に何とか計り難き有樣なり。然るに城代三宅藤兵衞は、先志摩守忠高の代よりの古老の臣錄二千石を領し、日頃は人もなげに威勢を振ひしが、此節三宅大に弱り人心地なく、百姓共邪宗を取立て、役人共を殺害し、重罪の上一揆を起す段奇怪なり。急ぎ退治すべしと口にはいへど、此程の奉行頭人を打殺したる手並に恐れ、又は百姓の中に鬼の如くなる浪人の交り居て、所々打潰すの由沙汰するに驚き、當城小勢にて、中々退治叶ふべからず。却て百姓原に逆寄に寄せられては、防ぐべき手立あるべからず。夜に入りて

竊に早舟にて、唐津の本城へ引退くべしと犇めかれ候に、三宅藤兵衛色々諌めて、今百姓の一揆起れりといへども、一度の討手も差向はず、聞怯して唐津へ逃歸らば、何の顔あつて、兵庫頭殿へ御目見なるべきや。斯る爲にこそ御城代とはいふなれ。殿樣より城を明渡し申すべきの差圖なき內は、城中五人三人の衆なりとも、城を枕に籠城あらん事、道にて候。今一揆共、當城より討手向ふべき事を恐れ、未だ此城へ押寄すべき用意は調ふべからず。今城中人數少しと雖も、皆武士なり。何ぞ素肌の土民幾千萬ありとも、恐るべき事に非ず。猶も心元なく思召さば、早く唐津へ加勢を乞ひ、御留主居の家老原田・並河等の人々に調じ合せ、立挾んで一揆退治あるの外は、別儀あるべしとも存ぜられずと、大きに恥しめいひしかば、藤兵衛日頃の義勢にも似ず、藤左衛門差圖次第たるべしとて、唐津へ此旨注進にぞ及びける。此時若し唐津よりも早速討手を出し、富岡よりも軍兵を差出し、未だ心の落着せざる邑々を、善言を以て宥め隨へ、本人の大江村に、浪人の輩計りを選み顯はして追討せんに、斯る動亂には及ぶまじきに、日頃三宅藤兵衛を惡む者多かりければ、此度の事も、三宅

が越度にせんとて、兎に角評定一決せず、延引に及びければ、寺澤家の不運なり。此時又隣國へも此事聞えければども、天下一統の御定に、若一揆動亂起る時は、其國々の地頭領主より相防ぐべく、隣國よりは國境を相守り、廣がらざる樣に相働き、江戸へ注進申上げ、御下知來る迄は、一人一騎も他國へ入込むべからず。相背くに於ては、逆罪同前たるべき事なり。東照宮より堅き御掟故に、近國在國の諸將、或は留守居の家老職城代共、皆々軍勢を揃へ、面々の領分の端々迄、念に念を入れ、領境に人數を出して急度相守り、江戸へ注進引きも切らず、此故に大江村の一揆共、安然として心の儘に田を刈取り、諸神諸社を潰し、家々の所財を引纒めて、用意心の儘に備はりける。是に依つて之を見て、未だ感心せざる里々も、扨も一揆といふ者は能き者なりと、我人の心固まりけるにや。されども勇氣に進む者は少なく、足弱老人女童、只身の置き方を尋ねさまよふに付いて、壯夫と雖も氣後れ、一揆何かと調ふ事捗行かず、誠に土民の一揆なり。其内に彼十七人の者共、義勢を見せて、漸々夫々手分人數配をぞ取定めけるとなり。田作は快く刈込み畜へける。近國よりも、餘り御法式守

り過ぎて、一揆の募る儘に捨置きける。 其外諸國にも、江戸注進御下知次第とのみ言次ぎしに、大坂御城代阿部備中守殿計りこそ、此の注進聞くと等しく、是變事なり。江戸へ窺ふに及ばずして、豐後府內の兩使（石谷十藏 牧野傳藏）肥前・肥後の諸侯へ、差圖せられたる事多かりけり。 されば事治まりて後、將軍家より御感に預り、頓て御老中へ抽でられけると聞えし。 一統に此時寺澤兵庫頭方の留主居より、細川・鍋島の兩家へ加勢を乞ひ、差圖を乞ふ事ありしに、其頃江戸より、御目附豐後へ下り居られしかば、細川・鍋島より出勢の儀、御目附へ伺ひ、御目附にも御出馬の樣子乞ひし所、此目附は、石谷十藏・牧野傳藏の二人にも、是は其頃越前一柏忠直、豐後萩原へ浪人仰付けられ、此事に付、府內に居られる故、預り人を捨てゝ出馬もなり難く、且小身故、差圖も致し難く、其中に一柏公、一揆に組せりなど風說もありしかば、細川・鍋島も、國境の番勢を皆引戻しける事ありし所へ、大坂城番阿部備中守殿より差圖來り、又々本の如く境勢早打頻に重なりしに、折惡しく海上路次とも滯りて、細川・鍋島・立花より注進後になり、前後不首尾共多かりける。 小身故とはいひ乍ら、近年武備少き故に

てありけりと聞えける。纔に世の淸平廿年、早くも斯く武事も息り出で來けり。諸國共に多く斯くの如し。誠に華美には、流れ易きものにこそ。

天草時貞が事

一揆大將を立つる事幷百姓原追々一身の事

抑一揆の首領天草四郎時貞といふ者は、父は肥前の國島原領原村の大庄屋、十三ヶ村の惣名主にて、一萬石の裁許、渡邊小左衞門といふ者の一子。母は天草甚兵衞が妹なり。其頃四郎は十七歲、生得美質理口發明にして、一を聞いて十を知る。器量大きに勝れて、諸藝皆々器用なり。右の小左衞門は、元來は長崎の生れ、此原村へは入人に來れり。身大富貴にして、一つ家廣く被官多く、田畑高持金銀充滿して、支配組下へは、自由に米錢を貸し廣め、其上慈悲仁愛にして、貪る心一點もなし。學才あつて尤思案深く、隨分能き人品にて、一萬石の組下、一人として半點の恨もいはず、一言背く者なし。彼小左衞門が一人子の四郎故に、寵愛して萬事自由に育て、父小左衞門は學文好にて、あらゆる書籍を所持しける。四郎も其片端を聞きけるが、天

然と劍術を好み朝暮に修行し、常に天草へ赴き、伯父甚兵衞方に居て、千々輪五郎左衞門が門弟となり、稽古する故に、葦塚或は大矢野等も、何となく懇に交りけり。然るに母是を強く制するに依つて、久々行かざりしが、又々忍びて天草へ行くと聞えしかば、母聞きて歎き、我れ常に小左衞門殿の語り給ふを聞く。昔花山法王、未だ帝にましましける時、時の關白成久に、朕が如き身にも、飢に及ぶ事ありやと仰ありしに、關白勅に答へて曰、君殊に飢渇の相ましますと答へ給ふ。是あるまじき事乍ら、御心にふと思ひ出し給ふ所、則ち因縁なりとぞ。果して道路に立ち給ふ事ありしとかや。農民は天地風雨を計り、鍬鋤の間に樂しむべきに、劍術軍事に思を寄す。此應に匆す因緣あり。四郎は身を全うして、家に死すべからずといひしとかや。然れば父にも告げて曰、四郎が天草へ渡り、武藝を勵む事を堅く戒め、目附を置きて外へ出さゞりしかば、四郎も是に依つて、絕えて天草へも行く事なかりしが、今度の一揆を傳へ聞き、大きに羨しく、あるにもあられず、夜拔にして天草へ渡り、面々に對面し、互に喜び合ふ。斯くて六人の者共相談に、第一是程の一揆に、惣大將なくては叶

ふべからず。共に天下を引受くる上は、滅亡は覺悟の前なり。此儘にて止むべきにもあらず。又此六人の內を、選み出して大將とする時は、百姓原、上には下知に隨ふとも、昨日迄困窮の浪人共、人の厄介になりし身なれば威勢薄く、內心には必ず悔むべし。我々は大將の威輕く、人伏せざる時は戰敗る。是軍道の常言なり。幸ひ四郎殿は、若年乍らも、此人大將となさば、父小左衞門殿も同意なるべし。其時は一萬石の百姓、誰人か背くべき。段々所廣く、長崎の湊を手に入る程ならば、異國の通路自由を得て、南蠻·西洋國·阿蘭陀·伊留滿などへ調じ合せて、異國の勢を引出さば、日本中に敵對しても、不足あるべからずと評定極りて、扨四郞に惣大將になり給へと勸むる。四郞元來濶大の器量の者にて、諸人常々今判官殿と稱する程の若者なれば、聊か辭退の心なく、內心甚だ悅びしが、面々申す樣、各思召は滿足なれども、第一某軍術不案內にて、大勢を手に付けん事覺束なし。恐らくは百姓中下知を用ひまじ。此所如何といふ。葦塚忠右衞門聽きも敢ず、其段は心易く思ひ給へ。軍令下知の儀は、我々六人に、十七人の評定衆あれば、宜しく軍配して大將を保護すべし。惣

天草時貞な一揆の大將に押す

百姓歸伏さする仕方あり。彼の未鑑の心共を、よく〳〵四郎に呑込ませければ、四郎、其儀ならば大將たらん事異儀なしと受合し、是又天晴奇異の曲者なり。此上は事異儀を生ぜぬ先にと、十七人相談して、大勢の百姓を屈伏さするの謀を廻らさんと、俄に用意して幕打廻し、夥しき料理を拵へ、酒肴取揃へ餅を搗き、軍神を祭りて、八千三百人の一揆に振舞をする。廣大の費と雖、少しも儉約せず、上下交りて酒盛數度に及んで後、六人の者共詞を揃へ申出す。扨も此度の一揆成就、宗門繁昌すべき瑞相、天帝の加護あり。互に斯の如く寄合ひても、惣大將なければ如何計の難儀。譬を取るに、大寺に本尊なく、車に心木のなき心地なりしに、彼の未鑑に少しも違はず、稀代不思議なる御大將今判官殿、御下向ありけるぞや。今日より惣大將軍と仰ぐべし。面々安堵して喜び給へ。追付是へ御出なりとのゝめけば、百姓共、是非の了簡もなく喜び勇み、首を延べて待ち居たり。良時移り、段々の案内あつて、兩側に蠟燭を點し、行儀法令十分にして四郎出で來る。時に古老の五人十二人の評定衆・六人の組頭・十六人の小頭、次第を守り列座し、四郎を招請す。愚昧なる百姓共の心

を取る謀なれば、隨分衣裝結構を盡し、太刀打佩き、小結びの烏帽子を着て、往古の判官殿の如く出立ち、末廣の扇子を携へ、身輕にひらりと床几に腰を懸くれば、古老の面々は、家老の如く頭を下げ、しづ〳〵と座を寄せて是を敬ふ。惣じて百姓共は何の分別もなく、只拜み禮拜す。今判官殿御大將と平伏して、悅ぶ事限りなし。皆御盃御流を戴き、夫より亂酒になりて、面々は盃機嫌にて、今日も暮に及べり。時に兼て調略故に、五人の面々口を揃へ申上ぐるは、斯くの如く集りたる一揆の面々、皆以て死を極め、骸を並ぶる覺悟なれば、向後御下知を守り、大將九州を治め給ふ時、夫々御恩賞もあるべき事、今日は何角に付其發端なり。然れば永く君臣上下の御約諾には、肴なくては叶ふまじ。誠や傳へ聞く御大將には、天の幸福あつて、妙術を得給ふ由。今晩諸人の目前に、向ふの離島に火を四五十も燈して、御見せ給へと所望しければ、四郎聞きて、夫こそ最易き事と、靜に床几を立ち、向ひの離島に向ひきつと見上げて、末廣を差上げて三度招く。其時此方に相圖の燈明を揚げて見すると、兼て向ふの島へ、五人の腹心の者渡りて、拵へ居る事なれば、松明を四五十計、一度

にばつと立て振廻る。此方相圖の燈明に付く事なれば、四郎が詞に從ひ、左へも固まり右へも散る。百姓原大に驚き、扨も不思議や、誠に天道に叶ひ給ふ御大將、我々迄も末頼もしき事やと底心に思込み、唯九郎判官の再來なりと感じける。其時四郎扇を納めて、則軍令を說いて曰、凡そ合戰の道、大小勇弱の違はあれども、各心を一にせば、武士農人の隔あるべからず。先づ指す敵は寺澤・松倉の兩家、日頃情なかりし恨も、一時に散ずべし。勝利の上は、長崎を攻めて異國の通路自由を得、彼伴天連・伊留滿の衆を招き、後立として西國諸士を斬從へ、武具兵糧を飽迄集め、堅く守つて二三年を經るならば、內々約諾したる異國の大軍、押渡るは必定の事。其時又日本の諸大名の內にも、勿論天帝の法に歸伏する信者も出で來り、諸國に異變を生すべきか。法天に叶ひ人運に順はゞ、忽ち四國・中國を傾けん。東國に踵を爭ひ、日本國を領せん事も、只今日の一擧にあり。若又大軍心に任せず、事叶はずと見る時は、面々天帝の御名を唱へ、照覽の影前にて、枕を並べ討死せん。生きては富貴榮耀を共にし、死しては一つ上天菩薩ぞや。唯何事も我下知に從ひ給はるべしと、詞す

ずしく述べければ、百姓共頭を垂れ、何がさて愚盲の土くれ同前の我々、御下知に從ひ死を極むる事、此上もなき本望なり。あな不思議や、斯る若年の御身にて、法の大意軍の要略、斯迄に詳しく知らせ給ふは、彼の內々承りし五々の年に當つて、仙童の出で來候はんと聞えしは、今此大將軍の御事ぞや。あな有難し嬉しやな。ていすまる〳〵と、八千の土民、同意に吐と感じければ、五人の古老・十五人の評定、其外の役人迄、口を揃へて申しけるは、此上は何に憚る事はなし。御大將無位無官にては、輕輕しく聞え候。兼て御受領も然るべしとて、俄に席を儲け、從四位肥前守四郎太夫渡邊時貞とぞ名乘りける。是薩摩公と同じ官位なれば、土民共、只公方將軍家抔いふも、此上もなき事の樣に、思ひ極めたる稱號なり。是を聞傳へて、殘る所の邑々より、何と心得たるや、樽肴を携へ來り、御大將極まりたる上、殊に御受領目出たし目出たしと飮み騷ぐ。幸ひ當秋豐年にて、田畑十分に出來、年貢を押領し、酒を送り餅を搗き、海邊は網を卸し肴を調へ、暫く都の花盛と賑ひ、人數も次第に重なりて、究竟の一揆原、一萬人に及びける。今は容易く追討叶ふべからずと、ゆゝしき天下の

大事ぞと見えにける。已に斯くの如く廣大になりたる上にも、諸方の噂、事のやうに聞え、唐津に於てさへ、百姓一揆と侮る。是大變に及ぶべき先兆なり。彼六人の古老共、何れも一器量ある者共なれば、諸事滯なく用意する。併ら早速富岡の城へ攻寄せざるは、鐵炮のある計にて、外に鎧の一領と持ちたる者なく、外の武具馬鞍もなき故に、哀れ敵に一攻攻めさせて、謀を以ておびき入れ、其後手痛く戰ひ、其敗軍を奪ひ謀略をなして、武具馬具を掠め奪ひなどせんと相談して、段々忍を入れ、唐津・富岡の樣子を、間者を以て窺ひける。されば葦塚忠右衛門が下知として、村にても隨分武具は拵へける。竹鑓を用意しけるに、三年以上の竹を用ひ、先を尖らかし、そかせをそといふ魚を燒きて油を取り、此竹に付けて炙るに、最上の劒の如く、如何なる鐵甲と雖も、突通さずといふ事なく、幾度用ひても、なまるといふ事なし。又舟の帆木綿を解いて、肌着を刺すに、大樣具足に變る事なし。扨軍中の第一は、兵糧を集むるに如くはなし。迚も今出來秋の最中なれば、女童老人は、籾を磨り俵にする、尤後の夏作に構はず、唯當分の用意をなし、富岡・寺澤・唐津よりの、寄手の勢の手當

を定めて謀計を敎へ、今や〳〵と待懸けたり。

南島變亂記第三畢

南島變亂記第四

原田伊豫出陣の事_并深木七郎右衛門明智の事

原田伊豫天草へ出勢

斯くて唐津の城には、天草よりの注進櫛の齒を引くが如し。併ら卽時に出勢なり難き事は、近年城主寺澤兵庫頭遊藝を好まるゝにより、家中も自ら華美に誇り、俄の軍用共調ひ難く、其上常々仕置正しからざれば、此虚に乘つて、唐津勢出る跡にて、御領內又一揆騷動するに於ては、重き難儀の事なり。彼是評議區々にして、事行ふべくも見えざりしかども、捨置くべきにもあらざれば、先づ唐津領の在役人を增し、所所手配り法令調へて、其上先づ江戸幷に御目附への注進殊の外混雜して、漸々八月廿一日に出勢す。唐津の留主居には、番頭寺澤勘兵衛（兵庫頭從弟・二千石領）・組足輕五十人・堀付役人奉行頭人、或は小頭組彼是、並河九兵衛侍分卅五騎・足輕六十人、番頭岡島次郎左

衞門・島田十左衞門・大竹嘉兵衞・渡邊卜菴、鐵炮頭深木七郎右衞門・小笠原齋宮・稻田平左衞門・閑善左衞門・國枝淸左衞門、此五人の者共に、五組の鐵炮百挺なり。鑓奉行柴田彌五左衞門・目附深木十兵衞、是等の諸頭相揃ひ、同勢都合百四十騎・雜兵四千餘人、寬永十四年八月廿一日唐津を立ち、天草へ發向す。則豐後府內御目附兩人へ注進に及び、卅日の兵糧在陣の用意相調ひ、本渡りの渡を越え、天草島の島子・本渡村の湊へ着きて相窺ふ。上津の一揆原、急ぎ此旨を搜り聞きて、注進に及びければ、葦塚兼て謀略を廻らし、島子・本渡兩邑の百姓等、男女共殘らず召させられ、家々に歸らせ置き、何氣なき體にて居たりける。其上隨分利口の者共を選み、兩村の名主組頭肝煎に仕立て、種々酒肴を獻じて濱邊に出迎ひ、原田が乘船の前に平伏して申しけるは、先以て御出馬の御喜に罷出候。扨此度の一揆は、大勢徒黨を組み日を追うて蜂起仕り、剩へ渡邊四郎太夫時貞と申す大將を立て、一萬人計集り居る故、頭分の者共に、中間の六分出來候由にて、未だ何方へも打出で申さず候。當所島子・本渡の兩村は、別して家數多く、兩村にては本高二千石餘、人別帳も二千餘人に及び候。

此中に此度邪宗に相成候者は一人もなく、村中殘らず淨土宗にて、此所の旦那寺島子村西方寺にて候所、此頭一揆原頻に催促仕り、急ぎ一揆に組せよと嚴しく申越し、若不同心に於ては、大勢押寄せ打果し申すべき段にて、哀れ西方寺にて寄合ひ評定極むべき所へ、斯の如く御出勢有之候へば、私共皆々安堵仕候。當村の儀は、御公儀を恐れ奉り、一向同心仕らず候。先頃一揆共、御役人を殺害仕候段、言語同斷の仕合、併ら常々御仕置手荒く、未進の御取立餘り嚴しかりしを、恨み奉りての事なるべし。各樣御發明なされ候儀承り、此頭の評定には、幾重にも御詫を申上ぐべしと申由承り申候と、誠しやかにたばかりけるにぞ、原田伊豫も大きに喜び、いかさま㒵水練の奴原、武士の體を見ては、即時に散亂すべきは案の內なり。先以て兩郷の者共一揆に組せざるは、御忠節第一と褒美して、頓て進物を請納め、皆々舟より上りける。眞に古語に曰く、兩雄は必ず相爭ふの習、原田伊豫事、三宅藤兵衞とは常々不和にして、此度天草に一揆起りし事、三宅藤兵衞が不調法にして、追討は我れ一人の軍功となし、藤兵衞が鼻を押へる心底故、密々に心喜び、今日着船の事を、富岡の城へ屆けず。

是心正しからざる處なり。英雄と雖も、一揆の謀略に乘り、唐津勢を殘らず下知して舟より上り、濱邊に幕打廻し、芝居して休足する。是皆百姓一揆と思ひ侮る誤なり。時に鐵炮頭深木七郎右衞門進み出でて、大將原田に申しけるは、傳へ聞く將息る時は破れ易く、謀密ならざるは破るといふ。此間の出陣、十日計りも延引して、此色敵に皆知られたり。愼まずんばあるべからず。今此頃に至つて、心得難き事三つあり。其故は、數日の間に一揆原、當村計り殘し置くべき仔細なし、是一つ。此儀又富岡より度々の注進に告げ來らず、是二つ。且又名主役人共の申分、辯舌巧にして、事見透きて疑はし、是三つなり。此間の難儀、いかにも邑中周章すべき事なるに、取靜まりて笑顏の者多し。能々御思慮あつて、先づ富岡の城に御入ありて、藤兵衞殿・藤右衞門殿とも御相談あつて、其上の事然るべしと申されければ、原田は兎角三宅藤兵衞が功を奪はんとの了簡計りにて、上へは領承して、成程貴殿の申さるゝ所尤なり。此上相談思慮すべしと深木を歸し、番頭岡島治郎左衞門に問ふ。治郎左衞門が曰、是甚だ知れ易き事なり。彼等愈一揆に組せざるや否、是を決すべき所は、菩提

所といふ島子の西方寺の佛壇にこそあるべけれ。此旨糺明あるべしといふ。原田尤なりとて、此事を村の者に尋ねる。名主組頭承り、此儀幸に奉レ存候。兩村高二千石の所、只一ヶ寺故に、年來寄合普請も、大概に相應せり。廣く而も淨土上人持にて候。各樣御宿陣遊ばされ候ても、さのみ御不自由にも之なく候條御出下され、寺中の體も御吟味下されかしと、誠しやかに申す。此挨拶人は、此度百姓の組頭六人の內、布津村代右衞門とて、辯舌賢き者故、殘る所なかりける。扨原田大きに謀られ、尤の申分、然らば檢分の上、軍勢をも村中へ入れ、休息の樣子聞合せ、益敵對するに極まらば、明日押寄せ打果すべきなりとて、彼の名主組頭共に案內をさせ、究竟の諸士物頭四十八人・侍分八十五人に、用心嚴しく弓鐵炮長柄旗馬印押立て、雜兵一千人、相殘る面々は濱邊に陣し、或は船中を守り、一左右次第島子の寺へ入るべき由申渡して、行列押立て出でにける。彼の西方寺の住持は、いつの昔打殺して、斯樣の謀略すべきと兼て用意を極め、一揆評定衆の內森宗意は、古老の古狸、而も佛學に達し醫者にてあれば、博學にもあり、年は六十に及び、勿體殊勝にて善き僧柄なり。殊に妖

術ありて、數百人の中と雖も、夜中に遁れ出づるに、難しとせざる者なれば、葦塚忠右衞門計略にて、住持に仕立て衣を着し、七帖袈裟をかけ珠數爪繰りて、人々の迎に出でたる體、殊勝さといひ、誠の知識と見えたりける。原田先に立ちて各本堂へ上る。宗意對面して、武門の習、修羅鬪諍の出立、佛場靈地も立所に戰の巷となる。淺ましき人界。併ら是も又彌陀の利劔なり。結緣に十念授け參らせんと、さも堆高く居直り十念を致す。猛き武士も、寺の事といひ、何となく殊勝に覺え、何れも十念を受け、さて佛壇に心を付くるに、正面には三尊幷善導法然の兩祖師、左右に位牌、諸檀家の佛供、何から何迄、淨土宗の形想、一つも怪しき體嘗てなし。扨は百姓共の申分相違なしと、さらりと疑晴れたり。住持重ねて、凡そ當邑の面々は、折節愚僧が談議を聞入れられたる故にや、今度の邪宗にも傾かず、淨土門の派を立つる今日、公儀の御役人中を待受けらるゝも、是偏に如來の利益なるべし。又此節上津・上浦・大江に屯したる一揆の根元は、富岡の御役人を、大勢殺害したる罪を、恐れ申す故と承る。此罪だに御宥免なし遣されなば、早速降參仕るべく候。一揆四ヶ邑の內、當寺の旦那筋

所々に入交り居候。右樣然るべく思召候はゞ、明日より拙僧走り廻り、皆々召連れ降參致され候樣申すべし。和順を調へ申す事は、出家第一の役、一命に懸けて取扱ひ申すべきなり。先今晩は悠々御休息あるべし。村々の面々、隨分と御馳走申上候上は、夫に付き愚僧此節の難儀、召仕の下部も、何れも隣鄉の者故、今度の騷動に、親兄弟の事を氣遣ひ、皆沙汰なしに在々所々へ逃歸り、坊主共小僧なども、近村にて正法の出家は、皆殺さるゝとの風說に恐れ、何方へ缺落致し候か、一人も殘らず落失せ候。是に依つて差當つて廣き寺に、拙僧只一人、且方中の役害に罷在候。御中間衆を賴み動らかせ申すべし。風呂も御座候に、唯今より焚かせられ候べし。酒は當村の寄合所故、常々澤山に所持致候。扨又此度の事、寺にても苦しからず、當所は濱邊にて、生肴自由なり。僧さへ食べ申さねばよし。遠慮なく御料理を仰付けられてと、底意なき體、流石の人々心を許し、邑中より持參の肴にて料理始まり酒宴とりどり、風呂に入るやら寢轉ぶやら、元より謀略の事なれば、小才覺なる一揆原、村の者に入交り、骨身を惜まず汗水になつて働き、手廻しのよき事、何から何まで自由千

萬なり。唐津勢、今晩は存も寄らぬ活計にて、千年を延ぶる心になり、皆々打寛ぎ休みける。

唐津勢狠狽の事并葦塚謀計の事

斯くて原田伊豫は、一人高名にせんと思ふ心より、嘗て富岡の味方へ調じ合せず、忽ち葦塚が謀に落ちて、島子村の西方寺に入り來り、森宗意を誠の老僧知識と思ひ、心喜び休めて、手下の諸士も、早賊徒退治したる心になり、雜兵共は酒宴を始め、上下快く打寛ぎける程に、宗意、此體を見て申しけるは、此上何の御氣遣なし。浦方の陣御舟の軍勢、一つに皆村中へ御入なされ、御休息もやといひければ、原田を始め皆皆、いかさまさにもやと、同じらるべき體なり。未だ何の言渡もなき內に、一揆の小才覺なる者共、濱の陣舟へ馳せ行き、大將の御下知に候。皆々村中へ御入ありて、休息なされ候へと觸れければ、濱の陣舟の人數、下知もなきに、村の振舞と聞き、士卒共拔々村中へ入り來る。凡二千餘人なり。村々二百軒餘の家々に入込みたり。一

揆共茲を大事と相働き、種々に機嫌を取り家々馳走して、色々の肴にて、下々迄酒を強ひ、村中の賑ひ、神事祭禮の如く夥し。此節又島子西方寺には、宗意大將に申す樣、一揆原の用意、承り及ぶ所、漸々竹鑓扨は棒鎌の類なる由、定めて此邊の村々にも、二つ足踏む百姓共候べし。哀れ御用意の武具を、當寺の門内にて、庭の邊に飾られ、武備を盛にして、御威勢を輝かし申候はんには、聞怯して、一入早く降伏仕るべしといふ。原田已下の諸士、大酒に魂を拔かれ、是は一段の思付にて、五月の飾物の如く、鐵炮をはや腰付にして八十挺・弓五十丁・長柄七十筋、本堂の前に飾立て、其番人に、村の者共を附置き、扨四つ過亥の半刻までの大酒盛、大方は醉潰れ、皆々帶紐を解いて寢入る。近頃不思議の油斷なり。斯く心怠り、眠氣さす事も、偏に葦塚奇代の軍法者にて、萬事間違なく、森宗意又忍の術をなせばこそ、斯く十分には仕畢せたり。唐津衆の中に、島田十左衞門・小寺忠兵衞・柴田彌五左衞門、此三人少しも油斷せず、宗意が色々酒を勸むれども、下戶なるとて一滴も飮まず、馳走振にも、敵地なれば心を許さず、組の足輕家僕等にも、大酒すべからず。今夕眠るべからずと言渡し、何れ

も鎧に凭りて、宿意の心に守りけれども、半夜過より頻に眠を催し、我れ知らずに休みける。されども動亂の時、一番に敵に渡り合ひ、諸士に抽んで相働き、多くの味方を助けゝる原田伊豫も、此柴田彌五左衞門が着替の鎧にてこそ、漸々退口の働はなしけるとぞ聞えし。諸軍悉く沈醉して、村中へ入り來りし諸士、勸め酒を强ひ付けられて打臥しける。濱手の一陣深木七郎右衞門計ぞ、寺へも村へも入り來らず、士卒を下知して、百挺の鐵炮を左右に伏せ、自ら馬に打乘り前後に心を配り、原田に變あらば、助け來らんと控へたり。船中に殘る所の相役並河九兵衞さへ、宵の程は船中嚴重に陣せられしが、村寺の馳走を聞き、組下抜々に寺へ行き、段々首尾よき沙汰ありければ、九兵衞も手廻り少々引連れ、島子村の庄屋方迄來られしと聞く。斯くて森宗意は、原田を始め、皆々休息するを見て、寺中を見廻る振して方々立廻り、其後大音にて、御安堵の爲め、戶板に念を入れ候と斷り、雨戶を釘付にする。諸人醉中に是を聞きて、律義なる亭坊の心遣と笑ひ、更に咎むる人もなし。斯くて夜半過ぐれば、愈寢靜まりて、鼾の音のみ聞えしかば、宗意は眠藏よりそろりと立出で、餝り

原田伊豫誑さる

立てたる武具共を、番人に差圖して、裏の藪の方へ持出させ、弓鐵炮旗竿殘らず盜み取り、宗意は夫より差足して奥へ行き、原田が具足櫃長刀添へて盜み取り、藪の裏道より忍び出で、遙に約束の森迄退き、相圖の燈明を點し、諸方へ告知らせ、其後彼原田が鎧を着し、用意一々相調ひ、頃は丑滿の過ぐる頃なり。村中へ手遣の一揆にも差圖して、所々へ火をかけ、火事よ〳〵と呼ばはりける。されども諸士熟醉して暫くは魂もなし。次第に諸方騷動しければ、寺内の諸士、原田を始め目を覺して、是は定めて地下人原、今晩の取込に手過なるべし。地下の者共寄つて鎭むべしといふ内に、次第々々に騷ぎ罵り、諸方頻に騷動する故、皆々起上り、原田伊豫、追取刀にて先づ住持を呼べと、口々に住持よ和尙よと呼べども、更に答へず。こは不思議、然らば戸を明けよと立騷ぐと雖も開かず。宵に釘付にしてありければ、二三枚踏放して見れば、南無三寶、飾り置きし武具一品もなく、番人も見えず。こは如何に。扨は一揆原に十分謀られたり。無念至極なり。先づ具足よ鎗よと周章てふためき、皆々宗意が差圖にて、鎗も鞍置馬迄、隨分盜み出しければ、原田が勢大きにうろたへ廻る。村

中にも同じく人數二千人計、醉覺の頭重く、ひよろつき乍ら、目を擦りて起出で、大きにうろたへ騷ぐ計なり。火の手を相圖に、一揆の面々、本道の正面より葦塚忠右衞門大將にて、究竟の一揆原三百餘人、竹鑓穗先を揃へ、竹の筒の貝を吹鳴らし太鼓を打ち、鯨波の聲を上げて押寄せたり。裏口筋より、千々輪五郎左衞門を大將として三百餘人、勇を振うて駈け來る。其他村中へ向ふ總大將に、大矢野作左衞門、百姓彼是五百餘人、鯨波の聲を上げて切向ふ。天草玄札・千束善左衞門、一所に合して三百五十人、押續いて陣を助け、濱手の陣へは布津村代右衞門・四鬼丹波、兩替四百人、前後に分けて打向ふ。舟手の陣へは、柏木右京・有馬休意・山田右衞門等、追々に駈付けて、留主舟の雜荷を、心懸けて悉く奪ひ取り、鯨波の聲十方に聞え、人馬の音、燃火は所々に燃えたり。忽ち一百三十六地獄の有樣も、斯くやと覺えたりと夥し。扨又駒木根八兵衞・鹿子木左京は、鐵炮を百挺づつ藥仕込み、密に富岡の城より、海邊に伏兵となつて居たりける。是は葦塚が計略にて、濱手は念なく打勝つべければ、若富岡より火の手を見ば、兵を出し救ふべし。然らば味方危ふしと、此勢を伏せて待懸

けたり。智謀の程こそゆゝしけれ。然るに思の外、富岡の城代弱うして、救の兵は來らざれども、却て不慮の事ありて、三宅藤兵衞を討取りぬ。城代といひ高祿といひ、一揆方の手柄利運となるべき所、此藤兵衞を討取りしより、却て城中堅くなりて、終に富岡の城落らず、一揆の不運となり行きける、天命の程こそ不思議なれ。扨西方寺には、原田伊豫近習を下知し、大庭に下りて、一揆原に謀られたりと雖も、土民百姓の鍬業計の者共ぞ。一あて當てゝ蹶散らせと、大音に下知する所へ、藪の蔭より以前の住持、原田が鎧奪ひ着て、武者振ゆゝしく打つて出で、健なる一揆共百餘人、面も振らず切つて入る。唐津勢大きに仰天する中に、宵より待儲けたる島田十左衞門・小寺忠藏・柴田彌五左衞門三人、鎧一縮して原田に打向ひ、一揆大勢にて取圍み候體に見え候。此表に於て、我々切拔け申すべし。早々舟手の味方と調じ合せ、富岡の城へ御歸り候へといひ捨て、大庭へ切つて出で、推參なる一揆原、武士に向ひて、手詰の勝負叶ふべからす。いで物見せんと、叢り立ちたる眞中へ、會釋もなく駈入りて、手元に廻る雜兵六七人切殺す。此時寺中より、原田が近習共十二人、鎗提げ

て駈向ひ、面も振らず切つて入る。　森宗意が勢、少し怯む所へ、一揆の小將小濱治郎兵衞・上津喜內、七八十人にて駈付け、是に力を得て、又唐津勢を追込む所へ、寺內より又十六人駈付け、彼是武士卅一人・雜兵百計り打混じて攻め戰ふ。　終に一揆共勝つ事能はず、引色になりて見えける所へ、本道を來る葦塚忠右衞門是を見て、初度の合戰、百姓原に手懲させては叶ふまじと、舍弟忠太夫・嫡子左內に下知して先へ進め、自身も太刀眞甲に差翳し切つて入る。　葦塚左內は、壯年の勇力の者なれば、先に向ふ小寺忠兵衞を、只一打に切倒す。　心得たりと柴田彌五左衞門、橫合より向ふ所を、振返つて拂切に切付けしに、柴田が弓手の片腕を、離るゝ計り切下げたり。　透さず葦塚忠太夫潛り入りて、柴田が首を、水も溜らず打落す。　忠右衞門も、能き武士三人迄打倒しければ、一揆共是に力を得、棒鐮を持て薙伏せけるに、忽ち十二三人打殺されければ、島田十左衞門腹を立て、大手を廣げ、葦塚左內に無手と組む。　左內打笑ひ、片手に提げて、二三間投捨てければ、一揆共上へ上りて、大勢して踏殺し、片端より武具衣類等剝取る。　勇む一揆共の有樣、更に軍令はなかりける。　原田伊豫是を見

て大きに怒り、とても遁るべき所に非ず。いで目に物見せんと、馬廻の武士一手になして、二百計喧と叫んで切つて出る。跡よりも追々素肌乍ら、續いて侍共出でければ、一揆共、此勢に氣を呑まれ、門前の在路指して引退く。原田猶も勇を振ひ、同勢眞丸になして、切拔けて駈通らんとす。森宗意・上津喜內等が、むら〳〵と屯したる中へ駈入りて、十文字に切つて廻れば、忽ち四五十人、蹄の塵と散亂す。此一路、旣に開けぬと見えける所へ、楠浦八郎兵衞・田島刑部、大勢を引いて駈來り、荒手を以て追戾す。原田再び葦塚が陣中へ駈込んで戰ひしが、忠太夫・左內手を碎き戰ひ、忽ち竹中兵左衞門・西田七太夫二人の勇士、續いて左內が爲に切殺されければ、此手も進む事能はず、眞丸になつて屯する所へ、千々輪五郎左衞門、寺に殘る雜人原、邑にうろたへ廻る唐津勢、百人計討捨てゝ、原田伊豫を遁すなと、一揆聲々に呼ばはり〳〵、鎗を揃へ鐵炮を放ち、寺を本陣として後を圍む。此時日出でて明かなれば、四方皆々一揆の隊陣、況や原田が兵共、取卷れて遁るべき樣なかりければ、原田も今は是迄なり、討死せんとためらふ所へ、忽ち楠浦・田島が勢、後より紛々と亂れ散り、一

軍喚き叫んで切つて入る。一揆の小將小濱治郎兵衞・上津喜內、繩手綱の馬乍ら、馬にゆゝしく乘上つて、此所を破られなと下知する所を、數聲の鐵炮轟々と響き、小濱治郎兵衞・上津喜內二人とも、馬上より打つて落す。是に依つて山の手の圍忽ち開けて、一揆の勢、皆大雪崩の如く引退く。續いて唐津の勢、鎗先を並べて突返す。勢宛ら奔雷の如く、原田に代つて敵に當る。是則宵より濱邊に陣を固うせし深木七郎右衞門、此所へ救ひ來るなり。

南島變亂記第四畢

南島變亂記第五

深木七郎右衛門戰死の事并駒木根・鹿子木狙打の事

斯くて鐵炮頭深木七郎右衛門、（世祿八百石）、兼て島子の在陣を心元なく思ひ居しが、手勢一人一騎、村へも寺へも入らず、濱手に陣して夜を明しけるに、寅の一天に陣騷ぎ、島子西方寺火災ありしといひしかば、心元なく、陣を出して是を望むに、忽ち四方に鯨波の聲起り、一揆十方に群り立ち、村も寺も猛火燃え上り、鐵炮の響雷の如し。扨は一揆共の謀計に落ちし條疑なし。先づ大將原が西方寺の宿陣を救ふべしと、船手の番陣並河九兵衛に軍使を遣す所に、是又村へ入りたる由、此表へも、凡當の一揆押寄する體なれば、今は是非なき次第なり。何卒原田が本陣を救うて、富岡の城に入るべしと、馬引寄せ打乘り、鐵炮押立て乘出す所へ、一揆の大將布津村代右衛門、一揆

の兵を引いて切つて懸る。深木七郎右衛門靜り返つて、敵を近々と引寄せ、鐵炮を一放ちばつと打懸け、其煙の黑紛れに、眞丸になりて駈込み、布津村が勢四方へ散りければ、深木兼て戰を好まず、一文字に駈拔け、島子の西方寺へ駈向ふ。布津村は此勢に恐れて、後を慕うて追ふ事能はず、漸く後陣の勢四鬼丹波を待合せ、濱邊の留主陣を打潰し、小荷駄武具等を分捕にして、村の敵へぞ向ひける。深木七郎右衛門は、西方寺の邊に馳付くれば、夜は早明けて、實にも軍の半と覺え、西方寺の前の山に、竹鑓繩襷の一揆共、蟻の如く集りて、原田が勢を取圍みし體なれば、足をも休めず、山手の陣へ取懸り、一陣を打破り、續いて鐵炮の手に命じ、亂調に打立てさせけるに、忽ち一揆の少將小濱治郎兵衛を打落しければ、一揆漂ふ所を、鑓を入れて駈立て駈立て、一方を打破り、原田が陣と一つになりける。原田伊豫大に喜び、馬を並べて圍を出で、深木が手を取り、恥らくは我れ、百姓一揆と思ひ侮つて、君の金言を用ひず、不覺を取りし事、無念口惜し。又何の顏あつて唐津へ歸らん。速に討死すべしといひければ、深木七郎右衛門大に諫めて曰、已に去る事は悔むべからず。今一揆の兵

多しと雖も、元土民なり。我手の勢、命を捨てゝ戰はゞ、縱令何萬の兵なりとも、追詰め防ぎ留るは難からず。君早々富岡の城に入りて、全き勝の謀計をなし給へ。我れ討死するは、大木の一枝を折るなり、君に過ある時は、富岡の城保つべきに非ず。寺澤家の滅亡、今日の一擧にあり。一揆は僅闕切の事なり。城地さへ破れざる時は、大公儀へ對し、主人の誤になる事あるべからず。家中の死する事は、厭ふべきに非ず。早々去つて富岡の城を守り給へと、理を盡して諫めければ、原田實にもと、早速深木と原田、二隊に陣を作り、素肌の武士足輕の雜兵共を先へ進め、二隊の陣後へ下つて、替り〴〵敵を防ぎ、富岡の山路を行く。千々輪五郎左衞門是を見て、人もなげに敵の振舞、斯迄取圍みし生濱の魚、何ぞおめ〳〵歸すべきや。喰留めよや者共と、究竟の一揆是を見て、鐵炮二段に構へ、敵近寄ればぱつと打ち、漂ふ所は射立てゝ、さつと引き、軍に馴れぬ一揆の勢、慕ひ兼て見えたる所へ、千々輪五郎左衞門・葦塚忠太夫・同左內、眞先に馬を駈廻し、士卒を下知して、敵の返合せて鐵炮を構へる時は、松原を楯に取りて軍兵を休め、敵の返し難き同勢亂るゝ所を見ては、急に駈入り

て亂しければ、原田が勢多く討たれて引取り兼し。小林又左衞門・米津九兵衞・青木忠左衞門・佐々木小左衞門・佃八郎兵衞、幷に前髮の小冠者二人、彼是七騎小返しに取つて返し、一揆の勢を追卷る。千々輪五郎左衞門馬より下立ち、只今分捕せし鑓を振廻し、突いて懸れば、忽ち米津九兵衞が胴腹を貫く。佃八郎兵衞、心得たりと切つて懸るを、千々輪左の手を延べ、打込む太刀の鍔元を握り、前へ引伏せ頭を把へ、𣜿と踏みけるに、血を吐いて空しくなる。小林又左衞門・青木忠左衞門、扨も勇しき敵の有樣かなと、左右より切込むを、飛退りて拔合せ、二太刀合すと見えけるが、小林又左衞門・青木何れも深手を負ひ、芝居に𣜿と倒れけるを、一揆共群り寄つて、赤裸にぞ剝ぎたりける。佐々小左衞門と小冠者の二人は、此勢に恐れて、かい振つて逃げけるを己、等、迚も此千々輪に刃向して、逃げんとて逃すべきかと、一飛に追付きて、佐々が上帶摑んで、味方の陣へ投捨て、二人の小冠者を打倒し、足を捕へて引摺り通りけるに、先陣の一揆共、扨も剛力かな〳〵と、手を上げて喜び、大勢の一揆共受取りて粉の如く働き、衣類武具は剝取りけり。千々輪一人の働に、七騎の小返し皆討た

深木七郎右衛門戰死

れければ、原田が陣崩れ立ちて引退く。今は討死せずんば叶ふべからずとて、討殘されたる味方廿五騎、太刀先を揃へて切つて懸る。一揆共又此勢に切立てられ、討たるゝ者卅人計り、吐と崩れて逃返るに、千々輪五郎左衛門打笑ひ、幾度にても返す敵のある時は、我に告げ來れとて立歸りければ、忠太夫は、胴勢を守つて新手に順ふ。葦塚左內、千々輪の働を遙に見て、羨しき働やと、步立になつて駈付くる。楠浦八郎兵衛・田崎刑部も、手勢を選つて駈來る。深木七郎右衛門が兵共、入亂れ戰ひけるに、葦塚左內、能き首二つ取つてけり。楠浦も首二つ取りて立上る。田崎刑部も、手柄なる太刀打して、手負し乍らも、敵三人切伏せたり。されば深木七郎右衛門、千變萬化して働きけれども、一揆は大勢なれば、深手を數多負ひ、終に千々輪が爲に首を取られけるが、千々輪も彼が勇功を賞して、彼が甲冑取つて、我が着領とぞなしにける。されば深木が働に因つて、唐津勢一の難所を越え過ぎぬ。敵味方、深木が忠死を感じけるにや、其子孫、四國の土州の太守土佐守忠義公の呼出になり、今に榮えけるとぞ。爰に葦塚忠右衛門が濱手の軍心元なしと、向ひ進みける所に、此手は大矢

野作左衞門、不意に村中へ駈入りて、唐津勢を散々に打破り、魁將並河九兵衞を討取りぬ。分捕の武具山の如し。浦手の先陣布津村代右衞門・四鬼丹波、山手先陣有馬休意等一つになつて、殘黨を打亡し、唐津勢の乘渡りし舟さへ、大船二艘兵船共、又兵糧鹽味噌の舟七艘、幷に鬮舟四十艘迄奪ひ取りて、一揆の中浦方の者共に申付け、此舟共を、上津村・大江村等へ引取りたり。駒木根八兵衞・鹿子木左京は、富岡の本道の傍に鐵炮を並べ待懸けたりしに、騎馬廿騎計に、雜兵少々隨ひ、揉に揉んで駈け來る敵あり。伏兵、すはや敵向ふぞと、思ふ圖におびき入れて、百挺の鐵炮を、一度に噇と放し懸けたるに、彼の駒木根父子は、鐵炮の名人、下針をも外さぬ者共なれば、騎兵廿騎・雜兵十三人、同じ枕に打落しける。頓て下りて是を檢むるに、こはいかに、彼の富岡の城代、日頃鬼神の如く威を振ひし三宅藤兵衞なりければ、駒木根・鹿子木も、葦塚が見積に驚き、又々鐵炮構へ待懸けゝれども、夜明け晝に至れども、一人も來る勢なし。味方に勝軍しけると聞えければ、先づ引歸しける。其趣を葦塚忠右衞門に語りければ、葦塚聞きて、是れ我見積の合ひたるに非ず、違ひたるなり。三宅藤

三宅藤兵衞討たる

兵衞出陣する程ならば、後より軍勢の續かざるは、如何にも不審なり。いかさま是は謂もあるべし。何れにもせよ軍始に、敵の大將討取るは、心地よき事なり。唐津の並河九兵衞は討取りぬ、今一人の原田伊豫、打洩らしては殘念なり。爰より直に追懸くべし。富岡の山道へ懸りて、揉に揉んで追返し、已に深木七郎右衞門が、討死の所へ行懸りしかば、惣軍勢一手になして、山々峯々を通り、原田が勢を附慕ふ。此時に至つて一揆の勢六千餘人、勢猛に猪の駈ける如く、山野を踏荒して、竹の筒の貝を吹鳴して競ひ懸る。原田伊豫少とも恐れず、段々弱兵を助けて先へ打たせ、原田自ら殿に乘りて引く。渡邊卜菴・岡島治郎左衞門・大竹嘉兵衞・小笠原・齋宮を始とし卅四人、乘渡り〳〵附慕ふ。一揆を追拂うて、軍勢を引纒ふ體、手足を使ふが如くにて、六千の一揆を、物の數共せず、心靜に引いて行く。誠に武に馴れたる有樣なり。千千輪を始め大矢野・葦塚等、後陣を繰替へて喰留るに、唐津勢も大きに困窮して見えければ、古橋權太夫・高田甚兵衞等九人、原田が難儀に替らんと、前陣より戻り、佛塚とて究竟の足場に鎗を折敷きて、閑り返つて、原田を遙に引かせける。原田、平日士

を愛する事深し。故に常に五十餘人立塞つて、原田が前に力戰する。賊是等に討たれて、原田終に恙なし。されば今日も古橋・高田等爰に來りて此體を見、扨は一揆共、富岡の城迄も附入にせんと心を懸くる。爰に討死せずんば叶ふべからず。古橋が輩、勇を振うて決戰するに、忽ち一揆八人突倒し、一揆の先陣あらけ亂れ散りければ、楠浦八郎兵衞・布津村代右衞門・有馬休意・赤星內膳、二軍に變つて切つて懸り、何れも一揆の中の大勇の者共なれば、小軍の唐津勢數多討たれければ、高田甚兵衞立堪へ、一揆二三人切退きしを、一揆の小將串山太兵衞、其處を引くなといふまゝに、今朝より分捕せし長刀を打振つて、掬ひ上げんとする所を、高田甚兵衞長刀を躍り越え、串山が肩先へ、眞二つと打込みしが、長刀の柄に支へられ、淺手にぞありける。串山長刀かららりと捨て、斯る邪魔なるものこそあれ、無刀こそ遙に增しなれと、飛付きて無手と組み、高田甚兵衞を、何の苦もなく捻ぢ据ゑ、心元を一刀刺し、首をも取らず躍り越え、古橋權太夫に飛んで懸る。古橋は剛力無雙の者なれば、飛び來る串山を片手に摑んで、尻居に嚏と押伏せ、串山無念と起きる所を、拜み打に打ちたれば、

哀れむべし串山太兵衛、二つになつて倒れける。布津村・赤星是を見て、事々しの有樣と、兩方より打つて懸る。古橋獅々の齒噛をなし、死身になつて戰へば、布津村・赤星あしらひ兼ね、受太刀になつて引退く。葦塚遙に是を見て、斯る死夫の爲に隙入るは、味方の利に非ず。鹿子木・駒木根は在せぬか、鐵炮なされ候へといひければ、鹿子木左京有合ひけるが、畏り候とて、十匁玉强く搊込みて、遙に此方よりため澄して、きつて放しけるに、何かは少しも外すべき。古橋權太夫が胸板に、血烟立てゝ打込んだり。さしも大勇の古橋も、一言もいはず、向ふ樣に倒れて死しければ、此の手勢破れて、大軍原田が隊に附慕ふ。原田數十騎を引き乘下つて、一揆附慕ふ時は駈破り、退きては引纒ひ、五里の道を退きしに、原田がさしもの茜のしなひに、えんすの當る事七つ、八つ目は竿に當りて、半より折れければ、緒を取りて腰に挾む。原田が勇氣追口の手柄、敵味方舌を振ひにけり。

三宅藤右衛門義戰の事幷賊、富岡の城を攻むる事

富岡の城には、三宅藤兵衞、一揆日々に廣まる樣子を聞き、諸將の我を怨む體を見て、日頃の威勢撓み、聞怯して居たりけるに、唐津勢の加勢延引等、日々心を痛め居る所へ、昨日原田・並河等の諸將、勢を出すと聞えしにより、炎天に雨を待つ如く、首を廻して待ちけるに、富岡へは一使も來らず、本渡の渡に舟を懸並べ、一揆を退治する由聞えければ、甚だ恨みに思ふと雖も、我家來と雖も我を疎み、一揆に組みる者あるべき樣子聞えければ、一言も申出さず樣子を窺ふ。早昨日一揆に誑られて、並河九兵衞・原田伊豫を始め、一人も殘らず討果されたる由風說しければ、三宅藤兵衞大きに恐れ、足手を置くに所なく、忽ち富岡の城を明け、唐津へ引取るべしといひけるを、三宅藤右衞門大に制して、寺澤の代々、公を重んじて、富岡の城を預くるは、斯る變亂の時、能く守護して、預かるの任を恥かしめざる爲なり。治世の時威を振ひ、亂るに至つて難を遁れては、商人と雖も是をせじ。城中の軍勢、一揆退治せんには足らずとも、城を守るには餘りあり。早く討手に下知を加へられ、軍勢を出し給はゞ、軍中の風說豈誠のみならんや。味方の勝敗は見る所に非ず。唯今御出陣御觸の外、

御分別あるべしとも存せず候と、至極恥しめていひければ、三宅藤兵衞心に服しけれども、心中終に安からず、居間に歸りけるが、近臣の內に殊に臆病なる者、一揆明日は此城を取卷き攻むべき由、風說ありといへば、兎角此城に御籠りは危きもの、今夜中に唐津に救を乞ひ仰せられ、速に出城候て、先づ島原領迄退かれ、然るべしといひし程に、弟藤右衞門に恥しめられ、又も言出し難く、手廻廿騎計を引きて、密にまだほの暗き頃、道を急ぎて出でられけるが、天命にやありけん、葦塚が埋伏の陣に行懸り、駒木根・鹿子木が爲に打落されて、臆病の死をぞせられける。其砌一人も生くるものなければ、未だ城中には知らざれども、誰いふともなく、三宅藤兵衞殿こそ、降人に出でられたりといふ沙汰して、城中色めき立ちて、我れ一と城を落ちんとしたりけるを、三宅藤右衞門、大手の門際に幕を打ちて其中に座し、城中の諸役人を召して言渡しけるは、三宅藤兵衞殿出城の事は、是非に及ばざる所なり。諸君某が如き、代々寺澤家の祿を喰うて、君の難に死なざらんや。各は出城すとも、此三宅、某一人なりとも、城に殘りて敵を防ぎ、討死致すべし。今聞く三宅藤兵衞殿、敵の手に死

したりといふ沙汰あり。然れば城中を出でて、必ず助かるにもあるまじ。此城若し一度賊の手に入る時は、國君國を預かるの規模なし。公儀の政道、何と行かんも計るべからず。豈臣下の身として、君を危める者あらんや。各自ら思案して城中に留り給へ。斯く申す藤右衞門があらん程は、猥に出城せられんは不覺の本たるべしと、義を先として言渡しければ、大奉行の輩、譜代等の下役迄義を感じて、三宅藤右衞門が詞に從ひ、御差圖相守らんといひける故、藤右衞門、暫く城代の印を受けて、諸手の櫓々へ手配定め、各能く聞き給へ。賊強しとて恐るゝ事にあらず。今城中を計るに、騎兵百餘人・鐵炮二百丁・雜兵前後五六百人の兵あり。昔楠正成、僅八百餘の兵を以て、金剛山の城に籠り、鎌倉の八十萬の大軍をだに防ぎしぞや。今是程の味方あつて、烏合の一揆竹鑓の土民、何十萬あればとて、城の落つべき道理なし。各心をけるか、遙に深き谷の內へ、人雪崩を突いて落重る。是を見て原田伊豫、采幣を取つて下知をなせば、小笠原・齋宮・大竹・岡島・渡邊卜菴等を始めて、馬廻三百計取つて返すと見えけるが、先陣の一揆、散々になつて逃げ走る。千々輪・葦塚馬を乘廻し、手

始の軍に十分に打勝ちぬ。軍は是迄ぞ。味方悉く疲れぬべし。必々引軍ばし止めまじき者なりと、物馴れし者なれば、別々に退きける。原田・三宅も小勢なれば、續いても追はず、兵を引いて、富岡の城へぞ籠りける。葦塚・千々輪等所々の分捕を集め、勝鬨を三度上げさせて、上津・大江へぞ引取りける。誠に此軍、唐津勢大きに油斷の上、臆病の働き、嘲ると雖も、是又笑ふべからず。只葦塚忠右衛門が軍術深き故、一揆十分の勝になりたり。されば十七人の古老も、葦塚が謀略深きを感じて、以來軍師とぞ仰ぎける。一晝夜の合戰に、分捕の具足六十領・長柄五十本・持鎗八十本・鐵炮百餘丁・玉藥箱百餘・弓六十丁・靱尻籠の類、其外陣々武具旗差物、或は幕の類、目に餘る程なり。船中の雜具は數ふべからず。乘馬四十餘疋を奪ひ取り、書付を以て配當し、此内毛能き具足一領・太刀一振・釆幣・鞍置馬一疋、物大將の領に定め、殘る武具共は、五人の古老を始め、領分の面々に配當するに、上下恨なく勇み喜び、悉く相濟みければ、兵糧の仕度等夫々申渡し、勇氣日頃に倍し、富岡の城攻と定めける。斯くて天草四郎時貞は、初度の合戰に大利を得て諸軍勢勝誇り喜び、卽時に富岡の城に

一揆富岡城を攻む

打向はんとするを。葦塚忠右衞門進み出でて曰、昨日の合戰、敵の不意に出づ。故に味方剛强を顯すに似たり。然れども俄に催したる一揆なれば、多年の武士に、手詰の合戰は危し。今度富岡に籠る所の勢、前後の恥を雪がんと思ふ心あり。原田・三宅又勇將なり。其外旗下の士軍人、恥を思はざる者は落失せぬべし。今城に殘る者は、一騎當千の兵共なるべし。容易く落城すべしとも思はれず。城上又鐵炮多し。味方素肌の勢多ければ、城攻甚だ心元なし。先づ近隣の藪を切盡し、大竹束を編み多く拵へ、其外諸手軍令を嚴しくして後進むべし。血氣に任せ仕損ずべからずと、先づ城攻の兵具を隨分拵へ、手分を定めて打寄する。大手の一の先陣は、千々輪五郎左衞門を大將として一揆二千人、二陣は天草甚兵衞・赤星内膳・森宗意・天草玄札を大將として、四隊に分ち三千二百人、旗奉行は千束善左衞門・楠浦八郎兵衞、鐵炮頭布津村代右衞門・四鬼丹波・堂島・津島・大江治兵衞・駒木根八兵衞・鹿子木左京、其外長柄旗奉行、或は軍中目附貝太皷の役々を定め、惣陣代は葦塚忠右衞門、後陣は柄木右京・葦塚忠太夫・同左内、彼是都合一萬餘人、大旗廿流、何れも白き木綿に天帝の號を書

き、小旗七十本。同家々の紋を書きて持ち、鐵炮六百丁・長柄百本、其外は皆竹鎗長鎌を持つて、四郎太夫を眞中に守護して、城より一里の四鬼野といふ廣野に、武者配り法の如く、嚴重に備を相定め、隊伍を亂さず、城内の人々の心を、一先づ刧しけり。富岡の城には、原田伊豫、三宅藤右衞門に對面し、今日の勞を謝し、扨軍の評定するに、忽ち外より使あり、舟手より遁れたる船中の將並河三郎兵衞・同太右衞門・深尾主馬・同又八出來る。賊の勢大なりと聞ゆ。其城保つべしや否やと。原田、使に對していひけるは、城を守る評議、豈使の口上を以て決すべきや。先づ城中に入り來らずして、船中よりの口上、是二の足の心あり。何ぞ評議を使に語らんといひければ、船中の諸軍士、此詞に恥かしめられ、頓て城に入り來る。原田が曰、城將三宅藤兵衞・並河九兵衞、逃亡して行方知れず。賊は目に餘る大勢なり。何れにしても賴むべき事にあらず。然れども今唐津侯の祿を食むが爲に、議して賊を討伐す、功なうしては罪死に餘りあり。何ぞ城を捨てゝ遁れ歸るべき。死守して罪を償はんと欲す。勝敗は我が知る所に非ずと、諸武士皆義を感じて、城を守るに極まれり。先づ惣廓三

の丸は、拂ひ捨てゝ戰場となし、本丸二の丸に兵を堅め、矢狹間はりして矢倉へ大筒を構へ、追手には三宅藤右衞門・岡島四郞右衞門、三宅が被官組の騎馬・足輕・鐵炮・長柄組前後四百五十人、搦手は原田伊豫を頭として、渡邊又小笠原等の唐津勢、彼是四百七十人、旗押立てゝ相守る。正々として嚴重なり。先づ城主三宅藤兵衞が時とは、事拔群に變りて、英雄義士の堅城と變じて勇ましき。時に寛永十四年八月廿六日巳の刻に、一揆原惣軍押詰めて、富岡の城へ押寄せ、先づ城下の町中を放火するに因つて、町中にも、一揆に組する輩多かりければ、家財を皆々取除け、自ら家々に火を懸け立退くもあり、城付用人の家は、一揆一味の者共打毀ち、家財を奪ひ運ぶもあり、衣類をも剝ぎ、妻子をも打殺す、傍若無人の樣、城中の人々大きに怒り、拳を握り齒を嚙み、口惜き仕合かな。百姓連に圍まれて、城下の狼藉を見乍ら、武士として悚へらるべきや。前代未聞武門の恥辱なりと、打つて出でんとする輩多かりしかども、原田・三宅駈塞りて大きに制し、憤怒は軍の大禁なり。あの大軍に打向ひ、出でては難し。只一揆共血氣に任せて攻むる所を、大筒を以て打立て、手詰の軍をさすべきも

のをと、乘廻り〳〵下知して、英氣を含んで待懸けたり。一揆共ばら〳〵に、追手搦手へつと押寄せ、外廓三の丸難なく込入りて、蟻の如く集り居る所に、待澄せし原田・三宅、櫓の大筒切つて放し、塀より小筒の先を揃へ、狙打に打つ程に、一揆忽ち百人計り、ばら〳〵と打倒れ、上を下へと犇く所へ、二の木戸を開いて、百騎計一度に噇と駈立てたれば、一揆原大に恐れ、散々になつて外廓町中の燒跡迄崩れ來る所へ、楠浦・布津村得たりやと、横合より鐵炮を打立て、城兵の後を切取らんと進めども、追捨てゝ足輕く引いて入る。又攻寄すれば鐵炮打立て、亂るれば駈立つる。巳の刻より未の下り迄、十度計り攻寄せけるに、城兵一騎も打得ずして、味方の手負死人千人計り出來ければ、百姓共呆れ果て、我も城に籠りたき事ぞや。最早城攻に飽果てたり。前日の如く分捕はなし。危き骨折して何の詮もなしと、大に退屈して見えければ、葦塚忠右衛門、さらば諸人の少し眠覺しをして、百姓の心を慰めんと、無體に竹束を城近く築立て突寄せ取詰めけるに、城中には、扨は大軍、一方より力攻にするぞやとて、城中此手に固まりて、澤木七太夫とて、一組鐵炮の手垂ありしに命じ打出さ

せけるに、澤木祕術を盡し打つなれば、竹束の繩悉く切れ、竹は十方へ亂れ散りける程に、軍兵共驚き引退きける。手負は少しと雖も、大竹束の一度に崩れ倒れる故、大敗軍の體にぞ見えける。城兵得たりと切つて出づる。味方足早に引寄せけるに、唐津勢も、此度は度々の勝に馴れ、足長に追出でたる所に、中にも深尾主馬・同又八は、度々一揆を追拂うて事ともせず、前後を下知して進むを見て、葦塚忠右衞門、駒木根・鹿子木に向ひ、今朝より敵の首を見ざるは殘念なり。此兩人を毛付して、討取り給へといひければ、畏つて候とて、駒木根は主馬、鹿子木は又八を狙ひて、馬上より十匁玉を込め、狙澄して打ちたるに、其間二町もあるべきを、甚だ延びたれども、天下に名を得し鐵炮の元祖駒木根・鹿子木等が事なれば、過たず主馬・又八が胸板に當りて、血煙ぱつと立つと共に、馬下に打落されて死にける。味方得たりと取て返せば、城兵十一人打取つて、殘らず城々へ追入れけり。千々輪・葦塚乘廻り、城は猥に攻むべからずと、三の丸の廣みに、城を睨みて怺へける。爰に此夜有馬休意・赤星內膳が方より軍術あり。富岡の城下に、宇右衞門といふ、馬の飼草を入るゝ町人ありし

が、是が弟に宇吉といふ者、富岡の馬屋付なりしに、今度は籠城し居けるを、休意は兼て宇右衛門知る人なれば、色々と一揆の中へ勸めしに、元より耶蘇宗門歸伏の者なりければ、頓て同心して、城中の弟宇吉・家人久六等に內々申含めしは、兎角城攻の夜、諸人草臥れたらん折を待ち、所々火をかけ、天帝宗に歸伏するぞ、城中の誰々こそ、一揆一味と呼ばはつて、城を開かんと約束し過ぎけるに、此時有馬休意・赤星の組は、內々約束あれば、晝の合戰には少しも構はず、暮行く相圖を待懸けたり。城中には、敵も引き、日も暮方になりける儘、諸人草臥れ陣屋々々へ歸りけるを窺ひ、原田が陣屋の向なる雜具の小屋に火を付けらるゝに、原田火の手を見て、纔の事なれば大きに驚き、手勢を引き大場に躍り出で、手の勢一人も動くべからずと言渡しけるに、彼雜具の小屋焰々と焰え上るを、原田少とも構はず、諸軍へ使を遣していはせける。只今我陣屋の向の小屋を燒かせ申候。敵より忍を入れて驚かされんよりはと、此方より燒き申候まゝ、諸陣御驚きなさるまじく候。尤持口堅固鐵炮等、油斷なく御構へ尤に候。此間に敵をかけべきやと存候故、態々使を以て申入るゝ由觸

れければ、何れも踊り出でて、役所々々を固め守り、靜まり返つて動かず。扨眼を配つて、立騒ぐ人々を改め、忽ち宇吉・久六等數人を捕へ、懷中を探して火打硫黃の火具を見顯はし、吟味を遂げて其情を知り、其後彼小屋或は所々の古き敷物を積みて火をかけ、空しく鯨波を作りて敵に知らせ、櫓の影に鐵炮を伏せて待懸けゝれば、城外の有馬・赤星、斯るべきとは夢にも知らず、はや相圖の火の見ゆるぞと、甲兵をかけて乘懸けしに、城中思ふ圖に引受けて、高矢倉より大音上げ、此城中は、堅く義を守る武士なるぞ。汝等如きの邪宗の土民に、一味する者あらんや。夜中といひ大勢といひ、遙々の御出深切なりと、城中一同に嗤と笑ひければ、寄手の一揆、膽を失ふ所を、四方の櫓より一度に嗤と鐵炮を出しけるに、將棊倒しの如く、二百人計も、ばらばらと落重なりて打殺さる。赤星も有馬も、皆鐵炮に當りけるが、幸に薄手にして、命に怪我はなかりける。城兵打つて出で追卷りしを、葦塚・千々輪四方を下知して、鐵炮を打かけ、城を總攻にする勢を見せければ、城兵も早く引取りける。葦塚忠右衞門軍兵を下知して、妄に城へ近付くべからずと、皆々陣を納めける。翌日諸將

に向ひいひけるは、此城の體を見るに、一刻攻には落つべからず。先づ退き軍議をなし、重ねて謀事あるべしと、諸手を纏めて引返しける。富岡の城中には、小勢なりと雖も、原田伊豫能く軍配しける程に、軍士皆戰はん事を願うて、恨むる者なかりけり。既に俄の籠城なれば、鼻紙に事缺きけるを、原田、我れ聞きたる事こそあれ。唐帋を破りて見れば、其中皆鼻紙なり。取出して是を配るに不足なし。是は寺澤志摩守廣高のする所なり。三宅藤右衛門も、原田が才智に伏し、先君の軍馬に油斷なき事を感じける。されば軍終つて後、世靜謐になりける時、並河三郎兵衛、此度の兵士の功を論じて、原田に功なしとす。其外兵庫頭愚昧に因つて、賞罰の事たゞ顚倒す。諸士原田を押立て、軍功を論ぜんとす。其外黨を立つる者多かりければ、原田思ふに、近世家中二つに分れて相爭ふ。主人無難の事はあるまじ。さなくとも御家、何と仰渡されんも計り難し。是を顧みざるば不義なり。我に於て恥辱を怒つて、主人を危ぶめじとて、終に並河三郎兵衛が詞に任せ恥辱を取り、家中を取鎭め、其後時過ぎて、原田は事を他に託して、暇を乞ふといふ。

（南島變亂記第五）

南島變亂記第六

島原領一揆の事并渡邊小左衛門が事

斯くて葦塚忠右衛門陣を引いて、古老五人の者に談じて曰、此富岡の城、一旦には落つべからず。力攻にするならば、落つる事もあるべし。然れども我々十七人の者共は、半鐵炮に打たれずんば、城破るべからず。百姓は素肌なり、誰か城上の鐵炮を避けざらんや。又謀を以て永々とせば、其中諸國より江戸へ注進して、國大名向ふべし。是又根城もなく、大軍に向はん事、一堪りも堪ふべからず。其上富岡を取つて天草に籠るとも、諸國の通路不自由にして、萬一の大略調ふべからず。天草は散地なり、早く天草を捨て、國中へ打出で、東武の大軍に懸合ひ、激しく戰うて討死せんこそ、武門の榮花なるべし。天草一隅に固まり、島の夷といはれ果てんは、武名を上

る道なかるべし。早く島原へ押渡り、國中を謀る計略すべしとて、富岡の城下、一軒も殘らず追捕して諸財を掠め、其後惣町に火をかけ、其外在々の諸道具迄、舟に積み島原へ引取り、只寂々として人なき如く、富岡は裸城となし、近郷皆荒地と變じ、野菜をだに取るべき樣なかりしとなり。今は中々富岡より打つて出でべき樣もなしとて、一揆皆撞と鬨を擧げて引取り、上津村・大江村に集り、四郎が前に打寄り、各評定に及ぶは、天草島は最早是迄なり。大功を立つる地に非ず。浮々と日を送り、討手江戸より來り下知せば、臍を噬むとも益なし。未だ江戸より下着なき內、耶蘇宗門を進め、一揆を廣くするより外、別に謀計あるべからず。彼島原領原村は、四郎殿古鄉なり。親父小左衞門殿、一揆に組されなば、彼支配下は一萬石の所にて、殘らず一揆に組すべきなり。又幸なる事は、上深江村の佐治木左治右衞門といふ地侍は、元來筋目ある武士にて、浪人の果なり。此佐治木福有にして、村中思ひ貴ぶ人なり。而も我々常に入魂なり。切支丹天人華宗は、日頃心ある人なれば、彼地に行きて佐治木を語らひ一揆を起し、從はざる近村を打果して蜂起し、其後島原・高久の城を攻

落し、松倉が武具兵糧を悉く奪ひ取り、あはよくば長崎へ渡り、西國へ跨がるべきなり。此儀尤然るべしとて、手分彌極まり、先づ大將四郎太夫時貞を守護して、上津村・大江村に殘る面々には、天草甚兵衞を初とし、赤星內膳・有馬休意・森宗意・布津村代右衞門・千束善左衞門・山田右衞門・大江治兵衞・柄木右京・楠浦八郎兵衞・四鬼丹波、其外一揆一萬人、村々に陣を張り、女童は稻田の籾を臼づき、諸事の手番能き様に言渡し、兵糧の外、鹽方味噌方の支配悉く定めて、手早く相調ひ、島原の一左右を相待ち、此度島原へ渡る面々には、葦塚忠右衞門を頭とし、天草玄札・千々輪五郎左衞門・大矢野作右衞門・駒木根八兵衞・鹿子木左京等、究竟の武士卅餘人、鐵炮五十丁揃へ、其上足强なる地侍、太刀打武藝達者なる者八十餘人、彼是上下三百餘人、早舟四艘に取乗りて原村に押渡り、先づ兵士は皆舟の中に殘し、葦塚・千々輪・大矢野・天草等、先づ原村渡邊小左衞門が宅に入來りて對面あり、前後の有様を物語り、兎角時節の到來と申すべきに候。先づ四郎殿御大將となり給ひ、今は早精兵一萬五千候べし。最早天下の兵に對するとも、容易く敗れ候まじ。此上父子の念を繼ぎ給ひ、一味候へかし。

勘當等なされ候事、迚も是れ濟む事に非ず、遁れらるべき道にも非ず、其上四郎殿武者振、一目御覽候はゞ、誠に百世の御本望に候はんか。誠の九郎判官殿にてこそ候へといひければ、小左衞門元より德實の者なれば、先達て此事を聞きしよりも、覺悟は致し罷在候。是皆前世の宿業、唯御約束にこそ存候へ。今は何ぞ叱り申すべきや。貴君達の蔭とはいひ乍ら、天晴一日なりとも大將の坐に居る事、閻魔の廳の許に候はんか、誠に出來したりと、頓て酒肴を出し、此人々をもてなし、老母も妻にも出でて對面させ、今は我も逆意の一味なるぞと、淚を滾してもてなせば、何かは憚る事あるべきとて、彼舟に殘りたる一揆の人々を呼びて、村中に止宿せしめ、扨組下の百姓殘らず集め、酒肴を出し振舞酒數遍の上にて、扨も我悴四郎事、天草島一揆の大將となりし上は、我とても父子の緣なり、遁るべき所なく候。然れば我れ今日より、一揆の徒黨するに極めたり。此上は面々志ある人は、一味して給はるべし。又不同心なる面々は、早く當村を立退かれ候へ。少しも恨み申さずと申渡しけり。此小左衞門事、常々慈悲にて、百姓を懇に勞り、彼地頭の松倉豐後守非道の仕置、年貢課役

島原領民一揆に組す

の嚴しきも、此渡邊小左衞門が立替々々する故に、村中も今日迄安體なり。其上村中は、大概被官が徒弟などの族故、誰一人違背する人あるべき。百姓原口を揃へて申しけるは、四郎殿御大將ならば、小左衞門殿も、定めて副將軍にぞ候はん。目出度し〳〵。此御下知は、直に我々旗本なれば、誰か敢て一人も違背申すべき。然る上は天草の者共に負くる道理なしとて、一味の誓言すべしと、俄に白木綿を出して旗となし、天帝を本尊に立て、究竟の百姓原相揃ひ、弓鐵炮古鑓棒鎌迄も取揃へ、健なる一族二百五十八人、小左衞門が大庭に集め、何か恐るべき、一味同心なれとて、天草の兵と一所になり、近鄕遠村へ打入り押入り、同心せざれば亂妨狼藉して、正法の寺々悉く毀ち捨て荒廻り、渡邊が組下の村々矢竹村・有馬村・深江村・本莊村・田代村、小里十六村の百姓、善き事顏に集り、競ひ廻りて打潰しする程に、只兩日の內に、又究竟の百姓勢、凡そ二千七百餘人集りける。渡邊小左衞門は人德ありて、此人ならばと慕ふ輩多かりし程に、近鄕近村皆附隨ひ、今は足長に、遠村遠鄕の隨はざる者を打滅し、掠め奪ふ事頻なり。惣大將は四郎太夫殿、副將軍は父小左衞門殿ぞやと、言罵り勇

み廻り、松倉豊後守の領分高久の城下迄侵し掠む。勢隱然として只燃に、火の燃え立つが如し。天草島だにも珍事と思ひたるに、又此所も斯る大亂出來る。いかゞなるべき世の中ぞやと、九州の人民は、安き心もなかりけり。

深江村英雄の事并諸鄕の名主一味の事

爰に松倉豊後守居城高久の城を二里隔て、南潮入河の所に深江村とて、上中下三ヶ村あり。高三千餘石の所にて、殊に福有の地なり。下深江村には、領主の米藏を建て、則運送の舟着にて、代官陣屋あり。又四五丁隔て上の方に、上深江村の名主佐治木佐治右衞門とて、元來武士筋にして、有德の者なり。先祖龍造寺和泉守隆信の家人にて、後に天正十六年宇土の一揆となり、加藤淸正と戰ひし木山彈正が組佐治木兵部が後世なり。祖父の代に浪人して此村に來りしを、野民より合名主に賴みけり。差續いて今三代相續す。地下中へ金銀を借し、所の不自由を達するのみか、情をかける者にて、人民唯地頭の如く思ひ親しみ、隨分和順なる者、學問あつて、彼渡

邊小左衞門とも、常に無二の入魂なり。如何なる因緣にや、昔より耶蘇宗門を深く信用す。又折々葦塚・大矢野などにも懇にする。斯くの如くの由緒故に、今度天草の葦塚・大矢野等も、島原へ渡ると聞き、密に行きて對面せんと思ふ所に、或夜葦塚・大矢野兩人、供二三人連れて、密に佐志木が方へ來り、兼て心易き中なれば大きに喜び座敷に通し、取敢ず酒を勸め、さて天草の起、地頭の非分、又富岡の城攻めなど物語りければ、佐志木も彌同心合體し、額を合せて餘念なく一揆の評定す。葦塚いふ樣、未だ此邊、一揆の色目見えざる內に、一謀ありたきものなり。其故は高久城、松倉家小身と雖も、關ヶ原亂後、浮田の城を受取りし時に、百五十萬石の城中、武具鐵炮玉藥など引取りて、城外の藏に籠置きたりと聞及べり。されば何卒江戶の追討使向はざる以前に、島原領を悉く奪ひ、彼武具火藥を我物とし、天草と一つになつて、松倉の城を追落し、直に有馬領を押靡け、長崎へ打出づるならば、九州を呑むの勢を生ずべし。然らば先づ當村三鄉の儀、偏に貴殿の心底にありと相談す。佐志木は元來望む所、殊に耶蘇宗門再興を喜び、其上近年地頭の辛き掟には倦み果てたり。一言

にも及ばず同意して、各と安否を共にすべし。幸かな下深江村の名主葭田三平は、我れ常に懇なり。利發者にして膽亦太し。彼も又日頃地頭の非分を恨み、殊に藏元の庄屋なれば、一揆の頭人にしても不足なし。哀れ五六十騎の將とはすべき器量の者なり。常に見置きたり。先づ今宵密に呼寄せて内談すべしといふ。葦塚が曰、君、人を見るに違ふ事なし。三平定めて器量者なるべし。今天草島愚民多くして、將となるべき者は甚だ少し。我れ其才を誠に深く用ひんと欲す。三平來らば、隱れて屏風の後にあらん。君先づ斯くの如くいひて試み給へ。其後我れ出でて味方に勸むべしといふ。程なく三平入來る。佐志木迎へ入れて、夜中の御出、近頃忝なし。急に貴意得申度と申すは、聞きも及び給ふらん。天草の一揆大に廣がり、原村の渡邊小左衛門も組しぬと聞ゆ。彼が一子兼て棟梁たるの上は、さもあるべき事なり。最早此邊の鄕々へも打出づるなるべし。我れ君と心を合せ防ぎ守りて、百姓を救はんと思ふ。君共に力を合せ心を固うし、防ぎ給ふべしや。葭田三平曰、水來らば土を以て防ぎ、賊來れば人を以て防ぐ。元より極りたる理なり。心を合せて防ぐべし。佐

志木曰。然れども一揆大勢なり。其上密に聞く、未鑑といふ者ありて、彼天主教大に蔓るべしといふ。我れ是を恐るゝなり。夫今度此國終に賊の者とならんや。三平曰、天草の衆一萬人、皆是士民女童の類なり。將とすべき者五六人には過ぎずと聞く。何ぞ蔓る事あらん。九州には島津・細川・黑田・鍋島・有馬・立花・小笠原、英雄地に滿てり。焉ぞ亡びざるべき。且宗門の歸依は、一揆に一味せずとも、尊む人は尊むべし。夫れ宗に傾くは內心の法、一揆に隨ふは外相の用、何ぞ是一つなるべしや。島の愚民は諭すとも、焉ぞ大國中國へ出でて、奇特を以て歸伏さすべきの理あらんや。未鑑などといへば、是れ今の人の密に作れる詞ならん。佐志木曰、說に明かなり。我れ彌賊を防がんと欲す。君力になり給ふべきやというて茶を勸む。三平が曰、此外に談ずる事なしや。佐志木が曰、談じたきは是なり。此外に談ずる事なし。三平辭して歸らんとす。佐志木立つて送る。三平又曰、君此外にいふ事なしや。佐志木いふ事なし。三平忽ち座敷に立戾りて曰、久しく君と交り、君篤實にて僞る事なし。然るに今日初めて君が僞を聞くのみ。佐志木曰、是れ則何の辭ぞや。三平曰、

葭田三平一揆に與す

君已に一揆に組し、此座敷に又一揆の大將を隱せるならん。佐志木膽を失ふ。葦塚驚いて屛風を出で、三平を迎へて曰、我れ實に葦塚忠右衞門なり。公の詞、何ぞ斯くの如く合へるや。三平が曰、斯の如き事は、一言の本にも見るべし。一揆を防ぐは常なり。惣庄屋一統にも談ずる事なり。何ぞ夜中に呼び給ふ事あらんや。又一揆の事を誹るに、喜べる色なし。且聞く人に聞かするが如し。是故人の聞くを知る。我れ僅の座官にあつて、正しからざる政道にあぐむ。今骨折りて一揆を入立てずとも、代官に叱らるゝの外他なし。一生逼足して人の下に立たんより、一揆に組し、日頃奢りし郡代共に思ひ知らせば、死すとも恨なし。葦塚大きに喜び感じて、共に誓をなし、葭田三平得る上は、松倉の高久城奪ふに難からずと、密に三平に謀を約し、先づ一揆に組せざる體になして返しける。されば下深江村の合戰に、大きに松倉が勢を打破り、一揆一方の大將となりにける。三平歸りければ、佐志木は村中の一家被官皆々呼集め、我聊か宿願の仔細あり、今日より每晚日待をなす間、地下中へ觸れよ、心喜びありて振舞の條、殘らず私宅へ來り遊び給へと、段々觸れ流しける。此

村高千二百石の所にて、男女も多き地なり。此觸に依つて皆々來り遊ぶ。餅を搗き酒を蓄へ、魚類の日待して人々に馳走する。常々も日待には、打寄り遊ぶ嘉例故、百姓原大きに悅び、面々擅に酒宴に飽き、實に安樂世界ぞやと打倒れ足を出し、不禮なる百姓の交なり。此時に亭主も葦塚・大矢野をも座敷に置き、曾て一揆の噂を言出さず、地下人の體を窺ふ百姓共。段々酒宴に長じて高聲になり、世間話になる。扨第一此間天草一揆の物語を初め、本渡島子にて寺澤衆を追捲り勝利を得、軍法の譽此上もなき手柄話、先づ差當り肥前原村の一揆起り、已に三千餘人に及ぶ。扨も〳〵羨しき事かな。此一揆の人々は、常に酒肴に飽き、百姓の辛勞さらりと遁れ、地頭殿へは年貢も計らず、憎かりし日頃權威の役人を、鼠の如く追返し、一日の榮花も、百年の樂も、猶此上に、何とやらんいふ國より、いんす七厘づつ配るとやらん、其上死すれば上天菩薩となり、生涯は萬福長者になる、兎角好ましき事なりと、口々に言立つる後より、皆知らずや、此度大將四郎太夫殿は、今判官殿とて、九郎殿の再來なり。殊に葦塚辨慶とて、智謀多き名士あり。又大矢野・千々輪・赤星などは、昔の佐藤

兄弟・龜井・片岡にも増りたる人にて、此人々に勝つ者、日本中にないとやら風聞する、扨々羨しき事と、いひ募り〳〵後には我知らず佐志木が前へ出で、庄屋殿、何卒思召立ち給へ。一揆に組し、天草村と一つになり、此の息子殿を馬に乘せて大將になし、旗押立てゝ出づるならば、此上もなき勇しき事なるべしと、願ふ事頻りなり。左治右衛門態と頭を振り、各勿體なき筋なき事思ひ立たるゝな。當村は島原の領にて、高久の御城膝本なり。若し聞えなば、卽時に皆殺さるべし。其上當村に三ヶ寺あり、天臺宗・眞言宗・淨土宗なり。住持是を聞かば、其儘御城へ訴へ出でん。天草村兩所の一揆は、天帝の宗門に思込んで、寺々を破却し、僧法師を打殺し、或は奉行代官を殺害して、詮方なく徒黨したる由、各は旦那寺を抱へ左樣の心得、其意得難し。いらざる思立せんより、快く酒飲み日待して遊ばれよと、言捨てゝ奥に入る。後は爺亂酒になり、親子の境もなき程醉潰れ、何うあつても一揆羨しく、若者共寄合ひ、何と寺を打破るまいかと、ひよつと一人が言出すより、尤然るべしとて、無分別の若者共二三十人連立ち、先づ中の瀨古の坊主奴が、日頃惡き勿體面、彼寺から先づ打破

らんと、棒鎌鍬或は斧鉞を持ち走り行き、佛壇を打毀ち門戸を破り、住持を縛り上げ、天帝宗になるか〳〵と責め問ふ。坊主も命惜しさに、御宗門になり申すべしとて、いすまる〳〵と唱へ、口重なる住持三人迄引きけり。佐志木が宿に喚き歸り、斯の如く最早寺々を打破り、又住持も多く切支丹になり、命御詫申すなり。此上は天帝の宗門を立て、一揆を起し給へ。日頃願ひ奉る庄屋殿の事なり、此節御見捨はあるまじ、是非共と勸むる。佐志木、今は時至りぬと、葦塚・大矢野を伴ひ出で、各斯の如くの上は、是より我々も一揆なり。唯此人々の下知に隨ひ給へと、頓て誓約の酒汲み交し、片時も早く急ぐべしとて、先づ白木綿を數十反取出して、天帝を本尊に立て、村中の鐵炮を集め、古脇差古鑓鎌鍬迄も集め、人別を選み着到を付くるに、究竟の百姓一揆二百卅餘人、犇々と固まる。急ぎ原村へ此由申送りて、彼邑の一揆共を此方へ呼寄せ二所になり、大將には千々輪・大矢野・鹿子木・駒木根等、手寄々々の隊伍を定め、鐵炮二百挺揃へて、上深江村へ押來る。當村の一揆二百餘人、佐志木を大將として、各出陣の酒宴をなし、事始に近邊の村々を催すに、秋の木の葉の嵐に崩るゝ如

く、一度手を出せば、悉く隨ふ。若し隨はざれば、片端より打毀ち、亂妨狼藉して、米錢を集め家財雜具を掠めて、此騷動唯一時に起り立ち、一黨する村々、上深江村・中深江・一色村・野田村・尾村・里村・池田・小森・高原・波多野・佐田、此村々の百姓原、悉く一揆に與力して、足長に諸方へ出で亂妨する。只津波の打つ如く、一度打寄せては、雜具衣類食類迄悉く引奪ふ。下深江村には、第一松倉の兵糧藏あり。一番に押寄すべきの所、庄屋葭田三平一味して、高久の城兵を計略に乘せ、此兵糧藏へ引寄せて、悉く打果すべき內談故、此村は其儘打捨て置きたり。此葭田三平、謀略衆に抽んでける故、葦塚密に一の臂を得る如く、賴もしく思ひける。旣に他領へ立越え、萬事心元なく思ひける。俄に二三日の間に、大鄕悉く靡き從ひ、此上に渡邊小左衞門・上總三左衞門・佐志木佐治右衞門・葭田三平、皆一器量ある大將を得しかば、天命至り、萬一功もなす事もやと、葦塚・大矢野心中微笑して喜びける。扨又高久の城には、間近く此騷動を知ると雖も、去頃天草にて、寺澤勢の敗軍嚴しく、人々心を置合ひ、外へ出づる事を許さず、唯江戶へ使を馳せて、急を告ぐる計なり。

（南島變亂記 第六畢）

南島變亂記第七

渡邊大謀を失ふ事并肥後川尻にて捕はるゝ事

斯くて原村には、渡邊小左衞門逆意に組すといひ乍ら、悴四郎が一世の名大將と譽め上らるゝに喜んで、眠る事能はず、熟と思ひけるは、我今愁に大將の親として副將軍と呼ばれ、采幣を取るといふ共、切て七書をだに知らざれば、却て足手纏になり、我手より敗軍仕出しては、千悔す共甲斐なかるべし。所詮軍中の用には立つべき器量なければ、早く死したる方、却て四郎が爲め、又葦塚殿の手分定めにも儘なるべし。迚も死すべき命ならば、今度一揆の大用に當つて死したき者なり。今葦塚・大矢野等の計らひを聞くに、長崎を味方にして、異國の通路を引受けなば、是此度の一揆の眼目なりと聞く。幸ひ我は長崎よりの入人なり、未だ長崎に與五といふ弟あり。其

弟は肥後にもあり、味方海道續きに靡け行かんには、松倉・寺澤・有馬領、所々の郡城を落さずしては、長崎に至り難し。其中には必ず江戸の下知ありと、近國の諸侯取圍むは定の事、さすれば志計にて、空しく亡びなんは口惜しかるべし。我れ一人今宵に長崎に一揆を起し、前後立挾んで攻立つる時は、四郎運により、國中を手に入る事もあるべしと思付きけるが、又思ひけるは、老母は繼母なれば、殊に義理深し。我こそ四郎が愛により、命を捨て家を亡すなれ共、繼母にも其罪かけん事道に非ず。所詮老母をも同船して、事ならずば長崎に預け歸るべしと、先づ妻にも語りければ、妻いふ様、當時天下靜謐の時、斯る惡事を思立ち、萬に一つも功なす事あるべからず。いらざる事に他領へ分れんより、此處に死を共にし給へ。老母の事さる事乍ら、斯く惡徒の張本なれば、何處に遁れ住むべき。我罪をして、他人に辛勞かくるは道に非ず。已に此家に來りて四郎が愛に溺れ、訴人に出づる事も能はずして、惡意に組するは、迚も老母への孝は缺け、先祖への罪は謝し難し。今旣に此地を離れ、他境の人、誰か四郎幷我々を、此地程に思ふべきや。必ず捕はれとなるべし。此事思留り給へ

と、懇にいひしかども、小左衛門が氣金鐵の如くにして、一言を變ぜざりしかば、妻又いひけるは、此事思寄り給ふ事なくば、是も亦天理なり。さらば自らをも伴ひ給へ。此地の人民崩れざる樣に、代りの大將を定め、能く覺悟して出で給へ。我れ母共に、一所に罪に合ふ時は、切て四郎が自業自得の果をも諦むべしと、懇にいひしかば、小左衛門尤に思ひ、彌是に定めて小船を用意し、漁舟の樣に拵へ、老母妻以上五人打乘りて出船せんとす。則後の軍勢、此地の產にして、勇武智謀衆に勝れたる上總三左衛門といふ者に、跡式悉く與へ、則指揮して申しけるは、我れ今功を立つるに道なし。故に長崎へ渡りて、一揆を廣めんと欲す。千に一つも無事に歸る事あらじと思へ。我れ若し敵に捕はるゝとも、諸軍曾て心を落すべからず。一揆の百姓を能く懷け、萬事葦塚忠右衛門・大矢野・千々輪の差圖を受け、軍の懸引して、四郎を守立て給はるべし。我れ他邦に死すとも、生きて此所にあるが如くなるべし。返す〲も我子の四郎に、父が志を能く立てゝ、一揆の人々に憎まれず、葦塚・大矢野・千々輪の人々を父と賴み、快く首を並べよと傳へ給へ。さらば〲と淚を流しいひけれ

ば、上總三左衞門は涙を流し、出船の首途に、忌々しき事宣ひそ。我れ今早打を以て、此事を、上深江村に在陣し給ふ葦塚殿へ告げやつたる間、此返事を待ち給へといひければ、斯く思立ちたる事なれば、善惡は論ずべからず。此跡上總殿能く守り給へと、用意支度して立出でけるに、上總三左衞門を初め一揆の人々、濱邊迄送りて、樣々留めければども、終に聞かず。其中に上總三左衞門方へ、葦塚より返事も來りけるが、心に任すべき由なり。是に依つて是非なく、濱邊に酒宴を設け別れけるが、小左衞門が妻は、天草甚兵衞が妹なれば、少しも惡びれず人々に暇乞し、夫を勇めて、頓て目出度歸り逢ふべしなどといひ乍ら、是を限りとや思ひけん、扇子を上げて立上り、龍門原上の土に骸を埋むとも、名は青天に輝かさんといふ潔き朗詠して、盃を納めて舟を漕出しける。扨深江村には、葦塚忠右衞門、上總三左衞門方より早打を以て、渡邊小左衞門が志、委細に言越しけるに、一度は喜び一度は恐れ、其喜ぶ者は、斯く身を捨てゝ長崎へ渡り、若し功ならば、九州に踵を爭ふべしと思ひ、又恐るゝ者は、今諸國一揆の沙汰、大概に聞ゆべし。松倉・寺澤領こそは、隙も油斷もあるべき。諸國は

皆人民上への政道に歸し、國主油斷なく國境を守るなれば、此人々忽ち生捕らるべしと、心分つべき方なく、密に袖の内にて卦を起し、占うて見たりけるに、不吉に當りしかば、心決せずして暫時呻吟する所へ、大矢野作左衞門來り、此事を聞くに、葦塚疑ふ所をいひければ、大矢野大音上げ、何ぞ吉凶を以て試みんや。長崎を窺ふは、我輩の望む所なり。死するは我も人も、早きか遲きか迄の事、勇士の思入、留むとも留まるべからず。其望に任さるべしといひければ、終に返書を調へて返しける。其使の後姿を眺め、葦塚猶心決せず心樂まず、自ら立ちて歩行し濱邊に出で、海の面を打眺め久しく立つ。浪の色甚だ惡しく見えければ、葦塚忠右衞門手を丁と打ちて、大事去れり、必ず渡邊小左衞門を失ふべし。是又味方の弱味なり。始め勝に乘じて富岡の城を攻むるに、城堅固にして拔く事能はず、今又長崎を計略するに、其事不慮に出で、必ず功をなさじ。天命なる哉。終に夫れ島の中にして事止むべしと、獨言して歸りしとなり。斯くて渡邊小左衞門は、水主と自ら舟を出して急ぎしに、汐合甚だ惡しく、長崎へ着く事能はず。其中目附船検見多く漕合ひけるを、漸々として漕

抜け、長崎へと計り急ぎ行くに、夜に入りて漸く田の浦といふ所へ着きぬ。漁家の本に寄り一夜宿り、長崎の樣子を聞くに、こゝは宇土の下なり。此邊此頃は、天草一揆起れるとて、島々舟着く毎に御番嚴しく、夥しき軍兵にて囲め居る中なれば、此舟の如きも、商物にても、慥なる請合なくては、何處の浦と雖も寄り難しといふ。其話に便りて小左衛門も、又天草の大將の才智一揆の超過したる樣、且天草の法の奇特など語り見るに、中々聞入れず。今の世、何者が出でたりとも、世の中變あるべきや。天草にも、いらざる事して、身を亡しなん人の多き事抔と、他領の人は、談合殊の外違ひ、此舟の衆も、何とやらん心元なき人達なり。早く他領へ着き給へ。此所は小浦の事なればこそ案内もせで、一夜泊めたりなどいふ程に、何卒夜に入り長崎へ着かんと、又舟を押出したりしに、天運や廢りけん、海上大汐不意にさして、忽ち舟を、方角違細川殿の領分、肥後國川尻といふに流し寄せける。此所は則細川の家老長岡監物よりの與力並に家人、大勢にて守り居る。此日は別して、海上の舟の往來を改むる最中なれば、頓て前後より大勢取包み、皆々生捕られて段々吟味あるに、則一揆の

渡邊小左衛門捕はる

張本四郎時貞が實父渡邊小左衛門に紛なかりければ、早速手伽足伽を入れて禁獄し、卽時に江戸表へ注進あり、其後御吟味ありけれども、母も小左衛門も、互に死に變らん事を爭ひ、命を惜む氣色更になし。耶蘇の法などの事、御尋ねありしかども、一向不案内にありければ、先づ其儘に差置き、追ての調略を待たれける。斯くて原村には、渡邊小左衛門舟路間違ひ、肥後の川尻にて生捕られたりと聞えければ、村中の人民、聲を上げて恨み泣き、軍心皆撓みけるに、大矢野・千々輪・葦塚等急に馳來り、大きに勇め利害を說き、今は小左衛門殿弔合戰より外あるべからず。先づ此事を四郎殿に隱密にもなるまじ。急ぎ申送り、彼の人若し深く歎きなば、是大將の器量に非ず。又別に大將を選むべしと、葦塚・千々輪・大矢野等相談究め、四郎太夫方へ申送り、其返事を相待ちけるに、逼に一揆の惣大將に選れし程の四郎が返答潔し。父小左衛門事、今更是非に及ばず。凡人倫の道、親子の別程切なるものはなしと雖も、斯く大義を思立つ砌、已に父母の恩に背けり。各を始め三萬人の軍卒、皆我父の如し。我も人も遠からぬ死の緣、頓て上天菩薩の御前にてこそ言譯致すべし。一人の爲

に、三軍の民心を落さんや。早々肥前・肥後を切靡け、小左衞門殿の弔合戰こそ望む所に候。今日の歎、各餘り心に懸け給ふなと申遣しければ、葦塚・大矢野・千々輪已下の者共、扨は此人大將の器量は備はりしや、あら賴もしや〳〵と上下安堵して、此上は彌小左衞門殿の志を繼ぎて、島原領の一揆を取集め、深江村に謀略し、松倉の根城高久城を奪ひ取り、腹癒に攻居れやと、四郎が返答を、普く一揆の百姓原に見せて、其上にて諸役人殘らず呼集め、其後葦塚忠右衞門、軍士を勇めしは、惣じて父を生捕らるゝ事、不吉に似たりと雖も、先例皆ある事なり。昔周の文王も、敵の爲に捕はれとなり給ひ、其子武王、敵を亡し周の世を開き、天下を保ち給ふ事、八百餘歲なり。又漢の高祖と申す帝は、始め御父太公を、敵の楚の項羽といふ天下無雙の勇將に生捕られ、對陣の度々、此太公を引出し、陣を退けずんば、忽ち煮殺さんといひ、或は鼎に油を湧し、其上に俎板を置き、此上に彼太公を橫に置きて、陣を退けよと呼ばはりし事ありしとなり。樣々に謀を廻らし、終に鴻溝といふ所を限り、國を境ひ和睦して、彼の父太公を迎へ返し、其後又軍を起し、終に項羽を亡し、漢の天下四百年の基

を起し給ふ。其外前漢の王陵・南京の高祖・和朝の義朝・甲斐の信玄、近くは奥州の伊達政宗、皆是父子離あつて、其家榮えし例ならずや。却て敵に恨を增し、諸軍心を一にして、金石の如く義を立て、突けども射れども顧みず、切らば刀に縋りかけられて戰ふべし。九州二島、日あらずして打靡け、軍船兵糧前後を圍み、花の帝都を指して打上らんに、大物難波等防ぐとも、尊氏歸洛の先規に習ひ、井伊・本田・榊原・藤堂・板倉・酒井の輩、備播二州の間に切亡し、天帝の旗を、此日の本に吹靡けんは案の內、各心を落されな。差當り松倉高久城代、近日押寄せ打果さん。勇み給へや人々と、詞すゞしく座を立ちける。

葭田三平智略の事并藏奉行兩人一身の事

斯くて深江村には、葭田三平、葦塚が密謀を受け、種々工夫を廻らし、先づ支配地下の中にも、口を利き一揆にも一味すべき者、其器量ある者二三人を密に招き、各先づ聞き給へ。天草の一揆次第に廣がり、近々に最早九州一統になりぬべし。さあらば

此郷、早く一揆に一味して、先づ急難を遁れたきものなり。扨一揆に一味すれば、當年來年來々年の年貢は出さず、作り取りといふ定なり。一揆に一味なければ、目前に押入り亂妨するなれば、各能く覺悟して、早々一味し給へといふ。何れも三平、常常村の惡しき事いはぬ者なれば、いかさまとも、庄屋殿次第たるべしといふ故に、然らば外々へ沙汰あるべからず、高久の城へ一手立して、高名したる後、天草所々の一揆共より、此郷の一揆を敬はす樣に手立あれと、是等をば返し、夫より密に藏屋鋪に行き、代官奉行中尾甚太夫・山脇七左衞門兩人に對面して申しけるは、いかに御聞き候や、今天草大江村に一萬五千の兵を集め居る、彼が宗門の本國伊留滿伴天連にも、内々物語の事候へば、頃日に黑船共着岸致すべしとも申候。先づ差當り原村の變亂御聞及びの前、申すべきにあらねども、内々所々に一味の味方此ある由申候。誠に龍の雲を得、虎の山に寄るが如しとや申侍らん。寺澤の家中、本渡にて一戰ある由、忽ち大將の三宅藤兵衞・並河九兵衞等討取り候て、其後一陣も張合ひ申難く、富岡へ逃籠り候とも申し、最早一揆に降參仕るとやらん承り候。寺澤家は十二萬三

千石、中大名に候所、一戰に及ばず敗軍仕候由、況や松倉の御家は、先づ小身にも御座候上、近年御政道惡しく、諸人倦み果て候へば、誰彼こそ一揆に一味して、味方の負仕出し候やらん。武勇も此度は詮なき事に候。其故は人間の世界さへ、大劫とやらんの大火は、大地の底より火燃え出で候へば、萬民遁るべき所なき通り、天迄燒拔けるとなり。今此一揆も、縱令武士防ぎても、國中の土百姓皆々一味仕候はゞ、大地の火になりたる如く、防ぎ難き者と存候。是は武邊の立たざるにも非ず、國政の宜しからずとて、此一揆起る事止む事を得ず、天性といふべき者なり。上深江村・中江村も今一揆に組し、渡邊小左衞門・佐志木佐治右衞門なども、一揆の一將になり候上は、最早今あなた方の身の上に相懸り申候。所詮一揆共、松倉公の手際には鎭まり申さず候と存候へば、早く一揆合體の御心になされ候方、御身の爲、萬全の謀と存候。一揆は九州半も打從へ、天下の節度使に敵對申すとも、五度七度は勝負あるべく候。何れになりとも御了簡次第に候。官軍へ御加はりなされ候とも、自由と存候間、此度は唯我等が御勸め申す如く、一揆に御從ひ候はんや。又は一揆を御引受け、御合

戰も候やと、威しかけたる言葉に、兩奉行返答し兼ねて見えたりしに、三平又申しけるは、各樣方、一揆に御敵對候へば、御下知に隨ひし私事に候へば、御供仕候へ共、私支配を始め百姓中は、中々義理を得申さず候へば、一揆に組仕候と存候。さ候へば彼の聞及びし明智日向守が如く、竹鑓の最期と存候へば、扨も口惜しく候といひければ、兩人の奉行、面色靑く變じ、いかにや三平殿、其許の詞尤に存候なれば、我々も一揆に組すべきなり。併し新參とて、土百姓共に部役に使はれんは、死すともなり難し。其許の御働にて、中老分に用ひ給ふ樣に賴む由いふ。三平大きに喜び、則受合ひ、一揆徒黨の判形を取るに定り、家內殘らず一揆へ引取り、下深江村一揆一味の誓約極りければ、寬永十四年九月五日に、葭田三平は、忽ち高久の城へ注進に出づ。此頃も每度申上候如く、原村の一揆段々廣がり、上深江大半、一揆に組仕候由相聞え申候。下深江村の儀は、御城付兵糧米も籠め置かれ候へば、御油斷なされ難き所に御座候。然るに近鄕動亂仕り、又近村へも悉く亂妨仕り、土民共安き心は是なく候。且承り候へば、頃日原村名主渡邊小左衞門、川尻にて生捕られ候由、是により天草へ

加はりの大將へ申遣し候由、押付大勢押渡り候て、打潰し申候由沙汰仕候。是に依り一兩日は、上中深江村・原村の一揆の者共、うろたへ申す由承り候。さあれば此間に、先づ下深江村の御城米、殘らず御引取然るべく存候。私組下近年困窮、其上課役多く候へば、今年貢皆納御免遣され候はゞ、此度の御奉公に村中を相催し、急度守護仕り、次に近隣の一揆も、四五百人御切捨て候はゞ、御留主居の忠節、此上もなき事に御座候と、憚乍ら奉存候。若し天草勢着陣仕候上には、いかに思召す共叶ひ申さぬ事に候。只今原村變亂の間に候へば、早々御勢出し、御尤に奉存候。百姓の心も、只今定り申さゞる間に、年貢御免仰付けられ、隨分相働き申樣、仰渡され然るべく存候と申しければ、高久城代の松倉十兵衞、委細に是を聞き、尤の事なり。代官奉行中尾・山脇はいかゞと申されければ、三平則兩人の御内狀も御座候とて、出し見せければ、松倉十兵衞喜び、成程是より軍勢差遣し申すべし。此頃は、一揆悉く大軍と聞及ぶ故、城中を大事と計り思ひて、追討も延引す。一揆の中に斯る變亂あるこそ幸なれ。其上深江村の鄕民、其方が勸に依つて、忠節の心あるの段祝着候。成程當年

の年貢皆免し、來年は半免にして取らせ申すべき間、其方隨分働き、上深江村の一揆共を、殘らず討取り申す樣心得らるべし。彌明後朝急度勢を出し追討すべきなり。又藏入の兵糧米は、其砌悉く城内へ運び取るべし。是又人數配り傭人夫等、其方取計らひ世話致すべしと、内談一々終り三平を返し、夫より十兵衞、彌出城の用意して、城の留守居は、松倉但馬を初め、在番奉行・町方奉行・城番組・堀付組等、彼是三百餘騎、方々門々を堅め、籠城用心して相守らる。打出づる大將には、城代一老松倉十兵衞、番頭筒井丈左衞門・下野小助・佐脇治郎左衞門三人、騎馬の侍卅九人・歩の士四十人・鐵炮五十挺・長柄卅本・雜兵合して五百餘騎、下深江村に打向ふ。

松倉十兵衞下深江村の一揆を攻む

南島變亂記第七畢

薗田三平智略の事幷藏奉行兩人一身の事

南島變亂記第八

松倉十兵衛敗軍の事并大矢野鎗術働の事

去程に松倉十兵衛は、寛永十四年九月七日の卯の刻に、島原高久城を立ちて、精兵勇士五百餘人、下深江村に出張して、河原表の廣野に陣し、何方へ押向ひなんと、未だ定まらず。定めて下深江村の者共、案内に來るべきなりと、暫く見合せ居たりける。昔より、彼を知り己を知り、然る後軍を押す。彼を知らずば、軍を出すまじと聞えしに、人頼みなる軍勢遣ひ、哀れ拶々しからずとぞ見えにける所へ、下深江村の名主葭田三平、健に出立ち、武具相調へ鑓提げ、究竟の百姓原五六十人召連れ走り來り、扨も一揆原、上深江村に屯仕る所に、各樣御出陣、御旗先を見ると早、日頃の氣勢も落し候やらん、遁れ走り申候。急ぎ追討し給へと注進する。則松倉十兵衛是を聞き、大

きに喜び笑ひ、いかさま百姓一揆は、さもあるべき事ならん。急々に追討せよと、十七町の所を、平一散に駈付けたり。既に上深江村に押付けて見るに、一人も見えず。百姓原此時に、追々二三十人も注進に來り、一揆は此次の小森村へ、唯今取込みと申す故に、城兵出張して是を見るに、內々葭田三平疑兵をなして、百姓原を二三百人、村々へ步み行く如くするを、城兵共是を見て、謀略とは夢にも知らず。すはや一揆原、此間にて追留めて打果せよ。先頃天草にて、寺澤衆の戰とは、事拔群に違ふべきぞやと、土煙を立て、跡先も見ず追懸けたり。此後に殘る城中の雜人原、或は小荷駄掛りの者などは、葭田三平、其邊邑々の親類兄弟などを以て、密々に招かせけるに依り、下賤の者は、大方一味して駈付くる振して、村々より外す者は多かりける。先手の戰士は、是を夢にも知らず、揉みに揉んで急ぎけるが、又半道計り走りたる故に、馬は白泡人は息切れ、步行立の武士も一所に集り、扨も臆病の百姓原かな。斯程の心底にて、能くも此度の一揆思立ちたるぞ。切て一鎗にても合せず、殘念なりと大きに嘲哢する所へ、追々百姓來り、唯今下深江村の御藏米を奪ひ取り、運び去ると申來

る。時に松倉十兵衞・筒井丈右衞門を始めとして、南無三寶盜人共の業ならん。彼奴原が後へ廻り、盜賊をなす以の外なり。元來此事一大事なり。一俵にても奪はれては、武士の恥辱此上なし。急々押付けて討果せと、健なる武士を勝つて十九騎・歩兵六十人・雜兵三百人、馬の手綱搔繰つて、矢聲を出し驅立つる。追々同勢も驅付くれば、是に氣を得て驅けゝれ共、馬は鎧武者を乘せたり、侍は具足にかたをいけ、中間は長柄に持重り、今朝より走り草臥れたる上、又もや揉みに揉んで、一里計り驅けたり。下深江村に押付けて藏を見れば、一揆一人もなし。こはこそ天狗の所業か、今朝より二里餘り走り廻り、大きに疲勞して、又此所に敵にてもあるに於ては、少しの働もなるべきに、一人も相手なき故に、今は心弛み、殊に藏米も其儘あり、心の張合拔けて倦勞れ、唯働く者は目計り、皆々肩息にて水を呑む。松倉十兵衞大きに怒り、注進の百姓共を引出させ、扨々麁末なる案內者共かな。葭田三平出ませい〳〵と呼び廻る。先づ第一心得難きは、藏奉行中尾・山脇の兩人なるぞ。今朝より罷出づべきに、今に於て何處にある事ぞと、大聲擧げて喚かれける所へ、俄に陣貝鯨聲、

下深江村の伏兵四方より起る。一番に一揆惣將軍葦塚が陣代、同苗葦塚忠太夫、采幣を取つて靜に進めば、葦塚左内は、究竟の一揆二百人を引きて眞先に進む。同勢彼是五百人・鐵炮五十挺、天帝の旗一流颯と差上げ、一度に鬨を噇と上る。又一方の河原表の方より、千々輪五郎左衞門華やかに鎧着て、速なる一揆勝り立て、百五十人同じく鬨を合せける。又一方より佐志木佐治右衞門が手下二百人、大矢野作左衞門が勢二百餘人、四方の面より取圍み、鐵炮を放ち懸れば、只今にも大地坤軸へ引入るやと、肝を失ふ計りなり。松倉十兵衞、こは如何にとうろたふるを、家老筒井丈右衞門・下野小助、馬を並べて立上り、いかさま敵の爲に計られたりと覺えたり。さありとて物々し、何程の事あらん。先づ藏屋敷に取入りて、二人の奉行と一つになり、防ぎ戰ふべしと、御藏の陣屋へ入らんとすれば、あら思ひ寄らずや、陣屋の鐘一聲を鳴らして、喚き駈出づる一揆原、天帝の旗一流颯と差出す程こそあれ、眞先には、是迄忠臣と思ひし葭田三平、賴み切つたる奉行の中屋甚太夫・山脇七左衞門、究竟の一揆三百餘人、鐵炮を二段に構へ、曳々聲出して押詰むる。此時城兵肝を潰し、今朝の疲

勞に心弛みたる所へ、賴みに思ひし味方は敵なり。何れも腰拔け、力落して働らかず、雜兵士卒は、皆道端に轉び伏し、我々一揆に組すべし、せんすまる〳〵と呼ばはる聲に、猛き武士も力落して、河原の方へ我れ知らず引いて行く。三方の一揆、鬨を作追懸くる。松倉十兵衞引返し、餘り無念の仕合なり。いかに一揆共、松倉十兵衞とりて聞及ばん、大剛の者なるぞ。一揆の輩、我と思はん者あらば、一鎗の勝負せよと、齒嚙をなして踏止る。是を見て松倉小八・近藤仁兵衞・同新八、馬廻廿七騎、一度に鬨と盛返す。此時一揆、鐵炮の手を以て打立てなば、早速功をなすべきに、今朝より手間取つて、其上武士大に疲れたるを見て、唯も打拉ぐ者の如く思ひける故、葦塚・大矢野が下知をも待たず、諸手の一揆五六百人、蟻の如く群りつゝ取圍む。松倉十兵衞些とも怯まずして、近習の者に鎗を組ませ、自ら一番に聲懸けて突懸り、一文字に駈破り、矢庭に十三人突伏せければ、近習の面々、思々に高名してけり。是に依つて一揆突白まされ、心驚く所を、筒井丈右衞門・下野小助、胴勢を以て引返せば、一揆四五十人討たれて、蜘蛛の子を散らすが如く逃散りける。大矢野作左衞門是を見て、

深江村・原村等の者共が手業にては、斯る事仕出さんと思ひしなり。敵一度勇を附くれば、今朝よりの疲勞蘇る者なり。いで一當あてゝ見すべしと、馬を弓手に乘放し、鎌鑓を打振つて、斯樣の所こそ武士の役目なり。我が働を見よやとて、押懸る松倉勢に、會釋もなく突入れば、松倉十兵衞が近習四五人、鑓を結んで突懸る。大矢野が劍術を得たる其上、十文字の鑓をば、就中通達の者の事故、片膝附けて、前一本を揉上げ、四五本を一同に卷結んで支へたり。城兵共拔かんとすれども、中々働かさずして、元へ手繰り寄せ、鑓の穗先をはつし〳〵と踏折る事、三本二本は、兩手に持つて引奪ふたり。透さず松倉の近習の若者二人、鑓を捨てゝ拔連れ打込むを、大矢野は、父の讓りの二尺八寸ありける忠宗の刀、青海の如くなる大業物を振翳し、二人共に只一打に切倒し、後より進む一人を、横樣に抱いて生捕にし、我勢のそゝけたるを押直し、敵を睨んで立ちたる體、實に異國の燕人張飛、我朝の朝比奈三郞ともいひつべし。松倉小八・近藤仁兵衞、同じく續いて切つて懸る處に、千々輪五郞左衞門躍り出で、大の眼をくわつと開き、島原へ渡りてより、刀は今日が拔き始めぞやと、

父五郎左衞門が、昔朝鮮國にて譽を取りたりける伊勢正宗の大太刀、打振り〳〵打つて懸る。

按ずるに、大矢野が帶する所二尺八寸の忠宗の刀、青海の如くなるといふ。古今銘盡にも、忠宗といふ鍛冶なし。按ずるに其頃のあら身は、當國の名巧忠吉ならんか。又青海といふ名目もいかゞ、青虹ならんかといふ人あれども、爰に肝冷ゆるが如く限りなく凄じきを、九國の里の諺に、青海の如くといひける。又千々輪が刀伊勢正宗、是又勢州には、正宗といふ鍛冶なし。恐らくは村正が子の正重を言誤りたるか。按ずるに彼村正又は正重の二代は、最上の手妙なるを以て、私に伊勢正宗と稱するか。近代に神田白龍子が新刀銘盡に、井上和泉守國定法體して、井上眞戒といふ、俗是を大坂正宗といふとある。然る時は千々輪が家に祕藏して、伊勢正宗といへるか。此類なるべし。

忽ち先に進む近藤仁兵衞が高股切つて、どつと打倒せば、近藤が近習七八人群り懸るを、千々輪大音上げ、推參なりと叫びければ、一太刀も合さず逃散りける。松倉小

松倉十兵衛敗走

八、こは卑怯ぞや。侍共此場を逃げて、生甲斐もあるべからずと、力足踏んで躍り進む。千々輪優しやとて、例の刀を以て、拜打に切つたるに、肩先より脾腹迄切り、兩輪となつて左右へ倒る。近藤新六・下野小助、今は是迄ぞと切つて懸るを見て、葦塚左內是にありと走り懸り、新六を取つて組しけば、下野小助は、大矢野に討たれける。是を見て原村・深江村等の一揆共、あら夥しの天草の大將達や、實にも一揆を起すならば、斯程の人もなくては、斯る事の出來ぬ事ぞや。天晴大將の御働や。いで大將の跡をくろめんと、六七百人、むら〳〵になつて押懸る。松倉勢は、散々に打破られ、大將松倉十兵衛さへ、捨鞭打つて逃出す。同勢崩れ引いて行く。筒井丈右衛門は、追來る一揆を睨みて、後へ乘下りて働くにぞ、松倉十兵衛等、程を經て引きたりける。されば番頭筒井丈右衛門、其日の出立鎧の毛色、殊に美事に出立ちければ、葦塚左內・千々輪五郎左衛門・葭田三平・大矢野作左衛門など、いかさまあの鎧は、奪ひ取りて着たきものなり。生捕にして分捕にせばや。おびき出し押包みて、組んで討たんと計りける。筒井も此振を見てければ、隨分身を守り、働き〳〵退きける

が、終に四人に取卷かれける。筒井は年六十歲なり。今朝よりの戰、大きに疲れ、此四人と取組むべくもなかりければ、生捕となりてうき恥見んよりはと、自ら太刀取直し、喉笛に突立て、田の中へ倒れ入らんとするを見て、左內・三平走り懸りて足を捕へ、己れが首を何にすべき。甲冑こそ所望なれと踏倒し、具足を剝取りける。松倉勢此所にて、討たるゝ者夥し。一揆は彼是千五百人、野山を荒し追懸け行く。松倉十兵衞辛き命を助かり、後陣の勢彼是二百人計、馬を進めて行く所へ、小松原の細道より、一手の勢打つて出で、敗軍に打つて懸る。何者ぞと見る所に、彼天帝の白旗一流颯と差上げ、上總三左衞門・天草玄札・駒木根・鹿子木等の一揆原五六百人、鬨を作つて打つて懸る。松倉十兵衞肝を冷し、一騎駈に駈けにける。此時も松倉勢、討る者麻の如し。已に十兵衞も危き所へ、高久の城に殘りし松倉但馬、軍勢を出して救ひければ、纔に免かれ、城中へ逃籠りける。城より出づる時は、究竟の勇士五百人、雜兵彼是一千餘り、松倉家中の事なれば、武具は華かに出立ち、嚴めしく打立ちしに、晩景に至り、城中へ返し入る兵は、纔に數十人には過ぎざりける。一揆今日の

分捕武具又鞍置馬、其外數知らず奪ひ取りぬ。其後一揆前後の備一手となり、兵糧を使ひ休息させ、扨第一は深江村の糧米ぞとて、此邊三郷の小船近邊の獵船悉く集め、下深江村の兵糧藏の戶前を打毀ち、悉く舟に積載せ、原村の新藏迄運送す。佐治木佐治右衞門に、天草玄札を差添へ、原の本村飯小屋迄遣す。其日は殊に往來汐時はよし。何の苦もなく運び取る。員數二萬八千俵、又大豆四千俵、其外雜穀其限を知らず、只一日の中に運びけり。大矢野・葦塚・葭田等、兼て葦塚忠右衞門が見積に任せ、一揆を四頭に分ち、一手は城を攻め、一手は其後の陣なり。一手は外廓の藏々、又は町にある藏々共を發き、武具兵糧を取り奪ふ。一軍は暫く町中に控へたり。葦塚忠右衞門が積りの如く、松倉の家中、近郷より集まる兵もありけれども、唯今敗軍の後なれば、心後れて、唯城中を持堅めたる迄にて、雜兵一騎馳出づる者もなし。高久の城下の町々は、近郷に之なき程の福萬の所なり。其上城中の武具の多き故に、煙硝玉藥の藏も、外廓樹木茂りたる中にあれば、諸手の一揆鐵炮を禁じ、此玉藥藏を發きて、多くの火藥を取運ぶ。扨こそ原の城中、鐵炮棒火矢地雷火にも事缺か

ざりしは、皆此浮田家、貯へありし所の火藥なり。されば此手殊に大事なればとて、惣目附千々輪五郎左衞門自身乘押へて、原村迄引取りける。其外三の丸前武具藏にも皆々押込みて、殘らず奪ひ取る。城中是を見乍らも、只持口定め弓鑓詮議のみにして、一揆共に、悉く武具を奪はれける。守護のあるまじき恥辱なり。一揆は其後町内心の儘亂妨して押行く。金銀米錢はいふに及ばず、衣類器財、作込みし味噌醬油、是等の諸道具椀鍋釜迄一つも殘らず、大波の如く引奪うて立去る。誠に廣大の事なり。此時一揆は諸方に立散り、慾心德に目昏れて、制すと雖も備なし。本陣葦塚忠太夫・同左內・葭田三平・大矢野作左衞門、是等纔に百五十人計り、陣を堅うして待懸けたり。其外上總三左衞門・駒木根・鹿子木等の輩さへ、亂妨狼藉に打交りて備なし。此時城中には、大勢の奇武者集りけれども、打つて出づる評議は一つもなし。一揆唯今是へ攻め懸る。此所を防ぎ、彼所を支へよといひて、鐵炮石弓立連ねて待ちけれども、一揆は折々鬨を上ぐる計にて、終に寄せ來らず。翌日未の刻迄城中を竦め居て、亂妨思の儘に仕盡しければ、此裸城攻落して何かせんとて、勝鬨上げ

て引取りけり。若し城中より附慕ふこともやとて、葦塚・大矢野下知して、駒木根八兵衞・鹿子木左京に、鐵炮の手垂二百人、後陣の左右に備へて引きしかども、城中より一人も出でざりけり。一揆共、心の儘に所得して、戰ふ心更になく、喜び勇みて引取りたり。此勝軍は、葭田三平が奇謀に出で、骨も折らず十分の勝利を得、數萬の兵糧武具を奪ひ取る。尤も大矢野・千々輪が働少しとせざれども、向はで原村に殘りたる葦塚忠右衞門が見積、一つも違はざりける、智謀の程こそ恐しければ、諸軍是を感賞す。

是れ風雷耳を覆ふに及ばずといふ術、敵を、強く攻むる時は、敵武具火藥の藏を自ら燒亡して立退き、空しく數里の空地のみ。一揆の利にあらず。

南島變亂記第九

天草、島原を合す事并四郎時貞渡海の事

葦塚忠右衛門は、一揆八月十三日に始りしより肺肝を廻らし、早速異國伴天連等へも、兩三度迄内通の船を出すと雖も、海路は漫々千萬里を隔つれど、何ぞ物便りあるべきや。又今の世は、吉利支丹伴天連なども、外國を望む如きの器量の人も盡きけるにや、終に便とてもなかりけり。さらば此地に楯籠り、春秋を送るべき城地ありやと見廻りけるに、此原村の上なる古城こそ、誠に天よりなせる名城と見極めければ、内々用意はしたりける。今度葭田三平が謀計調うて、彼の高久の城地、心の儘に押詰め、内々武具火藥、目に餘る程分捕しけるに、其邊の一揆又三四千人も加はりければ、今は天草の本陣一所に合せなば、究竟の勇士二萬人には及ぶべし。是にては

如何なる軍術もなるべしと覺えければ、さらば長崎へ押渡らんと窺ふに、海上には松平薩摩守より、薩摩潟あくねきといふ所に兵船屯し、島津家の一統新納・伊集院が輩、一揆若し海上へ出でなば、追討すべき氣色、中々船路へ出づる術は叶ひ難し。長崎の湊岬・大村五島などの名家諸士、威令備うて相待つ。是又小勢にては叶ひ難き有樣なり。此上は渡海の望を止めて、肥前の國中を打平げて、其後謀を廻らすべし。然れば天草と兩所へ分れ入る時は、味方の勢强く、此所へ一所に集り、其上にて計略相定め、出でて戰ひ、入りて守るの評議を極め、急ぎ天草へ此事を申送るに、彼地にも大將四郎を始め、古老大頭小頭等の面々、兼て出勢の覺悟して、今や〳〵と待兼ねたりし事なれば、大きに喜び勇み、舟の用意兼て仕置きたり。先月の合戰に、唐津勢の舟も多く奪ひ置きし事なり。其外に近郷の漁舟共數百艘に取乘り、天草所々富岡抔にて奪ひ取りし諸財寶・金銀・兵糧・武具・雜穀・椽・板戶・柱門など迄、殘らず舟に積み、原村へ押渡り、軍兵男女凡て二萬七千餘人、境の如く靑竹さへなき程の事なり。犬猫迄も連れ渡りしとや。執着の法を尊みし故にやあらん。籠れる時、葦塚忠

右衞門、大勢は無用なり、兵を勝つて小勢にて籠城せんといひしかば、此法義の因縁によりけん、終に一人も別れず、多くの土民共籠り居て、天草・島原惣じて十萬石、御城下にある程の米穀は集めけれども、翌年二月末には兵糧盡きけり。是又宿業因縁なるべし。斯くて原村には、當分の假屋出來ければ、有合ふ所の一揆を引きて、天草より渡る。四郎太夫時貞迎に出づる。惣人數六千人、天帝の旗百本、風に飜して打迎ふ。海よりは天草の軍兵男女二萬七千人、前軍一萬餘騎、大將四郎時貞を守護し、大小の旗二百流押立つる。又向の山際には、殘る所の一萬七千人、原の津々浦々山山に飜翻して、誠に時ならぬ雪の如く吹靡け、實にも未鑑に、野山白旗を靡けんといひしも、今日に符合せり。一揆の棟梁葦塚・大矢野・天草・千々輪、其外佐志木・葭田・中尾・山脇・上總・駒木根・鹿子木の輩、鎧華かに一縮し、濱邊に下りて、四郎太夫時貞を舟より靜に上せ來る。其粧ひ器量骨柄、此程天草にて隨分拵へたりければ、邊も輝く計にて、吳郡の綾蜀紅の錦、日の光に相映じて、土民共は兼て四郎を知りたれども、今又見違へて、天上より下り來る天帝と雖も、御粧斯くはあらじと恐れ敬ひける。

四郎時貞諸將に式禮して、此程の軍勢を尋ね、國家の懸引を談じ、一人々々に夫々の挨拶を遂ぐるに、皆軍陣の事にして、我家の事一つもいはず。天然大將の器備はりしと見えにける。行末の事は知らざれども、民間に生れ、忽ち四萬餘人の大將と冊かれ、威風天然と備はりしは、誠に不思議の若者なり。禿髮に結直して、唐冠の甲を着したれば、彼の未鑑に言置ける、奇代の仙童といふは是なるらん。此日寛永十四年九月廿一日なり。彼慶長十八年、上津浦の伴天連歸國より、實に廿五年なり。五五の數にぞ合ひし。扨其後原村に假屋を建て、夫々の役人を定め、上下の衣紋も、昔の田作獵漁釣者の類には非ず。富岡・高久を始め、其外諸村の富家大家の衣類等、皆皆奪ひ取りて配分し着たれば、原村忽ち三都の景色をなし、音聲こそは島の夷なれ、人の往來遊び酒盛の多き事は、花の都にも、おさ〳〵劣らじとぞ見えにける。其後四郎時貞は、我舊宅に立入り、上總三左衞門に始終の物語を聞き涙を流し、一類の人々を寄集め、最懇に挨拶し、其後持佛堂を開き、代々の位牌を並べ、別けて小左衞門日頃願ひし三尊の佛を下し、是に則ち小左衞門・老母・妻女三人の俗名を書記し、上座に

具へて座を下り、生ける父に向ふが如く、不孝の子四郎某、一旦兵書の端を見誤り、家を變じて國となすは、丈夫の本望と申す事を深く尤と存じ、天草の一揆に棟梁となり、嬉しく前後打忘れ、一味致し候所、父母却て是が爲に捕はれとなり給ふ段、千悔すれども甲斐なし。千年此罪を詫ぶるも詞なけれども、頓て目出度上天菩薩の御前にて、申譯致すべし。但人間五十年の世、久しと思へど、永くとも一夢なり。我も人も遠からぬ假の世、頓て彼の國に生れ合ふべき頼みなれ。今已に四萬餘人に守護せられ、此家に立歸り乍ら、此體を御目に懸けざる殘念さ。言葉にも述べ難し。何卒諸將の氣を勵まし、天帝の恩護を以て肥前を打隨へ、念なう父母を迎へ返し、生前の對面とは存ずれども、天下の討手に向ふなれば、最早互に首にての對面とこそ存候へ。但し今、原の古城に楯籠るに極まらば、此館に直に引取り、本陣を我宿所と定め、唯今名を書きし三尊を後に置いて、共に謀を談ずるならば、生前に面を合するも同じかるべし。構へて何事も前世の事と思召し、彌御生害あるべしと、涙を流しいひけるに、一類一座の人々、涙を催して感じける。さればこそ原の古城の本丸は、則

一揆、原の古城に據る

此渡邊小左衞門が座敷なり。彼三尊を床に飾り置きけれども、葦塚忠右衞門・大矢野等大きに諫め、新參の一揆一味も候もの、正法の佛像は、何とやら宜しからずと申すにぞ、原の城の隱れ所荒神が洞とて、人知らぬ穴住居の所へ移しける。されば亂終りて後、此本尊を見付け、四郎時貞こそ他宗門なれ。正法の三尊ありし抔といひしは皆誤なり。別本天草軍記にも、三尊の佛像ありて、四郎時貞は他宗門と書きしは是なり。十七歲の四郎、何ぞ自宗他宗と心を入るゝ念あらんや。一筋に一揆を思立ちたる迄なり。宗旨をいはゞ、いふにや及ぶ、彼耶蘇の邪宗なり。後人能く味ふべし。されば愈原の古城に籠るに定りしかば、一番に先づ渡邊小左衞門か家を、本丸に引きて大將の座とし、是を彼の家を變じて國となす、暫時武道の榮華ぞと思直して勇みし事、是又暫しの本望ぞと、後に聞えてやさしけれ。

原の古城の事幷籠城始末の事

抑肥前島原領原村の古城といふは、九州二島の名城の跡、往古より此城に籠る人、終

原古城の要害

に落城せし例なし。中古鍋島家の出城なり。鍋島の先祖は龍造寺和泉守隆信とて、武勇智略の人なり。日本戰國に入りて日久しき頃、天草島へ引籠り、其後此原の要害に出張し、出でては戰ひ入りては守り、終に肥前・肥後を打從へ、今子孫に榮華を殘し、本家は卅五萬石、肥前國佐賀に在城。別家は肥前小城・同肥前蓮池・同肥前鹿島等なり。皆此家の子孫なり。慶長六年天下一統に靜謐なれば、此原城を明捨てられし城跡なり。先づ東南は海上滿々として、岸は屛風を立てたるが如く、其上に岩石嶙巡として樹木荒け立ち、半腹迄も常々荒浪岸を洗ひ、舟懸りなく鳥も翔けられぬ要害なり。北は大沼大澤田、人馬の足入懸引叶はぬ切所なり。西一方こそ大手にて、麓は芝原、篦ため形、平地に似たる辷坂、上は嶮岨切所にて、本丸は雲に聳え、麓は常に百間四方の平場あり。矢懸り遠く防ぐに利あり。其前に敵を引受くべき場所、百餘町に連なると雖も、道は纔に一筋なり。南の方に突出でたる尾崎あり。是も昔より出丸に用ひ來る、誠に天のなさしむる要害無雙なり。縱令十萬廿萬の大軍にても、攻むる所は、一萬に餘る人は用なし。防ぐに甚だ便あり。其上山の頂廣うして、

男女大勢取籠るに甚だ利あり。人質は本社荒神が洞などに入れて置く時は、軍を耳に聞かざる地なり。其上に水澤山にして、山上に池七つあり。別して荒神の洞の前に、大なる湧出づる泉水あり。飛石捨石面白く立ち、其間に四季の躑躅、叉異なる草花咲き、人も掃除せざれども、常に塵一つもなく、天然と庭のかゝり築山の如し。されば葦塚忠右衛門とても、大勢籠るなれば、此山に思定めける。山上冷水多き事、是第一と賴みける。此水を飮んで見るに少しく辛し。是金氣なり。金生水の理なるべし。今時秋なり、秋は西なり、國は西國なり。西は金に屬すと其白色し。我れ天帝の旗色、皆白木綿を立つ。旁理に叶ひ覺えければ、此山を根城と定めけるに、本社峯の傍に、廻り二抱ひ餘りなる梨子の大木あり。常に此木より風雨起る。されば今度葦塚忠右衛門此所へ來り、繩張を始るに、此梨子の樹より風雨起りて、繩張を始むる事能はず。三度迄下山しけるが、餘り不思議に覺え、本社の峯に詣で、丹誠をなし申しけるは、我れ今異國の法を引きて、日本の諸將に敵對するに似たりと雖も、全く功をなす心に非ず。只浪人の義を盡し、智勇用ひ盡して、快く戰場に討死せば、靜平

の世の本意是に過ぎず。曾て異州の神をして、此土に廣めんと欲するには非ず。我は草間に飢死する者をして、戰場に死するを榮とする者なり。寺澤・松倉の如く、百姓士民に辛く當る國主をして思ひ知らすも、又我國の益ならずや。神暫く此地を借し給へと、再三して祈りけるに、神も納受ありけん、何の事なく日和も續き、城普請頻に捗行きける。然るに此山、凡て龍造寺隆信の神靈や殘りけん、當城攻口、毎度鍋島家武勇あり。されば鍋島甲斐守を始め、其支旗の向はるゝ時は、一揆いつにても、心の儘に働ならず、鐵炮も多くは的外れて、鍋島家には當らず。此手に多く一揆の大將勇士討死なり。是皆此山神の助力あるに似たり。されば城中の兵も、功はならずと雖も、心の儘の働はなしたりける。其上天下の御名代板倉内膳正殿を討取り、六度迄大軍を追崩す事、士民の輩にしては、古今未曾有の手柄、不思議なる働なり。扨葦塚忠右衞門、評定衆・番頭殘らず集會して、申談ずる趣は、已に今度の一揆發端は、八月十三日なり。其以後手合本渡りは、同月廿五日なり。又島原深江村鎚合は九月七日なり。日をさし指を折つて見るに、追々江戸へ注進あるべきなれば、遲く

とも十月に入らば、江戸御下知あるべき討手向ふべし。最早他所へ一人も出づる事無用なり。又此所にて大軍を防ぐ事叶ひ難し。島原の城を攻め取る事は安けれども、分內狹くして大勢取籠り難し。四國・九州に兼々聞及ぶ名城は、幸ひ此原村の上の古城は、日本國中の軍勢、三年攻むるとも落ちぬと、國諺にもいふなれば、此所へ一所に楯籠り、心々天下の大軍を引受け、花々しき軍して、慶長已來の眠を覺さすべし。折よく若し一二年も籠城せば、如何なる變、又は如何なる天運に叶ひたる味方の、出來まじきにも非ず。其上幾度も〳〵天下の討手を駈惱まさば、自ら名は日本に響き渡らん。近き世大坂籠城して、樣々軍に討死してさへ、子孫の名譽とはいふぞかし。兎角籠城然るべしといひければ、評定衆・番頭迄も、此儀尤も然るべし。天草四郎時貞に伺うて、九月廿六日は吉日なりとて、彼の原の古城に鍬初あり。繩張は葦塚忠右衞門司ると雖も、龍造寺隆信の仕置かれたる古法を考へ、自分の作略を入れず、本城・二三の丸・惣曲輪・帶廓、又虎の口・升の方・矢倉々々・水の手の扇繩・切所の詰々迄、大奉行には葦塚忠右衞門・天草甚兵衞、其外赤星・千々輪の輩・十七人の評

一揆原の城を築く

定衆・卅二人の中老分、立替り〳〵驅廻り、下知裁判殘る方なく、二萬人の歩卒、身に引かけ相働き、出水の如く民家を毀ち、大なる家の材木を持運びて、一時に城を取立つる。惣百姓我家とて、拵ふるを殊の外喜びければ、人足晝夜の分ちなく、二萬人とは申せ共、ぬけ〳〵四萬餘の人民共、手傳ひて拵ふる程に、最早本城より外廓・二三の丸・詰の丸・人質廓・荒神が洞・道々・柵・逆茂木等、虎口々々の石弓迄忽ち出來し、城中諸役人の假小屋兵糧竈所、殘る所なく建揃ひ、塀櫓迄悉く出來濟めば、片端より戸板に帋を貼り、墨にて狹間を切り、或は繪計りの所もあり、或は切開けし所もあり、手寄に付けて仕上げたれば、遠目に懸る時は、誠に金銀箔地の堅め、鉛瓦白壁の櫓々と見交す計り、目を驚かす有樣、寄手の肝をぞ冷しける。扨兵糧・玉藥・鹽・味噌・薪十分に取納め、天草・島原の二ヶ所には、惜むべき物一つなき程に取込めたれば、何不足なしと見えける。されば十月十四日を吉日として、肥前守四郎太夫時貞、諸將を引具し入城する。前後の行列目を輝かし、勝軍の禮に、燈火三度燈し、勝鬨〔閧〕と上げさせて、原の城に引移り、諸事の法令、葦塚忠右衛門が下知を守り、諸場の奉行諸役人、悉

く相定め、兼て天草人積り上げ、猶ほ又四老頭を定め、所謂上總三左衞門・葭田三平・佐志木佐治右衞門・會津宗印、中老分には大浦四郎兵衞・林田藤平・上津玄蕃・久田久左衞門・渡邊傳左衞門・堂島・津島、小頭の小將は布津村吉藏・秦澤休澤・高來傳治・山本與茂作・中尾甚太夫・山脇七左衞門・八代喜太夫、其外遲參猶多く、皆諸手の攻口を配り、引分々々番所を定め、身を塵埃より輕んじて、一同志を合せ、一城犇と金鐵の如く、惣じて廿一手組なり。天帝の旗三百流・廿一組の小旗には、皆横文字の相紋あり。何一つ不足なく調ひ、究竟の一揆二萬千三百人・足輕一萬八千九百餘人、都合四萬二百人、死を一擧にぞ守りける。

されば此時愚民は、兵糧諸具の類夥しきを見て、是にては落つる事あらじと思ひけり。葦塚又折々强き事いひて慰め、堅城には仕立てたれども、大矢野・天草・葭田・赤星などの類、切て此間に、大名の一所も、此宗門に傾きし人ありて、使者にても差越すならば、城中賴もしく思ふ所なるべきに、諸國何の通路もなく、又豐後の萩原へ、越前の一伯公流罪なれば、密に引込んでもやと使を遣しけれども、是又下

賤の人を用ふる事なれば、利害說くとも屆かず。哀れ此頃に、彼吉利支丹黑船の一艘も着けよかし。無理に商人船なりとも、大勢遣し引込んで、城中に楯籠らせ、諸國の公邊を恨むる人々を、味方に引入るべきものをと、方々開合せけれども、運や天に叶はざりけん、其年は商人船さへ、異國の通路はなかりける。されども此年の八月の通路、程經て南洋國へ通じけん、寛永十七年に、尋ね旁の商船一艘着岸す。吉利支丹も近き島々は、七八百里の間なれば、日頃は一日に、必ず便ある地も多かりけるに、日本神德の故にやありけん、葦塚・千々輪など、心中には覺悟してけるとなり。抑南蠻吉利支丹國は、別名イスハニヤ幷ポルトガル・カステラといふ。海上日本國より凡一萬二千餘里なる由、此國世界の繪圖を以て見る時は、唐土日本よりは、西の方に當る國なり。然るに南蠻と號するは、此國の手下亞媽港・呂宋等、日本の南の方に當る故、南蠻と號する者なり。一說に、南海に往來する故、南蠻と號すといふ。此說非ならんか。唐土日本に來る外夷の船、南海より往來せずといふ事なし。皆南蠻といふべき理なし。されば此耶蘇宗は、天然と南島の

人是に歸す。今此天草硫黄島も、中國より見れば西海なれども、實は是れ南島なるものなり。已に琉球國史を、南島史といふが如し。故に此書も南島といふ。夫れ亞媽港は、廣東國の南に當りて、日本より海上九百餘里、呂宗は臺灣國の南に當りて、日本よりは八百餘里なり。是に近き小島マンヱイラハ丶マンカヘツタハカシナン等あり。アケレスは、日本より海上一萬千七百里。

是等の國々、寛永十五年より、長崎入津は停止なり。されば華夷通商考に曰、寛永十七年庚申五月十七日、呂宗國より黑船一艘、長崎に入津す。同六月中旬、江戸より上使あつて、南蠻人七十四人の內、六十一人誅罰あり。船は津ろすん浦にて燒亡せらる。殘る十三人は、日本に來る事本意にあらざる事、明白なるに依つて赦免あつて、唐船の古船乘捨一艘給はりて歸國す。本國にて此旨を語り聞かせ、再び日本に來る事勿れとなり。上使加賀殿氏なり。長崎奉行大河內氏なりといふ。是等彼葦塚が通路に依つて來る所なり。

南島變亂記第九畢

南島變亂記第十

板倉内膳正出陣の事幷板倉着陣の事

斯くて江戸表には、西國天草の注進櫛の齒を引くが如く、先づ大坂迄は、船にて多く來るとは雖も、大坂よりは一所に陸路になり、押續き追々早打、寺澤・松倉は勿論、長崎奉行西國所々の御代官諸大名は、鍋島・黑田・細川・有馬・立花・小笠原等を始として、毎日五度、大坂へ早打船着きければ、卽時に又御注進は、靑竹棒の時なし。宿次諸大名の注進は、自分の宿の早打にて、大坂より江戸迄の往來、道幅五人並にして、走り續きたりとかや。言語に及ばぬ火急の注進なり。町中の雜說には、異國より黑船來りて、唐の大軍、西國へ攻め入りたりとの評判、何の譯なく騷ぎ以の外なり。江戸表の早打、噂區々なる故、騷動上を下へ返す。西國方の諸大名、何れも安き心なく、如何

なる椿事になるらんと、諸人騷ぎ以の外なり。江戸表、始め評定の時の老中酒井讃岐守・阿部豐後守・安藤對馬守・松平伊豆守・板倉内膳正五老の衆中、幷に若年寄・寺社奉行を始として、諸人殘らず登城、一大事の御評定故に、御三家御譜代の衆、井伊・本多・榊原を始め、皆々御出席、評議區々なり。此節當世の智惠者とて、諸人持囃す松平伊豆守、進み出でて申さるゝは、今度注進の次第を察するに、寺澤・松倉兩人の領分仕置宜しからず、非分の義あり。百姓原徒黨して、奉行代官を殺害し、是非に及ばず一揆を企つると相見えたり。然る上は誰なりとも、上使として下向あり、此所に於て卽時に訴に出づべし。御聞届あるべきに極り、忽ち平均すべきの條、餘り難しき騷動に及ぶ程の事にもあらず。又畢竟百姓原、大將とてもなき一揆風情、天下に對し何と軍仕るべきや。併し先づ寺澤・松倉兩人は領分の事、早速着到さるべき事に存ずるの由申さる。諸人此儀に同じ、此日は是にて退出す。早速上聞に達し、寺澤・松倉は急ぎ下國あるべしとの事なり。兩人畏り奉り、卽時に出立づべしとは思へども、遠路といひ、殊に今度國元の亂合戰の節なれば、武具の用意路次の費用、彼是

調ひ難くして、五七日延引に及びける。然るに今度殿中の評定、水戸黃門公一人御不得心なり。其中に西國より段々注進重なり、次第に廣がる樣子により、毎日登城御評定之あり。然るに一揆も、俄に原の古城を取立て、人數三萬に及び楯籠るとの注進、是に依つて殿中御評定も段々變り、寺澤・松倉の面々油斷なく、路次も早打にて登り申すべき上意なり。扨松平伊豆守信綱の裁判として、御目附中兩人差登させ、一揆の樣子糺明し、訴訟の事あらば聞屆け、寺澤・松倉へも差圖致し、何事も悉く早速江戶へ注進あるべき旨相定る。時に水戶黃門公の御意には、近頃合點の行かざる伊豆守批判なり。今度の一揆發端は、耶蘇切支丹の邪宗より事起り、天草島中一筋になり、唐津留主居發向の刻、島子・本渡の渡しに合戰し、一揆希有の軍慮を廻らし、唐津勢に打勝ち、多くの物頭共を討取るの樣子、是中々百姓計りの寄合にて、左樣の働思も寄らず、地頭に恨み不足一遍にて、代官を殺す事ならば、早速江戶へ頭分の者罷出、公儀直訴に相願ひ申すべき事なり。百姓原計にては、命を捨てゝも、是程には久しく一味はせざる者ぞや。案ずるに此儀は、事を切支丹に寄せ、内には先

年大坂落城の節、死殘りたる者共、或は武道通路の浪人共、困窮に迫りて事を起さんと計る者なり。然れば天下の沙汰として、粗忽の下知は無用なり。今目代等の者を遣しても、夫に應ぜぬ時は、程を知らざる天下の評定と、人の嘲を受くべし。其上海陸數百里を隔てたる所をば、度々江戸への注進も、中々往來日數懸りて無用なり。其内急の事勝なるべし。何にしても此度大變大事なり。唯御名代として、老職の中一人差遣されて、機を計らひ其變を考へて、西國の諸大名へ注進して御下知を傳へ、早速追討然るべし。度々江戸へ注進して御下知を相待つ、近頃延引の事に候と、急度仰せられしかば、此儀又尤と相極り、御評定も變りて莫大の沙汰となる。併乍ら此上御名代の御下向に於ては、定めて早速一揆平伏すべき事は必定なりと、上下さまで驚く人もなかりけり。唯水戸黄門公御一人、事を大事に取らせられ、將軍家へも仰上げられ、御直捌になり、仰出さる。先づ鍋島・有馬・立花の面々御暇下され、早速西國御發向、逆徒追討仕るべしとの仰にて、御目附衆御目代等差添へられ、段々急に發向せらる。又天草島一揆追討使として、細川越中守在國より、直に發向仕るべ

しとの御下知、是へも御目代御目附衆差添へらる。御目代の御上使は、板倉內膳正重昌を召出され、上意には、今度天草・島原表百姓原、一揆を企つるに付、追討の上使仰付けらるゝ上は、下知裁判の事、時宜に依つて差圖を加へ候て、早速平均仕るべし。諸大名軍法を守らせ、麁忽の働不覺なき樣、申付くべきなり。着滯る事あるに及びては、近國の諸大名へ下知催促苦しからず。御添下役には、兵糧怠儉等の爲として、豐後府內の御代官石谷十藏・牧野傳藏兩人差添へ、此兩人、板倉內膳正下知に隨ひ申すべき旨、御奉行の奉書下り、板倉內膳正には御時服御拜領、暫時も急々に打立つべしとの御下知蒙り、內膳正は御城より直に出立ありければ、家中被官は左右を聞き、追々道中迄駈付々々する。近代未聞の騷動なり。されば門外海道筋は、早打早追諸國の使者諸國の大名、況や御上使、何事なるぞとうろたへ、御殿中此儀に携はる人々は、何事に水戶黃門公の御うろたへや、さしてもなき百姓原の亂に、多くの大名の動く事ぞやと、內心に笑を含みけり。斯くて板倉內膳正重昌は、御城より小人數にて、急々に出立ありけるに、士卒追々駈付け、又道中筋幷に近國の諸大名よりは、

板倉重昌島原に向ふ

附使者是あり、段々大勢になり、此人數皆々手前々々の賄にて、他の世話にかけず。惣じて斯樣の節は、上使には自然の御用等もあるべきやとの用意に、道中筋城主郡主、御上使御馳走の爲め、物頭役一人づつ、鐵炮足輕等身上相應に出す格式なり。已に惣軍勢三千餘人に及び、板倉殿御威勢日々に盛なり。元來江戸表にて、水戸黄門公も、事を大切に取らせ給ひ、其外の人々には、別に騷ぐ事もなく、先づ觸先使大坂より今日明日の御着にては、軍船調ひ候段聞えければ、幸ひ兄板倉周防守、京都所司代相勤め居る故、則立越え軍議を聞きてもと、京都板倉殿へ立寄り申され候へば、板倉周防守、殊の外喜びにて、御上使御入とて嚴重の掃除、家中へも不禮是なき樣にとの事なり。内膳正御入候へば、頓て周防守出迎ひ、居間の書院に御通り、人々の對面床しく演べ、睦しく御咄、盃など出で、内談私用は格別なり。扨周防守申されけるは、今度は大役忝しと思はるべし。人も多きに、斯樣に兄弟共、顯官大役仰付けらるゝ事、身の爲め家の爲め大慶之に過ぎず。殊に今度其元儀、一揆追討正使の由、滿足の儀に候。扨副使相役には何方にて候や。飛使を以てなりとも相役へ挨拶申入度事

に候とあれば、內膳正申さるゝは、いや副使相役と申すは御座なく、我れ一人に仰付けられ候なり。周防守驚き、左候はゞ、又副使相役を願ひ申されざるやと。其時に內膳正申されけるは、今度仰付けらるゝ上意急に候て、座席より直に打立ち申す程の族、其上百姓一揆の事に候へば、副使相役抔願ひ申すも、いかめしき儀と存候て、一人役御受仕候由申されければ、周防守不興の顏にて、つと立ちて勝手に入られけるが、近習の侍を呼んで、內膳正殿に、表書院に御通りなさるべき旨なり。內膳正心得ず思はれ乍ら、表書院へ通られければ、周防守布上下に改め出迎ひ、白木の三寶に土器載せ前に置き、正使御一人の事に候はゞ、一時の御油斷も恐多く候。今日暮に及び候とも、本海道の伏見へ御出、御本心尤に候。申迄はなく候へ共、今度一揆の追討、若し御心に任せぬ儀候はゞ、御覺悟と存候。武士の上にて珍しからず候へ共、門出の儀に候へば、兄弟今生の暇乞の盃を仕るべしとて、土器にて酒宴ありて相別れ、其夜の中伏見へ出御、宿陣ありけるとなり。さればこそ正月元日の合戰、思合さゝる事となりぬ。後に此事江戸表へ聞えければ、內々水戶黃門公にも悔み思召すにや、

板倉重昌島原に到着す

其故にこそ、重ねての御上使松平伊豆守、正使として下向の時は、副使戸田左門、相役の命を蒙り、則此以後彌必ず相役を定められけると聞えしなり。扨板倉内膳正は、大坂へ着せられけるに、船調ひ兼ね、如何の事とや思はるゝ内に、四國の船奉行蜂須賀阿波守より、御上使馳走の船、夥しく浪を分けて漕附けば、則是に取乘りて、九州へ赴きける。風波殊に荒く、舟懸も所々滯りければ、阿波船能く力を盡し漕ぎ急ぎければ、程なく豐後の國に着岸し、府内の目附石谷・牧野の兩人へ、兵糧の相談を遂げ、何れも召具して日數重なり、十月廿五日島原表へ着陣なり。高久城主松倉豐後守先達て到着、上使を待受け、本丸へ迎へて、諸軍勢は皆々家中の居宅を點檢して、當分の陣營とす。上使の御着陣に付、諸方より相伺ひ御下知を待つ。第一に長崎の御代官馬場三郎左衞門、來りて御下知を承り、早速歸りて長崎を堅め、張番嚴しく相守る。又寺澤領分天草島一揆追討使は、先達て細川越中守御下知を蒙り、出陣ありと雖も、一揆は悉く天草を引拂ひ、島原へ引退き、殘黨一人もなく靜謐なる故、其勢直に島原表原城へ向つて、一揆追討致度旨相願ひ申さる。江戸よりも御差圖來

り、板倉内膳正差圖次第、原の城へ向はるべきに極りければ、一番に寺澤・松倉と同陣して、原の城へ討手に向ひける。細川越中守も、後に内膳正差圖に依つて、原の城へ向はるゝなり。斯くて上使の御本陣へ、領主を始め近國の諸大名段々發向して相詰めらるゝ。高久の城下は尺寸の地もなく、大軍滿々たれば、此威光に恐れ、一揆原早速御訴訟申上降參すべく思ふ所、案の外原村古城の一揆共、靜まり返つて音もなし。御上使島原へ着陣は、十月廿五日の未の刻なりしに、其夜城内より、杉の折一荷・浦肴一籠・手すきの天草帋二丸、右三種を臺に載せて尋常に仕立て、文箱一つ、上書には、御上使へ上ると書付けてあり。夜明けて番人是を見て、卽時に石谷・牧野兩目附へ注進する故に、其儘上使へ訴へて、諸役人立合にて、扨こそ推察に違はず、百姓共訴訟を出したるぞ。先づ急ぎ開き見よと、杉の折を見るに饅頭なり。其丁寧なる事、上方の製と雖も及ぶ事なし。折の仕形、獻上物の法を外さず。是を以ても、城中萬事自由を知るべし。天草いかにも淸らかにつき立て、籠肴も何れ上魚計りを選んで丁寧なり。是城内萬事自由にして、土民共にあらざるを見せて、寄手の肝を拉

がんとす。扨又文箱の狀に、

乍レ恐謹而申上候。今度遠路御上使御下向、御人數被二差遣一候事、私共身上冥加相叶、過分之至存候。我々一揆雖レ似二麁忽之儀一、天草島中幷島原領百姓原、近年者地頭寺澤兵庫頭・松倉豊後守邪曲利欲苦仕置申事年久鋪、偏不レ安二生涯一故、傾二耶蘇宗門一相二背公邊法令一、罪科死刑相究者歟。依レ之不レ得二止事一如レ斯之仕合候。急度可レ被レ加二御成敗一之條、當然之儀奉レ存候。猶其節期二一戰時一候。恐惶謹言。

寛永十四年丑十月

一揆首頭

渡邊四郎太夫時貞

葦塚忠右衛門　在判

大矢野作左衛門　在判

葦塚忠太夫　在判

千々輪五郎左衛門　在判

赤星内膳在判
天草甚兵衛在判

御上使上る

斯の如く調へありければ、御上使を始め、各委細御披見なされ、大に立腹あり、慮外千萬、言語を絶したる憎き奴原なり。第一公儀を輕んじ、討手の武門を侮る條、此上もなき逆賊なり。即時に踏潰し、今に思ひ知らすべしと、齒を嚙んで憤り、頓て軍勢を催促あるに、兼て江戸表より御下知の衆中、急ぎ雲霞の如く馳集り、末々の諸將迄大に憎んで、嘗て一揆を和らげ、降參さする謀はなかりけり。是皆葦塚忠右衞門が肺肝より出で、斯く一揆を憎ませ、味方を堅めける謀なり。若し初より慈悲を以て、二心なく和睦を先とせられれば、日本一州を敵に受けて、二心を生ぜざる者あらんや。忽ち一揆われ〳〵になり、快き一戰もあるまじきに、葦塚が一計より鐵石の如し。板倉内膳正も、慶長十九年大坂の役、木村長門守と同じく、若年の使節、天下に目を驚かせし英雄、智勇發明の人と雖、少し短慮の失ありて、終に葦塚が謀略に、出る甲斐

なく、土民の爲に命を殁する事は後卷にあり。是又天なるかな命なるかな。惜むべし惜むべし。

南島變亂記第十畢

南島變亂記第十一

原城一番攻の事并立花勢敗北の事

板倉内膳正島原着を聞いて、兼て江戸表より御下知の衆中急ぎ馳集り、先づ第一に肥前佐賀龍造寺の城主鍋島信濃守勝茂・嫡子紀伊守元茂・二男甲斐守直隆父子三人、其勢二萬人にて着陣なり。立花左近將監・子息飛驒守八千餘人、有馬中務大輔・同玄蕃頭・二男左衞門尉、彼是一萬三千人、其外追々着陣。上使の下知を守り、島原高久の城下に野陣を張り、翌日御上使并御目附等、原の城邊に着陣、近日惣攻あるべき軍令、段々其備組手配等、大概城中より見透して、兼て覺悟の前なり、其手配を定む。先づ本丸に惣大將四郎太夫時貞・天草甚兵衞・同玄札・森宗意・軒山善左衞門・有馬休意・葦塚忠太夫、凡て一揆二千餘人。二の丸には葦塚忠右衞門を大將として、同左内・四鬼

丹波・時枝隼人・堂島對島・上總三左衞門・駒木根八兵衞・鹿子木左京、一揆原二千人楯籠り、三の丸には、大矢野作左衞門を大將として、頭分は大江治兵衞・有馬久兵衞・戸島宗左衞門・松竹勘右衞門・三宅治郎右衞門・鵜川八三郎・菅寸善兵衞、健民二千二百餘人。帶曲輪惣構へは、大將千々輪五郎左衞門・赤星内膳・葭田三平・山田右衞門・楠浦八兵衞・大浦四郎兵衞・久田七郎右衞門・打田木工之亟・有馬長助、其外小將集勢五千餘人にて堅めたり。大江口は布津村代右衞門・會津宗印・上津玄蕃。二の丸取出には田崎刑部・上總助右衞門、何れも集勢千五百人。出丸口は柄木右京・佐治木左治右衞門二千餘人。夜廻頭多崎久藏・池田清左衞門、其外使番目附役兵糧奉行鐵炮頭、夫々の兼役相勤め、惣軍勢二萬三千餘騎、鐵炮九百挺・乘馬七十疋、其外の女童は細野口浦邊に出で、磯菜を拾ひ貝を取らせ、海苔を集めて食事の助とす。旗は二間に一本づつ立て、皆白木綿なり。誠に高山に白雲飜り、高間の雲といひつべし。其下には、必死を極めたる諸浪人・百姓原四萬餘人、英氣を含んで楯籠る。敵寄せ來らば、馳落さんと待懸けたり。斯くて板倉内膳正大物見として、城の近邊五六丁迄乘付け見廻し

給ふに、案に相違の形勢かな。高山の城取軍祕を盡し、白旗三百流西海の嵐に吹靡かし、其陰に軍勢往來して、虎口々々に鎧武者共多く相交りて、湯洗ひ馬引立々々して、要害堅固にし、勢森々然たれば、中々急に落城すべき氣色ならず。諸大將も心に大きに驚き乍ら、勇氣を表に顯はして、追付け一攻あるべしと、何れも辯を揃へ申さる。板倉内膳正申されけるは、此城の體、一揆に勝れて甲斐々々しく見ゆれば、此旨江戸へ注進し、西國大名は、一邊に出勢せらるべき段、重ねて申觸れべし。然れども百姓原の事なれば、手業の程何事かあるべきなれば、一攻惣懸りに乘付け見るべしとて、十一月十四日を一番攻と定め、追手の先陣は立花父子、其勢一萬餘騎、其頃は御名代板倉内膳正重昌三千餘騎、幷役人諸國の添使、中の手は有馬一家一萬三千人、寺澤・松倉先陣たり。出丸口は鍋島父子、御目附榊原飛驒守父子相添へ、都合四萬九千人、竹束鑑の甲の類悉く用意して、曳々聲上げて攻上る。追手の先驅立花左近將監は、士卒を下知して、將軍家御名代の御先手なり、他人に先を越えらるゝなと、兼て申含めらる。元來勇猛の立花の家筋、家中士卒に至る迄、誰か一人後るべき、勇み進

んで、寅の刻より城下に押詰めて、夜のほの〴〵と明くる頃、一同に鬨を上げ、彼篦ため形なる平草山を、段々押上る。其勢大龍の雲を巻上るが如し。大手の曲輪は、一揆の勇將千々輪五郎左衞門堅めたり。態と旗の手を下し、閑り返つて控へたり。立花の先陣小野和泉・十時三彌・立花五郎左衞門三千人、爭ひ進んで押上る。され共城中靜まり返つて音もせず。扨は一揆、恐れて本城につぼみたるぞ。只一時に揉破れと、竹束龜の甲を打捨て、旣に堀際迄詰寄する。千々輪五郎左衞門是を見て、時分はよしと思ひ、白旗一流颯と差上げければ、是を相圖に四方の櫓、思も寄らぬ林の中石の間にも、旗を擧げ鬨を作り、健に鎧うたる武者立上り、組頭堂崎・大江・布津村等下知して、鐵炮二百挺筒先揃へ、一時に打出す。寄手大きに驚き、すはや竹束龜の甲よといふ所へ、四方より大石大木を投懸け〳〵戰ふ所へ、大筒小筒先を揃へ、隙間なく打立つる。天草は元來鐵炮の出所、皆々名人共なれば、あだ玉は一つもなし。忽ち先手二百餘人打殺され、先手一軍捲り落されて、半死半生の者數を知らず。是を見て千々輪五郎左衞門下知を傳へ、大江・時枝・楠浦・堂島四人を大將として、一揆一

千人、四組に分けて鬨の聲を上げ、鑓先を揃へて、山を眞下りに突いて懸る。寄手の大將立花父子三人、麓より是を見て、百姓原に追立てらるゝ事やある。追朿めて乘破れと、身を揉んで下知あれば、一番に立花三郎右衞門踏止つて、只今投掛けし大木の上に躍り上り、鎗を振つて立戾れば、十時三彌兄弟・小野和泉・綾部清兵衞、押續いて取つて返し、此勢に付きて、平田平左衞門・岡田久右衞門・小野彌十郎を始めとして卅七人、鎗を揃へて進みける。一揆千餘人と鎗を組みたり。然れども此芝居は、すらり〳〵と辷り、下り坂なれば、我れ知らず落下りて、物別れになり、立花三郎左衞門計りは、足溜に材木あつて、唯一人大勢に取込められ、終に討死したりける。立花飛驒守是を見て、口惜き次第なり。此所にて討死せばやとて、馬より下りて突いて上るを、父左近將監遙に見て、飛驒守討たすなと、采幣を取つて下知あれば、恥ある勇士共千餘人、天下御名代の御覽の前ぞ。穢く引くなと恥しめ、鎗を下げて押上る。此時飛驒守廿歲、若武者の勇氣に任せて、一番に鎗を入れらるれば、一千の精兵一同に捲り立つる。十時十兵衞一番に立ちて、堂島對馬に手負はせ、其他の一揆七八

人突いて落す。此時千々輪五郎左衛門は、出丸の合戰を危みて、行向ひける後なれば、二の丸より葦塚忠右衛門此樣子を見て、一揆二千餘人を引いて懸合ひ、横の山手に鐵炮の手を伏せて、同勢を目に懸けて、選み打に打落す。眞先に進んで懸りける十時十兵衛是を見て、鎗を上げて葦塚に打つて懸る。葦塚忠右衛門心得たりと鎗を組み、片膝折つて突懸けたり。葦塚忠右衛門手練の老將なれば、十兵衛あしらひ兼ね、其上葦塚左內、父の働を危み、入替らんと横に進み來るに、心驚きけるにや、片足を踏外し、遙の谷へ轉び落ち、岩角に打當り、微塵になつて死にゝける。一揆共一同に聲を擧げ、天帝の罰思ひ知れと、手を叩いて嘘と笑ふ。立花勢今朝よりの爭に疲れ、又此の勢に氣を呑まれて、怯むと見ゆる處を、兩方の山手に下知し、谷越に鐵炮を打懸けさせ、寄手漂ふ所を、鎗を入れてぱつと追下し、其間を乘廻して下知をなし、人數を纒めて、足輕く城內へ引退く。立花左近將監歯嚙をなし、一揆共に追下さるゝ條、天下の物笑ひ、口惜き次第なりと、怒らるゝ事なれども、物離れになりしかば、又無理なる事も流石なり。本陣指して引退く。今日此手の家老立花三郎左衛門・十時

十兵衞・平田治部右衞門、其外武士討死、雜兵は手負夥し。中の手は松倉豊後守・寺澤兵庫頭兩人は、面々領內の一揆なり。先陣は勿論身に懸りたる事故に、平草山を一文字に攻上る。殊に大手の將立花家、早軍始まる故、大きに勇みて坂脇迄押上りたり。續いて有馬父子兄弟三人一萬三千人、備を配つて驅上る。此時寺澤家老三宅藤右衞門、富岡より歸つて供奉したりけるが、兵庫頭を諫めて申しけるは、當城は中々猥に落つべからず。其上此邊を見たる所、足場能きやうに候へども、軍になつて、以ての外敗軍の地なり。如何といふに、地足下りにして、難儀の場所なり。此中段の足場能き所に旗を立て、味方の先陣追立てらるゝ時、横鎗に急度持こたへ給へといふ。軍老の見積もだし難く、寺澤兵庫頭、坂を左へ押上りて陣する故、有馬父子は、坂中より麓へかけて陣を備へたり。去程に城中の一揆原、寺澤・松倉の旗を見て大きに喜び、外の敵千萬騎より、唯望む所は此兩家の內、大將の首を討取り、日頃の宿意を晴らすべしとて、帶曲輪に居合ひたる一揆三千餘人、赤星・千東・山田・駒木根・鹿子木等、郭を拂うて打出で、鬨を上げ鐵炮打懸くる。松倉の軍勢、本渡・深江兩所に

立花勢敗軍

て、大きに手懲して、一揆を見ると、蛙の蛇に向ふ如く形縮まり、漸々鐵炮を打返す。是を見て一揆共氣を得て、大木大石を投懸け、一人にても踏止まる者あれば、駒木根・鹿子木等選み打に、鐵炮にて打落し、隙間なくかけしかば、少しも堪ふべき。松倉勢一番に崩れければ、寺澤先陣も同じく敗軍し、足取下りの平草山、すらり〳〵と辷り落ち、一人も返し合せて、戰ふ者はなかりけり。一揆共は勝に乘り、鬨を作りて切つて下る。有馬先陣敗軍に押立てられ、既に崩れんとする所を、寺澤の家老三宅藤右衞門、待設けたる事なれば、諸軍を下知し、大長刀を水車に廻し、旗本を以て盛返す。眞先に進む一揆二人、左右に薙ぎすゑ、嚏と叫んで追返す。一揆共は、山邊に馴れたる者共なれば、颯と引いて、敵慕ひ上れば、荒手を替へて切下る。三宅藤右衞門三度の駈合に、敵六人迄討取つて、坂中に踏止まる。藤右衞門が働、敵味方共に感じける。其中城方に引貝聞えければ、葦塚下知して兵を引上る。此手も一揆共勝軍して、鬨を上げてぞ引取りける。

鍋島甲斐守武勇の事并甲斐守乳母神前に死する事

此時出丸の攻口は、鍋島の受取なり。抑今度逆徒追伐に、一番攻より落城に及ぶ迄、諸軍第一の勳功は、鍋島家と甲斐守直澄なり。自身の働き比類なく、一番乘前後三度、七路の戰皆切勝つ。殊に落城詰の丸合戰、武勇を顯し、其名天下に震ふ。此鍋島家は、先祖より武功西海に轟き、太宰少貳が末孫、肥前國に居住する龍造寺和泉守隆信の末、平左衛門尉清久が子孫、鍋島加賀守直茂、關ヶ原の節、東照神君へ內談にて、幼少の御公達並に女中方を、伏見の御城より京へ退け參らせ、大功を立てらるゝ。子息信濃守は、西國方として御敵對すと雖も、老父加賀守直茂に免じて、罪科御免のみならず、本領安堵せられ、其後信濃守、御當家へ忠勤して、武名高く家門繁昌せらる。此所に甲斐守は、右信濃守二男。然れども國腹にて、父の愛子なり。此人の傅鍋島三左衛門、無二の忠臣にて、彼が妻、乳を參らせて育て上げ、當年十九歳になり給へり。彼の乳母は男子の如く、常々側を離れずして、唯養ひ君の出世を望み思へ

り。其上氣猛く義厚く、女には珍しき人柄なり。若殿大切の餘り、一男にて國腹なる事を悔み思ひて、常々佛神へ御出世を祈らるゝ。然るに今度島原出陣に付、女乍らも伴せんと願ふを、夫三左衛門も、深く止めてける。又甲斐守も、世間の流布旁、無用の旨申留めらるゝ。乳母聞いて、少しも苦しからず。古木曾義仲の妾巴は、いつも軍の伴して、一方を承り、士大將一人の替を勤む。城の九郎が姉の坂額女は、越後の國荒井に岩船の城を守る。結城友光が母は、主君の公達を軍中に介抱せり。近くは慶長五年勢州津の城に、富田信濃守の妻が働、山口右京が妾の乳母は、加州大聖寺の戰場に討死す。何れも武勇名高く、譽を末世に殘し、笑ふ者一人もなし。昔より例ある事なれば、是非伴せんと望む故、此趣信濃守へ伺ふに、勿論心底は尤なれども、併し其頃の世とは、大に風儀變りたり。我差圖にて召具せん事、世上の稱もいかが。決して無用にせよと申渡さる。留主に殘るを乳母大きに殘念に思ひ、女の身は口惜しき事なり。此上は死して後、供すべしと思詰めて、若殿の產神にて、龍造寺の後の山、瀧尾大明神に參籠して、

按ずるに佐賀黑髮山大智院、寺領三百石にて、鍋島家父祖の碑あり、山上に嶺頭石あり。此下に大池あり。往古鎭西八郎爲朝、大蛇を射し所なりとて、大蛇が池ともいふ。此水、瀧尾の瀧へ落つる。

鍋島直澄の武勇

此明神の神前を立去らず。此瀧の水に打たるゝ事三日、夫よりひしと斷食して、一情に祈願せしは、今度御氏子鍋島甲斐守直澄、島原表の軍功諸人に秀で、隨一の手柄を顯はし、家名を興させ給へと、自ら女の事故、戰場の供叶はず、唯今神前にて、斷食立願一命を取らせ給へ。魂魄は戰場に立ちて、若殿を守護し參らせたしと、一足立に立ちて、終に一寸も去らず。六十に近き乳母、神前にて立竦みに息絕えたり。誠に珍らしき忠節なり。されぱこそ甲斐守の乘馬、陣中にて不思議あり。又彼の乳母後神に立ちて、ようせうの如く見えしとかや。時に寬永十四年の冬より、原の城攻、甲斐守先陣して、出丸を攻めらるゝ事五度、殊に勇を顯はし進まるゝ。曾て薄手も負はず。翌年二月六日、出丸一番乘、本丸·詰の丸、共に人先に乘破り、城中宗徒の者共、多く此人の手に死す。比類なき勳功とて、肥前國蓮池五萬三千石を賜はり、本家後見として、

天下の稱美に遭ふ。昔より人の一念も確ならずと雖も、是又奇異の老姥なり。されば同日卯の刻に、諸手の勢、皆軍を押すと見てければ、鍋島家にも劣らじと攻上る。元來此出丸は、山尾崎鵜首形にして、遙の上に松山あり。山の裾、殊の外狹き所にて、上は大きに廣し。既に逸雄を先手坂中迄攻上れば、鍋島信濃守下知して、惣軍一時に鬨を上げて押上る。出丸の大將柄木左京亮・佐志木佐治右衞門二千餘人、鐵炮二百挺にて堅めしかば、些とも恐れず、寄手を思ふ圖に引寄せ、鐵炮を隙間なく連べ放し、漂ふ所へ、大木大石を投落す。先手の軍勢、谷底へ捲り落され、上り兼ねためらふ所、鍋島甲斐守直澄、生年十九歲、水色の鎧に金唐冠の甲を着し、紅の母衣をかけ、白旗の差物にて、枯草の山邊、唯さへ上り難きに、昨夜一通り時雨れて、所々は氷つてあるを、馬上ゆゝしく只一騎、眞先に楯の一重も限らばこそ、人もなげにぞ乘上る。敵も味方も是を見て、あれよ〳〵と驚きけり。鍋島の大軍、主君の乘上らるゝに勇み、先手の先陣是非なく押上り、出丸近く押詰めたり。三の丸の惣大將千々輪五郎左衞門是を見て、其爲にこそ、帶曲輪を懸けたり。いで打落して見すべしと、横合の

谷切より、百挺の鐵炮を一度に打立てたり。蜘の子の如く集りたる鍋島勢の事なれば、仇矢は更になかりけり。先手大きに難儀に思ふと雖も、山の麓には、主君信濃守、麾を取つて控へ給ふ。眞先の中段には、甲斐守、馬上にて乘上らるゝ由なり。此節一揆原の的になつて、討死すべき約束なるべしと、一人も退かず、竹束楯を突翳し、第一には横矢を防ぎける。出丸の大將柄本左京・佐志木佐治右衞門時分はよしと、山上より大木大石をぱつと投懸け漂ふ所へ、鎗を揃へて一千人、喚き叫んで突き出でたり。楠浦八郎兵衞・大浦四郎兵衞・久田七郎右衞門、五百餘人の健武を引きて、横合に鎗を入れ、鍋島の先手二千餘人、眞先に逆に捲り落さる。山の口は狹し、立振舞なり難し。人雪崩をついて敗北する。其中に甲斐守直澄、乘つたる馬の動きもせず、流矢一つも當りもせで、太刀拔翳して突立ちたり。楠浦八郎兵衞是を見て、天晴敵や勇將なり。此人を討取らば、寄手惣敗軍となるべしと、鎗打振つて躍り懸る。甲斐守につこと笑うて、靜に馬を立向ふ。楠浦焦つて鎗を上げ、甲斐守の鎧の胸板をはつしと突くに、茗荷の金物に當りて、鎗の穗先ぽつきと折る。こは無念と鎗を

捨て、手取にせんと飛懸るに、忽ち直澄の馬は高斷して、兩足を上げて、彼の楠浦をどつと踏倒す。あら口惜しやと起上るを、甲斐守馬上より、拜打に切られけるに、頭二つに切割られ、眼睛迸りて死してけり。是を見て信濃守、釆幣を取つて身を揉み、甲斐守討たすな、此勢に乘上れと、敗軍を立直し、二陣を繰替へて攻上る。鍋島三左衞門、甲斐守の馬に縋り付き、暫く退き給へといへども、松山の砦乘取らずんば、誓つて退くべからずと、猶も進まんと向はれけるこそ、誠にゆゝしき大將なりと、感せぬ人こそなかりけり。

南島變亂記第十一畢

鍋島甲斐守武勇の事并甲斐守乳母神前に死する事

南島變亂記第十二

千々輪五郎左衛門勇戰の事并馬術鍛練の事

千々輪五郎左衛門は、追手の合戰、味方打勝ちぬと見えければ、出丸口心元なしと、楠浦等を遣しけるに、早速馳返り、楠浦討たれて、寄手又松山へ取上ると聞えしかば、こは不思議なり、楠浦は並々ならぬ武藝の達者、心勇猛にして、一騎討の勝負などは、容易く討たるべき者に非ず。又進む追手の中、悉く追立てたるに盛返され、寄手又進む由心得難し。いざ駈向ひて、駈散らさんと打向ひしが、此體を見て大きに怒り、彼が馬を乘覺えたるや。いで物見せんと、唯今湯洗しける馬に鞍置き、卽時に打乘つて、彼深木七郎右衛門が鎧の黑絲縅に、白帋の切つたる差物にて、大身の鎗を提げ、出丸の虎口に乘出したる勢、誠に爽に見えたりける。此時甲斐守は馬を駈据ゑて、

鍋島直澄千々輪五郎左衞門奮鬪

龍造寺和泉守隆信五代の孫、鍋島甲斐守直澄なり。一揆原出でて降參せよ。さなくば忽ち踏潰すべしと、大音聲に呼ばはり給へば、千々輪是を聞きて、器量骨柄天晴の若大將かな。然りと雖も是猛敵なり。討たずんばあるべからずとて、同じく馬を乘廻し、足場の平地にて鎗を振上げ、面も振らず打つて懸る。甲斐守是を見て、推參なる土民かな。百姓ならば分限に應じ、鋤鍬持つべきに、馬上の鎗は何事ぞ。千々輪是を聞き、こはそも器量に似合はざる惡言なり。いでさらば名乘るべし。我先祖は尾形三郎惟義が嫡流、肥前國數代居住す。我父は加藤肥後守淸正の家臣、朝鮮日本に武勇の者と呼ばる。然るに加藤家斷絕に依つて浪人する、千々輪五郎左衞門といふ、恥ある武士なるぞ。然りと雖も運極りて困窮し、今一揆の內の其一人なり。我手の內の鎗を試みて、荒言は吐き給へ。いざ參りぞふと、山の平場なる所にて、兩方人交もせず駈合ひける。天晴能き見物なり。千々輪は大坪流馬の名人、昔の本間孫四郎・小栗判官が曲馬にも、おさ〳〵乘增さるべき有樣なり。諸人の目を驚かす。鍋島甲斐守は、日頃左迄達者とは思はざるに、此馬鞍壺の靜かさ、疊の上に座する如く、

術を振うて駈合ひ、若し流矢にて味方打もやと、雙方の矢玉を犇々と止めける。山上山下手を上げて見物する。古今稀なる壯觀なり。千々輪は鎗の達人にて、數度甲斐守の鎧に突當ると雖も、一鎗も裏かゝず。千々輪大きに怒り、我鎗先には、天魔も耐るべからず思ひしに、不思議の事とて鎗を捨て、太刀を拔翳して押懸り、はたと切る。鍋島も心得たりと鎗を捨て、太刀の勝負、犇々と切結ぶ。雙方兩眼の光星の如く、受けつ流しつ、拂へば開き、蝶鳥の翔けるに似て、雷光の閃き、早業太刀音、今は早敵も味方も、酒に醉ひたるが如く、二人の爭ひ見物す。于時甲斐守の乳人三左衞門、只一人此所へ來り、あれ〳〵御大將の、斯る匹夫業はあるべからず。そこ退き給へ。老武者の腕弱くとも、己れ一太刀の勝負ぞと、千々輪に向ひて働けども、五郎左衞門が荒馬踏立て〳〵、近所へ寄せず。終に三左衞門を踏飛ばし、勝負の付かぬは殘念と、甲を取つて投捨て大童にて、無法微塵と打合ひしが、勝負あらざれば、千々輪いひけるは、天晴武藝通達の大將かな。拙者常に思ふは、縱令如何なる人なりとも、三太刀とは合さすまじと思ひしに、中々の事及び難し。御大將も今爰にて是非勝負

原城一番攻敗る

し、討死あるべき所にも非ず。又某も、此所にて討死する時は、城中の一揆共力を落し候者多し。旁以て無用なるべし。大勢敵味方の見る所、御大將に譽を讓り奉る。是我が臆するに非ず。此城戰終る時は、必ず我首は、君に差上げ申すべきなりと、馬の頭を引返し、平一散に、出丸の松山へ乘入りたり。鍋島の諸軍勢幷に御目代・御目附衆・榊原等を始め、諸手一同に甲斐守を譽む。此上は早々引取られよと、一同に呼ばはる故、甲斐守直澄、武勇を顯はして本陣に退かる。誠に古今無雙の働、諸人兩手を上げて感ずる計なり。されば此甲斐守、出丸七度迄乘り、終に原城、翌年二月廿八日落城の時、千々輪五郎左衞門が首、契約通り渡しける。既に寄手惣軍退去する時は、未の下刻なり。是れ原城の一番攻なり。諸軍勢皆々陣々へ歸りければ、討死手負夥しかりし程に、上使板倉内膳正殿を始め、御目代御目附大に驚き、扨々侮り難き城の有樣かな。此體にては、急々には落城すべからず。さらば西國の分は、境を隔てたる所も軍勢を催促し、大軍を以て一拉ぎに押潰すべし。先づ此趣江戶表へ注進すべきなりと、評議大きに變つて見えたりけり。

此時追手立花氏の軍、子息飛驒守、振悉く能かりしとなり。中軍押上る節は、天草の民兵内足津長右衛門・多崎久藏などが手より、敵に難儀させよとて、不淨糞を城中より、運び出して投懸けたり。立花の軍勢、殊の外迷惑しける。葦塚是を聞き大きに戒め、陣中は軍神といふ者是あり。不淨をなす方、必ず負くるものなり。故に妖術さへ好まず。斯る事ゆめ〳〵あるべからずとて、大きに戒め、後より鹽を吹き、淸水を打懸け〳〵しけるを、立花飛驒守又糞を撒くぞとて、退かれけるとなり。此時は水なる事、定なりとかや。

天草外本に、穴を掘りて糞を流して防ぐといふは、斯る一手切のある事なり。自然と糞道に掘當りし事なるべし。

東武再び評定の事并黑田賴母諫言の事

御上使板倉內膳正重昌、十一月十四日の一番攻、城中强く防ぎ働きしかば、暫く軍勢を退け、此上は第一長崎の警固となし定めて、諸將に差圖ありける。是異國の賊船、

如何なる手組にてか、押寄せまじきにもあらずとて、俄に大村因幡守・五島佐渡守・相良遠江守は、長崎の警固と定めらる。又松平大隅守は、兵船を揃へて、一揆原若し要害を離れ海に浮み出でば、一人も餘さず打取るべしとて、內々磯邊の方へ陣を押出させ相構へたり。御名代板倉殿は、本陣を小高き處に移し、目印の旗押立て、夫より段々陣屋を構へ、御目附中幷諸方の附使者人數、次第を守りて相備へ、鍋島父子は、出丸の攻口五丁隔てゝ幕を張り、立花父子・有馬一家の陣は、追手へ押出し、竹束を重重に付けたり。寺澤・松倉は差當る敵故、一番に備を出し、城中の通路を切取らんとす。先づ江戶より一左右之なき內は、城攻無用との評定あり。斯くて板倉の注進、江戶表へ着きければ、時の老中諸役人、殿中にて御評定ある。何れも大きに驚き、先づ原城の地形繪圖を見るに、山上の陣取、古法に叶ひ、虎口馬出、地理を得て兵糧兵具澤山に、必死の勇兵三萬計、殊に鐵炮は、出所の種ヶ島の者共楯籠るなれば、中々難しき軍なりとて、一番攻仕損じたる次第、鍋島甲斐守の武勇抔、悉く言上に及ぶ。水戶黃門公、扨こそ予が斯くあるべしと思ひし事よ。是はゆゝしき大事なり。此時

四國・中國、萬一逆亂發する時は、天下の大事ぞや。急ぎ大勢討手を差向けられ、然るべしと仰せられし故、西國在城の諸侯は、直に馳向ふべし。又在江戸の輩は、急々御暇遣され發向あり、大名の人別には、細川越中守忠利・同若狹守、惣軍勢三萬餘人、秋月佐渡守・伊東出雲守、兩將合せて八千五百人、松平右衞門佐光之・黑田甲斐守長重・同宮内少輔、惣軍三萬餘人、小笠原右近將監・同苗内匠頭・同備後守・同壹岐守、惣軍二萬八千、中川佐渡守・木下右衞門佐・松平東市正・毛利主膳正、凡九州の軍勢殘らず發向す。凡て十萬餘人、夜を日に繼いで出陣す。是故に、西海道には上を下へと返し、御使番御目附中、皆々其一組々々毎に差添へられて、事の嚴重なる、詞に述べ難し。自然落城遲延に及ばゞ、追々注進すべしとの事なり。去程に西國の大名、悉く原の城に馳集り、大軍靡然として、御名代板倉殿の陣へ向うて法令を守る。板倉殿下知として、細川越中守・同若狹守、惣軍三萬餘人、兵船にて下深江村へ着岸なり。其船を以て、城の東南の方楡山口・細野谷は、此城の裏手にして、女童の楯籠る丸あるべし。此口へ大筒を打込んで、城中の肝を取拉ぎ、早く降參せんの定なり。黑田左衞

門佐・嫡子肥前守・二男甲斐守・同釆女正三萬人は、入替へ押詰むべしとの事なり。之に依つて立花左近將監・嫡子飛驒守は、中の手に替り、有馬一家殘らず水の手の口・扇繩の出輪へ、先に陣替なり。鍋島計りは、元の出丸の攻口なり。諸大將は、御旗本前の廣場二三十町程の內に陣屋を備へ、始の軍勢合せて十六萬二千餘人、各甲の星を輝して、稻麻竹葦の如く打堅めて、皆陣取堅固なれば、目を驚かす有樣なり。城中は百姓原の一揆、定めて此勢には弱るべしと思ふ所に、何を賴み何を待つてや、一揆少しも怯まず、愈旌旗を押立て〳〵、重々に虎口を相守り、靜に城を相堅む。敵攻上らば駈落さんと、鎗先揃へて待懸けたり。一揆の心ぞ不敵なり。諸大將幷御名代・御目代、何れも板倉殿の本陣に會合して、軍議區々なり。其內に有馬中務少輔殿、殊の外老年なりけるが、進んで申さるゝは、先づ城內は百姓原なり。浪人少々打交り楯籠れ共、大將とすべき者なきやらん、若輩なる四郎といふ百姓の子を大將と聞く。軍法にも、五事七計各皆御存知の上なり。されば敵味方を算ふるに、味方は數代武門の舊家なり。軍兵十六萬、皆是譜代恩顧の武士なり。敵は一揆土民なり、其上俄の

寄合勢なり、大將はなし、殊に二三萬に過ぎず。多く城中に旗を動かし太鼓を打つは、女童の部にして、切つて出づる勇兵は、五六千人に過ぎずとこそ思ふべければ、富士禪定する者、夜中に上る事、當世專ら致す。夜中は脇へ目の行かず、歩む程の明なれば、高き事に、心の驚く事なし。今も其の如く、多くは篝を燒き松明を持たせなば、矢掛鐵炮弓などは、明らかになるべし。味方今宵暮前より支度して夜攻をなさば、十六萬に四方の敵、何ぞ敵すべき樣なし。一定落城と存候。一刻も早く今晩城攻御尤と申さるゝ。其時一同に、成程御尤の了簡とありける時、末席に有合ひける黑田賴母は、陪臣乍ら大家より、皆々二三人づつも、軍功の者評定へ召連れらるゝ故同席なり。賴母は、則黑田右衞門佐二男にて、肥前守の弟なり。家老黑田三左衞門の養子なり。知行三萬石、組士相備、共に五萬石の身上なり。父子共に此席にあり。細川殿・長岡・有吉・小笠原・二木・寺澤の三家も此席にあり。則進み出でて申されけるは、末席の賴母體、御意見をこがましく候へ共、評定に候へば申上ぐるにて候。有馬公御意の如く、七計を論じては、一つも相調ひ敵し申さず、片押にも潰し申すべき事

乍ら、併し七謀にも増りて、城内に利を得たる事、男女强弱はともあれ、必死となつて地の利を守る。誠に金鐵の如く堅まり居候へば、城内悉く死し盡し申さずば、城は落つまじきに候。一人死を極むれば、萬人に敵すると申候へば、輕く思ふべきにあらずと存候。夜軍の事、御尤にもあるべく候へ共、我々承り候は、敵大軍にて候か。或は敵に油斷の隙候かを考へ、夜打夜軍は仕候ものと承り、堂々たる天下の兵、明らかに勝申す筋御座候に、却て夜軍なされ候はゞ、是味方變の基と存候。我等存候は、先づ城内の一揆共の心を和らげ、土地々々の親類を以て御招き、段々善言を以て御宥めなされ、浪人と百姓との心割々になさる方、御尤に存候。是等も手緩く思召候はゞ、九國の中へ御觸候て、健なる人部數十萬人御集め候て、水の手出丸扇縄一面に掘崩させ、軍勢の中よりも、段々加勢を入れ掘崩させ、通道を拵へば、嶺上の大木大石崩れ落ち、足懸のある究竟の大路二筋三筋は、などか出來ざらんや。其砌大軍を法の如く立て、嚴しく攻立て候はゞ、落城と存候。今此の儘に御攻候はんは、人のみ打たれて、功あるべしとも存じ申さずと、憚る所なく申しければ、長岡・二木・有吉・三

宅其他大名衆（以下原本缺文）

南島變亂記第十二畢

南島變亂記第十三

二番攻夜軍の事并有馬壹岐守討死の事

斯くて諸手の軍勢、何れも待設けたる事なれば、寛永十四年十一月廿四日の七つ時諸手一同に用意して、惣軍十五萬八千人、不意に陣を押出して、竹束を突き楯を突き押上る。此原の城は、扇を廣げたる如くの芝山にて、上る程狹く、末又要害なり。黑田・小笠原・立花等、逸雄の先手六七千人、蟻の集る如く押上る。折節嵐浦風時雨れて、芝原には霙交り吹懸り、草の上は軍勢足、霜解のして道辷り、歩み難しと雖も、諸萬人相互に鎗引合ひ聲を掛合ひ、坂半過押上り、鐵炮を打たんとすれども、味方の鐵炮に雨覆なき故、火蓋に水入り、口藥に雪吹込んで火移り兼ね、火繩の火も消えて、中々打たれず、最早嶮しき城攻なり。一揆原少しも騷がず、山上塀の上は、玉火松明

灯燈數千燈し立て、其勢唯白晝の如く、法令嚴重なり。兼ねて葦塚忠右衞門籠城の砌、駒木根に談じて是をなす。玉火といふは、樟腦を臼にてはたき、古酒を以て練固め、丸くなして火を付くるに、水中に入りても消えず。殊に冬浦の事なれば、時雨勝なるべければ、樟腦松明たるべしと、櫻の皮に岸藻を巻きて拵らゆるに、大雨の中と雖も、雨はじき能くて消ゆる事なし。其上火繩は、朝夕殺生に馴れし手細工なり。雨覆を懸けたる故に消えず。故に城中鐵炮は彌盛にして、唯百千の雷落懸かる如く、打懸け〳〵鯨波を上げ、石材木を投下し、此所を詮と防ぐ程に、先手夥しく討たれて色めき立ち、進み兼ねて見えける所に、出丸口には、例の紅の母衣水色の鎧着て、

或は水色の鎧の事、武要雜略・草要略程に見えずいかゞ。或は曰、黑糸なり。又曰、薄黄なり。然るに此水色といふは、銀のさね桃色の糸を以て威すをいふ。名目の出所未詳。

傳に、水色は桔梗なり。源三位賴政に給ふ所の紋、水色なり。今桔梗を用ふるなり。

鍋島甲斐守直澄、馬を三角に躍らせ、眞先に駈上らる。信濃守本陣の軍兵共是を見て、押續き馳上る。然るに甲斐守の手は、兼ねて玉火の用意したりければ、乳人鍋島三左衞門、出丸の道筋四方へ打配りて攻上る。枯草に火燃え付きて、風は山下より吹上るに、小雨は少しも構はず、段々松山へ燃え上る。すはや出丸は乘破りたるかと、諸手一同に鬨を上げ、彼篦ため形なる芝原六七丁・横幅十四五丁の所を上らんとすれども、外々の諸軍は火もなく、空は暗し雨は降る、足は辷り踏止まらず。此の所を見澄して、城中より柵陰へ出で、一時に石弓を切つて放ち、是は藤綱にて、大木大石を木に結び付け置きたるを、今繩を切つて落すなり。其響は、百里にも聞えやすらんと夥しく、寄手の大軍周章てける所を、鐵炮を以て思ふ儘に打つ程に、死人手負山の如く、遙麓へ捲り落されて、一人も進む者なし。死骸手負山下に累々たり。今晩最早戌の時に至り、惣大將軍板倉殿の先陣迄、崩れ懸りしかば、御名代より下知ありて、城の構嚴重にして、守透間なし。夜軍は叶ふまじきぞ、皆々引退き、明日軍議あるべしとて、軍使東西に駈廻りて、下知頻なり。故に幸の事なりと、元來心に進ま

二番攻夜軍敗る

ぬ者多ければ、黒田・立花・小笠原・長岡・二本等、皆々引貝を吹きて、先陣を纏めて引返す。此所に出丸口鍋島甲斐守直澄、諸軍の引貝・上使の早使來ると雖も、少しも聞かぬ振して、味方を下知して攻上る。此所城内の一揆原は、彼の玉火平草山に燃え付いて、一面に煙立上り、雨に降ると雖も、霜月の枯草にて、其根は乾きたる故、唯一虚に燃え上る。風は浦より吹上ぐるに依り、出丸の小屋先危き故、一揆の大將柄木右京・佐志木左治右衞門等、四方の小屋を守つて火を防ぎ、立悚ゆる計りなり。時に爰なりと甲斐守直澄、手勢を引いて押上る。又後より信濃守の軍勢共、追々馳付き、大筒小筒を打交へて、平打に打懸けゝるに、一揆原大きに打縮められ、既に難儀に及びけるに、葦塚忠太夫・軒山善左衞門、五百餘人にて打つて懸る。二の丸よりも葦塚忠右衞門・同左内・鹿子木・駒木根・四鬼が雚千五百人、鐵炮百五十挺を兩道に分けて、芝原の火には嘗て構はず、出丸の松原に寄添うて、一時に打立ちたり。鍋島殿の軍兵、玉筋に行懸り、散々に打立てられ、皆矢除して平伏に、後退りにぞ退きける。甲斐守些とも恐れず、諸手皆退きけれ共、當表に於ては、敵に一鎗も合せずしては退くまじ

と、獨言して馬を乘直し進まれたり。鍋島三左衞門、馬の水口に縋り付き、鐵炮頻に候。平に退き給へと申しければ、甲斐守眼を怒らし、天の矢は遁れず、汝知らずや、木曾殿粟津の流矢、退くとも、命助かるにもあらず、同じく進めと下知せらるれば、葦塚忠右衞門、此體を見て四方を下知し、諸軍皆軍を退けたり。爰は例の鍋島の荒武者よ。千々輪が話にも聞置きたり。大將一騎にせば、討取るに易かるべしと、白髮頭に鉢卷しめ、諸手の英士を勝つて、𩜙と突いて下るに、鍋島の先陣三千餘騎、雨雲覆ひ、黑闇の如く、寒風烈しく、鎧皆氷り手はかゞまり、殊に案内は知らず、終に一揆の勢に突立てられ、遙の麓に捲り落され敗軍なり。其中にも甲斐守唯一騎、少しも退かず、馬を竪横に躍らせて、自由に働き給ふ。此馬一度も爪折せず、一揆の者共近く進み寄ると、踏倒し喰殺す事夥し。忽ち一條の血路開けて、大路を乘るが如し。一揆の大將葦塚父子、此働を見て、いかさま鎗打つ者の類は仕損ずべし。唯組打にして、手取にすべきなりと、大手を廣げて駈寄り、甲斐守も葦塚と見てければ、爰は敵地なり、おびき出して討取らんものをと思はれければ、駈寄れば馬にて踏ませ、馬を捕

ふれば切拂うて、麓の方へ下られける。葦塚父子、三度迄甲斐守の鎧に飛付きたれども、宵の時雨に鎧氷り、手辷りて取外す。甲斐守、葦塚が白髪頭を打割らんと、三度迄切りしかども、葦塚も軍術逞しき者なれば、終に討たれず、互に我知らず麓迄下りけるが、葦塚ふと心付き、南無三寶、是は段々敵に引出さるゝ者なり。夜中の働詮なき事ぞと、父子二人平一散に、出丸の松山へ駈上りけり。甲斐守も、終に馬を乘下して、物別れにぞなりにける。葦塚も城中に歸り入りて、奇代の勇將と、甲斐守直澄を感じける。されば城中にも、此後出丸攻口を大事に抱へて、左右なく打出づる事なかりしとぞ。有馬中務少輔賴利（後番頭從四位侍從）は、今夜の合戰、全く我口より出で、諸手の嘲になり口惜しゝ。其上黑田賴母の金言をもどき、重ねて彼に詞遣も面倒なり。爰に軍議して功を立て、嘲を防がんと思はれければ、坂中に陣を止め、嫡子賴元・二男筑後守・同姓左衞門佐など、會集していひけるは、昨日の評議は、御名代に決すと雖も、謀は先づ當家より出す。諸手多く此謀に同意せず、黑田賴母が詞を、尤とするが故に、我一身の恥辱たり。然らば何卒當手不思議の功を立て、嘲を防ぎて、公儀の御

感に預かるべし。手を空しうして、諸將と同じく麓へは引き難し。思ふに今宵總軍押詰め、城中も能く防戰したる事なれば、其後大きに油斷すべき事眼前なり。是信玄初陣に、海野が城を落せし時に似たり。今引歸して、當手計り明日の朝合戰を勵むならば、一方はなどか破らであるべきや。今城中を見るに、水の手出輪、さまで防ぐ體もなく、又城中軍勢多く守る體もあらず。明日新に城攻する時は、御名代の軍令を背くになりなん。只今今晩引後れたる風情して、山の半腹に夜を明し、明日明行く横雲の頭に、急に切つて上らば、戰不意に出づるなり。必定大功あるべしといひければ、何れも尤と同じける。有馬家一族一手一萬五千人、犇々と用意をなす。先手の大將有馬壹岐、進み出でて申しけるは、定まりし上、申すはいかゞに候へども、此謀尤に似て候へども、同じくは衆人と同所に御陣進められ候方、然るべく候はん。今日の事は、一時の評定なり。恥といふべからず。明日の軍は抜駈なり、萬一打負けぬる時は、又々天下の笑種なり。且油斷すべき輩とも見えず、只一手にて向ふ時、若し城中の一揆一所に打合うて、大勢出づる時は、當手戰六かしくもや候はんとい

ひけるに、中務大輔大に怒つて、汝臆病の事をいふ者かな。斯迄軍議決定の上に、何ぞ敢て勝負の論をいひ、敵の大勢を恐れんや。今不思議の功を立て、諸手の大軍に鼻あかすべし。汝心に服せずんば、退いて我本陣を守れ。近頃、日頃に似合はぬ言分なりといはれければ、壹岐守赤面して退き乍ら、今日を討死と思ひ定めてければ、古郷へ遺言を細々認め、翌日潔く討死遂げん。されば壹岐守は、中務大輔の伯父聟にして、五人の家老第一の人なり。斯くて葦塚忠右衞門、常に此扇子繩の水の手、隨分心を配り相守る。殊に今晩の勝軍に、城中怠るべきやと思ひ、彌下知を堅く打觸れて、自身見廻りて、扨敵陣の體を窺ふに、有馬一家の陣、一手は殺氣ありて、未だ山の半にあり。葦塚則ち千々輪五郎左衞門を呼びていひけるは、有馬一類軍、山の半に屯す。今晩強味を見せて、明して戻る樣子には見ゆれども、地氣橫に明かにして、陣氣伏せず。我が不意を計つて、明日朝駈の城攻を、心懸になしなん。君今一千餘人を引いて、此陣に密に加はり給へ。我れ又城兵を以て相助けんと、約して別れける。有馬中務大輔は、斯る用心あるべしとは夢にも知らず、夜已に明方になりしか

ば、有馬の先陣有馬壹岐守・同隼人・同織部、三千人押續いて、旗本段々に攻上る。城中には兼ての下知なれば、閉り返つて、武者一騎も出合はず。扨中務大輔是を見て、敵は油斷す。唯一揉に取詰めよと、先陣中陣一固りになつて七千五百餘人、押上つて見る所に、上段は平野にして、究竟の足場、元來山水を受持ち水の手なれば、自ら扇子の手になり、上は少しの平場あり。寄手彌喜び、主人の見積神機妙算なり。諸手に肝を潰させんと、旗の手を差並べ、同音に鬨を噇と上る頃、漸々夜もほの〴〵と明渡る。霜に朝日の照輝き、殊に華かにこそ見えにける。山下の寄手惣軍是を聞き、遅れては言譯なしと、惣陣一時に先立ち、我も〳〵と旗の手を進むれば、板倉殿俄に惣軍に下知して、一騎一卒も馳向ふべからず。暫く樣子を見るべし。扨は有馬一家の軍勢、夕の戰以後、夜中故に引遲れ、山の間にて夜を明し、序能く夜軍の仕殘しと覺ゆるぞ。軍法を正し、其後一時に攻上るべしとの下知故に、諸軍勢は備を立てゝ見物なり。晴がましき攻口なり。有馬の先陣彌旗を進め、最早水の手扇子繩に取付

かんとする時に至り、帶曲輪溜の戸颯と開きて、千々輪五郎左衞門打つて出でたり。黑糸の鎧に御幣の差物、大身の鎗を提げて、一揆の中究竟を選び澄して三百人、雷光の如く突いて出で、無二無三に打つて入り、城中の四萬人、一同に竹筒を吹き太鼓を鳴らし、鬨の聲を上げて勢を助く。有馬の先手肝を失ひ、足を立兼ぬる所を、左の方の林の内より、大矢野作左衞門、紺糸威の鎧の、日に輝くを着て甲は着ず、髮を四方へ亂して、鬼神の如き勢にて、一揆三百人、拔連れて切つて入る。有馬勢散々に亂るる所、葦塚左内是又三百人の一揆を引いて、奔雷の如く突いて出づる。覺えず先陣捲り落され、死する者麻の如し。有馬壹岐守馬より飛下り、鎗を振つてなだるゝ味方を叩き直し、敵は百姓原なるぞ。麓の味方の見る前恥かし。只此の所にて討死せよ。此軍、敵に揚卷見する程にては、いかんぞ生きて遁るべき。中務大輔眼前なるぞと、詞を荒らげ下知しけるに、鐵炮頭長岡七郎太夫、實にも壹岐殿の詞の如し。諸手に拔駈し乍ら、此所を引いて何方にか立退かんと、竹束を打捨てゝ、立並んで突いて懸る。是に勵まされて、先陣悉く取つて返せば、一揆又突立てられて引返す。有

有馬壹岐守戰死

有馬賴利敗軍

馬壹岐、腰なる采幣取りて、一度に本陣を差招けば、有馬の同勢一同に鬨を上げ、勢に乘つて打上る。葦塚忠右衛門是を見て、此手若し手強き時は、諸軍皆進むべしと、駒木根八兵衛を呼んで、有馬壹岐を討ち給へといふ。心安く領掌して、片山の松の繁に立隱れ、十匁玉をため澄して待懸けしに、壹岐守、今日を最期と思ひければ、猶も進んで駈向ふ。駒木根矢頃能くなりしかば、どうと切つて放しけるに、哀れむべし九州の英士有馬壹岐守、胸元に血煙ぱつと立ちて、眞逆に谷底へ打落されたり。是を見て、後に續いて松澤半助・長崎大治郎・佐野三郎左衛門・尾崎宇八・柏原德左衛門等を初として、究竟の武士廿八人、千々輪五郎左衛門が備に駈込んで、心能く討死す。扨鐵炮頭長崎七郎太夫は、引けば引くべかりけれども、壹岐が詞をや恥ぢたりけん、大矢野作左衛門が陣へ向ひて、一足も去らず是も討死す。之に依つて先陣三千餘騎、大敗軍になつて逃下る。況や城中より天草玄札、一軍を引いて有馬玄蕃頭の陣へ向ひ、大斧を振つて切つて入る。諸軍色めき立つを見て、千々輪・葦塚・大矢野、鐵炮を中陣に打入れて、短兵急に切つて下る。城中より又々堂島對馬・千塚善左衛門・

四鬼丹波、千五百人を勝つて、遙の小道より押返して押包むに、有馬の本陣見崩れして、十方に分れて退きける。御名代板倉内膳正殿の先手へ崩れ懸りしかば、御本陣も色めき立つを見て、大矢野作左衛門、手を以て額に當てゝ、快く一笑して曰、御名代の一陣を駈破らば、冥途黄泉の土産たるべし。逃ぐるは追ふに如かずといへり。後には葦塚老將あり、心安しとて、强勇の一揆三百人、有馬勢の逃ぐるに追縋うて、面も振らず打向ふ。千々輪五郎左衞門・葦塚左内是を見て、大矢野を討たせて、城を保つ事難かるべしとて、同じく切つて下りける。有馬の陣を駈破つて、板倉勢の先手へ切つて懸るに、黑田の陣より是を見て、御本陣打たせては叶ふべからずと、黑田左衞門佐、一軍眞丸になつて、横合より切つて懸る。千々輪・葦塚駈合せて戰ふに、黑田賴母二陣を納めて、鐵炮を二段に立て、太鼓を打つて靜々と懸り來る。大矢野いふやう、爰は敵地なり、久しく戰ひ難し。殊に寄手皆集らば、我々は小勢、いかに働くとも叶ふまじ。寺澤・松倉の陣は、日頃手並は知りぬ。此陣を駈破つて歸るべしと、黑田の先手を駈拔け、御本陣を打捨てゝ引返し、松倉勢の眞中へ、面も振らず切

つて懸るに、先陣松倉十兵衞、一番に逃出しければ、忽ち道開けて、直に寺澤の陣に打入るに、此の先手已に崩れんとする所を、三宅藤右衞門、例の大長刀追取つて水車に廻し、向ふ一揆二人切伏せ、諸軍を下知して支へける。大矢野作左衞門鎗を差延べ、ぐさと突きけるに、三宅藤右衞門が膝頭に當つて、尻居にどうと倒れけれども、猶退かず防ぎ戰ふ。其中に黑田の先手、後より鐵炮を放し懸くれば、大矢野、三宅を打つ事能はず、葦塚左内・千々輪五郎左衞門十方の敵を拂ひ、三將軍勢を引纒ひ、終に山上へ駈上る。黑田勢隙間もなく喰留めけれども、千々輪・葦塚・大矢野、踏止り踏止り打拂うて引上る。猶も慕ひ見えけるにより、葦塚忠右衞門斯くと聞くより、鐵炮の手を山の尾へ下し立て、兩方より打たせけるに、兼て飛鳥も外さぬ手利なれば、選び打立つるに、黑田勢辟易してためらふを見て、三將は心靜かに、人もなげに引入るを見て、黑田勢先手、齒嚙をなして喰止めんとすれども、兩邊の伏兵に恐れ見合す内、本陣より引取るべき下知頻なれば、終に物別になりて、引返しける。今日有馬勢の討死夥し。殊に有馬壹岐守・長岡七郎太夫を失ひければ、中務大輔殿も、暫く自分

差控へられけるとぞ聞えし。あたら士を多く損ひし事、殘念の至りなりける。

南島變亂記第十三畢

南島變亂記第十四

加州光高公討手望み給ふ事
并大坂廻船借切になし給ふ事

斯くて原の城彌强く、二番攻も味方討負けゝれば、諸軍唯城を見上げて拳を握り、取圍む計なり。急ぎ此旨江戶へ早打頻なれば、東武評定も日々に重なり、旣に西國諸大名殘らず一城を取卷く所、城中も嘗て弱らず、剩へ寄手を物の數ともせず、御本陣迄騷がすの條、案に相違の剛敵、不思議の一揆ぞと、初めて諸人驚く。今や四國・中國への大名へも下知ありて然るべきや、重ねて又御老中御名代にても差越され、早速事落着せらるべき事、此上又他所に一揆動亂出來るに於ては、ゆゝしき天下の大事たるべきなり。先づ早く武功の人を選んで、重ねて御名代に差越さるべきに極まり

ける。初めより水戸黄門公、事を重く取り給ふを、今更感じ奉る。此頃加州大守中納言利常公の御子松平加賀守光長公は、水戸公の御女を、公方家の御朱殿として下し置かれ、威勢盛に在江戸なりける。先頃中納言利常公には、金澤在府なりければ、今度の西國の動亂、早打を以て御告ありけるに、聞くと等しく利常公、江戸發足の用意申付けられ、又大橋市右衞門・山本清藏を早使として、大坂へ遣され、御出入の堺今井宗薫・京都後藤勘兵衞等にも仰入れられ、大坂具足屋鴻池などに仰付けられ、九州廻船殘らず、密に前金を渡し借らせ置き、早速江戸北陸道より、急ぎ巣鴨本郷の御屋敷に着き給ふ。早速御子息光高公段々仰入れられ、頓て翌日光高公、押して此度西海追討使を願ひ給ふ。扨翌日加州より討手の願上る。是諸國より第一番と聞えける。光高公、御老中當番酒井讃岐守に就いて仰せられけるは、今度天草表一揆の儀、百姓土民原の手に候へば、尤諸國の大名歷々、御手に餘る儀あるべきには候はねども、御名代一度御下向之あり、一戰功を遂げず、又は二度重ねて御名代を下さんの條、是東武御威光强からざるに似て侍らんか。倩思ふに、九國・中國は、自國敵地

に近く候へば、此時節持國守護の事、肝要に候。然れば光高に於ては、先祖の功はともあれ、今日壯年の某、身一寸の功なうして、忝なく金枝玉葉に連なり、附馬の恩顧に誇るの段、常々心に恥づる所なり。年老なれ共、利常あつて國を守護し侍れば、國に於て泰山の安きに候はんか。肥前國は、路遠しと雖、是海路の事なり。船上の勞は、只風による事なれば、近國とて遠國とて、何の替か侍らんや。軍勢路次に勞るゝの憂なし。されば願はくは今度の役、あはれ光高に下し給はゞ、西國の諸大名へは、御下知あつて軍勢を返し、分國を守らせ給ひ、公儀より一枝の御目附、常服の御役人五七人、御添へ給ふならば、其餘皆々光高一家中を以て相勤め、諸國を始め、東武の御評定衆にも、枕を高うして安慮し給へ。某在陣三十日を出さず、成功凱歌を唱へん事、掌の内に候はん。土民に對し事をこがましく候へ共、若一度攻損ずるものならば、給はる所の三ヶ國を以て謝し、甘んじて刑を受くべく候。光高壯年の時、幸に合へり。御治世に候へば、再び又あるべしとも存候はず。斯る時節を蒙らずんば、一生男らしき役目もあるまじくと覺え侍る。偏に執奏の御厚意に、仰を蒙り候やう

にと、誠に餘儀なく仰せられしにぞ、酒井讃岐守も、誠に勇ましき御願に候。何樣早速御聽に達し申し、是より御左右申すべきなりと。光高公は私亭に歸り給ひ、此旨御申すに依つて、中納言利常公大きに御喜び、內々用意の所、水戶黃門公、御遠慮是あり許し給はず、其事止みぬ。後に松平伊豆守・戶田左門、上意を蒙りて打上りしに、大坂に至りければ、船一艘もなし。先達て蜂須賀阿波守、板倉殿の時、船一艘もなし。夫を船の調達自由を得しかば、早速申遣すの所、阿波守留守居より、今度は一艘も罷成らぬ由、返答に及ぶ。松平伊豆守大に怒りけると雖詮なし。此事後の條下に見えたり。之を略す。扨賣船の方を吟味するに、皆加州光高公より前金受取り、貸置きける由、則江戶へ早打を以て、加州へ仰渡さるべき旨、早使引も切らず。大坂在番加州留居申達する所、加州物頭黑坂外記・林十郞兵衞忽ち來りて、借切り置きし廻船を、殘らず伊豆守・左門に引渡し、驛路の物使軍船の調度、皆々揃ひて靜に事調ひ、松平伊豆守・戶田左門を初、諸國の御使の船等迄、用ふるに餘ありて、天草の戰功は、たゞ加州侯の一身にあるが如く、諸事皆加州の下知々々といひしとかや。

此事異説あり。此時具足屋鴻池は、未だ御出入に非ず。其もと木屋・升屋といふ者なり。寛永十四年初秋に、中納言利常公より急用ありとて、金澤へ木屋・升屋を呼下し、御料理下され御話ありて、其後密に仰せけるは、近頃微に聞けば、其方共其中間より、西國の大名衆と組んで、兵庫築島を引毀つとも聞く。又は大坂の南門の石垣を、入札を以て引取るとも聞く。誠なるや。木屋・升屋互に顔を見合せ、いや左様の儀、嘗て承らずと申上げければ、利常公御意には、いや事は慥に聞澄しあり。早々返り聞合すべし。若し誠なる時は手延にて、外の大名へ買取られては本意なし。我年來小松に隱居する。其地に葭島の亭を築かんと思へども、猥に石を切出す事、當時遠慮なり。汝才覺を以て人に取られざる様早々買取り、公儀評定仰渡されなき内に、其石共一時の船に積み、大廻にて、加州安宅浦迄着船すべし。されば大事の用事なれば、其方共持船を始め、神戸・脇の濱の船共、一艘も殘らず借切り、如何なる用なりとも、他用に船を散らすべからず。則先金三千兩下されしかば、木屋・升屋兩人の者共畏り奉り、早速罷歸り、船よ〳〵と借切置き、若築島

南門等の事候はゞ、早く積り申すべき段申上げしかば、何れにもせよ早追にて歸國致し、船を借切り申すべき由仰付けられ、急々に歸りしが、いかに聞合すと雖、何の沙汰もなかりし程に、飛脚を以て申上げしかども、中納言公より、船は散らし申すまじき旨にて見合せけるが、其後程なく此一亂ありける。扨は早く此事を御存知にやと、木屋・升屋密に舌を振ふとなり。忍の廻國にても、常々廻らせ給ふにや、又は雲氣等を以て知り給ふにやと、其頃いひしとかや。木屋後は辻といふ。享保七年の大火事に土藏を燒き、御用勤まり難く、嵯峨へ引込む。後に伴正藏といふ。今藏にある米三千石下されけるなり。御藏元は鴻池善七、木屋が一族を仰付けらるゝなり。升屋は松雲院殿御代に、御藏米十四萬石明き候て、此代り具足屋に仰付けられ候。是も升屋親類なり。其後湯川あり、何れも今に加州御出入なり。升屋は其後故ありて、大坂町年寄となる。此時も加州へ相伺ひ、事濟みしとなり。

紀州大納言遠謀の事并松平伊豆守下向の事

加州光高公御願に付き、御前に達し、種々御評定御相談あり。老中を初め、義勢にも似ず、御名代・御目附等の手に餘る噂を、此上に身の我々に預からんよりは、一向加州へ御頼みあるべきやと落着せざるなり。水戸黄門公御登城ありしかば、幸に尋ね給ふ。水戸公仰せられけるは、光高の願理なりと雖も、是必ず父中納言利常の計ひたるべし。言付け給はゞ、定めて功をなすべし。軍用も亦少なかるべし。然れ共天草の一揆は、外邪を憂ふる如し。捨置くとも自ら直るべし。加州に軍さするは、脾胃を煩ふ如し。老中只暫時の軍用をば厭うて、大義を知らず。此言付を知つて、願ふたる者なり。能思案せらるべし。先づ光高に頼みなば、光高兵を引いて向はんか、一度攻めて功なき時、おめ〳〵と罪に伏して歸らんや。縱ひ公儀より、善言を以て慰むる共、若年の光高、一人心に恥ぢざらんや。必定軍兵再び催し、無理に天草を攻破るか、却つて天草に馴合うて、寺澤・松倉に利害を說き、一家の大名に通じて、九國に大變を起すか、二四の間には過ぎじ。彼が臣に高田南坊あり、彼は邪宗の棟梁なり。今高山旣に伴天連を去つてなしと雖も、其支族知音、何ぞ國に殘らざらんや。

外聞といひ旁甚だ危き國變なり。よし光高一戰に功を得て、比類なき手柄あらば、國の幸に似たれども、是れ又好むべからず。彼れ加州は、百廿萬石の大身にて、日本凡二千四百萬石、然れば廿分にして其一つぞや。尤偏國たれども、治國には甚過ぎたる國割なり。然れども今度功ありとて、此上に何ぞ國郡を加ふべき。功あつて賞なきは、亡國の兆なりとや。光高半點の恨なくとも、其家臣心に甘んぜんや。是又天草百倍の安からざるを設くるなり。唯討手は幾度も小身の人を用ひ、寺澤・松倉が如く、罪ある者を以て攻むる時は、軍場に半心の傷むべきなし。然らば光高へは、詞を賞し、善言を以て止め、小敵なれば、今度は加州公を賴む時にあらずと、義を以て願を返し、唯幾重にも老中より、差向ふべき事なりと仰せられしにぞ、何れも舌を卷いて感じけるとなり。時に松平伊豆守信綱、末席にありけるが、進み出でて曰、我等儀は小身より召出され、此席に連なる者に候へば、重ねての御名代は、乞受けても罷上り申度事に奉存候。然れ共拙者愚蒙の上、治世に馴れ申候て、今度戰場一定の族、心腹仕候所是なく候。何と心得、今度御役目をも乞請け申すべきや、心中落着是

なき段申されければ、水戸黄門公御意には、紀伊大納言殿こそ、智惠傑出にこそ存候へ。餘所乍ら計り見るべしと御意なりしかば、頓て伊豆守、直に紀州公の御殿へ上られ候て、日頃御伽に罷出らるゝ上は、早速御前に出で、四方山の話申上ぐる。紀伊大納言殿にも、思召には、當時出頭の伊豆守、今何の事もなきに、斯く長話すべき理なし。扨は天草の軍議を聞きに來るにこそと御心付きしかば、色々其心を以て捜り給へども、此伊豆守も、さるしたゝか者なれば、終に天草の事を言出さず、始めは小盃出でてありしが、大納言殿御意には、大盃に代へよと仰ありし程に、大きなる盃を持出でたり。紀州公、此盃に酒を十分に餘りて注ぎかけ給ひ、伊豆守に、取つて飲み候へと御意なさる。伊豆守殊の外迷惑して、私下戸にて御座候。御免下され候へといふに、何となく御機嫌宜しからず。其砌御近所に、水野・安藤抔有合ひしに、伊豆守飲まずば、其方共飲み候へとの上意なり。何れも下され得ずと申上る。座席少し興さめて、大納言殿御顏色惡ければ、思切つて飲むべしと思ふ心付きたる時、紀州公、其盃を半分程御あけなされて、さあ飲み候へと御申の時、伊豆守と一度に、水野も手

を差出す。紀州公扇を持ちて、盃を御押へなされ、やあ汝、始め十分ある時は、盃を取らば衣服に酒懸り、座席の首尾失はんかと控へしなるべし。是程傾け捨てたれば、誰も手を出す者ぞやと仰ありしかば、伊豆守思はず飛退り、頭を疊に摺付け〳〵、扨々有難き御志慮承知仕候。實は其御詞を希ひに罷越し申候。私儀彌近日天草一揆追討使御受申上、罷立ち申すべきにて候により、御賢慮を以て首尾よく相仕廻ひ、罷歸り申すべしと有難く奉存候。直に御暇申候て御前を立ち、其夜直に御殿へ上り、段々申上候て、追討使御名代を蒙り、頓て打立ち申されけるとなり。

庵中抄に曰、中山勘解由、江戸盜賊奉行にてありし時、鶉權兵衞が爲に死去ありし後、跡の奉行を勤めし人、細川幽齋に、心持の事を尋ねられしに、其返事はなく、雜鱇の煮たる者を一器送られけるに、大國を治むるに、小鮮を煮るが如しと聞く。然れども猶深意なる事あらんと、上下改めて行きて、懇に尋ねしに、幽齋曰、故事の心は知らず。魚は肉は善く骨は惡し。然れども小魚は至てよき肉をよれば、骨と交りて出でず。骨の惡を捨つれば、善肉も交りて捨てらる。善に惡は共に善

なり。人多くは、一事は惡なる者なり。惡にも、只打交りて用ふれば、惡の骨よりうるほひ出でて、善の肉を助くるなり。政道は重箱にて味噌をすれといふ。手の廻らぬ所、國の恵なりといふ。其外多く隱語を申されしとなり。紀州公の事など、板倉が小住の三條の如く、其頃迄は、比愈の詞多く用ひられしにこそ。盃の事いかゞにや不審。

肥前國原の城下には、御名代板倉内膳正、謀略種々手を失ひ、城中の守り固く、隙を窺ふべき便なければ、諸軍に觸を出し、當城急に落つべからず。究竟の名將名家集り、百姓一揆原の爲に命を落すは、以の外の愚昧なり。一揆は死を一揆に定めたるものなり。猥に攻むべからず。逆徒楯籠る所、男女四萬餘人と聞えたれば、兵糧の積りあり、天草島原領殘らず集めても、米穀員數大方限りあり、追付け飢に及ぶべし。只一揆原を巻詰めて、一寸も明けず、水も漏らさず堅め、然るべしとの事にて、法令嚴しく陣屋を守り、唯取卷く計り。城中には此度又大に勝利を得て、彌其持口々々を守り、或は不時に鬨を發し、俄に鐵炮を打懸け抔して、寄手を惱しければ、いつ果つ

べき軍とも見えざりける。去る程に關東への注進、日々に打續きて夥しく、道中の間、大坂船着抔の取沙汰も、異國より黑船着岸し、早二ヶ國計り破れたるなど、あらぬ事言出して、諸人安き心はなかりける。江戸の評定にも、此上は一刻も早く、重ねて御名代御下しなされ、諸人の心を安んぜらるべきより外あるべからず。先づ此節天下御老中方若年寄等にも、當世然るべき器量才智の人といふは、松平伊豆守信綱然るべしとなり。既に斯の如く極る上は、御三卿へ相伺ひしに、水戸公の仰には、伊豆守下向尤宜しかるべく候。併し今寄手の軍勢は、九州の大軍十六萬餘の人數なり。太閤朝鮮御手遣さへ、二十萬に出でず。左候へば、人數に於ては不足あるべからず。御名代板倉内膳正あり、西國の諸將皆是武功の家なり。今此上に人を增すとも、大小替る事はあるべからず。只軍配のよき人を缺く故なり。當時北條安房守氏長こそ、軍法の中、萬事修練の人なり。然れば此安房守を差添へられ、軍法の事、萬事安房守指圖を受けられ、然るべしと仰せらるゝ。さすがの伊豆守殿も、心底に少し含む仔細は、天下の御名代として、西國九ヶ國の軍兵を下知して、一揆原の楯籠る

松平信綱戸田氏西一揆誅討の爲め發向

搔立城一つを攻め落さするに、北條安房守が指圖を守り、木偶人の如くにあるべきやと、少し立腹の心故、伊豆守返答にも、成程承知仕候。併し先づ安房守には及ぶまじき事に候と申さるゝ故、今度は北條安房守發向の事は止みにけり。然れば水戸黄門公、猶も心元なく思召しけるにや、今度始て中國大名一人御加へなり、則備後福山城主十萬石水野日向守勝貞なり。是は御內意にて、未だ祖父六左衛門入道勝成存命なれば、同道して軍の意見懸引の爲とぞ聞えし。然れども着陣以後、勝成老病故か、遂に死去故、重ねて北條安房守下知して、事落去しけるとぞ。去程に御評定相濟みて、松平伊豆守信綱・戸田左門氏西を御前へ召出され、急ぎ西國へ發向し、板倉內膳正に、前方の樣子承り、相談の上にて、早速に一揆追討仕るべしとの御事なり。兩人卽時に江戸出立、本國の城則武州川越と美濃大垣とへ立寄りて、急々用意、同道上るべし。又々追々注進に及び申すべしとて、伊豆守は川越より、中仙道を發向なり。戸田左門は大垣に至り、早速用意して、大坂にて會合なり。頓て松平・戸田集會して、船を求むるに一艘もなし。船手蜂須賀阿波守に下知せらるゝ。初めの板倉殿の時と替

りて、一艘も出さず。上使大きに怒り、漸々加州公より船の調略を得て、進む事を得たり。蜂須賀家如何なる故に船を出さゞるやといふに、武將感狀記に曰、耶蘇の賊の時、板倉內膳正重昌、總監軍として肥前國有馬領原城に赴く。四國・中國の諸侯、皆船を出して送る時、松平阿波守忠英江戶にあつて、留主家老共其半を出し、半は殘して變にかへんといふに、蜂須賀山城衆議に戾つて、船を殘らず出して是を飾る。波路一面に只阿波船の如し。重昌是を言上して、公儀殊に首尾よし。松平伊豆守・戶田左門御名代の時、阿波の家老始めに倣うて、悉く船を出さんといふ。蜂須賀山城聞かず、根もなき賊と聞えたれば、九州の勢にて事濟みなんなれば、四國・中國の兵に及ばず、縱ひ一旦攻め居らずとも、時今西風の節なれば、其間には船皆歸帆すべし。今賊思の外强うして、九州の諸侯手に餘ると聞く。さすれば此次は、四國・中國の勢に命ぜらるべし。其上今日船を出しては、東風の節、船速に歸る事得難し。四國・中國に命ぜられれば、蜂須賀其先登に當るべし。一度台命を蒙り、萬一船遲々に及ばゝ、武家の恥とする所なるべし。今度は一艘も出すべからず。公儀御咎あらんには、某

一人、其罪に當るべしといふ。則飛札早速是を江戸に馳せて訴へければ、阿波守忠英捨置き難く、老中酒井讃岐守忠利に告げて上聞に達す。家光公仰に、國主忠あれば、其家臣も亦忠を思へるとて、大きに御感ありしとかや書き記せり。此說能く兩段に叶ひぬれば、是を書して言を略す。蜂須賀山城を天下に譽むる。阿波守よりも忠賞ありしといふ。板倉内膳正殿の時は、蜂須賀軍船に力を盡し、松平・戸田の時は、加州の軍用力を盡して、已に大坂出帆に及びけるが、諸々の附使者かげの供凡そ一萬三千餘人、軍船を揃へ漕出す。九州一揆の退治、日を經じとこそ見えにけれ。

南島變亂記第十四畢

南島變亂記第十五

加州中納言普請の事

前田利常深慮

松平加賀守光高公、天草一揆追討の御願、御感あつて、御忠節に思召し候と雖、御老中御評定の上、善言を以て御差留なされ、今度松平伊豆守・戸田左門台命を蒙り、既に打立ちければ、加賀屋敷には、今度打向ひし同前の御厚志の上意下りけるにより、家中一統に上意の披露あつて祝あり、さゞめき賑ひけり。此節黄門利常公、俄に別殿屋形造營あるべしとて、急々數百軒打崩しての大普請、江戸中の大工木挽を傭ひ切り、且大庭には大石を引並べ、數寄屋の亭も一所に建つ由にて、數萬人の人夫をかけ、地車夥しく並べ、大石を引き大木を切らする。追々引連ねて連綿たり。駒込本鄉邊はいふに及ばず、本町通筋違見附人馬の往來も、加賀屋敷の材木に支へて通

り得ず。口論闘爭も日々又多し。御普請所は、長塀を打毀ち、數萬の人足入込み、卅人に一人づつ、伊達なる裝束したる木鐺人差添へ、其外御近習衆・御坊主衆の類、美麗花を盡し、普請の中に立交り、音曲歌舞目を驚かしける。御家老安房・山城等の老臣さへも、御普請場へ入込まるゝ時は、大筋の縮緬の上着一樣に着して、音曲をなさゞれば、御前へ出づる事能はず。況や若侍中、皆伊達なる出立、目を驚かす。町人等の行懸の見物、嘗て禁せず。門前には、塀を崩して垣とてもなし。其上每日菓子餅なんどを拋つて、入來る者にも與へ、酒は手桶に杓を付けて、飮む人の儘にして咎めず、每日々々米錢を費す事、百萬を以て算ふるに、其夥しき人步、大木大石を集め扱ふ音、天も崩るゝかと肝を消す。江戶中も是のみの評判。此頃は西國には大變あつて、人民多く死亡するに、いかに我金澤山なればとて、少しは遠慮もあるべき事なりと、諸方に沙汰して、兎角大名の氣は、うづけたる者ぞやと言觸らしける程に、利常公の老臣聞傳へて、密に申上げければ、中納言利常公一向聞入なく、彌大普請起し給ふ故に、御家中も肩を潛むる者多し。只殿には、物の附いておはせぬかと、案じけ

るも理なり。御家中幷御聞番横目役など、頓て種々申上げ、此節加賀屋敷大普請いかゞの心入ぞや。尤江戸中諸職人、暇の時節とは雖も、殘らず加賀屋敷へ引取る事、公儀へ憚からざるの仕合、且當時三卿にも、御愼の時節、老身の踊り狂言などの事共、何と心得居らるゝ事やと、御咎めの筋もあるべき事と、何れも內意を以て、水戸黄門公に伺ひけるに、御聞あつて御笑ひなされ、老功の中納言能く氣が付いて、出かす事よとのみ上意なれば、何れも何と分別なく、不審のみにて見合ひける中、翌年二月廿八日に、天草落城のこと、靜謐の段飛使到來しければ、其日より加賀屋敷には、中納言少し御滯とて、普請止みけるが、其後終に御普請はなかりけり。不思議なりし事にぞありける。思ふに正月の始頃にや、御名代板倉殿、討死の飛脚到來して、殿中は今も暗闇になるかと震動しけれども、江戸中下々の者共を驚かさずして、加賀屋敷大普請のみ沙汰して、嘗て騷がず。西國の動亂も、さしたる事もなきにや、加賀屋敷の阿呆なる普請を見よと、一點の動轉もなし。其砌に由井正雪、未だ民部之助といひて、江戸表にありしが、內々天草に通路ありし程に、江戸御旗本を伺ひしに、加賀

屋敷の大普請のみ沙汰しければ、大山は動し難しとて、密に此事を天草の一味山本與茂作方へ告げやりしに、天草の城中に聞えければ、彼の葦塚忠右衛門いひけるは、天下又人あり、大國終に動かし難し。我輩等運命も、二三月の間にあり、各思ひ極め給へといひしが、由井民部之助も、時未だ至らざる由、言遣しけるとなり。事治りて後も、此普請の事は密々にや、善惡に付御尋はなかりけり。天下英雄の機、何と相計り知るべきにや。然れども天草の動亂濟みければ、翌年御願にて、中納言利常公、頓て加州小松へ御隱居なされ、政事は皆々金澤光高公より御取計ひなり。按ずるに昔戰國秦の王翦、百萬の軍を引いて、趙の國を攻めし時、亭宅の地を願ふ事三度、老身の樂しむべき地を乞うて止まるには、是は國中の大軍我手にありて、天下の疑を止めんと欲す。今度加賀の大普請も、毎日金銀を費されしも、良是に類する事もあるにやと、心得ある人は言合ひけり。されば嫌疑の間を、未然に知り給うてや、頓て隱居されけり。此時姓をも本姓菅原に御願なされ、改むるといふ。

加賀小松といふは、丹波五郎左衛門長秀の持城、後村上周防守是に在り。後丹波

長重住居して、加州陽龍院殿利長公と、淺井繩手の一戰あり。其後加州領に屬す。今天下の名城といふ。中納言公御隱居ありて、御花畑・白鳥堀・龜橋など出來、葭島の亭は、掛橋川の水を引きて、三湖の水に合ふ。三湖芝山潟・今江潟・木輪潟は三ヶ股ともいふ。此水廻つて安宅の浦に出で、浮柳二つ堂の松原、白山の月を受けて絕景なり。前田氏は元尾州菅神社家なりとかや。此度本姓にて潰し給ふ。家光公より御歌あり。略之。故あつて、菅家多ければ、高辻公に寄り給ふ。其後小松に京北野を移し、城の北に一社造營あり。其頃北野の社家宗祇以後の名人と聞えし能順といふを呼下して、每月御月次あり、今に絕えず。能順の句讃玉集あり、見るべし。秋風は薄打散る夕かなと吟あつて、天下の人を驚かす。社領百卅石。寺院初の名は松雲院といふ。享保の始、相公の御法名に障りて、今梅林院といふ。中納言公御他界の後、葭島の亭を毀つて、今は亭宅、金澤の城中へ引きたり。今に嚴然たり。

藤堂大學頭大言の事

去程に御名代松平伊豆守・戸田左門、西國發向の後も、水戸黄門公只一人、大きに辛勞に思召して、若し一左右不思議の事あらば、彼太平記の亂の如く、東武の例にも、異變の輩出來まじきにも非ず。楠が金剛山の城落ちざるが故、鎌倉の禍となれり。只々火急に攻め落したきものなりと、御沙汰頻なり。萬々一奥の手には、紀州從二位大納言源賴宣卿を大將として、四國の諸大名松平讃岐守を副將とし、松平阿波守・松平土佐守・松平隱岐守・松平美濃守・伊達遠江守・京極備中守、此面々殘らず軍兵到着し、本役八萬餘人、内々御相談なり。先づ此差繼に相拵へる衆中には、藤堂大學頭高次・井伊掃部頭直孝差遣さるべき旨、御内意あるなり。是終に葦塚忠右衛門が方寸に出でて、斯くも今天下の人心を動かす。良將、人を以て城とし堀とすといふ、宜なるかな。されば東武御殿中に於ても、猶未だ心寧からず、今天下の武勇の將、御軍代として、御用にも相立ち申す人、誰にかあるべきと、内々御聞合ありけるに、諸大將の內、藤堂大學頭こそ隨一の勇將、諸人是を指す。是により大學頭を殿中へ召し、此度島原の騷動大方ならず、益落城是なき時は、大學頭を差遣すべし。兼て右の用

藤堂高次壯語

意仕るべし。且又一揆の勝負は、いかゞ存じ居らるゝや、所存申上ぐべき由なり。此時藤堂大學頭高次平伏、謹んで申上げらるゝやうは、傳へ聞く一揆の百姓原二三萬人、必死に籠城仕ると承りて候へば、殘る所なく存候。互に軍法を以て御戰あらんには、手に餘り難かしき事尤に候。若某仰を蒙りて罷向ひ候に於ては、時日を經ずして卽刻踏潰し、落城申すべく候。其仔細は、私の家來、臆病者は一人も御座なく候故に御座候と、御請申上げらるゝ。諸人大に眉を顰めける。藤堂大學頭、已に御次へ退去なり。此口上大音なれば、御座近く黃門公御聞遊ばされ、大學頭に御尋にて、御不審仰出されけるは、貴殿家に限つて、勇士計にもあらじ。何とやらん他家へも辭當り、旁以て其意を得ざる事なり。如何の心底にて、申されけるやとの事なり。時に大學頭高次申さるゝは、御意御尤に存候。今度天草の一揆男女四萬餘人、相働く兵は二萬五千人計もやと承り候。私相向ひ申候はゞ、御軍役を增願申上、軍勢大勢召運れ候て、原城に向ひ山を崩し、雜人原を埋草にいたし、無法に四五萬人押上り申すべく候。私、後に鎗を提げ居申候はゞ、一人も逃げ申す家來はあるまじく候。

其人數を足溜として押上り候はゞ、土民の奴原打物になつて、何と武士に敵對申すべきや。私馬廻五十人生殘り乘込み候はゞ、二萬もあれ、撫切に仕候て、一人も助け申すまじく候。されば我々が戰ふには、弓も鐵炮も入用御座なく候。只一拉ぎにて埒明け申事に御座候。誠に近年靜謐にて、武士要用を取外し、歌學香會、只長袖同前の有樣故に、土民の一揆に、古き家の大名始め旗本を出して、落城心元なし抔とは、誠に天下の恥辱と存候。此儀は御心安かるべきにて候と申捨て、歸宿ありければ、直に國元勢州と伊賀へ、早打を以て申付けらるゝ趣は、伊賀より一萬五千人、勢州の地藏堂迄此を出すべし。伊勢より一萬五千人、豐久野へ出張申すべきなり。何れも神水を飮みて、必死を思ひ定めたる軍兵たるべく候。二の足を踏み、死を恐るゝ軍兵に於ては、一人も用い是なき段、勝手次第暇遣し申すべき由、嚴重に申遣し、御下知を今やと待たれける。されば是に依つて、光圀公の御愁顏も、是に御晴なされ、殿中の人も忽ち靜まり、囁き合ひしも、何となく定まりて、萬人磐石に座する思をなす。實にも勇士の一言と、勇しかりける事ぞやと言傳ふ。

南島變亂記第十六

正月元日三番攻の事并板倉内膳正討死の事

斯くて島原表には、大軍城を堅めて、仕損じたる事もなく、最早寛永十四年も、指を折つて算ふれば、限りの日に至り、甲冑の春を迎へんと、上下屈して居らるゝ所へ、江戸より重ねて御名代として、松平伊豆守・戸田左門、十二月十一日江戸を立ちて、正月上旬には、當府に着陣の段、道々よりの飛脚、追々に來着せしかば、板倉内膳正重昌大に憤り、諸大將を集めて申しけるは、當表の儀、各粉骨を盡し召さるゝ故、賊軍を取圍み、今日迄相守り是あれば、城中終に飢に及び、落城するは案の中乍ら、天下の武士集まり、一揆の土民を攻落さで、食攻にしたるといはれん〻無念なり。只今又松平伊豆守・戸田左門兩使參着の趣は、前兩度の城攻、言甲斐なき思召の段、各我

等天下に對し、實に面目を失ふ所なり。所詮運を天に任せ、兩使到着前に、今一度城攻して、各必死と思ひ定め、城攻の用意を丈夫に拵へ、當手の下知を守るべし。御同心なくとも、某一手なりとも立向ひ、城を枕に討死と相心得、攻むべしとなり。諸將、何れも御光の御事なり。大軍今日迄辨々と取圍み、重ねて御上使、伊豆守殿には、何の面目あつて會合すべき。勿論御名代の御下知、何者か背き申者候はんやといふ。其時板倉殿申さるゝは、兎角戰はゞ、不意に出づるに如かず。正月朔日は、誰々にても一年の壽をなすなり。此朝俄に取結び、一攻攻立つるものならば、必ず功をなすべしとある。諸人、いらざる日にこそ。天子にも四方拜ありて、萬民安全を祈り給ふに、多くの人を失ふ事の日取、心得ずとは思ひ乍ら、御名代の詞なれば、何れも領掌して立退きけり。此時立花飛驒守殿、陣に歸りて言渡されけるに、家臣共皆々申しけるは、板倉殿こそ、後より伊豆守殿御出に腹立ありて、討死と思ひ究め給ふ共、當手は曾て預かる事に非ず。身に懸れる寺澤・松倉さへ、良もすれば逃げ廻る事多し。必ず〳〵此陣、正月元日には出し給ふなと、諸軍皆々進まざれば、立花殿色々に

言宥めて、先陣を押出されけるとなり。元日の合戰事極り、何れも討死を心懸けて、出陣せよとの事なれば。鍋島信濃守殿には、勇士の上にも子故の闇、子息甲斐守殿いつも〳〵先陣に懲り果て、今日の觸旁危ふし。若しや甲斐守討死もやせんかと、此故に甲斐守殿を呼んで、急度申渡さるゝは、汝度々先陣にあり。今日より思ふ事あれば、後陣を守るべし。今迄の如く荒き働は、必ず父子の義を切つて、勘當すべしとなり。甲斐殿は、常々孝心類なき人にて、如何なる事にも、違背せざる人なりしが、此時には思の外にて、御意畏入りて候。御勘當に於ては、以後御本陣に伺公仕るまじきなり。當陣の事、相手がましく候へ共、乘掛けたる城といひ、敵に詞も懸合ひたる儀にて候間、幾重にも後陣に控へ申す儀罷成らず候。此城一番に攻落し、高名仕候て以後、其功に替へて、御詫言申すべきにて候。夫迄は御勘當にて、心安く先陣仕るべく候と座を立つて、自分の陣へ歸りて、此以後落城迄は、父兄の陣にも參るべからず。然りと雖も、備は父兄の先陣に立て、敵の難に當るべき覺悟なり。且信濃守殿不便愈深く、若し甲斐守が先陣するかと、安き心もなかりけり。されども元日の合

戰、必定甲斐守先陣と覺ゆるぞ。今度は惣軍一所に押上げ、大筒にて打拉げと下知故、鍋島の陣は、内々先を爭うて、夜半より早出丸の麓へ押寄せ、段々に押上る。葦塚忠右衞門は、兼て城外に知音の者ありて、密に天下の風説も、告知らすやうにしたりければ、元日の城攻の事は、早く城中へ聞えたり。寛永十四年も、早大晦日に至りければ、諸手の一揆を集めて、假初乍ら籠城はや百日に至る。各の武勇にて、今日迄息才、安福に年を迎ふるこそ不思議なれ。されば新玉の年立歸るなれども、敵軍不意を考へ、年賀も祝ふべきなれども、其事もなく、元朝の城攻と極めたれば、敵を追散らしてこそ、快く祝ふべし。先づ歲暮の祝儀、面々の心慰みに、籠城の引出物ぞとて、陣々へ二百人三百人づつ、人數を配り增しければ、是に依つて諸軍、鬼神の如くに覺えしとなり。是は葦塚兼て斯くあるべしと知つて、足弱一萬八千人といふ中、自然敎へば、軍用にも當るべき者多かりしを、皆人質曲輪へ入置きけるを、此頃靜さに、皆々鐵炮を打つ事を敎へ、竹鎗を使ひ太刀打を習はして、五千餘人勝れたる者を選び出して、諸陣へ加へけり。其内には前髮もあり。逞しき生れの女などは、鐵炮を

原城三番攻

ば敎へ、皆々用ひける。誠に謀あつてとぞ聞えし。諸手皆喜び勇みければ、例の如く鐵炮石弓、其上に棒火矢といふ物をば製して、寄手を遲しと待懸けたり。寛永十五年正月元日、而も其朝晴天にして風もなく、浦山も靜にて、寄手惣軍十六萬人、貝太鼓を鳴らし鬨を上げにける。去程に兼て城中には、大きに油斷すべしと思ふ所に、案の外にて、持口々々少しも騷がず、天帝の白旗數百本立並べ、同じく鬨を上げ貝太鼓を鳴らし、竹の筒を吹き狹間の板を開き、堅固の體案の外なり。此故に浦手の櫛山谷の口へ押廻して、細野谷口は細川越中守忠利父子、三萬人の大軍にて、大筒小筒を打立つる。其響鐵炮の者、蒼海も躍り上り、大山も崩るゝ計に覺えけり。城内は、一揆の土民とはいひ乍ら、皆死を一擧に極めたる者共なれば、少しも騷がず、敵間を待ち、鐵炮に玉藥を込んで待懸けらる。追手の先手黑田左衞門佐、大軍押立て鐵炮を打懸くると雖も、上り矢にて屆き兼ねける。中の手は立花左近將監父子・小笠原一家、今日も相替らず願ひ申さるゝに付、先陣は寺澤・松倉兩家なり。松倉殿、度々の恥辱を雪がんと、今度は嚴しく面々楯を振廻し、一面に押立て〳〵、竹束をかづき

て堀端に付き、彼竹束を組み合せて橋となし、乘渡らんとする所を、城中相圖の旗を上ぐると一時に、四方の櫓より聲を上げて、天地も崩るゝ計、鐵炮を打出す。さすが下矢に打つ事故、玉火矢の利よく、殊に小草も見えぬ程に打圍みたる軍兵故に、仇矢は更になかりけり。松倉・寺澤今度も怺へ兼ね、散々に引退く。黑田の先陣黑田美濃守、老功の大將にて、子息二人黑田民部・同藤二郎が下知して、武者組・楯組といふ事をなして、竹束を引連ねて、平押に押上る。此迄に大木も大石も、更に物の數ともせず組連ねて、えい〳〵聲して攻上る。やう〳〵堀際に押詰めたり。是を見て後陣、勇み進んで押續き、雲霞の如く取圍む。あはや此城、只今落城に及ぶべきと見る所に、此頃駒木根八兵衞、珍らしき事を工夫し始めたり。此程調達せる棒火矢といふものを、十挺餘り放しかけたり。抑棒火矢の仕方は、桐の木を割りて、長さ六尺七寸にて、桶の如くに竹の輪を入れて、其內に棒を入れ、卅本五十本、其棒の先は尖りにして、物に立つやうにして、樫木なり。筒元の所に、鐵炮の藥を括り入れ、石火矢の如くに打つと、筒は四方に飛んで火燃ゆる故に、棒に火廻りて、走る事玉火の如し。

此駒木根八兵衞は、鐵炮の元祖種が島一流の根元なり。鐵炮は大永元年に渡り、其頃迄百廿年。日本に流布すと雖も、委しき事は天文十一年明の儒生五峯より、種が島時曉に、外に蠻客二人年叔舍切孟太ありて、駒木根が先祖に傳ふ。されば此節迄、棒火矢といふ事ありて、日本になし。以前の軍書に聞かず。大坂軍の頃にも、此棒火矢は沙汰なし。奇妙の武器なり。棒火矢、種が島の住人鐵炮の元祖駒木根八兵衞・鹿子木左京と彫付けたり。此故に後に生捕の山田右衞門に糺明ありし所に、彼鹿子木嫡子、原の城には始めより籠り申さず、鐵炮傳受一卷を首にかけて、祖父が弟子紀州根來の玉龍坊に隱る。仔細知れて、紀州南龍坊を以て御召出し、吉利支丹類そく轉衆とて、三百石賜はり、今に鹿子木八兵衞とて紀州にあり。後に棒火矢を轉じて、亂火矢を製すといふ。此駒木根より分れ、貞村流・木村流・稻富流・さいつ流・田布施流・一火流・玉木流・中尾流、此等皆此流にて、大筒を言立て諸大名に仕ふ。最も此流多しとなり。されば斯く手練したる妙手を以て、一聲に打立つる程に、其音雷火の如し。火燃え乍ら彼棒走る。寄手は此兵器終に見し事なく、其當る所二三人づつ、連ねて

打倒れ、又地にて燃ゆと燒爛れ、或は半死半生、四五百人出來たり。大に驚き周章し、黑田の先陣へも數十本打込み、竹束に付きて火燃え出づれば、夥しく騷動して、思はず惣敗軍の色目立ちたり。其跡より鐵炮の筒先揃へ打つ程に、寺澤・松倉の先陣惣崩れして、山下へ逃下れば、立花・黑田も終に見ざる武器故、浮足になつて、心を怪しむ所へ、城中より見定めて、谷切の人通ひなき所に、一揆三百餘人傳ひ下りて、白旗十流松の木隱に飜し、鐵炮の上手共、手先を揃へて打つたりける。黑田殿、旗本より是を見て、本陣へ込矢打たせては叶ふまじと、鐵炮の手を下知して、打除けよと大きに鬨を上げて立向ふ。此音山谷に谺して、何方の勢といふ事を知らず。先陣の黑田・小笠原衆、後の味方の鬨を作りしを、敵の廻りたると心得て大きに驚き、我先にと山下へ捲り落されて敗軍す。此時を拔かすなと、城中より一時に鬨を上げて三千餘人、眞驀に切つて下り、塀下の木石投轉ばし、隙間もなく突いて懸りけるに、追手は念なく追返されて、元の陣々へ引行く。此時鍋島信濃守の攻口は、惣軍へ下知を傳へて、出丸のおくびなりける尾崎より、平一面に押上る。城中出丸より、頻に鐵炮を

打懸けたり。寄手一枚楯を振廻し、えいや〳〵と押上る。然る所に少し脇の平草山より、二男甲斐守直澄、手勢千人餘り、別段に押上げたり。城兵共是を見ると雖も、二萬餘騎の信濃守の手へこそは鐵炮を打懸けたれ、此方へは間遠なれば、彌甲斐守力を得て、例の紅母衣黑の駒に、白沫を食ませて攻近付く。時に城中より駒木根・鹿子木傳受したる一揆共、彼棒火矢を五六挺、一時に打つて出しければ、鍋島信濃守が二萬餘人、妙技に當つて途を失ひ、山より下に捲り落さる。是を見て出丸を堅めし勇將柄木左京・佐志木佐治右衞門千五百人、時分はよしと突いて出で、散々に駈立つる。鍋島の手勢も、既に敗軍と見る所に、二男甲斐守直澄、脇道に乘上り居られしが、是を見て手勢一千餘人、得たりやとて一揆の横合へ、面も振らず切つて入り、柄木・佐志木も、甲斐守に駈立てられ、引入らんとする所へ、深江村名主葭田三平一揆五百人、喧と喚いて駈返す。甲斐守大きに怒り、なだるゝ人衆を立直し、眞先に馬を飛ばせ、賊軍を大勢踏殺すに、上總惣右衞門・小刀部甚右衞門、何れも大力の者共なれば、甲斐守と組まんと相近付く。直澄乘つたる馬一足に踊り立て、上總・小刀部を踏倒す。

上總惣右衞門起上りて、馬の水附に付く所を、拂切に切られけるに、腹の上より片腕切破られ、仰向に伏して死に丶ける。小刀部は馬に踏殺されて、此手一番に崩れければ、葭田三平も、敵し難しとや思ひけん、帶曲輪を廻つて、二の丸の內へ逃籠る。甲斐守只一騎、出丸の小堤の上に乘上つて、當城の一番乘鍋島甲斐守直澄ぞ。味方の者、續け〳〵と下知あれども、千々輪が帶曲輪より打出す脇手の鐵炮に打白まされ、味方一人も續き得ず、乳母鍋島三左衞門計りこそ、鐵炮の手少し負ふと雖も、漸漸に馳付きたり。本丸の葦塚忠右衞門是を見て、出丸口既に破れぬ。助けずんばあるべからずといひ、千束善左衞門・四鬼丹波、二千餘騎にて切つて下る。二の丸より葦塚左內、數百騎を引いて突いて下り、甲斐守只一人を、十方より打立てけれども、古今の駿足にて、乘破り〳〵、手本に近付く一揆廿人計り、打捨てられしは、誠に打物雷光閃く影、さながら荒天神も、斯くやと思ふ計りなり。佐志木・千々輪、麁の胴勢押隔てられて、終に續く味方なかりしかば、一方を討破り、無念ながら城を見上げて鍋島三左衞門を介抱し、後陣へ引いて返されしが、猶も口惜くやありけん、平草山を

横切に進んで、追手の二の目の大合戰、御名代討死の頃駈付けて、叉兵を防がれける。天晴勇將かなと、諸軍親疎なく感じて、鍋島の荒武者とぞ唱へける。されは城中强くして、中の手筋・黑田の先手・追手の先陣・松倉・寺澤、引返し〳〵したる體に見えければ、御名代板倉内膳正、大きに身を揉み、立花父子の陣へ使者を立て、入替つて攻上らるべき由、詞を荒くして下知ありければ、立花家前度の合戰に、有馬一家城攻を仕損じ、千々輪・大矢野・葦塚等御本陣を襲ふ砌、御本陣を守護して堅めたる故、中の手の黑田、横合の合戰に追返しけるを、上使よりは、立花家へ挨拶もなく、結句黑田一家へ御褒美の詞ありし程に、立花の手の者共大きに恨みて、今日板倉殿身を揉んでの下知にても、家臣等更に命に應せず、板倉殿を恨み、此方の知るべき事にあらずとて、其返事にも、先手松倉・寺澤の者共、後陣と御定め候はゞ、立花一家粉骨を盡し申すべく候。今日の城攻も、中々手强く見え申候。鍋島の手も、今にも引返し申すべき間、當手御見合せ、然るべく候はんとなり。板倉内膳正大きに怒り、我れ東照神君より仕へ奉り、父祖の武功忠誠に依つて、今日兄弟並んで大役を蒙り、高恩身に

餘れり。況や今度大勢の中より選み出され、御名代として發向し、大軍を指揮して今日に至れり。三度戰つて城を攻落す事叶はず。何の面目あつて、天下の人に見えんや。其上松平伊豆守・戸田左門、近日に着陣して御名代を替り、大將の任を奪ひ取られ、人の下知に付かば、父祖の名を下し、子孫の面を穢す所なり。よし今生害すべきと思はれしが、同じ命を落すならば、城に向ひて討死し、忠義を顯はし、父祖の美目に備へ、子孫の光榮とせばやと覺悟極め、手勢三千餘騎、犇々と押出して、立花の陣の前を、すげなく乘拔けて、軍使を以て、板倉内膳へ、旗本を以て一攻仕る。後より押詰め候へと言捨てゝ、同音に鬨を噇と上げて、追手の矢倉の下迄竹束をかつぎ連れ、眞一文字に乘上げらるゝ。御名代の眞先馬印迄、悉く城門の前に見えしかば、扨は板倉殿、旗本にて攻め給ふぞと、諸軍上を下へと返しける。されば敗軍して歸る軍と揉合ひて、諸手混雜の最中なれば、見つけぬ陣も亦多し。元より御觸とてもなかりければ、聞傳ふべき樣もなく、漸く聞合せて、前後十六萬人、不同に鬨を作りける。凡そ諸軍打出づる砌は、戰終りにける。板倉内膳正は、先手の鐵炮六十挺・中陣

百卅丁互に立て、騎馬を眞中に乘上げ、面も振らず切つて上る。三の丸の惣大將千千輪五郎左衞門是を見て、板倉殿の馬印と見ゆるぞ。扨は惣軍、必死となつて攻上るにこそ。今日の合戰、當城第一の大事と覺ゆるぞ。命の限り働けよと、本丸二の丸へも此旨を申送れば、頓て葦塚忠右衞門此所へ馳來り、一揆五千餘人、惣曲輪に配り分けて、今度は城より一人も出づべからず。鐵炮の手を揃へて、打立つるには利あるべし。敵の備常にあらずとて、究竟の鐵炮の上手を、殘らず狹間の陰に伏せて、石弓を連べ懸けて待懸けたり。立花の先手同時に押上り、鐵炮六百挺を、一度に切つて放つに、城門も搖り傾く氣色に見えければ、氣を得て立花飛驒守、上使の機嫌直さんと、一番に乘上らんとする所を、十方より鐵炮を打立つる。立花大藏、殊に振よく働く。鐵炮の手を負ひて死生を知らず。其外の先組の方、黑烟に目の明くべきやうもなかりしにより、少々引退り、竹束の陰に隱るヽ所を、横手の山際へ、板倉內膳正、無理に軍兵を押上げて乘破らんとす。千々輪・駒木根・鹿子木等、兵を下知して、筒先を揃へて打出す。內膳正の近習小性卅五騎、馬より下に打落され、色めき立つて見

えたる所に、内膳正、今日を限りと思はれけるにや、皆朱の鎧を着し、甲は布袋頭にして、鍬形に龍頭を打つたる金物輝き、五枚重を猪首に着なし、一寸も退かず士卒を下知して、馬を横に、輪乗をかけて進まるゝ。只今投下したる大木に蹟き、乗馬ひたと腰打ちけれど、是にも恐れず乗替〳〵して、平草山へ上らるゝ。鍋島甲斐守遙に是を見て、御名代一番乘と覺ゆるぞ。若し板倉殿に怪我ありては、各後難いかゞなり。御軍法の場所は違ふとも、御咎は後日の事、見遁しに過ぎ難し。心あらん人には、續け〳〵と只一騎、出丸の下の山道を、横切に馬を馳せらるゝ。水色の具足・金の唐冠の甲・紅の母衣、一目見ても隱れあらざれば、諸軍も是に依つて、打出づる者多し。惣軍大波の如く進むを見て、内膳正殿も、馬を城内に乘付けて、大音上げて名乘らるゝ。當城討手の御名代板倉内膳正重昌、只今此城に乘上る。我と思はん者は續け〳〵と、采幣振つて進み給ふに、城上より四五尺計りなる大石、ころ〳〵轉び來る。板倉殿乘り給ふ馬の前足に、當りたるぞと見えしが、手を立てたる如く坂の急なれば、馬も人も尻居に押潰れ、板倉殿ひらりと馬より飛び、彼の大石の上に上り、

板倉重昌戰死

後を振返り見らるゝに、細川の近習、其外渡邊幸庵抔見えければ、につこと笑ひ、塀を乘破らんとせられしに、運命や盡きたりけん、大玉の鐵炮來つて、甲の布袋頭に中り、打返されけると見る間もなく、又一つ玉來つて、胸元にどうと中る。内膳正、一言といはず討死なり。骸は、渡邊幸庵が引かたげて退きしとかや。是を見て御近習十三騎、場所をも去らず死したりけり。城中には御名代を討取りたり、閻魔の廳の訴ぞ。いざや〳〵と噇と笑ふ。此討死に、右の馬を潰す音にやありけん、又板倉殿の鎧の潰るゝ音にやありけん、剛氣の人の最期は、斯の如きものにや、凄じく物の潰るゝ音にて、はり〳〵と高鳴して、諸軍の陣中へ聞えしとなり。其頃狂歌に、

重昌と名乘をしても板倉やきのどく殿の身の果ぞかし

といふて持囃しけり。其外諸軍に狂歌狂詩多けれども、皆略之。此方重昌の名乘られし事、實話なれば留めぬ。されば此日天日靜なりしに、此討死の刻に、大風起りけるなり。此時東武にも騷しき事あり。寛永十四年も暮れて、目出度春を迎へ給へば、御城には恒例の如く、御規式行はるゝの所に、正月元日六過ぎより大風頻にて、

御殿中風甚しくして、立つ事能はず。御三卿幷諸大名、皆々御禮差支へ、何れも溜所に御見合なり。四つ頃に至りては、別して戸障子の類、皆吹放して烈しかりけるが、晝頃より風治りて、公方樣出御と雖も、時刻段々遲るゝ故、焬の間にして、惣禮に御請遊ばされけり。斯る西國動亂の間なれば、今日の賀日こそ、忌はしく怪しけれ。扨焬の間惣禮は、殊に不吉なりといひしとかや。斯くて元日合戰、御名代討たれ給ふと告げ來りしかば、思ひ合せて、いとゞ驚かれける。板倉內膳正討死許多しと雖も、不意の討死と極まれども、我宅へ辭世の詩歌入りし狀など記す。皆附入る說なり。當時大久保家に此直書ある故に記す。

去年の新玉は、殿中にて烏帽子の紐をしめ、今年の新玉は、陣中に甲の緖をしむる。打つて變る世の中、如此に候かしく。

正月元日　　　　　　　　　　　　　　內膳正重昌判

板倉德丸殿へ

大久保氏は當時江戸にあり。御書院組頭にて、大久保五郞左衞門といふ。千廿四石。此狀

を一軸として家寶とす。見る人無慙の思をなす。是馬上より書きて、子息德丸へ送られしなり。されば內膳正重昌の親板倉伊賀守は、元は松平主殿の家來にて、板倉八右衞門弟なり。始は三河に、小庵を以て住みし禪僧なり。本田佐渡守、鷹野の時分、よき者なりと見出して、齋坊主に呼び、後に還俗させて、佐渡の金山奉行とす。金山は盜賊夥しき所なり。然るに此伊賀守奉行となりし中、僅に二人を切り、其中一人を惜む。佐渡守其心を察して、京都諸司代となす。人を殺す事を大切にせしは、板倉より始まる。奉行の捌名譽なる事、天下沓知る所なり。且亦大坂の陣起らんとする時、板倉伊賀守、淸韓長老鐘の銘に難を入れしは、衆將のよく及ぶ品に非ず。板倉もと禪僧にして、深く禪意に賢しく、能く其理を知ればなり。其頃の武人、何ぞ心付く所ならんや。されば禪味の一路、代々に傳へて、此狀の文中も、詞多からずして意味深し。虛空を斷絕して、白日に向つて冷笑し、吹毛劒の一句を吐き盡せる體、言外に著し。されば此討死、諸家の評區々にして、多くは短慮より、麁忽を誹ると雖も、實は其場を得し事あるにや、子孫七千石加增を蒙り、今に中國の一城主となる事

は、後卷に委し、之を略す。

南島變亂記第十六舉

南島變亂記第十七

蜃樓の說の事并高月勘兵衞が事

旣に追手の合戰破れ、御名代板倉討死と呼ばはりければ、麓の諸軍大きに周章し、たまたま取靜めたる陣も、只大火を打消したる如く力落して、呆るゝ所へ、千々輪五郞左衞門・大矢野作左衞門、二手に分れて切つて懸る。板倉の一陣大將討たれ、散々になりしが、立花の一家手を盡して防ぎ、取靜めて引退く。葦塚左內・布津村代右衞門・小川吉藏・木庭久兵衞、一勢々々、引分れ〳〵切つて下る。殊に葦塚忠右衞門、諸手に向ひ討つて下る勢をなし、女童等に、城上にて太鼓を打たせて、諸軍は皆木戸を開き、坂中迄下り來れば、諸手持口の隊將、皆我陣を放れ得ず、鍋島甲斐守さへ、家臣多作美作忽ち討死すれば、父の陣心元なしとて引返されければ、一揆競ひ進み、立花・板倉

も、多く崩れて引きにけり。中の手の一揆、競ひ懸りて進む體に見えしかば、寺澤・松倉の兩陣、加藤源左衞門・關善左衞門討死すれば、本陣にも溜り得ず、遠く向はんとする所へ、高月勘兵衞といふ浪人ありしが、本陣板倉殿に賴り居りけるが、彼體を見て、松倉・寺澤の陣へ來りていひけるは、今城の勢大なれども、本陣數多備あり、且黑田・小笠原皆陣を押出す。而も細川の一族、未だ合戰の手に合はず、賊必ず長追すべからず。諸手へ皆切つて下る勢見すれども、賊の智謀を計つて、暫く陣の變を見るなり。必ず空しく勢を張る計りなるべし。今此を追ひ給ふ時は、悉く不覺の名を得給ふべし。今兵を揃へて切つて懸り給はゞ、賊の引取る所へ行懸り、不思議の功あるべし。今度の功を以て、在陣中の恥辱を雪ぎ給へといひければ、三宅藤右衞門尤なりとて、松倉十兵衞に示し合せて、高月勘兵衞、眞先に駈入り鎗を入る。勘兵衞見積の如く、一揆合あつて長追せず、諸軍色めく其間に、引上ぐる時行合つて、追討に駈亂し、首數十一取りし。一揆の小將木庭八兵衞を、寺澤の手へ討取りけり。されば寺澤・松倉の恥辱は、高月勘兵衞が淸めてやりしとぞ、軍中の評判なり。此事靜

つて、寺澤・松倉身上果てしかば、高月浪人してありしを、松平安藝守殿淺野家は、小松黄門公の聟なれば、高月を、黄門利常公に、千石にて御召抱へ候樣にとの御口入なり。加州利常公、其手柄を問ひ給ふに、島原にての働の由御物語候へば、利常公御笑ひなされ、天草は浪人共が、百姓原をたぶらかしたる一揆なり。皆亡したりとも、我家の功臣に並べては、五百石にても高き者なりと御意。加州家中の諸士は、有難き事に覺えしとなり。其後高月勘兵衞加州に奉公して、才覺なる者故、殊の外宜しく、一年江戶御詰の時、隅田川にて、小物三人惡行して打擲に合ふ。其時加賀屋敷の者と名乘る故に、御聞捨になされ難く、此高月勘兵衞遣され候所、悉く詮議して公邊へ訴へ、隅田川の者十三人迄、御仕置になる。是より出頭して、御近習相勤めしに、其頃は高月勘兵衞とて千石なり。承和元年四月、信州丹波島にて、木村彌兵衞と口論して、勘兵衞は振よくして恙なく、彌兵衞は首尾惡しく、切腹仰付けられし。是より家中何角風說惡く、其後勘兵衞の役料の事に付、高月は御暇願ひ、京都へ遁れ隱居して、道也と改む。されば此高月が働きにて、今日城兵の首を見たる計りなり。葦塚忠右衞門

よく計つて、陣を纒めし程に、城兵討たるゝ者なし。細川の陣には、あはれ城兵出でよ。道を横切つて戰はんと陣を出し、黑田・小笠原、皆金鼓法令悉く定めて、打破りて附入にせんと待懸けしに、敵も其色を知つて、早くも引取りしなり。兎に角難かしき城中の者共なりと、寄手の面々呆れ果てたり。されば葦塚忠右衞門が謀略のみにもあらざりき。此に一つの奇計あり、其事を見れば、長々しけれども、暫く爰に記す。關原軍記に曰く、土方勘兵衞・大矢野修理、故ありて佐竹氏へ御預人なり。上方筋石田が亂聞え、家康公、小山より引返して上り給ふに、此兩人も供奉して上る。然るに大矢野修理、九月十五日朝、淺野幸長の前へ來つて申すは、小山以來御介抱を以て、御備を借し給はり候上は、御家來と申合せ、似合の走廻りをも仕るべきと、福島の先手乘出し、浮田勢の敗軍に乘込み、よき敵一人、馬上にて退くを追討つて、鎗にて突落す。大野が家來米村權右衞門、走り寄つて首を取る。則御陣所へ持參す。御免なされ、道作是へ〳〵と仰せ候て、御床几の際へ參り候へば、骨折り申すは、最早先手へは無用なり。是に候へと仰にて、岡江雪と一所にありて、御勝利の御祝も、

一同に申上げしなり。此討取る首に、色々に玉を飾りたる見事の珠數をかけてありし。米村權右衞門、是は餘り見事なりとて、取つて置きけるに、其後傍輩の中に、切支丹宗門の者あり、則是を見て曰く、我々宗門に用ふる珠數なり、賜はれとて貰ひけるが、在京の中に、其者切支丹の寺三條油小路へ參詣し、住持に見せければ、住僧曰、此えたつは、先達て浮田殿内高知七郎右衞門、强つて所望故、與へたりし物なり。夫迄此敵の姓名知れざりしに、此者歸つて、修理にも傍輩にも此趣を話す。後に内府公傳へ聞き給ひ、修理が先頃取りし首は、浮田衆の高知七郎右衞門なる由。さあらば其時、首をも見べきものと仰せられしかば、修理首一つにて、三度の御稱美に預かりけると、人皆申しけるといふ。高知は、西國にて隱なき剛兵なり。彼珠數の先に、ありうゆるといふ珠ありて、後京都の商人、高價を出し買ひたりといふ。此珠、遠きを映す德あり。今變人高貴の人は、さし環とて、此の珠を琉金にて、龍或は三足蟾などに作りて、中高指の元にはめて道中に出づ。手に血下らず、指自由を得て、又遠きを映す德あり。此珠へ映して、先へ行く人を知り、後より來る友を待つ。最も軍用に

埋伏を顯はし、追手を知る。是れもと蜃の腹中より出で、蛤の眞珠の如し。凡て珠氣ある物を、映す事を司る。されば原の城中にも、不思議に森宗意是を所持して、葦塚に與ふ。故に常に是を城上にかけて、敵陣の異變を知る便とす。蜃は、螺貝にも性通うて、軍中の具に用ふべし。必ず蛤の城といふも是なるべし。されば蛤の城は蜃氣樓にして、乾達婆城・盬氣樓・海市などいふ。日本には三ヶ所あり。越中の魚津・勢州桑名・藝州嚴島なり。年により月により、少々づつ違ありと雖も、大樣變らず。藝州にて、近里俗に島遊びといふ。第一人家・岩・森などを映す。勢州にては、里俗貝のんきといふ。大方は松原・人物、或は引馬・臺傘・立笠の類多し。城樓は稀なり。城の體先に出で、人物・森・道・橋抔の、後になる事もあり。人物先にして、樓閣の如きを映すもあり。又越中魚津にては、里俗狐の森といふ。多く城樓の景色を出す。松原橋など嚴然たり。長高き人物、並び行く事もあり。樓に矢狹間開けたるもあり、塀の上より吹下したる松なども見える。是れ思ふに蜃の氣吹きて、遙に遠き所に、影を縮めて映す類なり。日本三所と雖も、當時嚴然として、年毎に映す物は、越中魚津

にあり。磯海を第一とす。其地は向ひに登州山を受け、三崎迄押包み、海中に長山列々して屏風の如く、又黑崎あり、是又能登の中なり。小隅山といふもあり。石動山を第一の高山と見る。景種々に變じ、山々皆袴腰の形となる。夕陽に多し。朝日にもあり。平時にはあらず。風强ければなし。多くは二月より四月迄に至る。然れども正月元日にも、見る事ありといふ。五雜俎にいふを見るに、土地の名、景の體、不思議に同じもの多し。故に爰に記す。

登州海上有蜃氣、時結城市樓閣同上。八面山見、斜曛疑燿、磯嶼炯籠如。若樓臺錯綜、若城郭周圍。俄而人馬縱横、又俄而旌幟掩映、出歿無定變換不常。是曰海市。

億有長山島有黑島。

其餘は略す。國人越中にては、喜見城といふ。又海の市ともいふ。是蜃氣、景を縮めて映すに決せり。七十二候に、雉入大水爲蜃といふ。夫れ山雉は怪ある鳥なり。夜は大珠に變じ、晝は飛ぶ事僅にして人を迷はし、終に深山に導き、狼虎に與へて其血を吸ふといふ。是皆近きに縮めて、人手に近付き、形を見する術ありてなり。歌

に、山鳥の尾口の鏡といふは、己が尾を曲けて、雌鳥の寢姿を映すと聞く。是映す德あるべし。されば山中に卵を生じて、若水に落す時は、必ず螺貝となる。故に螺には、必ず雉子山鳥の班あり。螺貝の、山を拔いて近く聞ゆるもあり。是れ道を縮むるの理に同じ。鐘は、音は山を廻りて聞え、太鼓は山を越えて響き、螺貝は山の土中を拔いて聞ゆといふ。螺、終に雉の性あれば、山を破つて出づるといふ。されば螺ある山は、必ず縮む。地の怪あり。縮地とは、三二里も隔りし所を、時あつては手の屆く樣に見する事あり。今加州倶利伽羅山に此怪あり。（三州奇談に此事を記す。）昔は加州金澤卯辰山にも、此怪ありしといふ。山破れて後は、此怪なく、雀入二海中一爲レ蛤、雉入二大水一爲レ蜃といへば、蜃の氣又縮地の德ありて、物を映す事必せり。其映す所、必ず百里二百里ともわかるべからず。唐土に、千里を隔てたる塔を、人家の柱へ、倒に映したる事も見えたり。其間に隔てたる物の映らざるは、造化の理たれば、計り極めじ。されば此寫珠、日本へも昔は渡ると雖も、僅十町の間にして、遠く映らず。南洋の山にして、うゆるは鳥なり。蜃氣の說、山鳥の怪に同じき事決定なり。されば原城

にありしありうゆるの珠は、森宗意の親森長意、未だ大坂の城繁榮の頃、蠻國より色色の寶器を送りし中に、利休、呂宋國の茶入を愛し、其時此珠を送り、長意は醫者なれば、乞請けて所持せしを、宗意に傳へ、原城にありしなり。原落城の後は、其行く所を知らず。

松平・戸田着陣の事并天草四郎母糺明の事

正月元日合戰終りて、板倉內膳正討死ありしかば、諸陣震動して、安き心もなければども、細川・鍋島・黑田・立花・小笠原等、陣々を取靜めて、法令嚴然として、金鼓節を守る。されども城中には、御名代こと討死したれば、軍々さゞめきことぶけば、寄手は何角に心怯れ、先づ此旨早打を以て江戶へ告げ、近日には松平・戸田着陣と聞ゆるを、首を延べて相待ちける。斯くて後松平伊豆守・戸田左門兩御名代、一萬八千騎、日夜道を急ぎける。然れども寒風の中故、海上陸地人馬滯り多く、其上諸國の御附使者幷見舞御人數等、日々相重なり、漸々正月朔日、豐後府內に着陣あれば、軍勢三萬に

松平信綱戸田氏西島原に着陣

も餘りぬべし。是より陸地を二手に分け、進發あるべき所、早馬敷波打つて、正月朔日巳の刻、原の城に於て、御名代討死と告げ來りしかば大きに驚き、晝夜道を急ぎ、揉みに揉んで馳付けらるゝ。正月四日の夜、島原高久の城迄着陣なり。正月五日より、御陣定格別御申觸あり、且又道々より御分別にやありけん、大札數百枚御調なされて、早速在々に立てらるゝ。其趣は、今度國民困窮に付、一揆取結ぶの條是非に及ばず候。其親類近き緣者なりとも、耶蘇宗門を相離れ、一揆に組いたさゞるの輩は、何の御構も是なく候條、安心仕候て、農業等常の如く相勤め申すべく候。飢に及び申候に於ては、御救米下さるべく候。若し城中と通路の者有之に於ては、一揆の十倍罪科たるべき間、耶蘇一味の者等早速聞出し候て、御褒美に預るべき事に候。或は落城已前耶蘇宗門を離れ、陣門へ出づるに於ては、父母妻子永く御免なされ、忠節により、本人へ褒美下さるべく候。縱ひ頭分の者なりとも、一揆一味の志を離れ出陣に於ては、悉く御宥免之あるべき者なりと、或は讀聞かせ、又は觸流しければ、城中

も、今度の御名代の寛なるさまに、大きに痛み見えける。始めの板倉殿には、進物書狀を以て怒らせけるに、今度は何となく城中味方同志も、心を置く樣なる體になり、あら難かしの今度の討手やと、頭分の者共心を惱しける。城中には中々撓む色なく、心も變ずる者もなかりしかども、城外の便宜は、是より不通に切れて、忍の出入も能はざりしかば、城中の大きなる惱みとはなりにける。松平伊豆守殿は、着陣より、諸手の戰功、罪の輕重、軍中法令の事のみにして、攻口軍術の沙汰はなかりけり。武に勇める者は呟き、軍場に、又江戸の評定場の出來たるぞや。何事もなきに、去年より此方、御吟味のみ打掛り、斯く顯はれて向ふにある、原の城は捨置きて、見ぬ顏なる事は、軍を知らぬ伊豆守殿を、天下の智慧者とは事可笑しと、いふ者共も多かりけり。板倉殿のいら〳〵、伊豆守殿のゆる〳〵とて、諸人評判、天地懸隔なり。其上長崎始め諸手津々浦々迄、御指圖殘る所なく下知せらるゝ。されば長崎は、第一の舟の津なればとて、行々迄の爲に、制札に用ひらるゝ。其寫略之。是より後寶永五年十一月九日、薩摩侯より蠻客一人を送る。羅馬伴天連といふ。南京、日本へ、又々

法を廣めんとの事なりとて、伴天連名は伊多利爺、國はしよあんといふ。年は四十計、髪黑く鼻高く、衣裳は下に四つ目の紋あり。花色木綿着物なり。脇差金拵へ、覆輪に好みと見え、あんたまりの佛一體、世界の圖一枚、書物八冊、内一冊は日本通用の詞、又二冊は常に身に添ふ。いんすかけめ九十目、元の字小判廿兩・金四十四包、金の針金の内に、細き十文字合せ目あり。早速御返しあり。右の後再び伴天連渡らずといふ。然るに松平伊豆守信綱は、秀才の人なれば、先づ地方の政事を聞き、遂一に聞屆けられしに、今度天草四郎が親幷に妻・老母、細川の手に生捕り、長岡監物が裁判として、若御尋の事もやと、陣中へ召連れ來る。伊豆守是を究竟の事なりとて、渡邊小左衞門幷母妻三人を、詰の白洲へ召出されて後、諸大將役人等皆詰居させ、伊豆守則小左衞門を引出し尋ねらるゝは、今度汝が忰四郎、逆賊の大將と聞及ぶ。然らば其方根元を知るべし。切支丹宗門信仰の一編の事にや、又外に志もあるにや、又四郎が年は何歳なるや、委細包まず言上すべき由なり。小左衞門申しけるは、先づ以て拙者儀代々淨土宗門にて、耶蘇宗門は嘗て以て用ひず、手前代々福分に候へば、

別して慾心の思立に非ず。一揆の根元は、天草より事起り候。悴四郎事は、伯父甚兵衞勸に依つて、今度惣大將に紛れ御座なく候。親子の間に候へば、遁るゝに道なく候段、兼て存知罷在候。尤四郎、年は當十七歲にて候。又私儀兎角の返答申上げ罪を遁るゝ所存、全く御座なく候。別に此事、隱し申す事も、又他に申上ぐべき事も是なく候とて、再び詞なし。何程御糺明あつても、目を塞ぎ無言なり。又小左衞門が老母、今年既に八十歲、子供夫婦が繩目に目昏れて、暫く氣を失ひけるに依つて、伊豆守殿、是にては道付かずとて、老母と妻とは、繩を許し給ひて、伊豆守、則妻に尋ね給ふは、汝が悴四郎事、未だ年も行かずして、今度逆徒の張本人たる事不審なり。併し若輩者なれば、深き所存もあるまじきなり。今降參するならば、親子三人命を助けて元の里に返し、以前の世帶を遣すべきなり。城内の者共構はずして、四郎只一人出城すべき旨、矢文にて申入るべし。狀壹通相認めべきやとある。彼女大きに喜び、扨々有難き事にて候。成程然るべきやうに申入るべき儘、筆紙を下され候へと申しければ、伊豆守殿も、其外在合ふ諸人、是は一段能き所存やとありければ、夫

小左衛門大音上げ目を開き、未練千萬なる女が心底かな。今城中の者共、四郎を始め、必死を定めて居るらん。何と迷ひ取る事あらんや。誠に七人の子はなすとも、女に心許すなといへり。汝、四郎が大惡魔なるぞ。迚も助かるべき命には非ず。不所存の女かなと、涙を零して白眼みける。女房は少しも構はず打笑ひ、小左衛門殿は男なれば、飽迄武勇を磨き給へ。此方は失ふとも、四郎と老母の命を助け、目出度世に榮えんと思ひ侍るぞやとて、片脇より文細々と、二重に封じ差出し、懇に相認め、定めて出城降參申すべし。此封の儘に遣し下されといふ。伊豆守殿大に喜び、是一段の事、さり乍ら内を改め遣すべしと、彼文を役人開き讀ましめ給ふに、先づ手跡美しく、其文に、

日頃の身持、あらぬ事のみ思ひしに、今は早殘るべき道にてもあらず。寄手大勢取結ばるゝと聞く上は、伯父甚兵衛殿とも能々申して、必ず神妙に人々をも勇め、相共に最後し給へ。母上も小左衛門殿自らとても、今に露の命永らへ居たれども、終には同じ道、冥途黄泉にて、再び對面すべきにて候。親子一世と申せども、何

とぞ〳〵さはあるべき。只一蓮を賴みにて、逆徒の中にも大將と聞けば、親の身にしては喜ばし。偏に〳〵最期の程、心元なくこそ。返す〴〵後れ給ふべからず。穴かしこ。

けふ　　　　　　　　　　　　母より

四郎殿へ

と書納めてあり。實にやいふ、少しきに深き諫め、心を籠めて調へけり。伊豆守を始め、滿座の人々大きに呆れ、女には、さて〳〵珍らしき心正しき者なりと、暫くは感じ入りけるが、伊豆守殿仰せけるは、汝當々彼宗門を嫌ひ乍ら、何故四郎に強く意見も加へず、斯く天下の一揆を催し、剩へ大將に迄なせしぞや。女聞きて、是は殿の仰とも覺えず候。我々賤しき者乍ら、相應に田畑抔も持ち、代々金銀不足なし。然る上は只一人の子を惡黨に組せよ、百姓一揆の大將になれと、申す親の候べきか。縱令十府の菅菰の上、如何なる麁食の水を飮んでも、親子一所にあらば、喜ばしかるべきに、是れ浮世の人の習なり。然るに四郎、いつの頃よりか、友達とする所は天草

の伯父、縁につれて、葦塚・大矢野・千々輪なんどいへる人々と打寄つて、朝夕武藝修行の上に、何角に付け心猛々しく見え候故に、四郎へ意見を加へ、誠に何の不足もなし、家にて心の儘に遊び候へ。由なき事仕出して、父母に辛勞を懸けなと、常々諫め申して候ひしが、斯く迄の事とは存ぜず候。殊に未だ幼年の者に候へば、何ぞ彼宗門歸依荷擔の心あらんや。友達とする人々こそ、今こそ浪人にて困窮の上なり。昔は究竟の武士と承る。然ればさのみ惡しき事もあるまじ。我子の親しき友達と思へば、四人の衆も隨分勞り申候。其後暫く遠ざかりしが、思はず今度の一揆起り、我子乍ら、四萬人の大將と聞く上は、同じ惡逆の中にも喜ばしく、其上序々の軍に打勝ち、此上は滅亡するとも、心に思ひ殘す事なし。只同意の人々と一所に、潔く死ねとこそ思ひ候へ。併し月にも花にも、只一人の子の、而も利發なり器量者と人に譽められしを、死ねと勸むる親心、切なる事に候はずやと、涙瀧を流して伏沈みければ、座中一同に、惡事は外になり、不便の者や、一揆とは思はずと、何れも感涙あれば、伊豆守殿も、由なき者を引出し、詮なき暇入りたりと思はれければ、急ぎ本の如く禁獄

さすべし。落着迄は、細川家の預りたるべし。此者は下郎乍ら、大切の四人なり。大事に致すべしと申渡されける。其時彼女、今一應御前へ申上度事ありと、居直りて申しけるは、伊豆守様と申せば天下の奇才、御老中日本一の智慧者なりと、國外れの田舍迄、申觸るゝが、見ると聞くとは違ふ者なり。天晴あなたの知行を、我子の四郎に領せさせたらば、又世に並ぶ人もあるまじきなり。只今殿の御言葉の内に、下郎と仰せられしは、一揆の頭にもなりし身の、殘念に候ぞや。自らが父は天草甚兵衞と申して、元來安藝の國中村の城主阿曾沼中務大輔と申す者の末にて、夫より七代の嫡流にて、四代の間は、天草を稱號と仕る。氏は秦氏なり。古今武家の盛衰珍しからず候。又父方は渡邊小左衞門、長崎より原村へ入る人にて、本國は平戸の者にて候。渡邊流にて替月本名にて、渡邊源太夫安が支流なり。四郎事は、父方渡邊母方天草にて、由緒正しき儘、賤しめ給ふべき者にあらず。其賤め給ふ四郎こそは、只今四萬人の大將にて、原の城に籠り、九州の諸大將數萬人集り、度々打勝ちて、御名代板倉殿さへ討死あり。城攻三度、皆敗軍し給ふと承る。今に城中は、鐵石の如く堅

へ候ぞや。人の恥が我恥、思ひ給へ、今天下の大將達、大勢寄り給うて、此城一つ攻落すに術なくて、一人の母を賺して、四郎を生捕らんとは。切て手を失ふたる有様ならずや。斯くいふ女の端なき乍ら、下郎といはれし口惜さ。我子は下郎にもせよ、各樣は、扨も結構な上郎方の敗軍やと、憚る所なく言立てしかば、一座の不首尾、面々一言もなし。又荒立てなば、益惡言をいふべきやと、各目を見合はせ、開かぬ顔にて、細川の手へ渡されける。

南島變亂記第十七畢

南島變亂記第十八

釣井樓の事并山田右衞門返忠の事

斯くて兩御名代は、御目附・御横目、其外諸大名を會合して、此原の城堅固なりと雖も、諸家の武士多く取卷き乍ら、空しく食詰も、餘り無念なり。所詮此儘打捨て置くべきにもあらず。近く一攻あるべしと、全く其用意の外他事なし。前に棒火矢といふ火藥にて、人損じ陣中亂れ、其上陣小屋の燒くる事もやと、此用意專なり。諸手の次第は今迄の如く、追手は黑田一家二萬八千人楠山口へ、細川一家三萬五千人、中の手は小笠原一家一萬五千人、相續いて立花父子寄合組子二萬人、出丸口は鍋島父子二萬五千人、水の手寺澤・松倉に有馬一家、御名代松平伊豆守・戶田左門此陣を守護して、毛利・相良・水越一黨、海の手は島津勢、長崎の堅めは、大村・松浦、又宗對馬守は自

信綱釣井樓を設く

ら國の端に押出す。其外在陣の次第、筆を取るに遑なし。伊豆守信綱は、萬事に念の入る事を好んでければ、信綱工夫あつて、城内の虎口・持口やう、又軍兵の多少・兵糧の體・鐵炮の間配、委細に見屆けずしては、攻め難きものなりとて、俄に諸大名の中へ役に當てゝ、土俵數萬俵を出させ、役歩を割渡し、又近邊の百姓を選み催促して、城の外六七丁間に取結うて、俄に山を築き、人夫一萬人計、夜を日に繼いで、傍の田土を運び、段々築立て、廣大に高くして、夥しき人歩を入れて、忽ち見上ぐる計の高山、俄に嚴然として出來し、偏に神仙出現の樣にこそ思はるゝ。扨彼の山上に井樓を釣立て、其眞中に、細川殿御座船の帆檣、長さ卅間ありし杉の木を立て、釣井樓を引上る。造作莫大なれ共、大軍故早速に成就せり。抑此釣井樓といふは、三尺四方乘物の如くにして、四方鐵張にして窓を明け、物見を付けて、轆轤にて引上ぐる。其中に人ありて、敵の陣を遠見するなり。高燈籠の如く、旣に築山釣井樓成就の上、此内に見定むる人を選みて入るゝ。幸ひ信綱の近習の內に、才勝れ、軍法をも大略に合點したる者ありければ、是を釣井樓の內へ入れて見屆くべしと、筆紙等用意して、中に

御名代なり。是に人が乘入り、何の詮かあらん。併し彼釣井樓の中の人を打殺し、敵の肝を取拉ぎたき由、例の鐵炮の名人駒木根父子を呼んで打潰し、釣井樓迄の間數を積り、鐵炮にて打落し、名譽を敵に知らしめ給へといひければ、駒木根父子、心得しとて、追手の城戸を下りに、椎の木の茂りたる所あり。彼の椎の枝の少し籠りたる内に上り、釣針を以て是を見るに、此木の上より百五十間程と積り、拾十匁玉に五德薬を籠めて、兼て待受けたり。五德薬といふは、焰硝九と山すか硫黄二分。是二九二一といふ秘法なり。旣に寄手、釣井樓を釣上る節、駒木根椎の木の上より、火蓋を切つて待懸けたり、寄手斯くとは夢にも知らず、竹束を打揃へて、築山の上に大勢集り、ふらり〳〵と釣上ぐる體、軍用とは見えず、慰の如し。斯くて加減よく釣上げたり。此時城中より、麓々に向ひて鐵炮を放つ。すはや城より馳向ふと、陣々用意をする。此紛れに駒木根は狙ひ濟し、井樓の窓より顏を出して、遠見する所を打つたりけり。誤たず眉見を打抜かれて死したり。遙の高みなれば、下には曾て是を知らず。駒木根は木より忍びて下り、城に入れ釣上る。城中には築山を見て、葦塚忠右衞門大に笑ひ、此人も武には馴れざる

り、十分仕舉せ候と、靜まり返つて居たりける。去程に漸々半時計りありて、今は早城中殘らず見盡したらんと、下へ下せと下知ありしかば、打寄つて引下す。段々早二三間も下したる時、使番聞番集り居て、聲々に樣子いかにと尋ぬれども、一言の返答なし。不思議なりとて、引下して見てければ、こはいかに、眉間を打拔かれ朱に染みて、早疾く打殺されたりと覺えて、手足冷固まりて、苦々しき體なり。こはそも魔所の業にやと、大きに驚き、急ぎ本陣に連れ歸りて、此由を申上る。伊豆守殿不與乍ら委細聞屆け、呆れ果て居られしが、暫くあつて、扨も鐵炮の上手共の居る事ぞと計り、申されたりとなり。いらざる事を仕出したりと思はれたるにや、再び申付けらるゝ事もなく、大勢の人歩諸材木打捨てける、凱陣迄も、此井樓の事沙汰しては、伊豆守殿の廻り遠き分別をぞ笑ひけり。北條安房守に、後或人此一事を尋ねしに、是は六つ指なりと答へられしとなり。扨爰に城中十二人の評定頭の中に、山田右衛門といふ者あり、當時中の手の矢倉預かり、一方の大將分にして、組下の百姓五百餘人あり。元來天草上津の地侍名主にて、大村の長として、大福裕の者なり、學問道

學の人、文筆の達者にて、老母に孝を盡し、先九ヶ國に當時稀なる人なりければ、島中相共に、貞信の人なりと是を用ひ、彼の親に孝なる事は、唐土の曾子山谷ともいひつべし。耶蘇宗門などに傾く人にては嘗てあらず。されば島中擧つて一揆する故、是非なくも組せしが、滅亡も旦夕にあるべしと覺悟して、同國達池といふ所へ、老母に妻を添へ、預け置きて、能く孝を盡せといひやりけれども、猶心元なく、終に今度の制札の文によつて、返忠の事を思立ち、其功はならずと雖も、四萬人の內、只此山田親子三人が、不思議に命助かりけり。此人孝行、近代の書にも出でたり。老母の僅の志を養はんとて、寵愛の妻子離別迄の事あり。事長き故略之。他本に付いて見るべし。

山田右衛門返忠

扨山田右衛門城中にありて、熟と老母の事を案じ煩ひ、何卒助けたく思ひ、此度の逆徒も、遲いか速いか、是非滅亡眼前なり。自分は死すべき覺悟勿論なり。老母の命を助けんときつと思付き、密に一通の矢文を認め、或夜是を射出したり。則小笠原家の陣の前に落つ。彼文を見るに、寄手御軍中へ、原の城中より山田右衛門進上と書付けたり。依つて小笠原右近將監、是は何にしても味方の善事なるべし

と、急ぎ御名代の前へ持出でて披見あり。

乍レ恐謹で奉二申上一候。城内一揆十二人の內、中の矢倉の大將分五百人の頭天草島上津浦之司山田右衛門、御忠節可レ仕趣、左之通書付奉レ捧候。

今度逆徒の事、私儀從二最初一耶蘇宗門曾て信用不レ仕、代々禪宗にて御座候所、天草一揆頻に蜂起、不レ及二是非一、當分の急難故に一味仕候。其實は一人の老母幷妻事、同國蓮池に聊か由緣の者候而（所書在之）差遣置候。尤老母を人質に差上申候。彼が命助け下され候はゞ、則相圖の日限相定、御下知次第覺悟仕るべく候間、城乘なさるべく候。其節私持口を開き、軍勢を城中へ引入れ、早速落城可レ仕候樣に、相働き申すべく候。私儀助命の儀は、願是なく候。老母一人御助命下され候はゞ、右の忠節仕るべく候。御返答に依て御下知蒙り、其用意仕るべく候。早速中の矢倉の筋へ、御返答待上候已上。（別に狀あり。）

伊豆守殿聞召して、是一段の事、謀略の者共多く籠るなれば、一應にては極め難し。急ぎ蓮池の老母を召捕り糺明し給ふ。伊豆守殿直に相尋ねらるゝは、山田右衛門が

母は汝か。且山田事、切利支丹を信じたるかといはるゝ。母答へて申すは、悴右衞門事、耶蘇宗門にては御座なく候へ共、妾が常に彼宗旨を信心申候故、是非なく一揆に組仕候。悴を御免候はゞ、妾早速ころび申すべく候。彼が罪は、母に起る事に候と、子をかこふの口上なり。伊豆守殿又曰、然らば其方、切支丹の譯を知りたらんと、一々尋ね給ふに、宗門の唱へ事さへ何の埒もなく、元來伴天連も伊留滿も嘗て覺えず。此上は山田が返忠實定なり。伊豆守殿、諸將を集めて申されけるは、既に時節到來して、城中より斯樣の返忠の者あり。決して落城近きに候と、彼の矢倉文を披露して、凡て城攻の事、古來より手筈を取つてするに極まる。明後晩は、正しく破敵の日に當る。則此旨然るべし。前々より、斯くの如くの日にこそ軍すべきに、城の守堅固なる所へ乘懸け、無謀の軍、沙汰の限りの軍術なり。今より我下知を伺はるべしと大言して、彌寛永十五年正月十二日の夜、城攻と相定まる。右の趣山田が方へ、老母が狀を添へて矢文を射返す。日暮頃、人顏の夫か是かと見ゆる頃、中の矢倉を目當にと、小笠原右近將監の中、精兵と聞えし者に射返させられしに、逆徒今暫の運や

强かりけん、此矢文思ふ所へ屆かず、少し此方へ落ちたり。城中には、今度寄手より城兵を招く高札立てし後は、葦塚忠右衛門萬事に心を付け、寄合浪人の中、心腹の者を選んで十三人、夜廻りを増したりしに、此夜此手の番は、毛利平左衛門なりしが、此矢文を忽ち見付け、密に取上げ改むるに、敵よりの矢文なれば、急ぎ走り歸り、大將四郎太夫が前に差出す。四郎時貞一覧して大きに驚き、密に軍師葦塚忠右衛門を始め、腹心の面々を呼集め、件の矢文を披露して、此事いかゞすべきと評定する。時に葦塚忠右衛門が曰、是城中の一大事なり。山田一人は惜むべき者に非ずと雖も、此事露顯すれば、諸手の物頭、大方山田が類なれば、忽ち心々離散し、氣を置合ふになつては、此儀一日も怺へ難し。以の外大切此時なり。只我詞に從ひて、我々が差圖を守るべしと、能々衆に示し、先づ何氣もなく山田を呼寄せ、犇々と圍みて、葦塚いふやうは、いかに山田殿、貴殿の隱謀已に露顯せり。今は殘らず白狀せられよといふ。山田もさる者にて、夫は雜談にて候べし。何とて某左樣の所存あらんやと、さらぬ體にて居たり。時に四郎、此矢文を取出し見する。山田氏、此上は一言も申すべから

ず。天命の盡る所、全く命助かる所存に候はず、母の命を助けんと思ふ計りなり。此上はいかやうとも計らひ給へと、死すべき命少しも恨なしといふ。四郎を始め一座の面々大きに怒り、近頃憎き山田が心底なり。見懲の爲め、彼が一族殘らず召捕つて、逆磔にすべしと罵り騷ぐを、葦塚大きに制し、凡そ軍法は、其次第に任さるべしとの約束なり。先づ能く心を靜め給へ。面々の了簡の通、山田を殺害して、敵伊豆守に鼻あかせ、笑ひ嘲らんは心地よしと雖も、夫は對々の軍の事なり。今日は大きに夫とは替れり。仔細は、今山田を成敗する時は、彼が組下五百人、敵となるべし。殺し盡しては叶ふべからず。山田常々慈悲深くして、親しき百姓多し。又渠が居村上津は、此度の大事を擧る源なり。一家親類に、彼が下司の者多し。山田を殺害せば、目の當り敵となる者多かるべし。先づ中の手虎口を持ち、大將には毛利平左衞門・四鬼丹波兩人を入替へて、別の人數七百人を斥けて、山田が五百人の組下は、赤星内膳が組に入替させ、扨申渡す趣は、山田右衞門事、本丸にて大將四郎太夫時貞の軍談相手に賴み、師範の列に付けらるゝ條、已來汝等は、赤星内膳が組に入替させ、下

知に從ふべき旨申渡し、五百人の者共、其外山田が彼家の子抔も、いかさまにも山田右衞門殿の人體學文、九州にも雙なき人なれば、大將の師範には尤なる事なり。五人の大老、赤星の組下に入る事なれば、さもあるべき事ぞと、此一手一人も疑はず。中の手矢倉の組下代つて、城中忽ち靜まる。斯る大變に當つて、少しも動轉せざる葦塚忠右衞門が智謀、感じても又餘りあり。山田右衞門が有馬の牢とて、城山の後谷合、嚴しく拵ひて、其中に禁獄し、手伽足伽首伽を入れて、少しづつ喰物を與へ、打込んで置きたり。然れども孝行の德、天に通じたる故か存命して、原落城の後、不思議に命助かり、親子三人、本の如く居座りける。去程に城中には、山田が事靜まりしかば、葦塚忠右衞門、さらば返忠して、敵を引入るゝたばかり返書して、城中へおびき寄せ、快く討殺して、智謀立する松平伊豆守に肝を潰させ、再び正しく向うて、城見せぬやうにすべしとて、先づ赤星内膳は、小細工能くて、手跡も能書なれば、山田右衞門が書捨てしを取集め、赤星に與へ、同筆と見ゆる程に返書を作らせ、文法は、小笠原殿の御取成忝く候。萬端吹擧に預り度候。老母赦免の儀、返すぐ\も有難き

事に候。左候はゞ、彌正月十一日亥の刻を限りに、御勢を寄せられ候へ。火の手を相圖にして、中の手の城戸を開き申すべく候と、懇に返書して矢を射返し、扨城中の手配を定め、中の手の櫓には、相圖の柴を積みて、毛利平左衞門・四鬼丹波七百人、松明玉火用意して、例の棒火矢大筒小筒を隙間なく伏せて、諸手の櫓前々の如く、其上遊軍救兵として、敵の强からん方へ馳合さんと、例の千々輪・大矢野なんど、勇を含んで待懸けたり。天晴此軍法、古來にもあらぬ方の術なれども、斯く城中、誠に混亂の時に當つて、斯く靜に手配を定むる、大勇妙計の仕方嚴然として、世の常の時ならば、寄手を城內迄もおびき入れて、城戸を打つて引包み、一人も殘らず討取つて、快き首實檢すべきものを。只今籠城も永々にして、軍民飢ゑ勇氣の撓みし時、寄手より和議の謀にて引入れんとする詞耳に入つて、百姓共の心中、多くは山田が如く動き立つる最中なれば、萬一敵を城中へ引入れ、若又一手變を生じて、實の返忠の者に及ぶべし。大軍に向ひ、終に調略を以て城を守る時なれば、殘念乍ら城外にて打破る事と極めけり。誠にゆゝしき計らひなり。さればこそ天下の大軍、九州の英雄を

目の下に置いて、安然として兩年の籠城、一度も不覺の働なく、俄の士民を御して、勇將の士に對し、斯く迄傍若無人の振舞、さすが天下の大老名人松平伊豆守殿に手を取らせたる、葦塚忠右衞門老將の勇略、舌を卷く事にぞありし。

南島變亂記第十九

正月十一日合戰の事井由井正雪傳の事

山田右衞門が返忠に依つて、既に十一日亥の刻、押詰めらるべしとの返答の來りし矢文、同筆と見えしかば、伊豆守大きに喜び、惜むべし板倉內膳、血氣の勇にして謀を知らず、久しく對陣の內、一つも斯くの如き謀なし。今夜必ず天草四郎を生捕るべしと、旗本を押出し、十一日の早天より、段々に詰寄り、先づ兼て相圖の備、一番に中の矢倉筋小笠原一家三八人、相軍五千八、其次に立花左近將監父子八千人、追手は黒田一家三萬人、浦の手は細川家一類、彼是相圖を待つて取詰むべき支度なり。小笠原衆は、敵の相圖なれば、當城の一番乘、我手なりと上下喜び、竹束楯なんどさへ打忘れ、山田が相圖を賴みに、堀の岸矢倉の下に押詰めて、相圖遲しと待懸けたり。後

陣は立花父子、同じく坂中へ押上れば、御本陣も平草山の麓迄押寄せて、相圖遲しと見る所に、忽ち中の矢倉より、篝火狼煙ぱつと燃上れば、前軍すはやと一同に押込む所に、四方の櫓々一同に、松明ぱつと振上げ、只白晝の如く、天帝の旗數十流十方に飜り、秋風に飛ぶ白雲の如し。寄手、こはいかにと肝を潰しける所へ、矢倉より大音に呼ばはるは、山田右衞門事隱謀露顯に付、城内に召込め置き、外の者共此手を相守り申候。遉に天下の御名代御軍立として、山田如き者の相圖を御賴あつて、夜陰に是まで寄せらるゝ事、諸國の聞え耳に恥かしく候。尤之に依つて御慰の爲、棒火矢二三十御目に懸け申すべく候。暫く御陣を召されて御見物候へ。前の御名代の如く、良もすれば逃尻にては、御無用たるべく候と、同音にどつと笑ひ、四方の櫓より、一同に鬨を上る。先陣の小笠原一族大きに驚き、上下震動する所へ、棒火矢數十本ひら〳〵と發せし程に、闇夜の中に火光散亂し、餘煙四方の草木に亂れ懸る有樣、夏の納涼の花火船、螢を分くる宇治・瀨田の眺も、斯くや見上ぐるに、先手の勢早棒に當り、火に焦されて半死半生の者、四百餘人出來ければ、怺へず亂れて引退く。二

陣三陣入替らんとする所に、則御名代伊豆守殿、兼て軍令に、旗本より半鐘を打鳴らすは、如何なる事なりとも、引取るべしとの軍令なる故、今宵山田が返忠僞にて、城中大きに備ありと聞えしかば、早速下知して、本陣より鐘を打ちければ、すは引取るべしと、先陣二陣同時に崩れ立てば、入替らんとしける立花勢も、伊豆守の號令、兼て嚴しきを知れば、心惑ひて半は進み半は退き、大きに混亂して、上を下へと騷ぐ所を、時分はよしと鐵炮五六十丁、同時に打つて放し、石弓を投下し、黑煙の間より、葦塚左内・千々輪五郎左衞門・大矢野作左衞門、何れも一揆の精兵を引連れ、鋒先三つに分つて突いて下る。小笠原の三陣、同時に崩れ立ちて、討たるゝ者夥しく、人なだれを突いて坂を下る。立花の本陣の前に崩れ懸るを、家老十時三彌、究竟の古き武士なり、敗軍の兵を左に引下させ、本陣を右の一段高き側へ引上げ、一揆の勢の入魂して切つて下るを、餘所目に睨んで堪へたり。是によつて城兵も、細川・鍋島・有馬等の陣々も、未だ攻め上らず、只立花の本陣に後を取られじと馳せ廻る故に、漸々と御名代伊豆守殿の陣も、事故なく引返されける。是を見て十時三彌、一揆は退くぞ。す

十時三彌戰死

はや懸れと、眞先に鎗を入れ、土民原を追捲り、雷光の如く切つて廻る。一揆の先手散々になるを、大矢野作左衞門是を見て、馬駈寄せ飛下り、三彌が鎗に突結ぶ。三彌大音上げ、何者と思ふぞ。立花左近將監が先手の大將十時三彌ぞや。受けて見よと、直鎗を突込んだり。大矢野が左の腕の膕(かゞまり)に突込む。大矢野大きに怒り、我が鎌鎗をからりと捨て、右の手に十時が鎗を引奪ひ、走り入りて無手と組む。大矢野は大力なれば、かさに懸つて押付け、十時が首を搔かんとする時、三彌も大矢野が小指を喰切りたり。されども大矢野上になり、十時が首骨に、短刀を取つてぐさと突込みたり。十時大剛の者なれば、咽笛を外して、あらぬ方を突かせたり。此時立花の家臣十騎計乘駈けく、大矢野を生捕れと、呼ばはりく駈寄する。千々輪・葦塚は、黑田の先手と睨み合ひて來り助けず、大矢野作左衞門此體を見て、十時を打捨て馬に打乘り、一散に一揆の陣へ馳込んだり。十時が働にて、立花の本陣は、崩れずして持怺へたり。然る時十時三彌は、老年の上深手なれば、翌日死したりとぞ聞えし。千々輪・葦塚も、勢を纒め引上る。黑田左衞門・黑田賴母、靜々と押慕ふ。千々輪も左内

も、此儘にて引き難し。如何せんと思ふ所へ、兼て城中より葦塚忠右衛門、大縄を兩邊の林の間に振上げさせければ、伏兵鳥銃多かるべし、殊に夜中といひ切所といひ、行先心元なしとて、終に物分れになつて引返しける。鍋島甲斐守直澄は、今晩城乘の事、小笠原殿の手に返忠の者あり、手筈の働なれば、定めて小笠原の手こそ一番乘ならめ。是を奪ふは法に非ずと、靜に用意して出でられけるが、本陣より引取り申すべき由、軍使頻なれば、今夜軍兵を出さず。是又大なる手柄の様に沙汰しける。去にても今夜の夜討、城中にも殊の外大事なる事に取つてありければ、足長に出づる事はあるまじき事なりしに、伊豆守殿鉦の號令より惣軍崩れて、思はぬ敗軍に及び、小笠原の人數夥しく討死しける。殊に立花先手十時三彌迄討死なり。伊豆守の引鉦今少し遲きならば、小笠原の本陣にて盛返すべきに、いらざる軍法嚴命故に、惣崩れになりけると、人々の沙汰惡かりけり。伊豆守殿も、軍法心の儘に行かぬをば知られけるにや、江戸の早打の次に、先日辭し申されし北條安房守を差添へられん事を望まれし程に、水戸黄門公御滿足に思召し、近日北條殿下向ぞと聞えし。斯く

て城中の軍勢、大きに勝軍して、城中へ引返しければ、葦塚忠右衞門諸手の大將を集めて、今日勝を稱し、先づ以て當討手松平伊豆守殿も、一當當てゝ追崩したれば、當城運を開かずとも、盛名に於ては天下を轟すべし。堅く守つて二月三月に至つて、異國内談の軍船着陣するも計るべからず。各義を守り給へ。人は只義あらざれば、禽獸にも同じ。兼て宗門の同志を堅うして、約束の死を誓ひて城を守り給へと、懇に勇め或は勵まして、各山田右衞門が事を披露しける。諸人皆、山田が心の如きは持つまじと、齒たゝき拳を握りて、いすまるを唱へ誓をなす故に、城中より足早き者共を下し、城外に立つる所の高札を皆切折り燒捨てゝ後、城中諸手の櫓々を守り、人質曲輪の足輕共を、又多く軍用に當て使ひて、樣々城中心衰へざる樣に取計らひける。されども籠城の日久しければ、去年とは何となく、勇氣衰へ見えたりける。爰に一揆の末將に、山本與茂作といふ者あり。彼は葦塚・大矢野に心腹の者にして、元は由井正雪が親岡村彌右衞門が小者なり。不思議の才覺者にて、籠城以來今日迄、城外の事又京・江戸の便宜迄、是が手より皆々術をなして通達ありけるが、伊豆守在

由井正雪の事蹟

陣已後は、國民號令に恐れて、通路殊の外不自由なり。されば内々葦塚・千々輪・大矢野に談じて、此體にては行末大義の計略も調ひ難しとて、與茂作は正法の出家となつて、肥前の國中に隱れ居て身を全うし、後の變事を謀れと密談極む。此の山本與茂作は、十一日の夜の合戰に、鐵炮に中り討死せし由言觸らし、密に正法の三衣等、悉く城中にありしを、僧衣法服に不足なければ、葦塚が計らひにて、淨土宗門の出家にぞ仕立てたり。されば龍は大なるべく、變化自在にして、終に上天する者なり。必ず汝城廓に潛み居て功をなす。外にも内にもありしが、落城の砌、此者障なし。慶安の由井正雪が徒に、增上寺の會下廓然と聞えしは、此者なるべし。智といひ勇といひ、才覺同名、何角必ず此山本與茂作が事なるべし。增上寺へ立入りし事は知れずと雖も、大方此者ならん。抑慶安の由井正雪が事跡、其先祖或は後身の事に付き、不思議を諸書に表はすと雖も、皆僞作にして、其實は姓氏は正しからず。親は岡村彌右衛門といふ相州の民なり。伯父岡村次右衛門といふ者、由井村に紺屋を業とす。此所に養はれ居て、學文手習の爲め、山寺に籠り居る事六年、此山寺の奴、甲州

家浪人何某が家に、久しく仕はれたる者故、武一道の學を學ばざるものなし。其頃正雪は吉次郎といひ、天性武を好む。終に心誇り、足洗村半左衞門といふ百姓あり、身代富貴にして是又武事を好む。相州・甲州の浪人多く此家に宿る。是に依つて彼の正雪、終に武者修行して、此足洗村に居す。廿歳の頃、諸國武者修業して、遠く天草島にも至る。此時は正雪變名して、高松與五郎といひ、天草にて森宗意・天草玄札が元にありて、武者修行し終りて、切支丹の密法など口授し妖術を授かり、諸國にて廣めんと約束す。然れども天下第一の制禁なれば、正雪大志あつて終に言出さず。幸に江戸に楠不傳が家に重んぜられ、大志あれば、志を枉げて能く諸人に仕へて、終に大勢の門弟を引廻す事を得たり。されば正雪未だ武者修行して、天草島にある日、葦塚等に會し、天下時勢の事に及ぶ。天草玄札曰く、我れ日頃大坂籠城の成功なき事を、甚だ不審に思ふ。赤星內膳、常に大坂籠城の人をして無能なりとす。我れ思ふに、皆英士なり。然るに何ぞ一戰の快き勝軍もなき事ぞや。葦塚笑つて答へず。正雪が曰、老君何の爲に笑うて答へざるや。葦塚が曰く、無能といふも、其所を得ず、

英士といふも、其所を得ず。我れ今一度小軍を以て天下に背く事あらば、縱ひ何十萬の寄手なりとも、二度も三度も馳惱すべし。然れども彼眞田・後藤に、我れ何ぞ勝らんや。只其所を得ると得ざるとに依るなり。玄札が曰く、天の時・地の理・人の和は、是必ず勝の利なり。大坂の事は、秀賴は主にして、秀忠公は臣なり。天の時を得るや。大坂の城は、天下の地の理を極む。城中諸士、一人も關東へ下る者なし、人和するなり。是何の背く者ありて、斯くの如く亡ぶるや。葦塚曰く、三事皆背かず。天只時の一字違へり。秀賴主にして、家康公の臣なる者は天なり、時にはあらず。天の時とはいひ難し。時をいはゞ、今は蟄して時節を待つ。家康公死去ありて、兄弟心巵情なる時を考へ、天下の諸侯の中、二三の英雄を語らひて關東を征せば、理必ず大坂に勝ありて、縱ひ三才七騎揃ふとも、時の一字違へば、萬事皆瓦解す。今此地若し亂をなす事を得ば、僅に一隅の時にして、天下の時に非ず。功をなす事は難しと雖も、少しは天下の耳目を驚かさん。君若し天下の大志あらば、是より廿餘年を待ち給へ。萬一不思議の時至るべし。我輩老年にして、空しく土民の中に死せんよ

りは、武名の本に終らんと、內々に事を企む。君は早く東武に歸り、諸國の英雄に因みて、靜に事を謀り給へ。當主家光公は、奇代の賢君なり。此世は必ず色にも出し給ふなといふ。正雪大きに喜んで、種々約談して別れける。正雪則同心誓約の家人に、山本與茂作を呼びて、葦塚忠右衞門に仕へしめ、不思議の通路を求めて、折々に通ず。正雪別るゝ時に至り、葦塚左內も正雪と同年なれば、同道して立去らんと思うて忠、右衞門に問ふ。忠右衞門潛に占ふに、離爲火の卦を得たり。此卦吉兆と雖も、上明かに下密なれば、叛逆隱謀には不吉にて、事の顯はるゝ象あり。殊に一網を出でて一網に入り、終に繩目の恥あるに似たりと見てければ、甚だ愼みてこそ伴ふべしといふ。左內いひけるは、此事止むべし。老父を捨てゝ去る、不孝なり。淸平の世に至つて逆亂を思ふ、不仁なり。同志の人々の約を變ず、不義なり。不義不仁不孝にて、何處にあつて何の功をかなさんといひて、終に正雪に同意せず。正雪も强ひて伴ふ事をせずして立別れけるが、正雪は原の一揆共落城して十三年、家光公御他界ありし程に、時至れりと見て、江戸に丸橋忠彌といふ者を語らひ、叛逆をば思立ちけ

る。葦塚がいひし如く、廿餘年を待ちなば、天下に如何なる一味の大名、或は近代の柳澤如き、荷擔の人もあるべきものを。早きにや、天下に一人も大名の一味なくて、終に松平伊豆守殿の智惠に碎れ、籌策に出でずして、慶安四年七月廿五日、功成らずして、駿河の府中七間町梅屋太郎左衞門が宅に死す。此時增上寺の所化廓然も、同じく時に自殺すといふ。事は慶安變に委しく記す、故に爰に略す。

南島變亂記第十九畢

南島變亂記第二十

北條安房守傳の事

御名代松平伊豆守殿、江戸注進の砌、軍中の要用、萬事心元なくやありけん、又はさすが無我の伊豆守といはれし程の人なれば、水戸黄門卿の志、察してやありけん、則北條安房守早速下着せられ、軍の意見ある様にとありしかば、水戸公にも御安慮あり。頓て江戸進發と聞えし。抑此北條安房守氏長といふは、元來小田原早雲より五代にして、美濃守氏規の末葉なり。是は氏直弟なり。北條遠江守相續す。其別家庵子の家にて、黄八幡と號せし人の子、幼名は新藏、六歳より東照宮に仕へてより、不思議の性質、別して軍學に通達す。されば北條流軍法殘らず、一流此人に相傳する上、甲州の家流軍法、殘らず口授す。其師は、甲州の名士小幡勘兵衛景憲より受く。

北條氏長島原下向

されば東照宮、甚だ奇才として深く稱美あり、御子台徳院様の御師範となる。日本軍法流行も、たゞ此人の一身にあり。北條流とて、天然神妙の術、仰いでも又仰ぐべし。當時家光公の御師範として、朝暮御伽ありて登城暇なしと雖も、水戸公は卽ち東照宮の御孫、御父は正三位中納言頼房卿なり。只今黄門光圀卿とて、文筆全才の大器、殿中も只此人の御詞に、背く者一人もなし。今度天草一亂も、全く光圀卿の身に引受けて御取捌なり。此光圀卿より、今度伊豆守相願ひ候て、安房守氏長下向なくては、早速の功叶ひ難しと、強つて御意なれば、暫時も御用多きなれば、軍師の命を蒙りて、今度九州に下向す。北條安房守年積りて六十歳、勇壯にして少年の如し。若年の時より、所々にて戰功ありと雖も、他人に讓りて自ら譽とせず。平生詞寡く行足らず。廿五歳の時、秀忠公に隨ひ、上田の城に向うて、眞田父子が城を取扱ふ。畢竟の成功は、安房守氏長が積りに出づ。然れども顯露に功を顯さず、平生の詞皆驗ありて、行何にても遂げずといふ事なし。東照宮其器を知つて、牧中の麒麟と宣ひて、高祿を與へ給はず。事は末卷に悉く記す。始の名は新藏といふ。御寄合頭より上

り、下總國中田川崎・武州簑輪の城主となる。寛文十年庚戌五月廿九日に卒す。年八十二歲、法名趙州院相陽西意大居士といふ。其子代々安房守といふ。後は町奉行を勤めし人もあり、江戸景圖等板元、皆此安房守氏長が始むる所なり。されば軍學名高く高弟多く、其中に山鹿甚五左衞門といふ、第一の弟子あり。是は福者にして、浪人にて淺草に住す。或夏の夕暮、御三卿の中、此邊を通り懸り給ひしに、俄に夕立して、雨具を屋敷迄言遣さるゝの間、暫く此宿りにて御休あり、御家來の中、山鹿甚五左衞門を師とする者多ければ、則雨具の事を尋ねしに、山鹿御安き事にて候とて、淺き羅紗の雨合羽三百を出して奉りければ、公大きに驚き、謝して御歸ありしが、其頃慶安正雪が後なれば、公儀殊に御安慮なく御疑にて、山鹿甚五左衞門忽ち御預けにて、淺野内匠頭に渡り、播州赤穗に引移されし。是に依つて淺野家中、軍學大きに流布し、大石内藏之助、深く山鹿が門人となつて、道を得たりといふ。其次弟子佐々木四郎兵衞、水戶公の御家人にして、則加州金澤家中有澤采右衞門が師なり。事長き故、其頃の軍學師一二を記す。

北條安房守　　　　　　　山鹿甚五左衛門浪人、播州赤穗住大石弓藏之助が師なり。子山鹿藤介、江戸回向院の裏住浪人なり。
佐々木四郎兵衛甲州御家人有澤氏師なり。　熊谷四郎兵衛酒井雅樂頭家人。
寺井三右衛門京極殿家人。加州前田駿河守内富山六右衛門師なり。　杉山八藏松平越中守家來。
遠藤伊兵衛公儀御家人。　仁科内藏助和武備志作州。

二月六日夜討の事

斯くて原の城には、葦塚忠右衛門、種々の方便を以て味方を計り、籠城の心を慰めけれども、日久しき籠城なれば、心怠り氣疲れて、勇士は早く討死を思ひ、弱卒は心草臥れて、勞れたる者多し。理かな籠め置く所の雜穀抔も、減滅早く、廣野の樣に、跡の見ゆる所多く、隨分澤山に見すると雖も、何となく心淋しく、俵藏一つ二つになりて、最早是程の命かと心細く、若しや異國より救の兵も來るかと、空しく青海に立盡して身を悶ゆ。波の音風の響のみにして、漁火商船さへ行通はぬ折節に、白鷺の飛行くのみ、帆影の思をなして、慰む方ぞなかりけり。葦塚忠右衛門是を見て、さらば

土民の心勇みに、一夜討して納得させせんと思立ち、先づ何にても所作あれば、さのみ心の疲れぬものぞと、長き計略を廻らしける。先づ惣軍の心を轉じ、勇を出す爲に、大篝を燒きて軍將を集め、細々謀を示し合せける。扨味方の一揆を五組に分けたり。千・天・大・赤・葦の標を定む。其一組は大將葦塚忠右衞門代忠太夫・同左内、組下頭は四鬼丹波・時枝隼人、足强達者なる一揆五百人、皆鎗手鋒の類を持たせたり。二の組は千々輪五郎左衞門、相從ふ組頭は、大江治平・上總三左衞門・鹿子木左京五百餘人右同斷。三の組の大矢野作左衞門、大將として堂島對島・菅谷等、一揆五百人右同斷。四の組は天草玄札を大將として、組頭千束善左衞門・葭田三平同斷。何れも斧を持たせたり。五組赤星內膳を大將として、組頭會津宗印・毛利平左衞門、是又一揆五百人右同斷。其外別手組浮勢に、駒木根八兵衞を大將として、鐵炮方の者二百人、棒火矢十丁、相詞丸く丸しと定め、相印は繩襷に、鉢卷にくるすを差す。扨城中には大將四郎太夫時貞に、森宗意・柄木左京・佐志木左治右衞門が輩、四方を堅めて相守る。葦塚忠右衞門は、軍の後へ付いて、五の口より出張する。初日は寛永十五年正

月廿五日暮合頃に、靜々と麓の方へ押出す。寄手是を見て、すはや城中より夜討に出づるはと、惣軍震動して、面々具足を着し、馬に鞍置き旗押立て、鐵炮の手を配り相待つと雖も、寄手來らず。依つて御名代伊豆守殿下知ありて、いつ迄見合ふべき、早々押付いて討果すべしと下知故に、先日の黑田・有馬・小笠原・立花幷寺澤・松倉の諸軍、犇々と押出して、鐵炮をかけんとするを見て、城兵大きに驚きたる有樣にて、はた〳〵と一戰にも及ばず、から〳〵と逃籠る。偏に鼠の隱るゝにひとし。寄手大きに笑ひ、恥知らずの百姓原や、何として此大軍の堅陣を、夜討の體思ひも寄らず、出でて見たる一揆原の、志の優しさよと、笑うて陣を納めけり。翌日正月廿六日晚にも、又同じく出張する。前日の如くに、又むら〳〵と引退く。既に打續いて正月晦日迄、同じ姿にて騷がする事なり。寄手始の程は、兎角用意したりしが、此一兩日は油斷しける。仔細は伊豆守信綱下知として、是は城中の一揆原卷詰められて、大きに退屈し、味方の大軍を襲うて、城攻を誘引するなり。必ず〳〵調略に乘るべからず。夜討抔に極らば、兼て物見は附置きたり。本陣にて釣鐘を打つべき間、其時は

各出勢あるべし。嘗て恐れ驚くべからず。次第に兵糧盡きなば、色々の變あるべし。味方決して騷ぐべからずとの下知故、此觸を賴み、釣鐘の音を當に、諸勢大きに油斷して、寬々と休みけり。二月に入りては、次第々々に寄する事近しと雖も、每夜々々の事故、最早弓鐵炮の用意もなくて、多くは寢乍ら是を見る有樣なり。城中の者共見澄して、今は時分よし、事仕兼せたり。さらば一合戰、有無の勝負を決せんとて、日取して二月六日、夜討とは極めたり。旣に六日の夜になりしかば、城中よりいつもとは遲く、暮六つ半頃に出勢せり。兼て皆兼々用意究竟の一揆、其組を守り、尤夫々に相分けたり。黑田家の大軍は葦塚忠太夫・同左內、小笠原家へは大矢野作左衞門、有馬家へは赤星內膳、立花家へは千々輪五郞左衞門、松倉・寺澤へは天草玄札、其跡備一勢々々引分け、棒火矢鐵炮を盡して持出づる。今晚は靜々と足輕なり。寄手の大軍、此頃中大きに侮り、何の用心もなく、又城兵の一揆奴原出でたり。いつもの如く引くべしと、嘗て取合はず。併しいつもよりは、今晚は近く來るぞやといふ內に、ばらばらと足早く押寄せて、今二町になる。寄手少し驚き、今晚は近邊迄相窺ふぞや。

用心せよといふ內に、駒木根・鹿子木棒火矢を仕掛け、はた〳〵と間近く打懸くる。すはや彼の棒火矢ぞと、大勢立騷ぎ罵り廻る內、棒火矢數十本打込んだり。殊に今晚は、合せ火能く十分に放し懸けたれば、黑田の先陣黑田將監・小刻屋始め、相備の足輕大將小川又右衞門・黑田佐二右衞門が組の陣迄、此棒火矢落懸り、同時に噇と燃え上る。陣屋は皆苫葺の小屋なり、葭の垣の事なれば、二月の春風に、乾き切つたる時なり。火の光四方へ燃え上る。日頃油斷の上なれば、馬に鞍よとうろたへ廻る。雜人原多く全裸の體なれば、一揆の鐵炮竹鎗に懸つて、討たるゝ者道を埋み、葦塚左內・四鬼丹波・時枝隼人眞先に乘入りければ、黑田家の先陣散々に亂れて逃走り、黑田佐二右衞門が組下十騎・雜兵足輕百人計、過半素肌の勢打交りたる儘にて、鎗を並べて切つて出づる。葦塚左內・時枝隼人、心得たりと喚て馳入り、十五六人討伏せければ、黑田の先陣鐵炮頭小川又右衞門、入替つて相働く。組下足輕悉く散つて一人もなき故、落し置く鐵炮を取つて、段々玉を込替へ〳〵打出しければ、是に依つて一揆七八人打倒され、しどろになつて退き出づる。一揆頭の四鬼丹波、鎗を打振り走り

入り、大の眼を怒らし、何者ぞ推參なりと呼ばはりしかども、小川又右衞門究竟の勇士なれば、ため込みたる鐵炮を郭に構へて立上る。四鬼丹波飛懸り、小川が鐵炮の筒先を確と握り、引奪はんとする所を、小川は逞しき男にて、少しも心を動ぜず、火蓋を切つて嚏と打つ、玉過たず、四鬼丹波胸先を打拔かれて、横樣に倒れけるが、横擲りに打つ太刀の切先、小川が肋骨、下より三枚切上げたり。小川素肌にてありし程に、胴中半切られて、二人共に、同じく倒れて死失せたり。四鬼が討死を見て、一揆原大きに恐れ、已に元の堤へ引戻さんとする所に、葦塚忠右衞門馬を乘駈け來り、大音上げて下知し、軍は味方の勝利ぞや。何しに此所を退くぞやと、鎗を打振つて乘込む。黑田左二右衞門が働く所を乘懸けて、只一鎗にぐざと突立つる。左二右衞門尻居に倒れてどうと伏す。一揆共簇り寄つて、黑田が首を討ち、旣に一番備敗れて、二の柵へ一揆亂れ入る。是に依つて惣軍敗走かと見る所に、黑田監物四方より下知し、爰を引きて何方へか逃ぐべきと、手廻を下知して踏堪へる。此中に黑田賴母、三軍悉く取堅め、靜に陣太鼓を打ち、列を定めて陣を出す。勢又山岳の如し。黑田監

黑田監物戰死

物は、我手の陣屋を、些とも去らず防戰し、流玉にて深手を負ひ、一寸も働き難し。家人原來つて助け退けんとする時、監物大に怒り、一揆原に仕負け、深手を負ひ助かりて、何の面目あらん。此深手を養ふ中に軍果てなば、千悔すとも甲斐あらじ。只此所にて討死せん、手廻の者共あらば、我を引立て敵に向はせよ。一鎗突いて討死せんと呼ばはりけるに、此監物が仲間在合さず、鎗持の下郎に、心逞しき者ありしが、走り來りて後より抱へて大音上げ、當手の大將黑田監物なり。夜討の大將出向ひて、勝負をせよと呼ばはりたり。葦塚左内是を聞き、天晴健氣の詞かな。當城の物主葦塚忠右衛門が一子左内なり。當手の大將黑田殿、鎗先試み給へと突出す。監物が胸先より突通し、後より抱へたる鎗持の孫右衛門が胴腹迄、一鎗に刺抜きしかば、一所に突かれて死にゝけり。誠に勇士の有樣なり。後に黑田三左衛門取置きて、孫右衛門が子を武士となし、楯孫右衛門というて、二百石與へられけるとなり。去程に黑田の先手吉田壹岐といふ大剛の者も、亂軍に討死す。筑前守勢黑田縫殿之助殿も討死し、小林八左衛門・原吉三郎・何見太郎兵衛・猪山久太夫・二神七太夫等、數人の勇士

を討たれて、此陣悉く破れたりと雖も、黒田陣の法、諸陣は少しも騒がず、靜に備を押廻して、討取らんとする勢を見て、左内は一揆の味方を纒めて、本の堤へ引上る。同日同刻に、大矢野作左衛門は、堂島對馬・菅谷吉兵衛、其外究竟の一揆五百人、有馬中務少輔殿の陣に、棒火矢を打込み、鐵炮を連べ放つ。有馬の先陣大きに驚き、馬よ鞍よと犇く所を、大矢野作左衛門、黒絲縅したる鎧着て、白き小旗を後に差し、常に得物なる十文字の鎗を以て一揆を下知し、柵を越えて一の備へ亂れ入り、短兵急に攻立つる。有馬勢多く素肌なれば、散々になつて、雜人は八方へ逃廻る。大矢野作左衛門は先陣にありて、既に有馬の一騎當千と聞えし兵共、十一人討取りぬ。然る所へ有馬の先陣秀島四郎右衛門、采幣を振つて下知をなし、味方比輿の有樣や、大將の本陣近し、一揆共に後を見せんより、只討死せよと身を揉んで下知すれば、只大きに騒動して、唯一人も、秀島に並んで戰ふ兵なかりしに、本陣より使來りて、石井九郎右衛門乘付け、秀島と馬を並べて、兩人の働激しく、既に一揆の勢七八人突伏せて、追返さんと働く體、石井は大坂にても、手柄ありと聞えしが、實にもと覺えて夥し。

大矢野作左衞門是を見て、僅の者共に追返さるゝやうやあると、例の鎌鎗を以て、卷落さんと乘向ふ。石井・秀島等、左右より追取り卷きて取つて懸る。大矢野右に鎗を取り、石井が鎗と搦み、左に太刀を拔いて、四郎右衞門に切結ぶ。秀島馬を一文字に馳入れて、眞向に打込む太刀を、大矢野引外して受け、太刀先馬の平首に打込んだり。大矢野馬よりひらりと飛びさまに、拂切に秀島に切付けたりしに、此太刀先、秀島が右の高股に當り、妻手へ落る所を、入替つて彼馬にゆらりと打乘り、石井九郎右衞門に打つて懸る。石井鎗を取直す所へ、堂島對馬馳せ寄つて丁と打ち、石井、堂島に向はんと振向く所を、大矢野馬を一つに寄せ、足を取つて逆に提げければ、堂島、終に石井を下切に打放す。秀島は半死半生になつて居たりしが、一揆共に踏み殺されける。此二人討死しければ、下知する人もなし。有馬の先陣大きに崩るゝ。一揆是に氣を得て、鬨の聲を作つて亂れ入る。有馬の先陣も、既に亂れんとする所へ、二の備有馬修理・同嫡子有馬藤九郎、勝つたる武者百餘人、鎗を揃へて突いて懸る。本陣の先手有馬帯刀、數十騎を引いて横鎗に進む。一揆菅谷吉兵衞・堂島對馬、是に對

する事能はず、引色になる所へ、毛利平左衛門來り助けて、漸々に勢を引上る。大矢野作左衛門は、大將を討たんと深く駈入りけるが、中々味方と、物別れては叶ふまじと、近く進む馬武者二騎、喚いて切つて落し、味方の陣へ駈歸るに、味方物別れして引きければ、空しくは出で難しと、邊を見廻すに、逞しき馬に乘り、爽に出立つ若武者一騎、數十騎前へ見えければ、大矢野馳寄つて、上帶摑んで中に提げ馬に打乘り、一散に馳出す。此者、然るべき人の主人にやありけん、大勢押懸りけるに、彼若武者を、あらぬ道へ投捨て、こなたの道より一散に、味方の陣へ駈入りたり。後を慕ふ兵共、彼若武者を介抱してぞ歸りける。終に誰といふ事を知らず、大矢野は、菅谷・毛利と軍を集めて、葦塚と一所になる。

南島變亂記第二十畢

南島變亂記第廿一

大矢野作左衞門勇戰の事并千束・赤星討死の事

大矢野作左衞門・堂島對馬・菅谷吉兵衞は軍を集め、葦塚・時枝と一所に堤を取つて、諸手の相圖を見合す所に黑田先手黑田左衞門尉・二陣黑田賴母、諸手に勝れて、先陣を打散らされたる恥辱を雪がんと兵を揃へ、鐵炮を左右に立て、一揆を引かせじものと慕ひ來る。有馬の二陣有馬修理・長子藤九郎・三陣有馬帶刀、獅子の齒嚙をなし、追縋うて大矢野に打つて向ふ。況や黑田美濃守養子なり。年若うして弓矢に才發の人故に、此間に鎧一縮して、白母衣を懸けて采幣を握り、勝れたる馬廻五百餘人、一揆の横合へと志し、平草山に押登る。細川越中守忠利は、船手の軍功少なき故、家老長岡監物といふ練陣の老武者、(米田監物の事なり、大坂陣手柄人なり)、二千餘騎を率して、細野谷口より押

廻し、一揆の後を取切れよと、陣を堅うして押向ふ。鍋島の一家は、陣屋元來城へ近しと雖も、甲斐守の武勇を恐る。其上出丸口は、良ともすると激しき軍ある故に、柄木右京・佐志木左治右衞門、只出丸を堅く守りて、一人も夜討に出でず。鍋島は身を堅めて、今や寄せ來るかと待ちけれども、軍勢向はざれば、同勢を揃へて、松平伊豆守差圖を待つ。一揆引かば、附入りに乘破らんと勵む勢なり。葦塚忠右衞門馬乘り廻し、今夜の合戰味方打勝つと雖も、退口殊に大事なり。爰を我れ防ぐべし。足輕く引取れよといひけるに、大矢野作左衞門いひけるは、敵陣近付くと雖も、味方の鐵炮をば恐る。我れ今敵陣を襲ふに、先陣は駈破れども、二陣皆堅し。思ふに赤星、天草の手を破るに難き事あらん。此口は我れ一人よく防ぐべし。葦塚父子・時枝の人人、速に諸軍の味方に加はり給へ。葦塚老將爰にある時は、諸陣に目なきが如し。早く此陣を捨てゝ、諸手を下知し給へ。あの大軍に駈向ふは、小勢程引取るに勝手よしといへば、葦塚尤と同意し、さらば鐵炮の手を殘すべしとて、駒木根の二百餘人を堤の蔭に伏せ、葦塚父子・時枝の者共一揆八百餘人、一文字に天草・赤星が陣に駈向ふ。

去程に黑田・有馬の兩陣向ひ進みければ、一揆の勢、味方の少しきを見て逃崩れんとす。大矢野大きに怒つて、我が手の働を見よ。敵何十萬ありとも、恐るゝ事なしと、駒木根に下知して鐵炮打たせ、我が聲をかくるを相圖に發せよと約束し、一揆五百人を一手になし、有馬の先陣に打つて入るに、忽ち先手の物主石田與右衞門・山田右平四面より切つて懸る。大矢野、一揆の勢を足輕く引かせ、加勢石田・山田を近々と駈けさせて、一聲喚いて引返し、忽ち兩人を左右に突殺しければ、其陣色めいて見えける所、有馬藤九郎・有馬帶刀寄切つて懸る。大矢野、一揆を先に引かせ、後れ駈に堤へ駈上れば、有馬の二陣、雲霞の如く駈集る。大矢野一度鎗を振つて、すは打てよと下知すれば、堤を隔てたる駒木根、待設けたる二百挺、一勢に切つて放す。唯將棊倒しの如く、先手の馬上の諸將共、犇々と馬より落つる。是を見て大矢野、再び切つて下り、一陣を追散らし、懸ると引取る。三陣恐れて附慕はず。其間に堂島と菅谷に下知し、一揆の勢を引上げさするに、さすが山道に馴れたる一揆共なれば、下知より早く、闇夜の山道を、何方の岩間よりか、城中迄遠く引取りける。大矢野堤を越えて、

平草山の麓へ來れば、横合より進む敵あり。是黑田求馬なり。大矢野、横合の敵を、堂島・菅谷に防がするに、大矢野が馬廻百人に足らず。大矢野猶退かず、駒木根が鐵炮の手を、樹木の間に伏せさせて敵を待つに、入替つて黑田の先陣、一牧楯を翳し連れ、松明を白晝の如く點し立て、金皷法を守りて押上る。大矢野どつと叫んで駈下るに、黑田が横合備より、鐵炮を一勢に連べ放すに、眞先の一揆共廿四人、悉く打殺さるゝ。大矢野も、馬の鞍搖直すに、鉛子一つ來る。大矢野鞍の上にて躍り上るに、玉は草摺に中つて身に中らず。作左衛門事ともせず、喚いて駈入りて、先陣黑田左衛門が陣を駈行き、引歸して上へ懸りて陣を取るに、五十人には足らざりける。大矢野曰、爰を引かば、菅谷・堂島を捨殺すなりとて、山中にて鐵炮の手を打たせて山口を守るに、半時計りして菅谷來る。堂島は討死せりとなり。大矢野一所になりて二百餘人、山道をば上るに、黑田の先手、雲霞の如く慕ひ來る。大矢野、駒木根に語つて曰、諸方の味方も、多く引きたりと覺えたり。最早城中へ引くべし。爰にて奇功をなさずんば、此手の味方悉く討たるべし。細川勢の重ならぬ先に、一つの手柄を

顯はし給へ。それを物別れの機となすべし。黑田の胴勢は、足重くして破り難し。横手に廻りし黑田求馬こそ、若輩といへども、只今堂島を討取りて、氣色ばうて見ゆるぞかし。此の二段の芝の上へ引上ぐべし。鐵炮にて透さず討取るべしと約束し、軍勢を段々引上げ、手廻卅人計り從へて、大矢野、道に堪へたり。黑田勢先を爭うて進む中、黑田求馬猶更に馳上る。大矢野も卅人を引きて、眞逆に驅落し、輕く引きて芝原の堤を緩く引上る。黑田求馬、猶更に馳上る。大矢野も卅人を引いて、一段高みに馬を立つれば、求馬遁さじと鎗打振り仰向く所を、鐵炮どうと響きて、黑田が胸板に、血煙立てゝ打込めば、少しも堪るべき、仰向にどうと馬より落つる。是に依つて先陣震動する所を、大矢野は山中の駒木根加勢と一所になり、二百人計り一同に、嚝と鬨を上ぐるを、山上の味方城中の陣々、玉火を打下し鬨を合す。黑田の先手、敵出で來るかと陣脚を取定むる所を、さはあらずして、足輕に引いて歸りける。黑田勢も山中案內は知らず、所々鐵炮の音は聞え、伏兵もある樣に見えければ、勢を纏めて引返す。然るに同日同刻に、天草玄札大將にて、千束善左衞門・葭田三平先

陣に進んで、立花將監の陣へ押向ふ。子息立花飛驒守は、年若と雖も、此程の一揆の體、心得ず思はるゝ上、今晩一揆の近寄らばと見て、多分夜討をすべしと、先手へ乘來つて揉合し、先陣の一相の陣場を悉く明け、傍に二陣を並べて備へさせ、本陣へも下知ありて堅固に守り、鐵炮を伏せて待懸けたり。城の一揆原は、嘗て是を知らず、一揆五百人鬨を作り、棒火矢を放つて燒立つる。其儘乘入りて見るに一人もなし。不思議に思ふ所に、二陣の逆茂木の内より、鐵炮二百挺を揃へて、一時に打立てたり。天草玄札、敵に備あり、此口引けと下知する所へ、立花飛驒守下知を傳へて、一揆は敗軍するぞや、鐵炮の手に及ぶべからず、鎗を入れて追立てよと、自身鎗を追取つて、眞先に馬を入れらるれば、騎馬五十人・足輕雜兵四五百人も、瞳と叫んで追崩す。天草玄札が勢、しどろになつて崩れんとす。千束善左衛門・葭田三平、爰を返させては夜討の詮なしと、命を捨てゝ切結ぶ。又立花の先手を追込みける所に、吉弘市之進・立花主計、兩方より切つて入り、立花飛驒守眞先に馬を乘入れらるゝに、一揆の勢、矢庭に五十人計り打殺されて、惣敗軍になつて行く。千々輪五郎左衛門は、今晩

手配替り、小笠原の陣に向ひしが、立花の陣、備ありと聞えしかば、玄札必ず敗軍すべしと知つて、引違うて立花の方へ向ふ所に、案に違はず、味方散々になつて引きしかば、五百人の一揆を眞丸に備へて、一の手は大江治兵衞、二の手は上總三左衞門となし、鹿子木左京、鐵炮を立花の二陣へ打込みて、横合より切つて懸る。千束・葭田是に力を得て、味方の横矢、日本一の能き圖なり。盛返せや者共と、白晝の如き四方火煙の眞中に、五百餘人取つて返し揉合ひけり。一揆原は、兩方合せて千餘人、勝ち進みたる立花の同勢へ、出水の如く押懸るに、立花の軍追立てられ、本陣も崩れんとするを、立花飛驒守馬廻五十人眞先に、高橋重太夫・小野掃部之助、眞丸になつて打つて返す。一揆勢、又切退けんとする所を、千々輪五郎左衞門、鬼神の如き勢に、黒糸の具足に、同じ毛の甲を着て、（十一日夜分捕せし具足なり。都て正月元日合戰の後より城中兵具夥し。）鎗振廻し馳入り、高橋重太夫と鎗を合せ、千々輪が鎗先、雷光の如く當るべからず。忽ち高橋、馬より下に突落さる。時に高橋が從者小出七九郎といふ者、千々輪が馬を突かんと馳廻る。小出を追立て、再び高橋を刺殺して、小野掃部之助に打つて懸る。是故に小出、後より

突くを知らず、終に馬の後足を突かれて馬より落つ。五郎左衞門大きに怒り、小出を鎗にて叩き伏せけるが、鎗の柄ぼつきと折れければ、打捨てゝ刀を拔き起上る。小出七九郎を拜打に切殺し、吉弘市之進・立花主計心得たりと、馬上より鎗を以て千千輪を突く。千々輪今は絶命の場と思ひければ、父が讓の刀を以て、散々に切懸け、小野掃部之助に追付いて、鎧を取つて跳返し、ひらりと馬に乘替り、刀を上げて切廻る。小野が從者數十人、駈隔て防戰す。小野掃部之助漸々に引退く。千束善左衞門是を見て、爰を揉めやと突廻る。元來千束善左衞門大勇氣にして、氣がさなる者なりしかば、千々輪に少しも劣らず、馬を並べて前後左右に乘違うたり。偏に萬夫不當の働なり。千々輪は、元來武道通達の者、其上加藤家百萬石の家中にて、隨一の馬の藝者、大坪流の名人にて、蛇に繩をかけても、乘る者と同じ樣に追立て、馬に乘廻れども、何とて千々輪に及ぶべき。もと千束は百姓なり。鵜の眞似する鳥は、水を飮むといふ如く、何角千々輪と乘並べたる程に、頓て右の足を踏外して、左へがばと落ちたりける。一揆の步の者は、危き時といへど、寄付く者なければ、落馬する

千束善左衛門戰死

と其儘、立花の兵士十人計りに取卷かれ、六七箇所鎗疵の深手を負ひたり。激しき鎗下、其上雷光の如き千々輪が働、立花兼、容易く千束が首を取る事能はず、千々輪も此時鎗はなし、太刀計りにて大きに難儀の所、千束深手負ひ作ら、千々輪殿々々々々と呼ばはりけるに、五郎左衛門馳寄つて見れば、千束深手負ひ、働くものは目計りにて、今は是迄ぞと、千々輪が鎗のなきを見て、我鎗を差出す。哀れ剛の心なると、千々輪見て後、獅々の齒噛をなし、心入あら不便なりと、則鎗を追取りて、いでや天帝の淨土に待ち給へと言捨て、只一鎗に止めを刺し、其儘敵中を馳廻るに、歷々の武士六人計り討取つて、終に立花の軍勢を、柵より內に追入れて、千々輪・天草一手になり、勝鬨作つて、山下に屯して息を繼ぎける。赤星內膳は、五百餘人の一揆を下知して、寺澤兵庫頭・松倉豐後守兩人の備に打入るに、最初に棒火矢を放ち、陣屋の燃上る相圖に、鬨の聲を上げ、平一面に押懸りたり。寺澤・松倉の軍兵も、兼々一揆に大きに仕付けられて、臆心直らず、大きに騷動して、先陣一捲りになつて敗北する。赤星下知して進みければ、一揆原は勝に乘り鬨を上る。本陣にも堪り得ずして、松倉勢大き

に敗軍に及びけり。寺澤の先陣も、既に敗軍に亂れて、陰源左衞門・池田新助・松本平之丞・谷澤八左衞門、枕を並べて討たるれば、前後鳴動して既に崩れんとするに、松倉の家老三宅藤右衞門、只一騎踏恷へて、燃火の中に大長刀を振廻して働く。此頃の手疵未だ平癒せずと雖も、不雙の兵にて、一揆を矢庭に五六人薙伏せ、味方進めと下知をなす。是に勵まされて、寺澤衆の松下半之丞・陰山五兵衞・谷崎八右衞門・小笠原齋之助・渡邊卜庵・柴田彌右衞門等、各進んで切崩す。寺澤兵庫頭も馬を乘返し、只討死すべしとて乘入る。此時一揆又押出されて、八方に散亂す。時に赤星内膳馬を乘出し、一揆三百餘人を從へ、咄と駈返す。寺澤勢又押立てらる。三宅藤右衞門少しも退かず、各身の上大事なり。今日爰を破られて、後日何の言譯あらんと、長刀を打振り立向ふ。赤星、惡鬼の如く立ちて鎗を突くを、松下半之丞是を見て、三宅が替りて鎗を合す。赤星怒つて突く。松下が内甲に、深く突込みければ、俯に倒れて死しけり。入替りて三宅藤右衞門、長刀を以て跳上るに、赤星が左の高股に深疵負ひたるに、あはや赤星討たれぬと見る所へ、相備毛利平左衞門・會津宗印、二百餘人を

赤星內膳戰死

引いて入り、赤星を救うて相働く。寺澤勢終に勝つ事能はず、討ちつ討たれつ、押込み押出し戰ふ所に、小笠原の先陣押廻つて、後より取包む。一揆是に氣を呑まれ退く所を、渡邊・柴田・三宅、得たりや爰ぞと、押續き打つて懸る。一揆を今鏖にしけるにやと見る所に、小笠原の先陣、後より亂れて、葦塚左內一軍を引いて切つて入り、段々葦塚忠右衛門・時枝隼人抔も駈付くれば、赤星・會津も兵を立直す。葦塚左內會釋もなく、寺澤の陣へ切つて入り、忽ち陰山五兵衛を突いて落す。是に氣を得て、一揆喚いて駈返しければ、三宅藤右衛門も、一揆に新手加はりしを見て、速に傍へ本陣を引上げて、鐵炮の手を揃へて待懸けらるゝに、葦塚も横合より、小笠原の陣々に近付けば、是迄ぞと引返す。小笠原の先手寺澤・松倉も一所になつて、一揆の後を喰止むるに、赤星內膳、迚も深手を負ひぬれば、城迄引き難しと、引返し死にゝけり。猶も諸手附慕ひけれども、千々輪・葦塚引下りて追拂ひく、或は鹿子木左京、鐵炮を伏せさせて、切所々々を立切りければ、夜討の軍勢、終に功を全うして、城中に退きける。此夜討、古今稀なる働と、西國にても評判なり。大坂籠城蜂須賀の手、夜討とは、

事拔群に勝れてぞ見えし。本陣松平伊豆守陣大に騷動して、旣に一揆の者共寄せ來らば、敗軍とぞ見えし。然れども別して立花の陣、𠞊甚强うして、今度は本陣さまで敗北の色なし。鍋島の陣は、敵城近しといひ、殊に柵逆茂木なかりしかども、甲斐守の武勇に恐れて、一揆より夜討は懸けざりけり。一揆今少し引下り、遲々に及ばば、細川の大軍後より向ひ、鍋島家の陣横合より懸らば、城兵一人も生殘るまじとぞ見えし。葦塚忠右衞門見積よく、足手纏めて引上げ、終に物離になつて、葦塚も城中へ引取り、諸軍を改むるに、討死二百八十餘人なり。然るに葭田三平・會津宗印も深手蒙り、城中にて醫療を盡す。其外隊將の中にも、死生を知らざる者多し。されば此夜の討死六千の內、赤星を始め四鬼丹波・千束・堂島が類、小頭の中には猶多く討たれければ、葦塚も寄せて戰ひし時は、一揆我が主を知らざる故に、物頭共多く討たるゝ事を思うて、重ねては打つて出づる事を止めければ、敵多く討取りけれども、城中長き籠城なれば、各退屈して、兵糧鹽味噌の藏を眺めて、志を失ふ者多かりし程に、城中の物頭共、慰め兼ねてぞ見えにけり。

落穗集曰、此夜一揆の城兵、黑田左衞門佐忠之の陣へ駈向ふ時、其夜廻松平伊豆守家人岩上角之助・尼子八兵衞、幷紀伊大納言樣の使者山中作左衞門、夜討の所へ廻り合せ、敵多勢柵を破らんとするを見て、夜廻りの雜人も崩れ、岩上・尼子・山中は立堪へ、鎗を追取つて柵際へ走り行く時に、一揆共柵を踏破り押込み、則ち紀伊大納言樣の使者山中作左衞門、銀の甲熊毛の立物、十文字鎗一番に合せて、岩上角之助・尼子八兵衞と立並んで鎗を合す。一揆共柵外へ突崩す。山中は鎗の手を負ひ、岩上・尼子兩人は、注進の爲め引取る。其後へ黑田衆入替る。其後世間の沙汰に、夜討に鎗入るゝ事、なき法なりといふ。水野日向守勝成曰、太閤の代小田原陣に岩槻十郎氏房、家來廣澤兵庫之助重信大將にて、蒲生左內・同五郞兵衞・北川佐渡守・畑又右衞門鎗を合み、城方の鎗は先騎廣澤、扨內田又は其外三人鎗を合す。秀吉公御感にて鎗に極る。薩摩陣根川にて、宮部善祥坊が鎗に夜討なり。大坂陣、蜂須賀の家人稻田・樋口・長谷川が鎗合せ、家康公・秀忠公御感狀下されしぞ夜討なり。されば此度紀伊大納言殿內山中、又伊豆守內岩上・尼子、島原の鎗にてはなし

と、不吟味なりといふ。故に感狀出でずとなり。其外立花の手先衆、多く吟味の上、感狀出さる。されば夜討の手強き事決定なり。又一說に、二月廿一日夜、再び夜討ありといふ。是追つて考ふべし。

南島變亂記第廿一章

大矢野作左衛門勇戰の事并千束[illegible][illegible]討死の事

南島變亂記第廿二

北條安房守軍法の事并大物見の事

江戸表には、未だ天草動亂、勝軍の注進なきにより、取々評定あり。水戸公仰せらるるは、今度重兵島原表に陣し、追討の大將は、天下の大老武功の大名等、其の面々は細川・有馬・黒田・鍋島・小笠原・立花・毛利・水野等、九州の大兵都合十六萬餘人。然れば大將にも軍勢にも、少しも不足なき事なり。只軍配人の裁判にて分るゝものなり。然れば北條安房守差下され、軍の指揮然るべきなりと仰せらるゝ。此事然るべきに極り、早速北條安房守下向申すべき由にて召出され、仰渡さるゝ趣、今度島原表一揆追討使を遣さるゝ所、事難澁に及ぶの條、安房守早く伊豆守・左門其外諸大將等と相談仕り、萬事差圖致し、軍配を心一抔に下知仕り、落城隙入り申さぬやうにとの事な

り。安房守謹んで畏り奉り、合戰の事、兼て勝負は有之候事勿論に候。併し今度は某手勢一人も召連れ申さず罷下り、御上使伊豆守殿へ軍法を談じ、諸大將を勵まし申さば、落城當日の中と存候。今我れ旣に至らば、いと安き事と奉存候。さらば伊豆守へ、此旨仰遣され、萬事隔心なく申談ずべき由申さるゝ事、第一の要用に候。追付落去の旨を申上ぐべく候間、日を數へて御待ちなさるべく候と申上、御城より直に伴廻僅廿人、武具の用意をなし、自身具足一領鎗一筋計にて、早打にて本海道より大坂着致され候所、城代諸役人、御軍使御出の筈とて、嚴重に急ぎ御觸の事なれば、兼て二三千人も御出と待受けたる所へ、僅の體にて御出故、何れも思の外なり。早船の內を選み、早速大勢の水主大勢船頭用意の所、安房守申さるゝは、今度は大切の御用、勿論日積も有之間、陸地を罷下り申すべきとの事なり。大坂奉行衆申さるゝは、陸地は難儀多く、御老人の御苦勞に奉存候。此船路は、瀨戸內にて岸を傳ひ、風波も難もなき所に候へば、是非船路にて御出立御尤と是ある所に、安房守申さるゝは、尤此筋陸路海路同前の所と聞及ぶ。陸は播磨・備前・備中を經て、下の關迄百五十六里

北條氏長島原に着す

に、海上は却て百五十二里と聞く。然れば順風あり逆風あり、潮落潮込豈常に心の儘ならんや。我れ陸地を行けば、晝夜に二三十里、僅人足五十人に過ぎずして事足れり。是故にこそ、我れ一人下りしなり。早打駕御申付、早々陸路下るべしとて、陸地を下られける。誠に神通の人にやありけん、其四五日過ぎ風起りて、其頃出船せし外、用事の船の者共、大きに急ぎけれ共、安房守殿より、十四五日後に着しぬ。不思議なり。されば安房守陸地を急ぎ下られけるに、二月十六日、島原高久城へ着陣なり。頓て早速御名代伊豆守殿に對面し、伊豆守・左門殿も、別儀を以て門前迄迎に出でられ、師の禮を以てあしらはれける。段々軍立を聞いて、或は感じ或は恐れ、此城中に籠る者、只者にあらじ。只今迄落城せざるも理なり。中々猥に攻め難き術とこそ覺ゆ。然れ共天下の御下知として、食詰と申すも餘り穩便に候。近日様子を待ち、一攻あるべき事と存候。先づ明日より、馬上卅騎の御使番衆を、御貸し下され候へ。城近く大物見仕るべきなりとなり。其後二月六日の夜討の前後、諸軍の手柄、篤と聞定められ、棒火矢松明抔取寄せて見られけるが、手を打つて、最早此城も程ある

まじ。松明焚きやう、陣屋の火の掛けやう、見所ありといはれし。伊豆守申さるゝは、其夜一揆共退口に、多く腰兵糧を落して行きぬ。臆病氣生じてありしといはるるを、其兵糧あらば、見せ給へとありしに、竹の筒に入れし兵糧多く集めて、安房守殿に見せければ、是れ臆病故に非ず。城中兵糧乏しからぬを、敵に示すの謀計にて、斯くは振舞ひしと覺ゆ。中々心入の優しき一揆の大將共やと、深く感じられける。松明陣屋の燒きやうの事は、見所やありけん、東武にても、紀伊大納言殿、陣屋の燒きやう惡しゝ。一揆落城程あるまじ。されども奇功は深く貯へたりと覺えたり。必ず油斷すべからず。重ねて飛使來りぬ。達人の見る所、千里と雖も變らざりし。北條安房守、翌日城近く大物見ありしが、退いて御名代松平伊豆守殿の陣屋へ入り、種々兵道相談あり。安房守申さるゝは、扨々城の構、諸事砦、皆能き繩張なれども、最早城中不和の象あり、何にしても近日落去すべし。然れども御本陣より御差圖なくば、敵出づるとも、攻上るべからずと御定めなり。安房守は御本陣を出でて、出丸先づ順見あり。直に鍋島の陣屋に入り、諸將の働を稱し、すぐに子息甲斐守殿の陣

所に入りて、直澄に對面し、御年若にも候所、去年以來御働、御勇名高く、江戸にても御沙汰宜しく、諸人も感じ此事に候。當時無雙の良將なれば、原城も必ず甲斐守殿こそ乘落されんと評定仕る。然る上は、萬一他家より乘落す時は、御武勇水の泡と存候。彌心を御勵みあつて、一番乘に攻入るべき覺悟御尤に候。尤軍法の事、古語にも、凡そ戰場には、君命を用ひざる所ありと申候。然る上は、此座席に御子息も候へば、軍代目附などの申條は、逹て信用に及ばず、勝利の圖を見ては、軍令を破り候も、又一つの武功手柄に相立つと申されければ、甲斐守大に喜び、敬うて敎を聞かる。其座に御目附の榊原飛驒守・子息左衞門佐とて、甲斐守一つ年劣りの友にて、在合されけるが、是又器量の人と見られければ、安房守、各皆今度合戰に手柄なくて、いつの時をか待たるべき。古き人の名譽多きは格別の事、若き人は、軍神の幸に出合ひ給ふと申すものならずや。此時勵み給ふべし。いざ先づ目當の所ありてこそ、敎へ申すに抄取れり。いで老人が煙氣の法といふを敎へ申さんとて、二人を同道して、柵外に出で、城中の氣を指さして、夫氣は宮・商・角・徵・羽・七變・三品、五二の口傳と

申すは。されども畢竟は、唯死活の二朱にてこそ候へ。あれ〳〵御覽候へ。城中より立つ煙黑くして、地より離れて舞上り候。是は物を煮る煙なり。此煙を虛煙といふ。是は深く難しき事に非ず。米を炊ぐ煙は、白鼠色にして地を離れず。横一面に聳ゆるものなり。此煙黑く空へつく氣色は、あらぬ木の根魚の骨など、煎き焦して喰ふ所多しと見えたり。故に名付くる事に候。されば兵糧も、今五七日には盡くべきやと見ゆる事なり。又城山の後に黑氣立上り候。是を死敗の氣といふ。誠に城の爲め惡き氣に候。されども靑き筋、横に交りて立ちし、是不思議なり。此中に變あるべく候。若し此靑筋、黑氣を離れて外へ出では、一揆頭分逃遁るゝ事あるべき兆と存候。能く心を付け給へ。其外城の利害、樣々敎へて戻らるゝ。于時甲斐守廿歲、左衞門佐十九歲、共に今度の一番乘なり。夫より北條安房守・立花左近將監の陣へ行き、此程の勞を慰め稱し、去つて先陣立花の子息飛驒守殿陣中に入り、去頃の夜討の御働、古今に秀で候。定めて東武評定にも、萬人の稱譽も、此事に候べし。若手の名將とこそ存候へ。然れば此城も落去近づき候へば、此時諸手に後れ給ひ

なば、夜討の御用心は、臆病より出でたる抔と、沙汰あらんも計るべからず。外に日本中に、敵とてなき時なれば、無理なる軍なり共、見許すべき時にや侍らん。穴かしこ老人が詞を忘れず、今度の城攻は不意に起るべき間、御脱りあるまじき事なりと懇に敎へ、其手の家中へも、武の用にも立つべき人には、必ず挨拶の中にも、勇氣を進めて心を勵まし、則立去つて北條安房守、細川家の陣所に行き、去年よりの軍勞を挨拶して、扨先陣へ來りて、長岡監物が陣所に入り、軍談して監物に申さるゝは、密に思ふ、此節此攻口細野谷は、決して大軍進み難し。只敵の遁るゝを討つの地なり。後軍一手を以て守らせば事足るべし。是は戌亥に至りて道あり。人夫二三百人を用ひて、樹木を切捨て道を作り、是より押廻しなば、追手へ出で申すべく候。是口の津口の海道なり。勿論割付の場所とは相違もあるべし。後難も思召さるべく候へ共、其段は、今度の御目代此安房守が、差圖申すと答へ給へ。又貴殿老功の事は、江戸表にても、度々言出し申す事に候。但し老いたる麒麟にやと、人申す者ありて候へども、夫は戰場を知らぬ人の沙汰なり。此口は難所なり。戰ふに道なし。天下

武勇の人の、さまでもなき土民に、討死を心に懸くるにも、及ぶまじき事尤に候。されども又、斯程に取巻きたる城を、落さで見上げ居られんも、武道とも思はれ侍らず。但し松平豆州には、何分返すぐ〵能く御工夫候へとて、安房守は歸られける。後に長岡監物は、北條安房守に、大に恥しめられたると思はれければ、怒を起して曰、我れ昔大坂軍中にありて、武勇を關西に轟かし、信達池の働き、人の知る所なり。然るに今江戸にて、麒麟の駑馬に劣るとの評ありとや。近頃無念の次第なり。我れ年七十に餘り、何の世に殘念かあらん。兄弟の子供に、兄を長岡帶刀幼少與七郎・次男同萬作兩人を呼出し、去年以來、御軍法背き難しと差控へ居る所、安房守殿御話に、江戸にて評定宜しからずと聞く。實にも大軍の細川、一度も軍の手に合はず。討取る所の首帳も、何を以てか日本の人に答へん。さらば此度は、當城一番乘せずんば、當手に於ては、一人も生きて歸るまじきの段、其心得をなすべし。迚も彼口の津口の道を作らせ、本陣へも其趣を達し、御子息肥後守殿をも勸め、軍兵を坂本迄押廻し、長蛇の如く陣をなし、城を睨んで控へ居る。其外諸方の陣々、皆北條安房守が詞に勵ま

され、勇氣百倍して、今にも合戰始まれかしと、人には先をせられじと、思はぬ陣はなかりける。去年の備は、誠に土にて作れる武具の如し。今日に於ては、飛龍奔虎の勢をなし、齒嚙をなして控へたり。

森宗意人質を守る事并鍋島甲斐守一番乘の事

北條安房守は、日々諸陣を廻りて軍將の氣を勇め、夜每には陣前に出でて、敵味方の軍氣を窺はれしに、日々味方の陣氣增し、城の氣衰へ行きて、今は一拉ぎにも押すの勢なれば、安房守獨笑して、旣に功成れりとて、筆を取つて江戶へ注進、落城當月中を出づべからずといひやられける。斯くて城中には、葦塚忠右衞門、種々謀を設けて、味方の氣を助くと雖も、日々陣氣衰へて、四郞太夫が前へ出でて申しけるは、味方の體敵の色、相見計り候所、今は早是迄と相見え候。併し天下の大兵に圍まれて、百五十日を經、度々敵を惱ませし上は、最早快く討死して、名を戰場に止めん事、元よりの願に侍り。今更驚く事にはあらず。然れ共兵氣敵に增し、味方衰へ行く

なれば、此儘にて候はゞ、後には突いて出づる義勢もなく、鐵炮打つ力もなく死せん事、無念の事に候。但し此軍機を取直すに、樣々口傳ありと雖も、女子共を去り退くるより上は御座なく候。されば只今人質として、召置き候女童の者を、一人の大將に預け、向の山の峯に一城の跡候へば、是に閉籠り、當城の一二の郭に居候人質共を、一人も殘らず去り候はゞ、兵氣相直り、又一二ヶ月も、相支へ申す事もあるべく候。左候はゞ、其中萬一彼黑船着岸し、變を生ずまじきにも非ず。早々人質をあの峯へ上げて、守らせ申すべく候。併し故なくしてはいかゞなり。皆敵の井樓高くして、火炮來つて四郎の袂へ當り、近習死すといふを、名にすべしといひければ、四郎始め其詞に從ふ。葦塚竊に森宗意を呼んで曰、天命あり、此城最早遲速はともあれ、一人も殘らず死は定りに候。就中宗意殿には、老人といひ、一度僧形にもなり給へば、人質の引導して、死を進め給へ。さればあの裾曲輪に引移り、人質を守り給へ。宗意領掌して、女童の數一萬二千人を引連れて、人質郭を取立てゝ引移る。其後葦塚は、竊に宗意に告げていひけるは、今味方、前日とは大きに勇氣劣れり。我れ止む事を

得ず、此謀をなす。君能く心に記して、彼山に至らば、天帝の本尊と稱し、白旗を多く立て給へ。扨又三つの谷の間には、樹木深くし、春の乾く間なれば、城中に萱蘆の類迄投込み置きたれば、敵軍攻上らば、女童に、天帝の誓を敎へ、人々稱名して、彼の谷へ戸障子を投下し、玉火を多く打込み、火をかけ給はゞ、浦風の谷より吹上ぐるなれば、谷中は火となるべし。其時上天菩薩の道は爰なりと敎へ、彼火の中へ飛入らせ、一人も殘らず燒殺し給へ。本城の將士妻子、敵の爲に燒殺さるゝを見ば、皆々死氣定まり、後へ心引かされずして、勇氣千倍し、詰の合戰華々しき働あらん。兎角敵に早く人質郭を攻めさする事第一なり。旗の手多く立てば、寄手必ず新に砦を攻むべし。さすれば數萬の鱗を捨てゝ、一魚、龍と化するといふべし。荒神が洞には兼て最期の合戰の用意と、殘し置きたる糧米の類幷に金銀を取乘せて、四郎太夫殿を守護して、兼て天草數千の渡船を奪ひしも、殘らず毀ちて城に用ふると雖、最上の一艘を殘し置きたり。是に取乘つて、海上潮の時間を明かにして、人數僅に百人計り打乘り、琉球にても呂宋・高麗にても、船路の潮に任せ、火炮に追船を崩して、天帝に任す

べし。然れども此事一度漏るゝ時は、城中撓んで、討死の合戰に大きなる毒なり。今聞く北條安房守來り、軍配して城を攻めば、此術迄には行かず、多分落城と覺えたり。然らば後世の聞えも恥かしかるべし。此事は、穴賢口にも心にも留むべからずといひしが、案の如く其氣を察しけん、北條安房守、敵に遁るゝ氣ありといひしなり。

異本に、四郎太夫碁を圍む。火炮來つて袖に中る。諸人、四郎が術盡きたりと嘲るといひしは、則葦塚が人質をいへる謀なり。

時に寛永十五年二月廿六日卯の刻、殊に其日は、浦風も靜にて、空も瑠璃の如く青し。朝日の色海に映じ、原城の山櫻も、花を催す朝霞、心なき輩も、あら長閑なる浦の氣色やと、諸人眺をなす所に、城の出丸口・松山の尾崎より、水色の鎧に金色の唐冠の甲、紅の母衣かけて、黑き馬に打乘り、山の尾崎より一文字に、只一騎駈上る。武者振といひ、四方の景色に連れ、いはん方なき眺なり。諸軍靜々たる中なれば、何れの陣にも見付けて、あれや〳〵と見る中に、早山の半に乘上らるゝ。諸人皆見知りたれば、さては鍋島甲斐守殿にこそ。いかにや〳〵といふ所に、御目代榊原飛騨守の

長子左衞門佐、同じく白毛の鎧着て、薄淺黃の母衣かけて、鹿毛の駒の逞しきに打乘り、押續いて平草山を乘上らる。彼古佐々木·梶原先陣を爭ひしも斯くやと、天晴稀代の見物なり。

されば此先陣の事、表向は御軍法を破り、拔駈になつて、御名代伊豆守立腹の上、鍋島甲斐守·榊原飛驒守迷惑せられけれども、其後御褒美ありし。此時安房守より內意ありともいひ、又廿五日彼の黑氣の中に、靑筋外に立ちて明くなれば、若しや敵、城を遁れんかと、鍋島甲斐守自分了簡にて、乘懸けしともいふ。又此日小笠原左近將監忠次の從臣に、高田又兵衞功あり。宵より鍋島家、明朝台戰あらん事を知る。人々其故を問ふに、西海寒うして、諸手旗皆朝霜氷る。然るに其夜鍋島甲斐守の陣中より、旗の霜解けて露滴る。汲は人氣春に上りて、陽氣增る故なり。此手より一番合戰あるべしと、自身にも拵へ、鍋島の手に打交り、上つて首一つ取れりといふ。武將感狀記に曰く、榊原飛驒守、祿僅千七百石にて、常に士を好みて、加藤左馬頭·福島左衞門太夫等の浪人を多く養ひ、只皆話伽とて、何時にても能き

主人あらば是を口入し、我は只浪人衆の中宿なりといへり。耶蘇の賊起る時、飛驒守は、細川越中守忠利の手の監使として有馬に赴く。子息左衞門佐と同道す。依つて浪人衆、久々の厚恩を謝せんとて、從うて行く者廿七人。此等皆先知千石五百石に下らず。二月落城の時、左衞門佐浪人を會して、一番乘を談ず。時に年十九歲なり。酉より亥に及んで決せず。藤田市左衞門席を進んで曰く、評議決せざるは、活に心あり。我手の勢百三人、原城中三萬餘の城乘せんに、生を全うして戾る理なし。若き人の口より出づ、只死すべきのみといふ。戶川定左衞門、右に候といふ。さらば最期の盃取交し、寅の刻に出で、小笠原勘介、車の旗を竿に卷いて持つなり。飛驒守は之を知ると雖も、知らざる振して細川の陣に行き、左衞門佐は疾く出でて候か。物見にや仕るといふ內に、左衞門佐一番乘して、車の旗を立つ。廿七人の士の功なり。

旣に若手の大將二騎、人交りもせず乘上るを見て、鍋島信濃守・嫡子紀伊守、御目附を討たせては、後難いかゞなり、進め〳〵と下知あれば、何かは少しも疑議すべき。前

後同勢二萬餘人、平一散に起り立ち、大筒小筒を取揃へ、楯を突立て〳〵、既に早帶曲輪へ取付いて、出丸の通路押切つて、一同に鬨を上る。黑田・細川・立花・小笠原の面々、すはや鍋島、御軍法を破つて一番乘するぞ、我れ後るゝなと、四方一時に鯨波を上ぐ。此事待ちし此頃の大將達、無二無三に一同に押上る。松平伊豆守大に驚き、是は如何なる事ぞや。御軍法を破り手前の相圖を待たず、大きなる越度を引出さん。早く引き給へと、使番頻に馳廻り〳〵すと雖も、諸將何れも聞かず顔にて、えいや〳〵と押上る。されば惣軍十八萬五千人、此時は一陣も殘らず向ひ進む。陣中震動し、山も崩るゝかと思はるゝ。伊豆守身を揉んで支へらるゝと雖も、諸軍進み立ちければ、詮方なく立出でられたり。さる程に出丸口は、兼て一揆の大將柄木右京・佐志木佐治右衛門、二千餘人にて堅めしが、此程は兵糧少なく、一飯は、食にもあらぬ物を煮焦して食ふ程に、力なく思ふ中、大江治平に一千餘人相添へ、出丸助勢として來り、是に少し力付いて、陣屋を堅むる所へ、今朝思ひ懸けず鍋島勢、眞一文字に乘上る。城中最早棒火矢を打つべき焔硝盡きたりしかば、小筒を揃へて打立て、大

石大木を投下して、爰を專と防ぎしに、甲斐守少しも恐れず、材木大石の飛び來るを、平地の如く乘上る。鎗を以て、馬に當るべき大木を打拂ひ〳〵、轉び落つる大石に飛乘り〳〵、えい〳〵聲をかけ上り進む程に、今日に限りて、親父信濃守も軍配強うして、尾崎へ馬を打上げて、身を揉んで下知あれば、惣軍二萬餘人、平押に攻上る。棒火矢大筒打出さねば、城中玉藥盡きたると見てければ、心安しと一足も引く者なし。甲斐守は、出丸外曲輪松山に取付き、堤の下に突詰めたり。一揆事急なるを見て、鐵炮を抛ち、是非なく虎口を拂うて突出でたり。甲斐守大聲上げ、一揆原を、今日に限りて一人も遁さじと、馬上に鎗を打振つて、味方出丸を乘破らずして、いつの時をか待つべきぞやと、呼ばはり捨てゝ、大象の荒れたる如く、千變萬化して切つて廻る。馬上は疊に座する如く、一揆多く素肌なれば、甲斐守の馬に蹶立てられて、多くは谷へ蹶落されたり。甲斐守の郎等には、大木兵部太夫・下村八兵衞・平岡勝二郎・鍋島彌五右衞門・都築宗兵衞・小池官兵衞抔を先として、究竟の若武者共、追々駈付けたり。乳人鍋島三左衞門、馬の承鞚（みづつき）に引添うて相働く。念なう外曲輪の松山に乘上

柄木右京討たる

鍋島直澄一番乘

つて、扇子を開き休らひける。出丸の大將柄木右京、今は是迄と、出丸の陰に突立ち上り大音にて、夫去年より以來、出丸口を取守りし一揆の大將柄木右京、只今最期の一戰なり。相手に嫌はあらじ。懸れ〳〵と呼ばはれば、甲斐守心得たりと馳向ふに、鍋島の家人平岡藤四郎、得たりやと、右京が鎗に手繰り付き、一躍に小堤に飛上れば、柄木右京、物々しやと、左の手にかい摑み、堤の下へ投下し、一鎗に刺殺す。甲斐守透さず馬を一足に立て躍り上り、鍋島直澄ぞと、大音に名乘りける。柄木思はず後へ十歩計り退きけるが、力足を踏直し、鎗打振つて立向ふを、甲斐守喚いて馳寄り、只一鎗に突殺し、旗よ〳〵と呼ばはり給ふ所に、佐志木佐治右衞門、馬上にて駈來り、推參なりと、鎗を以て毆り落し、出丸の樓へ駈上り給へば、味方二三十人計り、押續いて上る。然れども旗を持つ者なかりしに、鍋島三左衞門兼て用意して、甲斐守殿の旗を、腰に差して來りしが、鎗の先に旗をかけ、矢倉の上に押立て、天草の白旗殘らず打捨て、當手出丸口の大將鍋島信濃守が二男鍋島甲斐守直澄、當城の一番乘ぞと呼ばはつて、同音に鬨を咄と上ぐる。目覺しき有樣なり。御目附榊原飛驒守・嫡子

左衞門佐も、歩兵の强卒五六十人にて、押續いて攻上る。甲斐守を押返さんとする大江治平が陣を、散々に駈散らし、佐志木佐治右衞門が、馬より叩き落されて、再び兵具を調へて進むを、一打に切つて落し、同じく出丸の小堤へ躍り上り、松山の出丸の矢倉の上に取上り、是亦松山の丸の一番乘榊原左衞門佐と名乘り、同じく持旗を立並べたり。鍋島の後陣同時に乘上り、出丸・松山二の櫓に、鍋島の旗數十流飜り、鐵炮を配り四方を堅め、鎧づきして嚴然たり。一揆は二の丸に支へて防ぎ戰ふ。

南島變亂記第廿三

黑田先手働の事并細川家功戰の事

鍋島甲斐守拔駈の先陣、諸手に皆見えければ、黑田の先手黑田賴母・黑田右衞門佐是を見て、御軍法を守り、手痒く今日を送りしに、鍋島甲斐守の拔駈こそ、若手の手本とは覺ゆるぞ。此手とて後るゝなと、惣軍下知して、眞先に黑田右衞門佐馬を乘出して打向ふ。本陣も是を見て、最早賊兵共、玉藥は切れたりと覺ゆるぞ。乘破れと、惣軍二萬八千人、えい〳〵聲して駈上る。此口を守る大將には、千々輪五郎左衞門・組頭布津村代右衞門・菅村吉兵衞・大浦四郎兵衞・千束善太夫・原田淸藏・八代喜太夫・高木傳治、究竟の一揆三千餘人、帶出輪の切所に下り立つて、大木大石等を投懸け、小筒の鐵炮を打懸けて、爰を專途と防ぎ戰ふ。寄手は棒火矢大筒の類打出さねば、是

に力を得て、先手打なれば踏堪り躍り越え、勇氣日頃に十倍して、勢ひ懸つて進む。實にも理や、今迄は一手進めば一手退き、此口戰へば彼口逃歸る。夫さへ死を捨てて戰ひしに、今日は何れの口も皆進むといふ。後陣の大勢十八九萬の軍勢、段々に押上れば、先手何ぞ勇まざらん。威風堂々として、城も山も崩れぬべし。一揆の兵共大きに氣を呑まれ、裏崩れして、帶曲輪迄引入る者千人計り、餘兵も呆れて見えたる所に、千々輪五郎左衞門・布津村大きに怒り、臆病の味方かな。とても死すべき冥途の旅、行懸の駄賃なりと呼ばはり、提げて突いて入り、矢庭に七八人突伏せたり。是を見て黑田三左衞門、一陣に馬を駈合せ、健氣なり一揆の大將、いざ參りぞふと打つて懸る。續いて先手の物頭郡平左衞門・大藤市右衞門・浦式部など、何れも聞ゆる剛兵共、朱の鎗を打振り、えい〳〵聲を出して突き向ふ。一揆是に氣を呑まれ、小將大浦四郎兵衞始め五六百人、引連れ返す。布津村代右衞門大きに怒つて、いで一働して眠を覺さすべしと、鎗打振つて無二無三に打入り、忽ち浦式部が弟浦吉之助が胴腹を突拔く。千々輪五郎左衞門是を見て、代右衞門殿働、驚き入りて候ぞや。味

方が斯る臆病氣差したる時、退口の手柄より、難しき者なし。誠に一騎當千ぞやとて、五郎左衞門も手柄を顯はさんとて、同じく突き進んで、野村甚兵衞に手を負はせ、河村九郎を手の下に討取りければ、黑田の先手荒けて、少し怯むを見て、味方懸れと下知すれども、日頃に似ず、一人も進む者なし。はや黑田の二手より、勇兵と聞えたる浦邊七太夫・簑浦喜兵衞・飯田主馬、立並んで突いて懸る。千々輪・布津村、千變萬化して働きけれ共、味方終に勇みなく、帶曲輪へ逃籠る故に、千々輪・布津村二の矢倉へ引き息を繼ぎ、又駈出して戰はんと、目の下の黑田勢を追散らし、帶曲輪へ駈入りて見てければ、能く〳〵見落してやありけん、一揆殘らず二の丸本丸へ逃げ入りて一人もなし。千々輪、獅子の怒をなし、大臆病の者共や、千々輪一人生ある間、敵に恐るゝ事勿れと、勇め進むれども、嘗て殘兵勇氣の見えざるは、元來得物とする鐵炮のなき故なり。手下の一揆共、何となく心後れて見えにける。黑田勢押進む。此時出丸口は、はや鍋島の手に破られて、茗荷の丸の旗標、原城に飜れば、諸手の寄手勇みつゝ、帶曲輪へ蟻の如く取詰めたり。千々輪・布津村駈出で、有無の勝負せんと

する所へ、本丸より葦塚忠右衛門乘來り、大に制しいひけるは、此所強く防ぐべからず。今日は城中一揆の爲に惡日なり。無理に戰へば、一定大將を過つべし。是敵に日取ありと覺ゆ。先づ無念乍ら帶曲輪を捨てゝ、二の丸へつぼみ給へ。明日は又味方に勝利の日なり。合戰は士卒氣を勵ますにあるぞ。今日の味方の氣色にて戰はば無理なり。明日隱し置く所の玉藥を出して、敵を多く亡すべし。唯我に任せ給へと、帶曲輪を打捨てゝ、千々輪・布津村諸勢を纒めて、二の丸へ引取つて、翌日の戰を期しにける。黑田勢は、帶曲輪へ押上るに、防ぐ者一人もなし。黑田三左衛門・同賴母・同左衛門佐、本陣に告知らせ、帶曲輪を乘破り、白木綿の旗を燒捨て、逆茂木押倒し塀破却して、其後に先陣二陣堅むれば、後陣の本陣坂中に支へて、きしきよくはうて、明くる日を待懸けにける。細川家には、前々の戰に功なく、常に無念に思はるゝ所に、北條安房守指圖に依つて、口の津口の一路を開き、大に勇みて待ちし內、長岡監物父子、先日の詞を憤り、拳を握り待懸けたるに、今朝鍋島の手より、拔駈の先乘と見えしかば、こは口惜し。又人に先んぜられば、生きてあるとも甲斐あらじ。續

けや者共と、一騎駈に駈上る。されども細谷も、後陣の船手松井・有吉などの勇士共堅陣を取り、口の津の新道に、先陣中陣押出す。大軍といひ、道入廻りなれば、林下に向ふ時、大軍諸手は皆戰始まり、太刀音の震動山も崩るゝ計りなれば、長岡監物大に怒り、爰ぞ進めと下知すれば、中陣よりも宇土の城主細川和泉守有高・同若狭守等、各軍隊を下知して切つて上る。其勢三萬五千餘人、森の間より押上る。九曜の旗は山風に飄り、一揆の肝を打拉ぐ。日頃に十倍して、軍勢皆要用に當る。誠に地理を得るは格別なり。三の丸此日の一揆の大將は、勇猛第一の將大矢野五郎左衞門・駒木根八兵衞・鹿子木左京・上總三左衞門相從ふ。小將上津玄蕃・柏瀨茂右衞門・布津村吉藏、代右衞門子なり、彼等三千餘人、敵を難所へおびき寄せ、大木大石を投下す。此手は駒木根八兵衞・鹿子木ある故に、鐵炮の手は乏しからず。大筒小筒隙間もなく打出す。細川の先手難澁して上り兼ね、人を楯に突きてためらふ所へ、大矢野・上總、拔連れて切つて懸る。寄手の先備、坂落に駈落さるゝ。細川の先手小林半太夫・淺井九郎兵衞、爰を返すなと鎗を折敷き、嚴然として一揆を引受け、小返しに返せば、大矢野

怒つて十文字の鎗を廻し、先手七八人駈倒し、一度采幣打振つて味方を制すれども、一揆進む色なく、其中に黒田先手早帯曲輪へ攻上る。此勢に一揆勢、臆心生じ退き立ち、晴軍し乍ら三の曲輪へ逃戻る。上總三左衞門・鹿子木左京殿して、散々に戰ひ、敵を追拂ふ。細川の大軍目に餘り、大勢大山の動く如く押上る。心疲れて大矢野と手に手を取つて、無念の齒嚙をなし敵を睨み、一鎗づつ突いては引退き、終に三の曲輪に閉籠る、一息ついで軍兵の英氣を助け、再び出でて、死生の決戰を極めんと、城戸を守りて待懸けたり。

長岡監物父子働の事幷布津村代右衞門討死の事

長岡監物は、去頃北條安房守に、麒麟も老いぬれば、駑馬に劣るとの詞を、大きに心に懸けて、嫡子帯刀・二男萬作を呼んで、今日の軍は、鍋島の手より始まると雖も、出丸は格別の事、追手の黒田には、一寸も劣るべからず。一番乘すべしと、急に下知して打つて上る。此故に二人の子供、組下幷家人・雜人彼是二千餘人、眞先に進みて、

彼平草山に押上る。前に一枚楯を振廻して、必死を定めたる勢は、凛々として見えにける。跡より二萬餘人の同勢、一同に鬨を作る。細川家の長臣長岡監物、一番攻ぞやと口にはいへども、今年春秋積りて七十六歳、心計りにて行歩叶はず。況や道ずるり〳〵と辷る坂なり。敵より大木大石を投下す。大筒小筒の先を揃へて打つ程に、心計りは、如何なる剛將にも負けざれども、腰は二重になり、足は踏み定め兼ぬると雖も、近習子息に詞を勵まし、いかに汝等、是程の平山は、子供遊びの事ぞや。我に續けと先に立ちて上らるれども、三間上りては息を繼ぎ、五間上りては膝を折り、ひたと脆き、中々に叶ふべしとも見えず。實にや去る元和元年には、泉州信達池の働にも、岡部が輩と共に武勇を顯はし、其後細川家に仕へ、名高き剛者と雖も、行年には敵し難し。哀れ怪しき麒麟なりけり。爰に監物が嫡子帶刀は、父の手を引き先に立ち、次男萬作は腰を押し、えいや〳〵と上るにぞ、組下家人等も矢面に立出で、前後二百餘人、次第々々に押上る。城中よりも隨分火炮石材木投出し、打懸くれども、前とは大きに變りしかば、細川越中守忠利遙に見給ひ、一揆共は早弱りたると覺

ゆるぞ。無體に押上りて乘破れと、釆幣振つて下知あれば、長岡監物急度四方を見て大きに悶え、いかに子供、最早一手は、戰を始めたると見ゆるぞ。我れ心計りは働けども、足の遲きに後れたると覺ゆるぞ。汝等父に構ふ事勿れ。捨置きて面々に先陣せよ。進め〳〵と下知すれば、兄弟さすがに不行步なる父を捨て丶、進むにも進まれず、弟萬作いふは、いかにや帶刀殿、急ぎ先陣して、城を乘破り給へ。某は父上の介抱して上らんといふ。帶刀聞き、汝進んで一番に功を立てよ。某は長子の事なれば、父の御手を引かんと、兄弟競合ひ爭ふを、父の監物大きに怒り、齒莖を嚙んで足拍子を踏み、やあ汝等、此父が手助とは、近頃推參なり。年こそ寄つたれ此監物、武勇誰にか劣るべき。兄弟進んで一二の城乘取れよ。さなくんば手討にして、未來七生迄勘當ぞと、太刀拔持ち、二人の子息を追立つる。兄弟今は是非に及ばず。さらば父君の命に任せ、城乘すべし來れとて、二足連れたる唐獅子の、牡丹の巖に飛ぶが如く、後になり先になり、一文字に馳せ上る、父の監物是を見て、あら甲斐々々しの兄弟が有樣や。如何なる眺も是にはまさらじ。我爲には吉野高尾の花見ぞや。

いざ〳〵我も續かんと、長刀を杖に突き、よろ〳〵と上れば、老武者の息切れして、只組下の人々に、手を以て下知すれば、何れも爰にて此人を討たせては、何程の手柄したり共面目あらじと、楯を左右に投捨て、身輕になつて押續く。時なるかや天道、其功を助けしにや、此時立花左近將監中の手より、子息飛騨守、北條が詞胸にあれば、勇を表はして見せんものと、眞先に押上る。扇子繩手と帶曲輪の間より、命を捨てゝ切つて入る。大矢野・上總是に駈合ひて、喚き叫んで戰ふ故、三の丸の守殊に少かりけるに、細川の大軍に見崩れ、多くは木戸を捨て、二の丸へ逃込んだり。長岡帶刀・同萬作、何の苦もなく矢倉の下に着いてけり。下より思ひしとは、要害も淺間なり。板戸蔀二間踏み開き、打物拔いて踊り込めば、一揆二百餘人、散々になつて逃げて行く。長岡帶刀・同萬作、高櫓へ躍り上り、楯の板踏落し、白木綿の旗切つて捨て、腰なる上帶打振り〳〵、當城三の丸一番乘、細川越中守家來長岡監物が長子帶刀・同萬作と、大音に名乘り、是かりもの乍ら、初手より早く原城の一番乘、細川家に相極る。父監物遙に見上げて涙を零し、老後の面目是に過ぎずと、采幣振つて味方を勇

め、旗本へ使者を以て申遣し、二人の悴一番乘仕候。追付け落城仕るべく候。御馬を寄せらるべきやと申遣す。是に依つて旗本より下知あり、惣軍平押に上つて、先に進む面々には、有吉四郎右衛門・長岡七郎太夫・杉井隼人・大木兄弟・片山・常村・溝口なんど其勢五千餘人、旗本の士大將澤村主馬が長子才治郎、彼是都合七八千人、押續いて押上る。塀矢倉を引崩し、殘る徒を追拂ふ。大矢野作左衛門是を見て、二の丸より救はざるは心得ず。此手駒木根・鹿子木は、鐵炮の手を分けて兩方へ伏せければ、速に救ひ難し。先々の立花の先陣を追散らし、立歸りて防ぐべしといふ。中に早三の丸人數崩れたりと見えて、矢倉の上に、一番乘と呼ばはる聲聞えしかば大きに驚き、早速上總三左衛門に、上津玄蕃・布津村吉藏を差添へて打向はするに、上總三左衛門早速駈付け、細川勢の先手に向うて戰ふと雖も、大山の如く押來れば、雜兵皆々逃げ崩るゝ故、上總三左衛門勇を振うて、片山勘兵衛といふ物主を討取りけれども、敵少しも怯まず、潮の湧く如く進む程に、千變萬化して防げども止まらず。上津玄蕃忽ち討死す。布津村吉藏も、大木宮内と組んで、刺違へて死にゝけり。上總

原城三の丸陷る

三左衞門、小勢にて防ぐべきやうもなく、二の廓へ引き行かざれば、此場にて一揆の剛民五百餘人、細川の手へ討取りける。長岡監物下知して、早砦に火を懸くるに、苫葺の小屋なれば、卽時に煙四方に滿ちて、細川家九曜の大旗卅流押立て、勝鬨上げて陣を取る。三の丸は念なう落城したりけり。大矢野作左衞門は、三の丸破られたりと見てければ、立花家の先陣勇氣を表はし、山の如く押懸りて引取るべきやうなく、命を捨てゝ力戰す。立花の先陣吉弘市太夫・矢島外記五百餘人、扇子繩の廣みより、橫樣に打向ふ。大矢野はわざと引取りて、吉弘・矢島をおびき寄せ、矢懸り能くなりしかば、兩方に伏置きたる鐵炮へ相圖す。駒木根・鹿子木百五十挺の鐵炮を、一度に嗵と打立つる。立花の先陣七八十人一度に倒れて、陣中混雜すれば、得たりと大矢野鎗を入れて突立つる。忽ち先陣あらけて十方へ散る所へ、子息飛騨守、二番手の陣太皷靜に押へて入替る。大矢野是に馳せ向ふと、軍兵を立直す所へ、葦塚忠右衞門來り、今日の合戰殊の外難かし。殊に今日甚だ味方に不吉の日なり。强く戰へば、本城も危し。禍を轉ずる一法あり。我がいふ事に任せ、三の丸へ扇繩手共に打捨て

て、本丸・二の丸・荒神が洞の間へ、皆々引返し、必ず戰ふ所にあらず。帶曲輪の千々輪も、三の丸の上總も、皆引かせたり。本城よりは、一人も救兵を出さゞるなり。明日は味方に利ある日なり。只今日を期して明日合戰して、奇代の名を上ぐべしと、大矢野・駒木根・鹿子木等の諸將を引具し、扇子繩も打明けて、二の丸へ引く。扨こそ扇繩手の砦は、立花家の手柄なり。斯る所へ布津村代右衞門、帶曲輪を敵に取らるゝ事、無念の次第なり。葦塚老將の諫にて、今日戰はゞ、身亡ぶべしといふを聞かず、思へば餘り本意なし。三の丸は我子吉藏もあり、大矢野は未だ引くべからず。駈合せて力を添へ一戰せばやと、三の丸扇子繩迄横樣に、五十人計りの手勢にて駈付けたれば、大矢野最早引取り、吉藏は細川の先手大木宮内と組討して、共に死したりと聞きしかば、代右衞門涙を零して、迚も今日明日に死する命、子を先立てゝ一人殘れぱとて、何程の思出かあるべき。我子と同じ戰場の草の露と消ゆるとも、冥途の子に合はんと、手廻り兵五十人計、靜に鎗の穗先を揃へ、我子の當の敵、三の丸の敵陣へ向ひ駈入るに、黑田の陣に押懸り、黑田三左衞門が、一千計にて控へたる眞中へ、

面も振らず切つて入る。黑田勢、思も寄らぬ事なれば、陣脚亂れて、忽ちしどろに見ゆる所を、布津村は得たりと切つて廻り、矢庭に卅五六人切落す。只一人の布津村に、其手旣に崩れんとする所を、黑田圭稅未だ十七歲と雖も、勇猛の者なれば、代右衞門に打つて懸る。布津村打笑ひ、汝が分にて優しやとて、太刀振上げて拜打に切込むを、圭稅得たりと太刀にて受けしが、平身なる故にや、鍔元よりぽつきと折れて、甲の上に二寸計横に擲られて、前屈みにかゝり、薄手なれども、大力に強く打たれて、尻居に嗵と伏したり。家人土井四郎兵衞是を見て、南無三寶、主人の敵遁すまじと走り懸り、代右衞門が眞甲に切つて懸る所を、布津村引外して、土井が綿噛の所へ打込めば、只一打に四郎兵衞、二つになつて失せにけり。黑田三左衞門、六十五歲の老人なれども、氣力英雄の者なれば、大身の鎗を閃かして、忽ち焦つて、布津村が胸先に突込んだり。代右衞門につこと笑ひて、南無阿彌陀佛と唱へ居座つたり。立花の家人、横合より馳入りて、首を討たんとする時、黑田の家人西村太郎吉走り出でて、彼が當手の敵なり。他の備へ立交るべからずと爭ひ進む。布津村は目を閉ぢて、只

西村代右衛門戰死

念佛のみして居たりしかば、西村大音上げ、天帝め、何の念佛所ぞ。首を延べよと驅寄る時に、布津村大の眼を開き、我首を討たん者、只今鎗付けし老武者の、慥に大將と見えたり。汝如きに討たれんや。其上惡言す。いで天帝の供せよと、横毆りに、西村が諸脛ずんと薙倒して、高聲に念佛十遍計り唱へ、終に黑田主稅に首を討たれにける。此代右衛門は、布津村の庄屋、大勇の者なりしが、領主寺澤兵庫頭の非道を恨み、積つて一揆に組す。邪宗を信ぜぬ仔細は、最期の念佛にて知られたり。既に布津村討たれしかば、其手の勢、一人も殘らず討死す。三の丸筋靜まりしかば、黑田主稅・立花・細川の面々、家々の旗を靡かし要心嚴しく、不意に敵の襲ふべき事もやと、陣々心を堅固に、夜をぞ明しける。

南島變亂記第廿三畢

南島變亂記第廿四

小笠原、人質廓を破る事并鍋島甲斐守神異の事

豐前國小笠原家は、則小倉の城主にして、小笠原右近大輔・同因幡守・同内匠頭、其外一家總軍一萬八千人にて、一類一旗出陣なり。今度虎口の割合により、戰場に當らず。此故にさまで手柄もなく、又前方彼山田右衛門が返忠の矢文、小笠原の手より出で、城攻大きに仕損じ、評判宜しからず。故に右近大輔大に立腹し、父祖兵部大輔より、同苗信濃守相並んで、大坂にて討死して武勇を輝かし、大學之介迄大きに軍忠を勵まし、天下の耳目を驚かせり。此故に武名稱譽に顯はして、信州松本を轉じて、豐前小倉を賜はり、一家一族共に旣に卅萬石を拜領し、家臣にも武功の者多し。諸人に賞せられ乍ら、今度は言甲斐なく見ゆるこそ、細川・黑田・鍋島には御師、北條殿

も軍意見ありしと聞えたり。當手へは何の沙汰もなし。勿論戰場の虎口割にて、同樣にならず。細川・黑田・立花の陣に遮られて進み難く、今日の戰も鐵炮なき故、大手の一は、細川・立花・黑田と聞く。有馬一家其後に續いて、出丸は鍋島武勇を振ふ由、人口名高し。然れば當手、此攻口に漏れん事、法令とはいへども、無念千萬なり。いざ者共、攻め能からん口あらば、法令には違ふとも、無理に押上れよと、先づ城を見上ぐれば、本城の二の丸は堅固にして、天帝の白旗風に飜れり。黑田の人衆平一面に、一寸の明地もなし。雙方の鐵炮矢叫の聲震動す。爰に東南の方の山を廻りて、一つ峯あり。道細く離れ曲輪にて、常々には人もあらず、攻口の割もなし。然るに此間、俄に人數多く籠り、天草天帝の白旗、多く峯越に見えければ、小笠原家大きに喜び、是究竟の仕合なり。此丸を攻取つて、人口を防ぐべしと、一類合して一萬餘人、鬨聲を上げ、えいや〳〵と押上る。此處鐵炮も打出さず、矢一つも來らざる故愈喜び、扨は城中玉藥盡きて、勢弱れりと見えたり。只一擧に攻落せと、中段の峯を過ぎて押上るに、山上の小屋の中より、石材木を投ぐると雖も、石は小石の手頃なり、材

木は小丸太にて、中々人の損ずる程の事もあらず。是に依つて小笠原勢、息をも繼がず攻上る。理なるかな廓の中は、勞れたる女童計りにて、若菜を取り食物とし、土を煮て食ふ。總大將は森宗意、一揆の者十一人、相從うて爰を守る。されば鐵炮もなく大木もなし。此所を知らず小笠原家、嚴しき體にて上り來るも不幸なり。此故に軍使あり、御目代北條殿より下知の候。其手は思ふ仔細あれば、必ず引返さるべし、只元の陣堅固に御守り候へとなり。小笠原家嘗て取上げず、鍋島既に御軍法を破る。是程仕寄りたる此曲輪、乘取らずして置くべきやと、軍使等に畏り候と答へ乍ら、猶も進めと下知せらるゝ。既に小笠原の人數、山の八方へ乘上る時に、森宗意、女童共に、大音にて悟して曰、凡そ今度の一揆、只偏に死を定む。今日迄存命するは不思議なり。今敵の手にあらんよりは、火路に赴くを宗の本意とす。されば今此谷の中に、潤然たる上天の迎道を開くを、火消三昧の火塵となりて、菩薩界に生ぜん事は、兼々の願ならずや。さらば此谷へ天帝の名號を唱へ、殘らず飛込んで、目出度娑婆の別れを示すべしとて、日頃敎へ置きける古木枯柴雨戸障子なんど、後の谷へ投下

し、玉薬を放し燒き立つるに、廿六日の夕風に、炎々として燃え上る。女童老人共、心得たりと一同にて、いすまる〳〵と唱へ乍ら、我先立たんといふ者見えざりければ、森宗意、我女房娘二人引連れて岸に出で、日頃言置きしは爰なり。天帝の尊號を唱へ、先達して飛込めよといひければ、女房覺悟して襟押寛げ、此宗門有難しとは承り候へ共、導師御僧とてもなく候へば、何を力に心を定め申すべきといひければ、其時宗意大音上げ、天帝の法に歸して、何の導師をか求むべき。汝則大德の導師なり、夫れ諸宗と雖も皆空なり。萬法も皆一に歸し、何れの所にか歸せんやといひければ、女房悟つて、天帝の白旗を下し、裏に一首の辭世を書く。

法ならぬのりぞ誠の法ならめ嵐は殘り霜は空吹く

と筆を投捨て、宗意が方を見やり、追付け天上にて待ち申さん。娘來れと左右に挾みて、天帝の號を唱へ、忽ち火谷に飛入つて失せければ、是を見て一萬三千の男女老幼、異口同音にせんすまる〳〵と唱へて、我れ劣らじと燃火の中へ、飛込み〳〵焦れ死す。其聲大に叫び苦しみ、八大地獄の有樣も、斯くやと計り、目もあてられぬ次第な

り。此日如何なる日ぞや、寛永十五年戊寅二月廿六日、無智無罪の生民共、人の爲にたぶらかされ、一萬五千人、一時の煙と燃え上る。嗅氣は九州の鼻を突き、穢といふは、八十島に吹穢す。暫く一時、武事に於ては功ありと雖も、萬劫の惡業を惹起すは、唐人の唐歌にも、一將功なれば萬骨枯ると恨みたりしも理なり。小笠原勢は、女童とは夢にも知らず。すはや城中の奴原勢力盡きて、此の所にて自滅するぞ、上れ上れと二木勘解由組下千人、眞先に進めば、其外海原・中野・天野・平林の面々、彼是二千餘人、鬨を上げて平一面に押上る。時に一揆の大將森宗意、少しも騷がず、靜に鎧の引合より矢立取出し、白紙の旗を引下し、大筆に一首の頌を書く。

去歲今歲夢　喜怒四萬聲　什麼天帝子　火裡梅花淸

四句を書記して、其下に攝陽豐臣右府公の醫師森長意が嫡子同苗宗意と、大筆に書き、寄手の陣へ投出し、其後より法師武者、長刀を水車に廻して一揆十一人、某外女童の內、合戰に從はんといふ者彼是七十八人前後に隨ひ、噇と突いて出で、先手一組追下し、坂に息切したる武士六人討取つて、塀の內へ颯と引いて、扨十一人の一揆に

森宗意戰死

いふやうは、此の手は態と破るゝ廓ぞ。早く汝等は細道より、本丸へ取籠り、明日の合戰に、快く討死せよ。早く〳〵と竊に落しやりて、其後敵軍に亂れ入り快く戰ひ、敵廿騎討取れども、終に十本計りの鎗玉に上げられ討死したり。依つて小笠原勝関上げ、燃火に飛入る者を引上げて生捕になし、城に殘る者多く生捕り、其外燒爛れたる者は、首を切つて集るに、生捕千六百人、珠數繫ぎにして、首數千餘級、其餘は皆燒失せたり。小笠原家打集りて、何れも喜び、手柄顏にて、扨二木勘解由に命じて、首實檢するに、こは不思議、男の首は一つもなく、皆女なり。是はいかにと生捕を引出し、糺明をするに、皆女或は前髮の子供なり。生捕共に尋ぬるに、人質廓にて、女童計りなりと申す。首帳も拵へて認むる事も叶はず、切て只今働きし甲斐々々しき武者こそ、實檢にもやと甲を取れば、六十計の皺だらけの坊主首なり。扨も忌々しき働してけり。さるにても狐狸の業か、慥に手強く働きたるに、是は切支丹の魔法といふ者かやと呆れ果て、今更北條の諫を侮めども返らず、小笠原一家、手持惡しく呆れ果てたる首實檢なり。其中に二木勘解由心付き、北條殿使命に背くといひ、諸手

も皆々知りたる事に候へば、外に惡しく言沙汰せば、當家の恥辱なるべし。早速御名代板倉伊豆守殿・戸田左門殿御兩所へ、注進なされ然るべし。但し此使口上の間違ありては、却て越度にもなるべきや。拙者罷越し、隨分取計らひ申すべきの段申すに付、いかさま尤と定まり、早速陣所へ罷出で、今日小笠原一類本城離れ、曲輪へ押懸け申し、然るべき一揆共、悉く城中へ逃込み、先手共乘込み候砌、北條殿より見合せ申すべきの御使來り申候へ共、はや先手入城仕り、斯の如くに候。併此の中一揆共、大勢燒草を積上げて、自滅仕り申すやうに見え候。尤女童多く見え候へ共、御吟味の筋もあるべきと、御法に背く逆徒、其儘にも自害すべきに非ず、若又此度の始末、御糺明もあるべき事に奉存候故、女童に候へ共、二千人計り生捕り置候。討取り申す首も、一千餘候へ共、多く燒草にほたれ候まゝ、打捨て申すべきや。先づ大將森宗意と名乘り候者の首一つ持參候由申上る。伊豆守、尤の事に候。宗意が首受取候。實外の首共ほたれ候はゞ見るに及ばず、首數計にて相記し、差越し申さるべく候。實檢には及び申さず候。山上の骸と一所に埋めらるべく候。生捕の分、女童共にて候

はゞ、皆々麓へ下さるべき旨言渡され、やう／＼事故なく濟みければ、二木勘解由は大汗になりて、這々に鰐の口を遁れし心地して、小笠原の陣へ歸りしとなり。扨又葦塚忠右衞門は深く謹み、堅く本丸二の丸を守りて、諸軍を下知して居たりしが、夕方に及んで、小笠原の手より、人質曲輪を攻むると見えければ、心喜び待つ所に、彼十一人の一揆遁れ來りて、妻子老幼、殘らず燒死したる由告げしかば、扨は明日の合戰、味方打勝ちぬと思ひければ、本陣へ歸り手配を定め、先陣の將を呼集め、籠城以來、最後の一戰待受けたる事なりと雖も、足弱に心引かるゝ者ありしに、今妻子皆敵の爲に燒殺されて、恨重疊なり。さらば一人なりとも敵を討取り、妻子の弔軍すべきなり。人は死する時こそ、平生の英雄は顯るゝといへり。さすればさすがは土民百姓なりと、敵に笑はるべし。各思ひ定め給へといふに、日頃死夫と思ひ定め乍ら、今日人質曲輪の火焰を見てより、恨氣胸に突き、中々鐵石の心とぞなりにける。二の丸は千々輪五郎左衞門・大矢野作左衞門・葦塚忠太夫・同左內・駒木根八兵衞・鹿子木左京、今日を最期の合戰なれば、荒神が洞に貯へ置きたる鐵炮の火藥、殘らず押出

し、大敵を打破り、天下の肝を拉がんと待懸けたり。本丸には天草甚兵衛・玄札、大將四郎太夫を守護し、大江治兵衛・田崎式部等を集め、葦塚忠右衛門が計らひとして、荒神が洞より本丸の間に、不思議の謀略をなし、天晴死物狂に、關東の御名代衆を一拉ぎになし、名を萬代に顯さんと、大軍取圍むに、事ともせず、勇氣を勵まし待懸けたり。葦塚其夜陣氣を見るに、又一揆の兵威振ひしかば、大きに喜びて明日を待つ。北條安房守、小笠原の一家、命をも用ひず、人質曲輪を燒破りたりと聞えしかば大きに驚き、是又敵に一萬の加勢を入るゝに似たり。其夜陣氣を見らるゝに、敵の氣大きに直りて、窮鼠猫に向ふの勢あり。況や明日土のへの日に當りしかば、金氣の城を助くるに生日なり。大きに難かしき日取なり。今日小笠原、人質曲輪を燒かずして、謀を入れて城中を離散せば、今夜中に多分落城すべきものを。いはれざる事に、小笠原の手柄立ぞや。而も此城、機を隱す事多しと覺えたれば、戰うて落す時は、殊の外難かしき働なり。中々急には落城あるまじ。然れども味方山上に假居して、兵糧に難儀すべしとて、俄に石谷十藏・牧野傳藏に命じ、兵糧米殘らず打上げさせ、麓に

大釜數十ヶ所据ゑて、急に強く飯の如く炊かせ、近邊の在家の大家共に觸渡して、隨分飯を炊ぎ、麓迄持參すべき由觸渡し、手島莫蓙に包み、一俵づつとなして、一石に二百人の積にして、麓より引きも切らず持運ぶべしとなり。水は人別に桶を與へ、谷水を汲上げ、城より下る水を、一滴も飮むべからずと觸れて、先陣皆握飯を食ひ、夜中大篝火を焚きて、夜討の要心嚴しく相守り候へと、北條殿自身山上山下駈廻つて下知をなし、廿八日落城迄、終に眠ることなく、身を揉んで下知せられける。されば黑田・細川・立花等の陣所へ、北條殿直に馬を乘寄せて、明日城攻は、甚だ味方謹まずんばあるべからず。各其心得し給へ。猥に進み給ふべからずとて、能く〳〵下知して立歸り、直に鍋島の手へ來り給ふに、早夜明けて、甲斐なく疾く出陣なり。榊原左衞門佐も、續いて出馬と見えしかば、先づ暫く待ち給へとて頓て止め、北條殿鞍嵩に突立ち上りて、四方を見渡し給ふに、黑田・細川の軍勢、人より先と二の丸を取圍み、鍋島殿は、本丸の二の城戸へ、横合より馬を進めらる。北條殿手を打つて曰く、此間必ず奇計あるべし。恐らくは味方の大將を過つべし。地勢を見るに、火藥を地に伏せ

たると覺ゆるぞ。扇子繩の手より、立花・小笠原の手に命じ、水を止め山をさき、二の丸の後へ落し、地脈の火氣を去つて後進むべし。鍋島殿へ早使を遣し、此旨を告げ、安房守逸り切つて、立花・小笠原の手へ乘付けらるゝ。鍋島甲斐守は、斯る危き謀あるとは夢にも知らず、血氣に任せて一番に打つて出で、例の水色の鎧に、紅の母衣かけ、黑の馬に乘りて進まるゝに、此馬本丸の傍に至つて、一度嘶きしが、立竦みて一歩も歩み得ず、色々鞭打てども動かず。甲斐守不思議に思ひ飛下り、奇特を顯せし祕藏の馬、大に驚き怪み、忙然として暫く立ちておはせしが、いでや乘替招いて打向はんとためらはるゝ内に、早打の使者來り申しけるは、先々御引き候へ。北條殿の御下知に候。此間に敵、謀を設けて見え候。扇子繩の手二の丸の後の谷水を落し候へば、其後本丸攻めらるべきに候。構へて猥に進むべからずと、呉々仰せられしといひければ、日頃尊信せらるゝ北條殿の仰に候はゞ、只今馬の不思議、旁以て心得難し。本の陣へ引取り、暫く待ち給ふ內、扇子繩の山越に、堤を切つて落しありと見えしかば、本丸には、將士駒木根八兵衞立顯れ、扨々運强き鍋島甲斐守殿ぞや。又北

條來つて軍配をなすと聞えしが、今扇子繩の手の水を下して、地中の火藥道筋を立切らば、何事も甲斐はなかるべし。今折角設けたる事なれば、あの有馬・小笠原の人部共、寺澤・松倉の先手なりとも、打散らして止めばやと、時刻は及ばずとも今放せと、國崩といふ大筒を、どつと切つて放したりしに、本丸の二の木戶の外れより、二の丸の裏手迄、火藥を通じ置きたれば、一齊に火光迸り、大小の者共飛行して暗闇の如し。若し此所に、鍋島勢行懸りなば、一人も生くる者あらじと見えにけり。されども二度目の飛玉、本丸の追手へ近くて、寺澤・松倉が先手の中へどうと落つれば、數百人の軍卒共、或は中天へ飛上り、或は頭を打叩かれ、微塵になり、其上小さき玉四方へ飛びて、鍋島の脇備・立花の別備・細川の先手迄、散々に打散らせば、寄手大きに騷ぐ所へ、大筒小筒の手先を揃へて打亂し、其後に葦塚左內・上總三左衞門・大江治兵衞、鎗先を揃へ突いで出づれば、二の丸の裏口より、大矢野作左衞門一揆數百人、喚いて駈出づる。寺澤・松倉の陣震動して逃げ崩るゝを、鍋島甲斐守・紀伊守心得たりと、陣々入替る。大矢野一手は立花の陣へ、會釋もなく切つて懸り追廻して、二の丸の

追手迄押立て、散々に戰ふ。此戰は暫く後に記す。一方の葦塚左內・上總三左衞門は、鍋島勢に打つて懸る。鍋島先手諫早隼人・鍋島勘解由・同彥太夫、其外木造・別所・市川が輩、先手に進んで切つて懸る。葦塚左內・大江治兵衞・上總些しとも恐れずして、散々に切立つる。一揆一千人、死身になつて戰へば、日頃に勇氣百倍して、一足も退かず組合ひて、首を取られても、肩骨にても腕元にても喰付きて、齒たゝきして死しける程に、寄手の兵も空恐しく、多くは引色に見えにけり。別所小五郎・市川甚八、物々しや一揆共、其處引くなと切結ぶ。葦塚左內躍り懸つて、別所・市川を切立つるに、忽ち甚八、手の下に討たれけり。小五郎少しも退かず、大江治兵衞駈寄つて、弱腰摑んで打付くれば、一揆共上へ上り、足手を拔いて四になす。鍋島彥太夫心得たりと、馬上より鎗取延べて突く所を、葦塚左內透さず橫合より、躍り上りて打つ程に、鍋島彥太夫馬上より、二つになつて失せにけり。是に依つて、此陣微塵に碎けゝれば、鍋島の先手半町計り崩れて引く所へ、甲斐守直澄、乘替の白馬に打乘り、走り來り是を見て大きに怒り、爰を一足も引かば、誰に向うて面を合すべきと、鎗提げて立

向ふ。大江治兵衞是を見て、いで甲斐守殿ぞ。願ふ敵なり、まゐりぞふと突懸けたり。甲斐守常々物和かなる人相にて、人よりも眼目尋常の形なりけるが、此時兩眼朝日の如く、聲荒らげ、推參なり、己れ我前を過ぐるや尾籠なりと、急度睨み給ふ其勢、偏に鬼神の如く、さしも大江治兵衞、大剛の者なれども、覺えず膝を折りて平伏す所を、甲斐守躍り懸つて、一鎗に刺殺す。乳人鍋島三左衞門、終に治兵衞が首を討つ。葦塚左内心驚き乍ら、刀を振り立向ふ。甲斐守の鎗に、二打三打叩き合ひしが、甲斐守の鎧の上に、雷光の出づるが如く、光り廻りたるに氣撓みければ、覺えず十歩計り退きしが、終に軍を引纏ひ、退いて本丸へ入りて閉籠る。鍋島勢是に氣を得て、惣軍續いて本丸に向ふ。本陣鍋島信濃守、惣軍を下知して押懸り、鍋島紀伊守の先手に、中尾何某といふ大筒の達人ありしが、百目玉を强藥にて、本丸の一の木戸を打開き、二つ放しければ、本丸の門の木内より折れて、戸板微塵に碎けて散りければ、鍋島勢、同音に鬨を上げて勇み立ち、雲霞の如く進み行く。甲斐守荒神の荒れたる勢、馬を乘捨て髮をも亂し、柄先迄血になりたる鎗打振りて進まるゝ。あはや本丸、今目の前

に落ちぬべしと見えたりける。

鍋島信濃守先陣諫早豐前、此日功ある故、軍中にて采幣を許さるゝとなり。

南島變亂記第廿四畢

南島變亂記第廿五

千々輪五郎左衞門討死の事
幷黑田・細川二の丸を取る事

此時本丸には、葦塚忠右衞門地中火雷の謀、扇繩の手の水に破られしかば、是必ず北條安房守が謀なるべし。我れ今死夫なり。己れ天地を貫く術ありとも、一度は思ひ知らさで置くべきか。さすれば本丸の切腹とは思ひ定めたれども、さらば荒神が洞に一術を設け、寄手を一惱し惱して、安房守に手を取らすべしとて、暫く命を永らへて、本城切腹は弟忠太夫に天草玄札を定めて、御座の間にて切腹すべしとて、大將四郎太夫を倖ひて、大矢野を始め究竟の者共、二の丸へ引取りて、荒神が洞に籠らんとなり。旣に其用意最中なる所に、一の木戸打破れりと告げ來りければ、葦塚、千々輪

五郎左衞門を招いて、いかにや千々輪殿、契も今暫くとこそ存候へ。武門の意地に候へば、荒神が洞の一手立思立ちて候間、何卒貴殿の勇武を以て、鍋島の手へ馳向ひ、一防ぎして給はるべしといひければ、五郎左衞門欣然として、鎧搖直して立向ひけるが、今は是迄と、今生の名殘ぞと思ひしかば、忠右衞門に向ひ、今度の企、互に運開くべきには非ず。然れども今日に至りし事、誠に是非なき事なり。但し誰を後詰ともなき裸城に、二年の籠城して、天下の大軍に對し、今日に至つて猶戰ふ。我輩の本望、天下の聞え、此の上のあるべきとも思はれず。萬計皆夢の戯に候。互に來世にて再會せん。四郎殿を始め、何れもさらばと言殘して、一の木戸へ立向ふ。千々輪五郎左衞門生年四十六歳、黑糸の鎧にふちなはかけ、此頃細工に仕立てたる、一丈餘りの樫柄の、三尺計りの刀を鑄込みたるを提げて、究竟の一揆二百餘人相從へ、向ふ者なき勢にて、本陣の横廓作道の廻角より、辻風の吹出る如く、一揆の首領千々輪五郎左衞門爰にありと突いて出で、鍋島の先手三千餘人の眞中へ、面も振らず打つて入り、件の手鋒を持つて、當るを幸に突伏せ薙倒し、勇猛を顯せば、從ふ二百の剛兵共、

今日を限りと働く勢、妻子の恨を口々に言罵り、一足も引かず戰ふ有樣、中々當り難し。鍋島勢、分内狹き所なれば、大勢も取卷かれず、散々に押立てられ、直に一の木戸も押返されて、逃出でんとする所に、鍋島の旗本奉行石川權太夫、物々しやと鎗追取り、千々輪に駈向ふ所を、五郎左衞門さしつたりと、無體に鎗を叩き落し、石川を何の苦もなく鋒の先に刺貫き、後の谷へ投捨て、働偏に鬼神の如くなり。依つて鍋島の先手、ばつと退きたりける。惜い哉千々輪、殊に一騎當千なれども、不幸にして逆徒の棟梁となる事を。此時に五郎左衞門、一揆二百人を率ゐて、勢に乘つて切卷るに、我一人、皆々十人に敵すれども、鍋島家は大勢なり、恥ある武士多ければ、敗軍すべきやうもなく、一揆原は素肌なり、心計は鬼をも取拉ぐの志なれども、一人二人押へ立てらるゝと見えしが、百人計に打なされ、暫く息を繼ぐ所へ、鍋島甲斐守は、只今の働に、草鞋の紐切れたるを、とある松蔭に寄つて、再び結び直し、鎧搖直し佇み、本城より鐵炮打懸くれども、一つも當らず。其上戰の中旗差物の間に、墨繪に書きたる如き捌き髮の女の姿、ひら〳〵と見えて、一揆立向ふに、身震ひして寄付かず。終

に手負ひ給はずして、終に甲斐守鎧の上帶締めて再び出で、爰彼に一揆六人迄突伏せらる。千々輪は四方に向ひて戰ひしが、今は防ぎ得じと見えければ、我れ兼て約束あり、最期に首は鍋島甲斐守殿に渡すべしといひしが、此人何所に在せんと、向を急度見渡せば、遙の松蔭にこそ、甲斐守例の水色の具足着て、武者振ゆゝしく突立ちたり。五郎左衞門につこと笑ひ、あら嬉しや本望やと、久しく候甲斐守殿、千々輪五郎左衞門にて候ぞ。御存知にて候や。今日迄存命せり。いで見參と手鋒を振廻し、鎗遊ばせと呼ばはつたり。鍋島三左衞門是を見て、南無三寶、又こそ千々輪めござんなれ、年寄りたれども鎗一筋、物々しやと打折しき、既に討つて捨てんものと、千千輪が鋒に取付くを、大力無雙の五郎左衞門、是を事ともせず引寄せて、三左衞門が上帶摑み、中に差上げ投捨てたり。三左衞門大力に打付けられ、心計は無念と働け共、老人の足腰痛み這ひ廻る。其所へ榊原左衞門佐・戸川丈右衞門馳付け、打つて懸る。千々輪怒つて面倒や、汝等其所を退けよと打投ぐる。手鋒の胸の方、戸川が肩口に當つて、一二三間投散らさる。再び手鋒を投突きにするに、榊原左衞門佐が左

の股に、裏かく計り打立ちたり。左衞門佐心得たりと引捨てけれども、深手なれば尻居に倒るゝを、戶川走り寄りて、左衞門佐を引抱へて、本陣へ引いて退く。千々輪再び鋒を取り、甲斐守に立向ふ。甲斐守鎗を以て突出さるゝを、鎗のしほ首丁と握つて、本城の方へ廿間計り引いて行く。鎗を引拂うてつゝと入り、押並べて無手と組む。甲斐守も金剛力を出して押懸くるに、思の外千々輪、手もなく下になりしかば、甲斐守終に組伏せ取つて押へ、いかに五郎左衞門、只今最後ぞや。あつたら勇士を、一揆にして殘念ぞや。いひたき事あらば申すべしとありしかば、千々輪は、甲斐守の兩手を無手と握り、さて〳〵健氣の御大將や。我首を與へんは、君ならでは外になし。是本望なり。抑當城儀、未だ今日は落つべからず。明日本丸落城するとも、乾の方荒神が洞といふ所の檜木山に、一つの穴あり。彼所大將四郎太夫始め、究竟の老將共忍び居て、不意に打出で、手詰の一戰せんと用意なり。此事親子兄弟に深く包み、大功を立て給へ。某末期の一言、心に疑ひ給ふなと言終り、御尋のいひたき事是なりといふ。直澄聞き給ひ、坐ろ不便に思召し、神妙に候。能くこそ知らせ

千々輪五郎左衞門討たる

たり。明日の手柄は、誠に汝が賜なり。さて汝は、子はなきかと尋ね給ふ。大勇の千々輪聲打曇り、有難き御尋に候。肥後八代城下法華寺に、當年八歲になり候悴あり。彼が存亡、偏に君が心にあり。早く我首を打ち給へといふ。甲斐守の曰く、汝言殘すべき事是計りか。今忠義を持つを教ゆ。感じても餘りあり。今聞く八代の幼子の事尋ね出し、我家の功臣とすべし。心安かれと宣へば、五郎左衞門起直つて、題目十遍唱へて、再び無言なり。甲斐守終に首打落し、一揆の首領千々輪五郎左衞門を、甲斐守直澄討取つたりと呼ばはり給へば、父信濃守大きに喜び、同勢に下知して進め、直澄頓て本丸の一の木戸に乘上り、當城本丸の木戸一番乘、鍋島甲斐守直澄と名乘り給ふと、はや鍋島三左衞門、旗を下より投上ぐれば、甲斐守自ら取つて櫓に立て歸らる。手柄比類はなかりけり。されば甲斐守、天下の稱譽に預かり、肥前小城十二萬石下さるべき內意なりしかども、堅く辭し申さるゝ間、小城七萬石紀伊守に讓り、自分は蓮池にて五萬三千石拜領なり。本家後見として、威勢九州に高し。俗に小鍋といふ是なり。事靜まりて後、甲斐守殿、勇士の約言違へ難しとて、竊に近臣

をして、千々輪五郎左衛門事を、肥後の八代より尋出し、世の憚あればとて名字を改め、則此城の地名にて、原と名付く。原齋宮と號して、錄千石賜はり家老となつて、今に榮ゆるとなり。後に田原と改むといふ。扨黒田勢、前にいふ二の丸國崩火炮の變に依つて、一方へ打つて出し、彼大矢野作左衛門、本丸石火矢の黒煙の中より、松倉・寺澤の先陣等を、木の葉の如く追散らし、立花の先陣を打破つて、二の丸の追手に押廻して見てければ、黒田・細川の軍勢、蟻の如く追取り卷く。物々しやと駈散らし、一揆の味方を顧れば、百騎計り討たれければ、迚も崩るべき細川・黒田の陣にもあらずと、獨言して引いて入る。此口には、幅二間計り深さ一丈計りの空堀あり。爰へ用意の跳橋を渡し、一揆を皆引取らせ、わざと橋を殘して、大矢野作左衛門、此口より引いて入る。此口を守る一揆の大將戸島宗左衛門・軒山善太夫、究竟の剛民五百人、竹鎗を揃へて鬨を作り、敵にあらざる大矢野、二將に爰を破らるゝなど言捨てゝ本陣へ行く。透さず細川勢押寄せ、眞先に長岡帯刀進みたりしが、是を見て物物しやと、一揆原僅の橋を飛越え、爭でか我を防ぎ得んや。いで一鎗の勝負ぞと、力

足踏んで進むを見て、弟萬作續いて馳せ來りしかば、是を始めとして有吉・杉井・大木・山本等の勇士共、一文字に馳せ付け、跳橋の本に押合せて、はや長岡帯刀一揆の大將戸島宗右衞門・軒山善太夫鎗を組んで、からり〳〵と突合ひしが、後より續く大勢に恐れ、軒山少し退けば、帯刀飛んで突く鎗に、戸島が胴腹ぐざと突込むを、戸島も剛氣の者なれば、こは口惜しと、太刀を拔き鎗切折らんと、獅々の怒をなせども叶はず。終に帯刀が爲に堀の中へ落されける。軒山善太夫は大に恐れて引退く。黑田の先手咄と聲をかけ、空堀に飛込み〳〵、附入にせんとする時、大矢野作左衞門、又荒手を引いて突いて出で、先へ進む黑田勢をば廿人計り、算を亂して突伏せければ、一陣咄と崩れて引返す。大矢野此中に、味方を城戸の中へ入れ、虎口を立直さんと、只一人後に殘り、敵を睨んで立ちたる所へ、長岡監物が二男萬作、跳橋の上をはや渡り、橋の先陣我なり、續けや者共と呼ばはる所を、大矢野走り來り、橫抱に無手と組む。引上げて見るに、前髮の顏にかゝりければ、健氣なる敵ぞや。重ねて働けとて、弓杖二丈計り、橋より彼方に投げ返せば、萬作躍り起き、あら心得ぬ敵の振舞

かな。敵に助けられて、生きて歸る侍やあると呼ばはつて、又駈向ふ。扨も健氣の若者かなと、打笑うて城に入る。長岡の先手も黑田の陣も、大矢野が武勇を感じて、暫く攻口を退きける。斯くて黑田筑前守は、二の丸大手に犇々と付きて、爰を揉立て攻めければ、一揆の魁將鹿子木左京・島津八五郎に、手先を廻して鐵炮を發し、爰を詮と防ぐ。黑田左馬之介是を見て、長柄の鎗を十本からげにして、二百本計りを、雜兵二百人計りに持たせ、堀の中へ入れて、是を擔げさせて渡しければ、橋の如くにて、安く渡るべき有樣なり。此上を打渡り、城へ乘入らんとする所へ、大矢野作左衞門顯れ出で、忽ち堀に飛込み、雜兵七八人薙倒し、大きに怒りければ、百人計りの步卒散々に亂るれば、鎗の橋は、からり〳〵と堀の中へ落入る、上へ乘懸けたる武者廿四人、一度に堀へ落入りて、周章てふためく所を、十本からげの鎗を打亂して、穗先を向になし、堀の中より投上げたれば、風鳴り響き渡り、此中へ居る所の武者雜兵共、刺抜かれて散々に倒る。黑田筑前守物頭栗山新平、步の士二三十人引連れて、切先揃へ堀の中へ飛びたるを、大矢野見て、爰は軍する所に非ず。兎角城を乘り給へと、

からからと笑ひて、長柄二本を杖となし、一躍りに岸に上り、再び飛んで塀の上に乘付く。此二の丸、汝が手には合はぬぞ。大矢野作左衞門とて、本多出雲守が內に、名を知られたる者なりと、尻打叩き飛び入りぬ。黑田・細川大に怒り、大軍を以て攻立つる、二の丸城中にも、葦塚左內・駒木根八兵衞・上總三左衞門、日頃名を得し一揆共、爰を專途と防ぐ程に、兩方に叫ぶ聲鬨の聲、打違ふ鐵炮の音、或は諸手の虎口に駈込んで、討死するもあり、追出しては打殺すもあり、千騎が一騎になつても、引くなくと勵み合ひ、一揆は一勢なれども、昨日妻子を燒殺されたる恨なれば、討たれても切られても我身を忘れ、一足も去らずに防ぎ戰ふ。日暮に及びしかば、寄手彌重りて、打出す鐵炮の玉、突出す鎗先、篠を吹出し、葦の穗の、時雨に起る心地して、いつ果つべき戰とも見えざりしに、葦塚忠右衞門軍使を以て、早く二の丸を去つて、本城につぼみ給ふべし。別に一戰の地ありといひ來りければ、葦塚左內・駒木根・大矢野諸共に、外道より引取つて、本丸へつぼみし程に、二の丸は念なう細川・黑田の手に落ちて、長岡帶刀・黑田三左衞門等、東西より押上り、旗の手悉く取替へて、諸軍同音に勝

原城二の丸陷る

鬨を上げて、翌日の戰に手柄を顯し、武名を西海に輝かさんと、勇を含んで待懸けたり。

南島變亂記第廿五畢

千々輪五郎左衛門討死の事并黒田細川二の丸を取る事

南島變亂記第廿六

葦塚・北條、機を爭ふ事

本丸は、葦塚忠右衞門、種々の奇策を思ひ計ると雖も、只今に及んでは、敵に北條安房守あれば、見顯はされて、其功徒になるより、無念重なるなり。今城中手負最も多し。死を定めたる手立は、いかなる事もなるべきなれども、一度仕損じては、既に落城なれば、色々と肺肝を碎きて、終に散死龍の謀をなす。多分此安房守をして、進み退く道なく、手を空うして肝を破らしむべしとて、城中の諸將に、種々の術を敎へ、二十八日夜明けしかば、荒神が洞に貯へたる所の一艘の軍船を、大坂の盲舟の如く作りなし、内には火藥焔硝の類を込め、死を定めたる一揆十八人取乘りて、何さま大將四郎太夫を始め一味の首領共、落行く體になし、細川・黑田の舟手に及び、五島・長

崎・薩摩の諸將追取卷きて討取らんとせば、則相圖の火炮を、内より打て打圍む。軍船萬艘もあらばあれ、一時に微塵になして、海上の泡となすべしとの謀なり。尤船中の味方、一人も活くべきに非ず。故に散死の二字なり。大將には上總三左衞門・佐志木佐治右衞門・會津宗印、是を承りて勤む。皆是前日の合戰に、股の間腰の上に手疵蒙りて、迚も立つ事能はず。必死を思ひ定むる故なり。其他の從者も、皆々思切つたる者共なり。されば廿八日の朝霞の紛れ、早舟に仕立て押出す。舟手の細川勢是を見て、すはや敵將落行くはと、本陣に訴へ、諸手共に進んで、軍船兵船押並べ、海面に追取り卷く。北條安房守此告を聞き、我れ此間一夜も眠らず、軍機を窺ふに、敵に一點も遁るゝ氣なし。是必ず船中謀あるべし。捨て置けば味方を損する事あるべしと、自ら早馬に乘り、細川の陣に行き、諸手を検分して、自ら水塞に馳下り、有吉四郎兵衞に敎へて曰、此舟必ず僞ならん。豈に晝に向うて出でんや。況や船の足輕しと見ゆ。我れ計るに此賊、松倉家の城付の藏を發きて、祕法の火藥を多く奪ひたりと聞く。是必ず舟の中に硝藥の火炮を用ひて、取圍む兵船を、打破らんとす

るなるべし。敵船に近く寄る事勿れと、諸陣の船奉行に段々通じ、扨船を繫いで連環となし取包んで、船を先づ近き方より大鐵炮を放して、逃道を遮る。北條殿も船に移りて、諸軍船を下知して、身を揉んで指圖せられける。只大筒を遠く打ちて船を近付けず。海中に陣して防がれけるに、此船不思議や、時刻の積りありしや、辰下刻巳の時に及ぶと思ふ時に、船中より火起り、霹靂一聲蒼海震動高鳴して燃え上る。火玉十方に飛散り、陽侯靈胥の高波立ちて、燃ゆるが如く舞ふが如く、暫く邊黑闇となりしが、忽ち微塵となつて失せにけり。是れ諸方より打込みし大筒の故にやありけん。又火船の燃ゆる刻限にやありけん、散死龍の火術の船路、味方數百騎亡ぶべきに、北條殿一人の見積能くて、水陣の船手一人も損はず、誠に萬里の長城なりと、諸人大きに感じけり。葦塚忠右衞門は、目附を置きて是を見るに、北條安房守陣を去つて、船手へ下りたると見てければ、冷笑して、何ぞ只一謀のみ用ひんや。我又散死龍の術を設けたり。寄手大きに破るべしと、敵寄せ來る時、其儘本城を皆開き切つて出づる。葦塚・大矢野・駒木根・鹿子木等、凡て軍將、咄と駈出で追崩す。鍋島・

黑田・細川・立花・有馬・小笠原・伊藤・松倉・寺澤等、今日を落城の時ぞや。今日手柄せずしては、いつの時にか斯る敵あるべきや。誰も〳〵進めと、鎗先を揃へ突向ふ。御本陣松平伊豆守殿よりも軍勢を出さるゝ。其外諸國の附使者なんど、今日に合はずしてはいかゞすべきと、十八萬五千人、一同に切つて懸る。一揆四五百人、將棊倒しに打ちければ、終に打負けて引いて入る。本城後に本丸の臺とて、一段高き所あり。此上へ皆引上る。此所は矢懸り惡しく、殊に鐵炮を多く伏せたれば、寄手先づ本陣に入變る。二の矢倉・三の矢倉・二の丸續きの臺に、寄手殘らず打上り、楯を捨て旗を奪ひ、扨も今日は一揆の者共、脆く本城を明けたる事ぞやとさゞめき、最早辰の刻過ぐるに、本丸の奥の臺より、大鐵炮五つ六つ轟々と打込めば、すは何事といふ程こそあれ、同時に本城櫓の下よりも、響き渡ると聞ゆるぞやといふ程もなく、一聲に天地も崩るゝ如く高鳴し、あはやといふ中に、矢庭に黑煙闇夜の如く、三ヶ所の高矢倉一度にひつくり返つて、大地へどつと碎けゝれば、土煙黑闇になつて、十方の大軍どつと崩れ落ちたるに、地中より一聲に火藥迸り上り、只百千雷の如く、此九國一島凡て崩

れ返りやすらんと、山上の陣麓の陣、あつと叫んで倒れ伏す。三の矢倉の跡より、數千の火矢起り出でて、人の逆る事稻妻の如く、只天隨鬼謀に落ちて、一業所感の者共、冥府の門に至るかと、淺ましかりける有樣なり。煙の中より數千の一揆、唯陰鬼惡鬼の如く、崔嵬たる洞岫より、喚き叫んで切つて入るに、寄手の陣々震ひ恐れて、麓迄引きたるは算へ難く、遠く高久の城迄引きたる人多かりける。此時三の矢倉にありて、燒殺されたる人々には、細川家には松井式部。黑田家には吉田喜太夫・長井八郎右衞門。有馬家には三井丹下之助・山尾五左衞門・石田少藏・小川喜八・山川與右衞門。小笠原家には宮本出羽・小宮甚兵衞。立花家には立花勝右衞門・由布藤右衞門・松田淸兵衞・橋詰新五兵衞・綾部藤右衞門・松田三郎左衞門・岡田久右衞門・大澤與兵衞・高岡喜三郎。水野家には鳥井甚右衞門・沼水三治郎等、御名代伊豆守內にさへ、遊佐宮內・松平安藝守使者長谷川久太郎、其外附使者の中諸手の討死多けれども、隱密に事濟ませしもあり。此時死人三千餘人と雖も、內分の員數は計り難し。諸本には、矢櫓一つ轉びたる樣に書きたれども、實は葦塚老將が散死龍の謀なり。此理は、火

炮に何を埋みし事を知らず。慶安四年に、彼の由井正雪が、江戸に於て用ひんとせしは是なりとぞ。誠に恐るべき謀略なり。葦塚忠右衛門は、一計既になりぬと見てければ、末期の活計喜ばしむるとなり。諸手の大將を一所になし、松倉・寺澤・立花・小笠原の陣へ、一群に切つて懸る。白髮頭に鉢卷しめたる老將が、白毛の駒に打乘り、大矢野・天草左右に進み、細川・黑田へ打向はせ、喚き叫んで突立つるに、肝を失ふ先陣共、只さへ引色に見えたる寄手なれば、二の丸にも堪り得ず、麓指して引きて行く。葦塚・大矢野快く見下し、元の本城に立戻り、相議していひけるは、天命盡きたるにや、勝利全からず。扇子繩手の水に支へられて、火功思の儘ならず、先陣のみを打散らせり。黑田・細川・鍋島等の陣々嚴然として、今煙靜りなば、押上るべしと備へたりと覺ゆ。最早舟手の調略も調はずと覺えたり。さらば此手の戰は、是を限りなるべし。いで麓へ追下りても、功あるべからず。此儘に打捨て、彼内々の荒神が洞の今一術設けて、大將伊豆守等の首を見たきものなり。さらば本丸の臺の上に、堅く陣を設くべしと、逆茂木を引直し鐵炮を伏せ待懸けたり。四郎太夫時貞は只切

つて出で、麓にて華々しく討死せんと、千度百度駈出でけれども、天草甚兵衛深く押へ、本丸の臺へ引きて上る。　鍋島の陣は、子息紀伊守殿、先手少々打潰されたる計なり。　早く御名代の陣を心に懸けて、敵の術を防ぎ、彼震動を見合す中、霧晴れ火炮に續いて、彼甲斐守殿、眞先懸けて押上る。　細川・黒田・立花も、同じく續いて押上る。此時北條安房守、舟手より駈續けて、大きに討られたりと、後悔せられけり。　されども落城は、今日の中なるべしと、諸軍の氣を勇めて、十方の路より切つて上る。　本丸上の臺を押包み、同時に鬨の聲を上げ、一人も遁すまじと押包む。

深木藤右衞門、駒木根を討つ事

散死龍の術既になつて、二三の矢倉を打返し、地雷火天地に響いて、寄手數千の英卒猛將、灰塵となつて飛び散れば、小笠原・立花・松倉・寺澤の陣々雪崩をついて、麓迄崩れ懸りけれども、鍋島・黒田・細川の陣々、嚴然として一人も動かず、本陣中陣に立顯はれ出で、只管に進み懸る。　一揆の勢も、今は大將四郎太夫時貞、中陣に立顯はれ出

で、天帝の旗押立て、一揆の將數を盡し、只今崩れたる本城の跡、奥の臺の要害迄、陣を魚鱗に立て、敵の隙間を駈破り、大將と組んで勝負せんと、勇氣を含んで、爰を專途と防ぎ戰ふ。・昨日の崩れ跡、愈山坂も急になれば、寄手の諸將鍋島・細川、何れも馬は本陣に返し、竹束を押擔ぎ、平一面に押上る。葦塚忠右衞門、地雷火船の謀にこそ、玉藥を惜み貯へたれ。今は手詰の合戰なれば、駒木根・鹿子木に命じて、散々に鐵炮を打立てさする。寄手猛勢なれども、事ともせず、本丸の臺の本へ、蟻の如く相集る。四郎時貞心焦ち、何にても物の手に當るを幸ひ、鍋釜器財の類迄投付けて打白ませ、自ら立ちて有合ふ釜を取つて、眞逆に投下す。其手の人々今日を限りと、手に觸るゝ物を投下す。小坂中の巖などに當り、微塵になつて飛び散る音、天地に響き夥し。四郎時貞怒つて鉢卷し、打出でんと血眼になる。葦塚諫めて曰く、夫は血氣より起るにて、死を急がるゝ者なり。是却て臆心より起る本にて候。只今は大將は、斯る時落着いて靜なるこそ、其器と申候へ。今日こそ末代に、時貞といふ良將ありと、名を殘す日にて候ぞ。名々士卒を下知し給へ。御腹癒に駒木根殿、今は是迄

ぞ。大將に一働して、御目に懸けられよといひければ、駒木根領掌して、さらば先づ鐵炮にて仕候はんと、大筒を押立て、群がる寄手の眞中へ切つて放すに、一玉に、二人三人打落され、黑田の先手有馬の勢打白まされ、少し虎口を引退く。細川の先手長岡父子・有吉・松井・溝口・常村の者共、竹束を引擔ぎ、少しも退かず、石垣の下に付いて玉筋を探る。細川越中守忠利は、良將といひ力量も勝れたる大將なれば、駒木根が玉筋と雖も、些とも恐れず、楯三枚を押立てゝ進まるゝ。此楯は、牛の皮七枚合せて、合目々々に漆にて砂を振ひ、段々に鍛ひ上げたれば、その上鎭西八郞が矢先なり共、裏かくべくはなかりけり。重き事甚しければ、九州の剛力の者を、日頃選み置きて、三人、布施宗兵衞・神谷新助・堀内藏介といふ者なり。押並んで是を持つ。其後に細川越中守忠利、床几に腰をかけ、九曜の差物を上げたり。駒木根遙に是を見て、大將細川殿と心得たりと、强藥にて、四放し迄打つと雖も、玉辷りて當らず。此楯は子持筋にてある故、駒木根は鐵炮に妙術の者なれば、急度工夫して、三十目玉を齒にて嚙み、紙に一遍卷きしめて、二つ玉込めて打つたりけり。彼楯の中にどつと當るに、

半分の上打込みたり。續打に打つ程に、一玉は楯を打拔きたり。玉の答嚴しく、布施宗兵衛楯を取外し、終に駒木根に打殺さる。此時楯を取外し、横に倒れける。越中守殿は、常にさまで力量も見えざる人なるに、此時靜に床几を立ち、片手を出して引起し、前に立てられける。其内は、玉矢も嚴しとて、家人大勢集り、矢面に立防がる。駒木根が鐵炮はこはものにて、中々先間なく見ゆる故、諸將同音に呼ばはりけり。舊冬以來駒木根は、鐵炮の上手に定まれり。されども元來百姓なれば、武士と手向の勝負は及ぶまじと、大きに罵り笑ふ。駒木根聞き、我れ往古は飛騨國駒木根同姓にて、元來武門有功の家なり。種が島に居住して、一家は島津家にもあらざれば、今度の一揆も、今日を限りと思へば、迚も討死すべき命、只今の雜言こそ無念なれ。今鐵炮にて、五十人百人打捨てたりとて、何の詮かあるべき。今を最後の晴軍せん。我打出で候はゞ、跡の木戸を立切つて堅く守られよと、葦塚忠太夫に申含めて只一人、木戸を開き躍り出で、鎗を小脇に挾み、種が島の住人駒木根八兵衛なり。鎗も相應に覺えあり、太刀打も隨分の者なり。我と思はん人々は御出あつて、手の

駒木根八兵衞討たる

中の力も御覽候へと、大きなる岩角を、後楯に取つて待懸けたり。細川家の先陣に進んだる若侍十人計、卽時に坂口に走り集り、引下して取籠め、討たんとすると雖、中々思も寄らず踏堪へ、近寄る武士を、忽ち三騎迄突落しける。其勢虎の如く猛つて馳廻るに、荒けて四方へ引く。鐵炮の手を繰出し、打つて落さんとす。長岡監物是を見て、敵を恥しめて鐵炮を止め、只一人の駒木根に、味方より飛道具は比興なり。馳合せて討取れと下知する故、武者共、又群々と馳上る。時に駒木根大音にて、さらば太刀打の勝負ぞと、三尺八寸ありける藤卷の刀、鍋蔓の如くに反りたるを拔翳し走り下り、先に進む兵を、弓手妻手へ切倒す。斯る所へ御名代松平伊豆守家中深井藤右衞門は、勇剛の者にて、所々の働を見分して廻りしが、此體を見て横合に馳合せ、無手と組む。駒木根心得たりと、深井を引付けんとすれども、深井は聞ゆる大力なり、駒木根は元より働き、深手五ヶ所負ひたれば、終に組敷かれて、首を深井に取られける。扨こそ伊豆守殿手へ、能き首十七級取りしは、多くは此深井藤右衞門が働なり。駒木根討たれしかば、此深井も、今は早、楯も竹束も入るまじと、黒田・細川・

立花等が勢を先にと、人を踏んで乘上る。防ぐべしとは見えざりけり。鹿子木左京は、詰の臺の惣門に、鍋島信濃守の大軍を防ぎ戰ひ、鐵炮の手を以て打白まし、爰を專途と防ぎ戰ひしが、追手の細川の攻口に向ひて、父駒木根死を極めて出でられたりと聞えしかば、大きに驚き、我々一所に死してこそ、父子の義を結びたるしるしはあれ。何ぞ他に向ひて働かんと、防ぎ場を捨てゝ引返し、本陣に來りけるに、早駒木根討死して、敵本丸の臺の下迄滿々たれば、同じく打つて出でんとせしを、葦塚忠右衞門押止め、討死は今日を限りと雖も、今一手柄を顯して、敵軍の肝を冷さすべし。荒神が洞の事、何しに忘れ給ふぞと、深手足弱の類は、本丸の下に敵を受け、御座の間の切腹と極めて、舍弟忠太夫は殘らすに定めたり。玄札も數ヶ所の手を負ひたれば、本丸に殘らるゝなり。其元は早く引取りて、大將の御供申し、荒神が洞の謀をなして、則當手の敵松平伊豆守內なれば、直に此手に向ひ、烈しく戰ひ給へといふ。鹿子木淚を浮め乍ら、迚も三途の道連なるに、暫時の後れは何厭はん。追付け夫へ追着き申すべしと敵を睨んで、葦塚と一所に、荒神が洞へ退きけり。

原城落つる事

斯くて葦塚忠右衞門、陣々を馳せ廻り、今は是迄と見ゆるぞ。昨今敵に降るとも、助かるべき道ならず。各快く討死して、さすが天下の敵共引受けて、一揆思立ちし者程あれ、天晴剛士勇猛と、人口に殘るこそ本望なれ。それは只今日二心なく守る所なり。能々心得て、此城に討死し給へと、義を先にして言渡し、未だ手を負はずして、勇猛盛なる强民を勝り、竊に荒神が洞に伏せ隱し、寄手皆本丸を落して、勝軍たりというて、首實檢などする所へ、俄に打つて出で、御名代の御首給はつて、冥途黄泉の家土産にすべしとて、四郎太夫を始めとし、宗徒の者共、皆々拔道より立忍び、本丸の臺には、敵味方討死の死骸多く、谷の中へ投捨てさせて、御座の間と覺しき所にて、天草玄札・葦塚忠太夫切腹して、頓て火をかけ、潔く落城の體に見すべし。軍勢多く自害せずば、敵も疑ひ申すべしと、手負の分は、多く本城にも殘しける。されば松倉家人降人中尾甚太夫・山脇七左衞門兩人は、葭田三平に勸められ、一揆に一味し

て、始めの程は心勇にして軍禮もなけれども、次第々々に籠城不自由にして、心細く覺えしかば、春至り、寄手松平伊豆守殿來り給ふ抔聞く程に、たま〳〵寄手へ歸らんと、事によそへて立遁れんとする體に見えければ、葭田三平、兼て手の者を附置きて、一人も陣外へ出さず、常に動靜を窺ひし程に、さすが武門に育ちしとて、一揆の土民等に、大きなりをせし手前もあれば、詞には出さずと雖も、あはれ能き便宜もがな、立退かんと見合す所、北條安房守來り、籠城叶ひ難しと見えしかば、頻に退き出でんとせられしを、此程は葭田三平も、二月六日の夜討に、退口の場にて、膝を鐵炮にて打拔かれ、立つ事叶はざる體なれば、是も今日、本丸の臺に上つて、腹切つて潔く相果て、土民と誹られまじと、刀を杖に突いて、御座の間へ上りしが、中尾・中脇がうろ〳〵とするを見て、聲を張上げいひけるは、兩公能く聞き給へ。今日に於て二心在すとて、敵用ひず。味方も又其事に、出城さすべきや。御覽候へ。此城中貴公二人の外、臆病に見ゆる者候はず。是は如何なる事に候ぞ。早々本丸の御切腹、覺悟候べし。尤荒神が洞の一計もあり候へ共、只暫く敵の肝を取拉ぐのみなり。惡しく

戰ひなば、却て恥辱に及ぶべし。一城の人、皆本城に切腹したらんこそ、後世の見聞も、潔く候はんと存ずれども、四郎殿、一戰ありたき望もだし難く候へば、葦塚老將も、斯くは計らはるゝとこそ存候へ。さあれば武士の本意は、本丸切腹のみにてこそ候へ。惡しくうろたへて、土民の我々に迄笑はれ給ふな。迚も遁るべき道はなく候といひければ、中尾・山脇もさすがにわるびれず、秦澤休澤・久田七郎右衛門と諸共に、是非なく御座の間、切腹の酒宴に連りしとなり。されば如何なる城と雖も、落城に至つては、見苦しき事多きに、土民の城中斯る靜なる事は、前代未聞の事なり。城に殘りて死する人、暫く荒神が洞へ立忍ぶ人、互に義氣をいひて、必ず來世にて、快く再會すべしとのみいひて別れけり。楠正成湊川の合戰の、首途に似たる事多し。是就中葦塚が、義を勵ますといひ乍ら、又外に人多し。就中此葭田三平、土民と雖も義氣盛にして、容又正し。六人の古老・十七人評定衆と雖も、三平に憚る事多かりし。されば隱德に、一敵國の如しといひしは、此人の類なり。世は清平日久しければ、深謀勇智民間に落ち、盛名武門皆義を失うて、利に走る者なりと聞えしが、僅

に慶長を去つて三十餘年、早くも一變しけるかと、不思議なりし事共なり。去程に詰の臺の坂口に、大將葦塚忠太夫・天草玄札・小將時枝隼人・柏瀨茂右衞門等、鐵炮を右に伏せて中軍を選み打上り、戰へば駈落し、取つて返せば要害に引籠り、おびき寄せては打立て、七八度迄揉合うて戰ふ所に、細川越中守忠利の長子肥後守光利十八歲、横合より馳合せける。玄札・忠太夫が勢、暫く戰ひしが、細川の功臣野見小左衞門・平塲勘兵衞・尾藤金右衞門、勇を振うて惡戰す。實にも野見は、御浦兵部宗勝が孫なり。平塚勘兵衞重近は、關原にて鬼神と聞えし平塚因幡守吉就が甥なり。何れも逸物の末孫故、英氣勇戰類なく、天草・葦塚を城門へ追込めば、鹿子木一類、鐵炮の手を左右に伏せて、散々に打つて落す。細川の先陣是に依つて、暫く塀の下へ寄付く者なし。尾藤金右衞門、薄紅の大吹貫を差して大音上げ、斯る所を付けずして、何事を見合ふぞと、平塚勘兵衞と共に塀下へ着き、面も振らず塀を乘る所を、内より鎗長刀にて散々に突き、其内尾藤が膝口に突込みける。尾藤少し弱る所を、又眞中を鎗にて突く。尾藤喚き叫んで、終に塀を下らず、腕木に抱き付きて討死なり。平塚も

同じく鎗付けられ、既に危き所へ、野見左衛門躍り越えて平塚を突伏せ、水も溜らず切つて落し、亂れやりあしの如く亂るゝ中を、事ともせず打拂ひ、平塚を助けて引退く。斯る所へ本丸の追手、小勢とは見え乍ら、先刻の地雷に懲りて、唯乘入る心なしと告げ來りければ、細川肥後守打笑ひ、敵地に來りて斯くあれば、病夫にも劣れり。いざや我先へ上らんと、一騎駈に駈向ふ。此時浪人野川彥藏功あり。鍋島信濃守・同紀伊守、采幣を以て詰門に攻寄り、死生を知らず戰はれけるに、城中にも矢種盡きければ、切先揃へて切つて下り、先手を散々に駈破る。甲斐守直澄是を見て、言甲斐なき味方かな。爰を破らであるべきかと、鬼神の如く横樣に追はるゝに、諸軍皆聲を上げて勇み喜び、忽ち城中一揆の大將時枝隼人・柏瀨茂右衛門を鎗付けて、切つて落しければ、此手悉く破れて、詰の門傾き倒れ、諸軍臺上に駈上りける。葦塚忠太夫・天草玄札、痛手數多負ひければ、今は是迄なりとて、本丸の臺に立歸り、御座の間の眞中に座し、諸人を見渡し、微笑していひけるは、人生の生涯武門の名譽、何か此上のあるべきや。我も人も快く死して、黃泉の道を伴ふべし。いざや荒神の洞の人に

萱塚忠太夫天草玄札自殺

安氣さすべしとて、四方の詰草に火をかけさせ、元より死體を多く積みたれば、殘らず切腹とも見えたり。忠太夫・玄札に向ひ、此宗門の習、自害する事を、宗門の禁制となす。然れ共敵の手に懸るも、武門を穢すに似たり。中に信ずる人信ぜぬ人、共にあるべし。いざや刺違へて、兩用に理を全うすべしとて、忠太夫・玄札共に刺違へて、俯けに伏して倒れければ、葭田三平・佐々木十二郞・上總吉兵衛・鵜浦七郞・中尾・山脇・松井・有馬が輩、刺違へてぞ死したりける。火焰段々燃え上りけるに、寄手又謀もやと暫くためらふに、甲斐守直澄、一番に乘上らるれば、本道の本丸は、肥後守光利なり。黒田家よりは、黒田美作守・同三左衛門、立花左近將監忠茂の家臣には、日根村源五右衛門・寺田角左衛門、是皆家々に、今日本城一番乘と稱す。何れも勇威を顯はして、本丸の臺に乘上り、則原の城落着なり。于レ時寬永十五年二月二十八日なり。

原城陷る

今日討死の內、尾藤金右衛門父尾藤藤右衛門知定といふは、則太閤秀吉公御譜代にて、一國を領す。筑紫陣根川にて武を穢す事ありて、御咎御改易なり。依て北條氏政小田原籠城の時、城へ駈込み、柴田勝家・佐久間久左衛門安治・同源三郞實正

と、同じく太閤に敵對す。小田原落城の後、佐久間兄弟、鎌倉の金澤稱名寺に駈込みしを、秀吉公聞召し、誠に義氣ある者共ぞ。今は遺恨を解き候へと、兄佐久間久左衞門に一萬五千石、弟源六に三萬石下され、蒲生氏郷の與力に付かしめ給ふ。尾藤左衞門聞きて、御敵の柴田が一門だに御赦免あり。況してや秀吉公小身の時分より、尾藤甚左衞門とて、舊功せし我なれば、御宥免疑なしとて、剃髮染衣にて、秀吉公小田原御立、奥州への御着座の頃、道筋に出でて畠の中に居る。秀吉公御覽なされ、あの大坊主は何者ぞと御尋、兼て内證にて御近習知れば、尾藤と見え申候、御馴染に甘へ、御目通へ罷出候と存候と申上る。秀吉公俄に顏色變り、佐久間兄弟が小田原に籠りたる、義なり。尾藤めは味方にありて、蔭の奉公もすべき時なり。道を知らざる奴なりとて、御步行衆に引張らせ、備前兼光の御腰物にて御手討なり。御尤と申さぬ人はなし。其子尾藤勝之助、竊に福島家に奉公す。其後細川家に仕へ、尾藤金左衞門といふ。天草にて討死し、父が汚名を悉く雪ぎしかば、其子勝三郎召出されて、今御旗本にて三千石下され、相續するなり。第廿六畢

南島變亂記第廿七

荒神洞陰兵の事并大矢野作左衞門戰死の事

鍋島甲斐守、本丸の詰の臺も一番乘して、以上三度の先驅なれば、父信濃守、涙を流し喜び給ひ、扇を上げて打招き、落城の上は、早々父が本陣へ來り給へといふ。甲斐守は、彼の千々輪が詞を心に忘れず、荒神が洞の方へ、陣を堅うして進まるゝ。其外諸將は、皆々臺城の上に取上り、扨も去年以來、勇を振ひ威を上げし一揆共、果はありける事よと海を眺め、扨々大勢に骨を折らせし事、去冬以來の危き事など語り合ひ、下々奴僕の類は、拾首などして、定めて押付首實檢あるべし。一手柄なる事ぞやと尋ねさまよふ。尤亂謀御免と雖も、一揆の事なれば、快く燒捨てけん、手に障る物さへなかりけり。夫々役人相定め、雜具を片付け殘火を濕し、首など調べする所へ、

はや松平伊豆守殿登山ありて、諸將殘らず山上に陣を取るに、別して荒神の洞の前庭水石も奇妙にして、岩間よりして山櫻・桃・山吹杯の開き懸り、躑躅・菫も自らの好山水、只作庭の泉水などといふとも、是には及ばぬ眺なり。此所は別して廣ければ、本陣を始め多く爰に陣して、首實檢あらんとの事なり。誠に危き事、風前の燈火の如し。勝軍の負とは、此體をばいふならん。時に既に申の刻にもやあるらん。斯る所へ北條安房守、舟手山上山下の諸手を駈廻りて下知ありしが、城上既に落城に及ぶの由聞きて、頓て城上の氣を窺ひしに、未だ戰氣半にして、嘗て陣氣鎭まらず見えしかば、大きに怪み驚き、早々駈上り、攻め落せし體を見給ふに、何の替りたる事も怪しき體もなく、人氣味方は靜れども、敵氣猶逞しく立ちければ、早々伊豆守の陣に入り、御油斷の所には御座なく候。未だ敵亡ぶと見え申さず、早々陣構御尤に候と、猶更細川・黑田諸陣へも觸渡され、伊豆守も此頃は、北條安房守に一傳ありて、陣氣の法あら〳〵傳授せられけるに、其器のある人には、一を聞きて十を知る事多し。されば今日の勝軍も、忽に其心付きければ大きに驚き、陣々を堅うして、諸將皆敵に

向ふが如く、諸手へも、用意嚴重に守らるべきに候と、度々觸られけるに、諸軍勢は大きに笑ひ、控思案の御上使や。去年來控々には飽果てたり。鍋島の荒武者がなくば、三年も落つまじき城を、仕合に乘取りて貰ひ、其上に又控思案かや。最早鳥か猿より外は、寄せ來る敵のあるべきかと、嘲りける所多かりき。されども黒田・細川・立花勢、元より武邊に馴れたる者共多ければ、見る内に靜々と陣取靜まり、敵前に押懸くる事なり。別して鍋島甲斐守は、荒神が洞檜木谷の谷口に、一番に陣取して嚴重たり。北條安房守殿、所々乘廻し來りて、此檜木谷に心を止め、此地必ず伏兵あるべし。陰氣蓮々として亂れず、誠に甲斐守殿の御陣は近く候程に、乘入れて見給へとありしかば、承り候とて、甲斐守自身、檜木谷の洞口に馬を乘据ゑ、大音聲にて申さるゝは、此洞の中に籠り申さるゝは、必ず一揆の大將四郎太夫時貞・蘆塚忠右衛門と覺ゆるぞ。名將は三寸の草に隱るゝと申候へば、謀驚き入りて候へ共、斯く見顯す上は、早々出でらるべし。斯く申すは、則當城一番乘鍋島甲斐守直澄ぞ。相手に不足はよもあらじ。いざ一揆一揆をと呼ばはり給へども、嵐の山風に答して、瀧の鳴

る音計りなれば、諸軍勢は大きに呆れ、此人も餘り武勇過ぎて、亂心せられしにこそと、大きに笑ひ居る。黒田・細川さへ、最早刻限も遲し。人はあるまじきなど言ひ合ひけり。諸手暫く息る所に、俄に洞の内震動して、夥しき鎧武者百五十人計り打つて出でたり。各鎗を提げ聲懸合ひ、陣頭を三つに分け、各五十人計りづつ、黒煙を立てゝ躍り出で、三手に分れて打つて懸る。天晴天狗の妖怪か、山鬼地靈の涌き出づるかと、諸人大きに肝を消す。誠にや油斷の時ならば、大將も討たれ陣も崩れて、天下の恥辱となるべきに、北條安房守が方寸の明かなるより、事落去しける。氏長が功、擧げて數へ難し。伏兵も殊によかりけり。見顯はされたるは是非に及ばずと雖も、少し遲きならば、洞の中へ鐵炮を打かけ、燒草を積み燒殺さんと、後陣の各運び寄せたる所に、其用意の體をや見てありけん、又時もや考へけん、數を盡し打つて出で、快き働はなしけるとかや。扨荒神の洞の伏兵も、陣の頭を三つに分け、眞先の陣の鍋島甲斐守が備へは、田崎刑部・池田淸左衞門等、死夫の勇士五十人、一齊に切つて入る。甲斐守には、今度當城一番の功、敵城の破れ口も、多くは此人にて、親討

たれ子討たれ兄弟を失ひ、恨の者多くあれば、此五十八人一所になつて、討てども切れども顧みず。只泣叫びて、甲斐守の馬前に、蟻の如く取圍み、喰付かん摑み付かんと、生靈の如く走り寄りて、いぶせき體に見えぬ。此甲斐守殿も、手にあぐみ見えしが、さしものゝ間々より、墨繪の如き者立顯はれ、手を以て押返すやうに見えけるが、甲斐守神力忽ち加はり、大きに怒りの聲を發し、馬卒を下知して、人毎に力を添へ、馬に取付く一揆共を、人礫に取つて投出す。只大風に、木葉を撒くが如し。此間に本陣を目懸けし中の手葦塚左内・鹿子木左京・大矢野作左衛門等、取分けて精兵共切先を揃へ、眞一文字に切つて懸る。松平伊豆守の先手、散々に切立てられ、黑田・細川兩所より、押返して切つて懸る。一揆は元より死夫なれば、眞一文字に伊豆守の陣中へ切つて入るにより、伊豆守大きに恐れ、急に鐵炮の手に命じて、兩方より亂れ放すにより、味方同士討に、殺さるゝ者共夥し。葦塚左内怒つて、渦卷く敵の眞中へ、躍り懸つて突いて廻るに、忽鎗を突折りければ、敵の鎗を引奪うて、又二三人突殺しけるに、數十ヶ所手を負ひける上、股の間を鐵炮にて打拔かれ、立つ事能はず。詮方なく

葦塚左內
鹿子木左京戰死

見上る所へ、鹿子木左京、是も亦數十騎の敵打靡け、父を討つ者は、伊豆守の內と聞く。只薙捨にせんと、當るを幸ひ切つて廻る。思ふ敵にも出合はず、深手數十ヶ所負ひたりしが、左內と行合ひて、左內殿、今は只是迄なりといひしかば、左內も立上り兩人手を取りて、壯子功を立つる事能はず、終に此所にて死す。さるにても今一働せばやといふ所へ、十方より打懸る鐵炮に、憐むべし二人の若武者、同事に打倒れて死にゝけり。其外壯子勇士の者十四人、同時に鐵炮に打落さるゝを、伊豆守內深井藤右衞門、あはれ生捕にすべきを、よしなき下知の鐵炮ぞやと、味方を下知して鐵炮を止め、選み打に組みて取るに、一揆皆勇壯の者共なれば、三四人組合うても、刀劍盡くれば喰付き、かぶり付きて、疵付かざれば死せず、睨み廻り飛び廻り、潔き討死共なり。生捕等少しはありし。樣子あつて江戶へ引かれしもあり、多く此所にて刑罪なり。扨細川は大軍といひ、殊に打向ふ一揆も手寄なれば、先勢共打亂して入混り、引包んで組んで討つ。一揆の一手、殘らず討たれしと見てければ、大矢野作左衞門齒嚙をなし、いで死物狂見すべしと、得たる所の十文字の鎗打振つて、細川の

大矢野作左衞門討たる

先衆の者士八人突落す。細川の中百度宗左衞門・佐藤十兵衞此を見て、兩方より鎗付ける。作左衞門大きに怒り、佐藤が鎗を左に持ち、前へ引寄せ、膝の下に引敷きたり。百度、隙間もなく鎗突懸る。大矢野丁と睨んで踏付くるに、佐藤は足下に血を吐きて死したり。百度宗左衞門鎗を捨て刀を拔き、一打にせんと驅寄る所を、大矢野拔打に、百度宗左衞門を大袈裟に打殺す其有樣、鬼か人かと分ち難し。細川の諸士大勢追取り卷き、鎗衾に作ると雖も、大矢野が勇猛に恐れて、近付かずして控へたり。長岡帶刀是を見て、味方の面々、比興の事かあるべき。只一鎗に勝負ぞと、大身の鎗を打振つて、走り懸り丁と突く。大矢野が胴腹に、ずばと突込んだり。作左衞門、こは物々しやと、鎗の柄を切れども〳〵、父監物が若盛の時分の持鎗にて、太刀打に鐵を丈夫に卷きたれば、中々切折るべきやうもなく、大矢野も次第に身は叶はず、鎗を拔かんとすれども、帶刀些とも動かさず、口惜しやといふを、帶刀立寄つて首を打つ。時に大矢野左の手にて、帶刀が草摺を、急度摑んで死したり。此手如何にしても離れず、帶刀詮なく、草摺を切つて捨てんとす。父監物制して曰く、勇者の

一念は、猥りに捨つべからず。汝が武勇の印、名譽なるぞ。彼左の手を、射付より切り落し、鎧に付けての手柄大きに秀で、比類なくぞ見えにける。されば戰終りて後、勇者の士氣を感じ、殊に弟美作を討たざりし者は、此大矢野なりと知れければ、彌父子感涙して、此腕を草摺に付け乍ら、國本の菩提所に埋みて墓となし、深く菩提を弔ひけるにこそ。長岡家には、草摺一枚なき鎧、今ありて重寶とす。又埋みし塚も、今に腕塚とも草摺塚ともいふと、今肥後熊本の一名所なり。

葦塚忠右衞門・天草甚兵衞最期の事

大將四郎太夫時貞は、若武者といひ、打物には飛鳥の如くの手利なれば、此程の合戰に、毎度打出でて戰はんといひけれども、天草玄札・葦塚忠右衞門深く止め、諸百姓迄も、四郎殿不思議の勇力を頼みとするに、甲斐なき合戰ありては、末々の恥辱となる。只々尋常に、城中の切腹といひしかども、頻に一戰を乞ひければ、幸ひ荒神が洞の一戰を催し、其上本丸にて、葦塚忠太夫と共に、切腹せし體にもてなし、此所にて

天草時貞討たる

は前髪を切つて捨て、鎧も着替へ、顏を血にて數度塗り、あらぬさましして打出でける
が、始の程は郎等押續き戰ひしが、段々押へ難く、心の儘に働きしか共、初陣なれば、
目に立つ程の手柄もなく、細川の家士陣野佐二右衞門が爲に討取らる。于レ時生年
十八歲なり。始め鍋島の手に向ひし田崎刑部・池田淸左衞門が輩は、則甲斐守馬前
にありて、命を捨て、戰ひけれ共、十方より取包む中なれば、何れも數多痛手を負ひ、
枕を並べて討死すれば、田崎も池田も、甲斐守自身手に懸けて、馬前に打倒れける。
其怪力比類なかりし。扨甲斐守殿、寄手小勢なりしかども、必死の勢、思ふよりは暇
入りたりと獨言して、荒神が洞へ一番に馳廻られけるに、洞の中も入口は、僅に二
三人を並ぶべき程なれば、誰ありて先へ入る者なし。甲斐守打見て、洞の勢を見付
く。さても松平伊豆守念者なれば、案内に及び難しと、自身馬より下りて、歩行して
入られければ、諸人大きに驚き、後より込入りしに、一人も人なかりしかば、早速御
本陣へ注進に及ぶ所なり。此取靜まり、諸手より大きに早ければ、是又橫目衆の稱
譽なり。葦塚忠右衞門・天草甚兵衞は、松倉・寺澤の手へ打向ひ、最早恨み納めぞと、面

面面も振らず切つて入るに、何の手もなく追崩す。されば有馬・立花・黑田の一族、段段堅く備へたれば、功なるべくも見えず。諸手の味方も、皆々討たれ、四郎時貞も大矢野も、討死をいたしければ、今は是迄なり。引返して自害せんと、打連れて頭を廻らすに、早荒神が洞は、鍋島勢入替りて、行着くべくもあらざれば、彼去年祭りし本社の峯に上り行き、峯の上に天草甚兵衛・葦塚忠右衛門二人並んで、今日の謀皆成らず。是天命なり。去年より千計萬術、終に此所に至つて終れるかな。さらば共に最期を快くすべしといふ所へ、早麓へ敵二三十騎寄せ來りければ、いざ我等が冥途の土産にすべしとて、打殘されたる從者八九人、喚いて駈下し、散々に追散らし、忽ち鎧武者一騎生き乍ら掴んで、元の本社の峯の段の上に上り、忠右衛門悲歎して、去年此峯に上りて誓ひし詞は、今日終に合せり。千萬の得失善惡も、皆々因緣より生ず。悔むべからず、思ふべからず。最早敵も近付きなん。我が最期の手本を見せんと、彼鎧武者を峯の上より、後の谷へ投下しけるに、遙の岩角に當り、微塵に碎け失せにければ、あら潔し、我も斯くの如くに終るべしとて、天草甚兵衛と岩頭に立ち、互に

刺違へ、抱へ乍ら遙の谷へ飛入り、微塵に碎けて失せにけり。 されば悉く一揆亡びしかば、寄手皆々諸軍を拂うて、普く所々を搜し、首共改むるに、殘る者も見えざりしかば、勝鬨を三度、法に依つて行ひ、落去し終るなり。 されば原城破却せられ、今に至つては、廣々たる原の草、蓬々として露深し。 今に二月廿六七八日の間は、晴天と雖も俄に空掻曇り、風落ち雲起り山鳴響き、海路は波高く、所々に火燃え上り、女童の泣叫ぶ聲四方に聞えて、遠近の人、毛孔を塞がる。 音いつとなく雲の隔て、物すさまじき事いふ計りなし。 修羅鬪爭の有樣、矢叫の音、何方ともなく聞えて、其間の日は、其邊の人の往來も止み、舟路を渡る人だにも、必ず心して、皆々弔をなさゞれば、必ず怪我ある事まゝ多し。 星霜百餘歳を經れども、亡卒の執念、猶更浮みやらざるにや、此山にて奇怪に逢ひし人の、筆追福の御法は今に絶えず。 惡徒とはいひ乍ら、元來理に闇き土民なれば、長く妄執の雲晴れやらで、國の質害ともなるべきか。 一社に祀ひ込められしも善政ならんと、つぶやく人も多し。

南島變亂記第廿七畢

峯塚忠右衛門天草甚兵衛最期の事

南島變亂記第廿八

亂後風說の事并首實檢の事

旣に原の城落去しければ、生捕老幼二千五百餘人、首數一萬六千餘級、此中有馬の牢といふ所に、手枷足枷の罪人あり、是等も引捕へ、諸將殘らず下山し、最も山上拂うて、諸軍殘らず高久の城に入る。伊豆守殿下知として、陣營悉く引退く。其近邊悉く亡所となりたる故、近鄕の百姓共に、歩役を懸けられて、雜人原の死骸を穴に埋み、山上のは谷底へ卷り落して、平均すべき由なり。先づ本城の奧殿より、過半燒失に及びしかば、其ありし者慥ならぬ故、荒神が洞を搜し見るに、萬事尋常の有様なり。洞の內に白米十石・大豆三石・味噌十荷、其外奇麗なる宗具備へり。佛壇には天帝子の像あり。然れども正法の彌陀三尊佛、卓の上に三つ具足あり。又大帳四冊ありて、

葦塚忠右衞門裁判として、去年八月十一日、上津浦の一揆起りたるより、前後合戰の剛臆得失を記せり。或は金銀諸財道具米錢の出入を記せり。四郎太夫時貞が寢所と覺しくして、一段高くしらつひ見苦しからず。衣類手道具、見臺に古今集を据ゑたり。硯箱の下なる疊紙に、自筆と覺しくして、斯く書捨てありし。

立隔つ波路はしばしはるけくも晴れてや頓て後の夜の月

とあり。其趣意は慥ならずと雖も、渡邊の時貞と書記し置きたれば、思を述べたる詠なるべし。竊に思ひ合すに、是かと覺えて、哀れなる物語あり。四郎時貞、未だ渡邊小左衞門が元にありし時に、長崎に與五郎といふ伯父あり。海路十八里の事なれば、度々に行通ふ。四郎時貞其頃未だ十五歳なり。器量といひ藝といひ、並なき少年にて、日本の中、京鎌倉といふとも、斯る諸藝の達したる人はあらじ。今判官殿なりと沙汰する。元より福有にはあり、緣を組むべき家も多かりしに、因緣にこそありけん、長崎材木町川岸大木町といふ所に、昔より長といふ家あり。是も由緒ある者なるが、此人の娘六歳になりける。器量といひ、幼きより心才發に見えし程に、親々

終に約束し、此四郎と許嫁の夫婦となしける。されども未だ幼き事なれば、互に家に行遊びしが、娘心にも、我夫なりと思込みしにや、其後よりは四郎殿は、日本にも稀なる諸藝の達人と人の話しければ、我にも幼少より、物を敎へて給へと、父母に賴みけるに、さすが田舍の事なれば先づ織り紡ぐ道こそ、女の第一の用なりと、是より織物の事共、色々敎へしに、娘心にも勵みやありけん、幼少にて、皆能く覺えける。此事原邑へも聞えければ、四郎が父母大きに喜び、四郎太夫も又慕はしく思ひしが、いかなる浮世の業因にやありけん、忽ち此一揆出で來り、彼四郎天草へ渡り、一揆の大將となり、原村も大きに混亂して、長崎の便も、佐野の船橋船路絶え、鬮に鬮の重なりしかば、雁の羽目の入るさにのみ、思いやます相成に、其年は娘も八歲にて、便毎に四郎殿の事を尋ぬるに、隱すべくもなき騷動なれば、あなかしこ暫し汝が許嫁なりなどといふべからず。四郎殿の身の爲め惡き事あり、今度の事は四郎殿、日本にもなき殿なれば、花の都へ上り給うて、又々江戶駿河も鎌倉も、皆御手下になされ、目出たき世になると、先づ娘、そちを輿に乘せて、都の花武藏野の月に遊ばする事ぞ。

今少しの内ぞ。構へて人にもいふべからず。御榮を待つて居よと敎へられ、子供心に都へ上ると聞き、嬉しさに、色々の帷子小袖など拵へ貰ひ、毎日々々、京へはいつ行く事ぞ、上方へは何時上ると、父母に責問ひしに、其年も漸く暮行きて、明る寛永十五年、嬉しからぬ春も半過ぎて、二月二十八日には、原の要害落城したりと聞き、其後四郎殿は、島原の邊に獄門に懸れりと、渡邊小左衞門父母の人迄、恐しき磔といふ物に上り給ふと聞えければ、娘は最早九歳なり。何方にて聞き來りけん、父母の前へ出で、今迄だまし給ふ事の恨めしやと、身もあらぬ程に打倒れて歎き悲しむを、色々慰むれども止まず。姿も衰へて見えければ、是はいかさま人の聞傳へて、此身にも一揆の一類が、罪科懸るべきも計り難し。早く娘を嫌して外の所へ緣組みて、一類の噂を遁ればやと、娘を色々と言聞かせけれども、藝故とならば、猶々外へは行くべからず。此藝は、四郎殿の爲めにこそ覺え侍れ。今何方へなりとも行きなんなれども、四郎殿の生きて歸り給ふ事あらば、何にてもすべし。只此儘にては嫌なりといふ程に、詮方なく更に沙汰も惡かりければ、兎や角思ひ煩ひて、暫く其儘差置き

たりしに、娘は何方にてか、死したる人は、何としても此世にて逢はれぬといふ事を聞き繕ひしが、頓て父母の方へ、廻らぬ筆して書置認め、或夜只一人濱邊へ出でて、いつも島原へ渡る船場へ來りしが、終に島原へ渡りても、其人なしと思ひ、賴む力やなかりけん、此邊の井戸へ身を投げて死にけり。是其年の六月十八日なり。人々翌朝見付けて、是は大木町長殿の娘なりとて、驚きて案內しければ、家內大きに驚きて、騷ぎ迎へ歸り、未だ存命へしとて、隱密にして駕籠に乘せて歸りけるが、書置のありけるにぞ、事の心は知れぬ。此程仕立てたる小袖帷子も、京へ行く鎌倉へ行くとて拵へし程に、切て四郞殿への爲めに、京や熊野の僧達に參らせて給へとありし程に、父母悲しみの中にも、猶死ぬ計りの心地して、其後年鎭りしかば、京海道に攝待の茶屋を拵ひ、其內緣ある僧并道者修行の人達には、娘が衣類を皆々施し、娘と四郞が菩薩を、竊に供養しけるとぞ聞えし。されば其頃京都には、御國歌舞妓とて、出雲の國より女來りて、京江戶に芝居を始めけるに、此事を爰に作りて、大木町の長が娘は、日本手利と聞えた。五つでは糸を繰初め、六つで機をは織初め、七つでは綾を織り、八

つでは錦を織初めたり。九つでよめりするとて、遠く冥途の殿御を慕うて出られたりと謳はれしは、寛文十七八年の事なり。お國が作りし歌、百千の多きあれども、年年消え行くとも、是は耶蘇の執着の國には、今に耳に聞く事にぞありし。既に普く六十餘州に滿みしこそ、不思議なり。其上此娘身を投げし時の帷子、梅の枝に橋の模様ありけるを、一番に先づ僧に施しけるとなり。されば向ひ通るは、熊野道者の肩にかけたる帷子、肩と裾とは梅の折枝、中は五條の反橋、東海道や京鎌倉やと謠ひしは、此故なりと誹れり。

扨落城の後、諸大將高久の城に集り、手柄の次第評定あり。先づ打取りし首共改め、生捕の者に見せて、頭分の首を選み出さる。葦塚忠右衞門・天草甚兵衞を谷底より得て、宗徒の首共大方揃ふと雖も、火船にて失せし類、本城の火の中なんどに依つて、不足の首も多かりし。第一大將たる四郎時貞が首、嘗て見えず。隨一の者なれば、急度詮議仕出して、獄門に曝さるべしとて、翌日廿九日に至り、角前髮の首共を集め、凡そ三百十四あり。白洲に並べて生捕に見すれ共、女童の類は多く四郎を見知らず。此

故に伊豆守の下知として、四郎が母を召出して見せしに、倩と一遍首を見返し、此中に四郎が首は是なしと申上る。伊豆守・左門其外の人々も、扨は亂軍の中、谷底へ落ちて死してやあらん、是非に及ばずと、既に首共を取退けんとする所に、北條殿申さるゝは、四郎が首は此中に有之候。女が見落しに候べし。其何十何番目、前髮を切りたる首を洗うて、三寶に据ゑ來れと命じ給ふ。仕候の人畏つて首を洗ふに、血嘗て落ちず。北條殿申さるゝは、塗りたる血は落ちざる物なり。早く荏の油入れ候へとなり。伊豆守殿申さるゝは、陣中俄に荏の油求むるも如何と申さるゝ。北條殿打笑ひ、雨合羽にても挑灯にても打込みて、湯を沸せと仰せらるゝに、何れ頓智に舌をぞ巻きにけり。扨首を洗ふに、血悉く落ちて、玉の如くなる顔となるを、三寶に乘せ直し置き、此首は四郎なるべし。母今一度見よと仰せらるゝに、女は北條殿の顔を熟と守り、斯る人の在してこそ、城は早く落ちたるにこそ。恨めしとは申し乍ら、首に三寶を賜はる。扨々有難き事に候。成程是こそ我子四郎が首にて候。早くも替り果てたるものかな。併し乍ら今は本懷なり。我子乍らも大將となり、賤しからざ

る死姿、悔み申す事更々なしと、三寶に暇乞して、諸大將を見向きもせず座を立ちける時に、伊豆守殿不興にて、北條殿に申されけるは、兼て四郎が面體、御存知にて候かと尋ねらるゝ。北條殿申さるゝは、遠國と申し尊卑といひ、何しに知り候べき。彼が母、多く目の當りたるはあの首なり。豈他人の首を見返さんや。親子の緣、眼中に顯はる。眼は人の小相なり。諸人は只選み出す首を御待にて候。其に心を寄せられたる計なり。某は只母が顏に心付けたり。是ほし目にて見る所、違あり候とて申されじ。諸人大きに感じけり。北條殿又曰く、髮を切り血を塗り、此首何ぞ唯者の首ならん。知り易き事多く候ものをと、事もなげに聞えける。松平伊豆守立腹の體にて、少し赤面に見えける。さて渡邊小左衞門事、子故の罪遁れ難く、出所なればとて長崎へ引渡し、磔に懸る。同人母妻並に頭分の者の類十二人、原の城麓有馬の浦に磔に懸る。堂島對馬が弟を始め、生捕の一揆、凡て卅八人、是又原の城下小濱口にて磔に懸りたり。諸手へ打取る首共は、一殘らず竹に髮を結び付けて串柹の如く、此並に押並べて夥し。但し頭分の首は、獄門臺に据ゑて、四郎が首計りは、くきやう

といふに座る。又生捕の女童二千餘人、前方所々の生捕共、都合して二千餘人、殘らず死罪は不便の事なり。是も宗門ころび候はゞ、助くべきとて、彼宗門の本尊を地に置き、刑罪の場浦方に、廣く埒を結うて、其内に穴を掘り、宗旨をころび、此像を踏みたる者は助くべし。踏まぬ者は切るべしと申聞かせけるに、三千人の女童、一人も踏む者なく、悉く切られける。其中盲人一人踏む事は踏みしが、既に助かるべかりしを、後にてせんすまるは〳〵と唱へて戴きける。依つて成敗せられ、一人も助かる者はなかりけり。今此の所は、年々一度づつ、斯の如く踏ませる宗門吟味ありといふ。但せんすると唱ふる事も、ていすまると唱ふる事も同じ事なり。賤しき女童は、唯せんするはといふ。少し物の心を辨ふる者、れごしやうてんはしたいそうせんすまる、又頭分同行などは別法あり。其又ははていていていやゝていすまるはらいそうといふ、ていといふせんといふ。聞き取る所の違なり。此所の人は詞も判れども、伴天連伊留滿は、實に南蠻鴃舌の人の、言よぶ鳥の聲の如し。せんも分ち難し。ちえういといふが如し。故に口に任せて受け得る故なり。此時法令又後よ

り、靜謐の上の御上使として、太田備中守再び下向ありて、諸大將へ御挨拶あり。今度の變亂の上に候へば、本國心元なし。先づ江戶へ罷出でず。直々に分國へ引取り、政道宜しく申付、其後參勤あるべき由にて、一年の御免にて、多くは翌年の春、江戶表參府登城と聞えし。

山田右衞門助命の事并北條安房守の事

爰に生捕共の內に、首枷手枷足枷を入られたる者一人あり。城中有馬の牢といふ中にありて、いかさま重罪人と見ゆる故、いかなる科を犯しける者ぞと、吟味ありしに、某こそ山田右衞門と申す者なるが、先達同國蓮池に預け置きたる老母が命を助けんが爲め、返忠仕る所に露顯して、斯くの如く禁獄なり。然る所落城の節、切つて捨てよと獄屋より引出さるゝ砌、早事急になり、役人皆周章して捨置きし所、捕はれ出で候といふ。扨はさやうなるかとて、御糺明の上に、老母妻子、共に命助かり候上、以來江戶へ召下され、一揆の次第籠城の趣、委細御尋ねに付、具に言上する故、天草

の次第、多くは山田が物語なり。されば西國表切支丹宗門の目明しに仰付けられ、四萬餘人の一揆の內たゞ一人、命助かりしのみならず、公儀の御感に預かり、再び富貴の身となりし。誠に生得母の命助けたく、又所體正直にして、而も學才あり邪法を信ぜず、其身を殺して、老母の命助けたく、自ら孝心天の冥威に叶ひ、神明の加護にてありしと思はれける。されば孝行の名は、肥後孝子傳に委しければ略之。天草一島の中、人民跡もなく、尤島原・神崎の人民分ち來ると雖も、百軒の軒は三十軒共、人の住む所なく、十人住みし家は、二三人ならでは人なく、萬事物凄く、常に心悲しき日を送りける。或日夕暮に、山田右衞門母子、常の座敷にて打眺め居られける時、愁傷たる悲風吹過ぎて、庭の松杉颯々と鳴りしが、忽ち樹木高くなるやうに見えしが、庭の景色變じて原の城となり、色々に心を靜められても、あやかに山といひ塀矢倉など、嚴然として鮮なりしが、日暮れ闇くなりてよりは、數限りもなき人の形の者共群り叫び、打合ひ組合ひなどする景色も見えしかば、母も右衞門も、頓て障子押立て入らんとせしに、彼影の如き者共、わつと障子に縋り、座敷へ押入り、山田父子の

命を乞うて止まず。叱々として夢か現か、悲しき聲ありて、只今も露の命消え行くにやと思ひしに、程なく空も月あかく、山も消え人も失せて、山田が母妻は恙なし。山田母子大に歎じて、一揆の愁魂恨をなすも、甚だ理なり。我命何ぞ惜むべきといひけるに、母は我れ死して、愁魂に事譯いはゞ、汝は恙なかるべしとあるに、右衞門は、罪我にありといひて聞入れず。夫より夜毎に悲風吹落ち、幽鬼啾々として命を乞ふ。叫ぶ求喰の聲、夜の明くるに至り、一在所皆恐れ悲しむ聲に、外より愁靈降伏の護府、或は加持の僧抔呼び給へといへども、山田母子嘗て聞入れず。我元罪あり。何ぞ神力を借りて遁るべきや。我死して母の命恙なき時は、我が願なり。早く命を取らるべきを待つ。何ぞ怨靈調伏の事をなさんといふ。母の曰く、我と汝と皆死したりとて、今亡靈の爲め、一つも益あるべからず。決して互に、修羅の業を増すなるべし。又思ふに此來る怨靈といふも、昨日も我子の朋友と思へば、恐しき事もなく、入來らるゝ喜ぞや。さらば餓鬼の飯多く供へ、香華を設け、夜毎に待迎ふるが如くすべし。思廻せば何の憎き事もなく、親しくいとほしき事ぞや。傳へ聞く唐土人も、

可憐墓定河邊骨、猶是春閨夢裡人と聞えたれば、怨鬼も恩ある友ならずや。さらば切ての功德に、百日の間、自らは手も叶はねば、口にて一日に、一萬遍の光明眞言を唱ふべし。右衞門は每日光明眞言を百遍づつ書寫して、普く原城の跡に埋め、一生彼の靈を弔ひ、幸に汝目明に仰付けられし事なれば、一揆の一類も末葉に至つては、多くは身に替へて宥免の沙汰し、亡魂の爲め益あるべしと、母の敎戒ありし程に、元來孝心の山田右衞門、此通りを相守りて、百日が間、光明眞言を書寫し、香華を供へて幽鬼を祭りしに、夜々來りし怨鬼眼鬼共、次第々々に遠ざかりて慈雲に潤ひ、佛光惠日の光に化して、愁霧の鬼忽ち開けしにや、終に山田母子、何の恙なくして、長命に世を終りぬと傳へ聞きしなり。天草島中百姓一人もなく、偏に荒地となる故に、北條安房守、早速詞を添へられ、伊豆守下知して、豐後府內の御目附石谷十藏を御郡代として、寺澤家老三宅藤右衞門在番なり。唐津領は別條なく、扨城の近邊破却の所は、百姓の步役にかけ、城邊に陣營を繕ひ、死骸共を遠く運び、堀を埋めさせ、段々申付けられ、其後寺澤・松倉の兩人は、供少々召連れ、江戶へ下るべしとなり。兩御

名代御目附中は、長崎へ參られずして、西國切支丹の事制禁、彼是法令ありて、北條安房守殿は、二月十六日原城に着陣、十二日が間に、一揆殘らず滅亡す。去年以來諸國の大名、手に餘りし逆徒の强敵を、一度の軍配に悉く治まりし、誠に三軍は得易く、一將は求め難しとは此事にや。世上の感賞大方ならず。事皆落着してければ、諸大將と共に東武に歸らるゝ。此度の寄手の軍將馬印の品、其あら方を記す。左の如し。

九つ巴切先　板倉內膳正重昌
猩々緋鍬形　細川越中守忠利
段々の馬連　細川肥後守光利
切先輪ぬけ上鳥毛　松平右衞門佐光之
金のしなひ　黑田甲斐守長重
ざいの上に黑熊　黑田市正高政
唐の頭上に鳥毛天目　鍋島信濃守勝茂
茗荷丸の上に鳥毛に唐頭　鍋島紀伊守

輪の切先の上に唐頭　鍋島甲斐守直澄
鳥毛のくるみ　有馬玄蕃頭豐氏
二階へい鷺毛　有馬兵部大輔
赤吹貫　立花飛驒守忠茂
白銀の二つ團子　小笠原右近大夫
白銀の髮籠　小笠原因幡守
赤き團子　小笠原信濃守長次
銀の板にいろは　牧野傳藏
銀の板に題目　林丹後守
竿に白熊　松平伊豆守信綱
鳥毛にひらき傘　水野日向守勝重
さしもの赤のうれん　毛利主膳正
同赤き四半白の子餅　木下右衞門佐

同白き牛牛赤字

中川佐渡守

南島變亂記第廿八畢

山田右衛門助命の事并北條安房守の事

南島變亂記第廿九

伊豆守殿法令の事

松平伊豆守信綱、原の城一揆悉く落去して、諸將殘らず島原高久の城へ集りしが、軍中専ら鍋島を稱し北條を譽め、自ら伊豆守殿を嘲るやうに見えたり。然る所に伊豆守諸將を皆呼集め、諸役人に對して申されけるは、某事、今度御名代として惣軍下知の事、私ならず。將軍家御同前たるべき事なり。抑今度百姓一揆の城攻に、御名代板倉内膳頭殿を始め諸家の舊臣、及び歷々の輩、數多討死有之段殘念千萬。將軍家御内意承り乍ら、此趣言上せん事は、伊豆守が恥辱。何を以て雪ぐべき。功臣の討死軍民の戰歿、近頃無益なり。故に城攻無用の制禁し、兵糧の盡くる時節を待つ所に、此頃量らずも城攻をいたさる。是假初乍ら、御軍法御法令を破らるゝ段、將軍家

御下知に違背同前なり。 右の段に候へば、御聞に達し申上ぐといひ乍ら、其罪輕かるべからず存候。 先誰人の手より、御法令を破り申され候や。 各御申分承るべしと苦り切つて、大音にて申されければ、細川・黑田・有馬・小笠原・立花等は、多く鍋島甲斐守乘上げられ、此手より城攻初まる故に、定めて御下知と存じ候故、面々おくれし事に非ず、急々に攻懸け、別に仔細は御座なく候となり。 其中に少々は、御目代榊原飛驒守殿眞先に見え申すにより、御目代討たせてはいかゞと存じ、其上御目代さへ此儀に候へば、定めて御評定の上と存じ、御觸御座なく候を恨みたり。 一足も早く押上り申すにて候なり。 松平伊豆守先づ榊原飛驒守を召出され、其許は上意を蒙り乍ら、拔駈いかゞの御心入にて、大切の御軍令を破り、御目附の上意を蒙り乍ら、拔駈いたさるゝ事いかゞとなり。 榊原飛驒守申さるゝは、御返答迷惑仕候。 某何の分別も御座なく、一子にて候ひし同苗左衞門佐、十九歳に相成申候が、今度初陣に召連れ候所、何と心得申候や、廿六日朝、不計陣中を出で、敵城へ乘入り候に付、親子の愛に前後を忘れ、我知らず後に續き、只召連れて歸り候はんと存候中、諸手皆押上り申候。

全く私儀拔駈にては御座なく、恥かしき事にて候へども、一子の儀にて候へば、子故の闇に昏み候て、引連れ歸り申さんとのみ存じて、御軍令相背き申せしなり。迷惑仕候どなり。伊豆守聞きて申さるゝは、夫は內證の儀に存候。近頃表立ち申す御申分にはなるまじく候。拙者斯樣に申渡す上は、御上意候迄、遠慮尤にこそ。子息左衞門佐殿儀は、其元へ預け申候間、左樣御心得御用意にて、歸國御差圖をなさるべき事なり。扨鍋島殿御出で候へとなり。伊豆守殿、只今申渡されたる通申されけるに、父信濃守、大きに氣の毒の事なり。いかゞ甲斐守の返答申さるゝと、手に汗を握り居らるゝ所に、此返答思の外に、甲斐守申さるゝは、只今御申の趣御尤に存候。貴殿儀御名代の事に候へば、將軍家御意同前の儀、左樣あるべき事なり。兼てより存じ罷在候。さるに依つて將軍家御上意背き申す儀、毛頭是なく候。其故は將軍家は、御一人にて御渡り遊ばされ候。御名代の儀は板倉內膳頭・其元・戶田左門、當時太田氏、此一事に付けても、彼是人多く御座候。就中最初の名代板倉內膳頭、諸將の城攻の遲々を怒り、正月元日堅城へ乘懸けて、御討死に御座候。此儀存候へば、落つべ

き所を見付候はゞ、一時にても早く落去いたすやうに相心得候も、又將軍御上意と覺悟仕候。我等儀若輩に御座候へば、御名代は多く、皆々思召入れ違ひ居申候へば、何れを誠の將軍の御上意といひ、相計らひ得申さず候。將軍は御一人にして、斯樣に幾重も御了簡のあるべき事とも存ぜず候。左樣の儀は貴公の御下知、是又貴公ぎりの思召にて、目の當り將軍家の御意にても、降參せよなどの御上意候へば、決して死んでも從ひ申さず候。武門の了簡に存じ極め居申候へば、武家の法に叶はぬ臆病の下知などには、誰と〳〵上意にても、隨ひ申すまじく候。左候はゞ此度の拔駈一番乘、縱令御軍令に背く事にもせよ、一言も御詫言申上る了簡にては御座なく候。若輩の推參なる申事に候へ共、私儀承り傳へ候は、食攻と申す儀は、戰國の時にて、此城を攻落せば、早隣國より攻入り、兵を勞しては、後日の軍面倒なりと思ふ時、武門の恥辱を捨てゝ、當然の理を取り、食詰にして落城さする事も是ありと承り候。今天下清平の御代、外に一人も敵これなく候に、百姓連の一揆原、永々の對陣、今日落城いたすのさへ、我々に於ては、天下の人に顏出しもならざるやうに恥入り存候。

夫に此上長々の對陣して、土民風情、將軍へ敵し、諸役人を殺害し、御禁制の切支丹を取立て、重々積りたる大惡の徒を、歷々の御預人同前に、疊の上の死に付け申さん事、御政道は何を以て御立ち候や。西國の大名殘らず武道を捨てさせられて、天下の御爲に相成申すべきや、御威勢に相成申すべきや。武門の儀は、御不案內と承り候。治世の御政道は、名人伊豆守殿と、人々の御成敗に仰付けられ候が、是も牢の內に打捨て置かれ候へば、獨り死に申すべき事に候、引出して七條川原・日本橋等、大勢の群集の妨なるに、大勢の劒鎗を立てたり行列をさせ、果は釜煮の火炙のと、大きなる物入、諸役人の骨折、何にもならざる事に候はずや。是はいかゞ心得たる者に候。若輩の自分事に候へば、御敎承り度候と、少しも憚る所なく申されけるに、松平伊豆守殿よりは、先づ一座の衆中顏色靑々となりて、人々手に汗を握る計りなり。伊豆守殿暫くありて、若年の甲斐守殿詞多く候間、御控なさるべく候なり。先づ御名代板倉殿の儀は、龜忽に思召の上にて、拙者に仰付けられ候、左候へば板倉殿儀は、其後何とと仰付けらるべきや。是は其元にも手前にも、與かる事に非ず候。但當時の御

名代承り、此方より申觸候にて、出陣無用と申す所を、遮つて拔駈に付、諸軍用意之なく、無理の戰多く候。幸落城すとは雖も、味方多く人損じも有之候と、當時拙者より相觸れ申す趣を違背の儀は、相違之なく候へば、拙者江戸表へ御訴へ申上候迄は、信濃守殿へ、甲斐守殿は御預け申候。尤信濃守殿御遠慮たるべく候。其御心得候やうにと申付けられ、甚だ不首尾に其日は過ぎにけり。其後松平伊豆守東武に歸り候て、右の趣申上げらるゝ。當時は事多しといひ、只今發向の伊豆守なれば、先づ其分に事相濟し居ける時に、肥前佐賀の城には、鍋島信濃守大きに立腹して、近頃伊豆守心底こそ心得ね。又天下の御下知とも覺えざるものかな。子仵らも今度甲斐守が働、諸將に勝れ粉骨を盡し、始終出丸・詰の城とも、三度の一番乘も、軍功の賞はなくとも、遠慮御預け等迄は思ふまじきに、近頃聞えぬ殿中の御沙汰やと怒られしも、尤至極せり。誰がいふとなく、此事專ら西國に風聞して雜説あり。水戸黄門公是を御聞きあつて、以の外大事なりと、またまた肥前表へ、御軍令賞罰御詮議あり。御評定衆殘らず相揃ひし上にて、北條安房守を召されて、去二月廿六日、鍋島甲斐守先駈し

て、出丸を乘破る時、既に落城にも及ぶべきに、大軍に對し持堪へ、手痛き軍したる事はいかにと御尋。松平伊豆守申さるゝは、凡軍法能く調ひたる時は、何程の强敵にても、忽ち打破り候。御軍法調はざる時は、必ず破る事能はず、古今變らず。味方には兼て城乘の覺悟もなく、法令を破り、理不盡に攻懸り候故、萬事がさつになり、此故に城强く堪へて候。是に依つて討死も多く候と申上る。光圀公又、右の儀さにやと北條に尋ねらるゝ。安房守申さるゝは、勿論伊豆守申さるゝ所、一理あつて候へ共、又外に仔細有之候。此城廿八日迄强かりしは、小笠原の一家、人質廓を乘破りたる故にも候が、此事は、敵の謀を設けて待ちたると見え候。女童老人共、寄手の手を借りて悉く燒殺し、恨を寄手にも負はせて候程に、一揆共只惡鬼の如く罷成、一人も降參する者なく、城中又々堅まり、勇猛の敵となり候を、味方の諸將粉骨を盡されたればこそ、廿八日には落去して候。人質廓と定まる事は、心を付けば、攻懸る體にも、投出す所の石材木にも知るべし。然らば早々火を鎭め老少を勞り、空しく悳の體を敵に知らせば、城中の心離散して、必ず廿六日の落城たるべく候。然れ共一揆

の城中も、頗る弓矢の才覺、中々尋常ならず防ぎ候へば、御手間取は理にこそと存候へ。小笠原の城攻の事は、實檢の首といひ、旁今一度御吟味あるべきやとありしか共、伊豆守にも不念あり、又小笠原の家筋は、格別の沙汰なり。彼是以て何事もなかりけり。水戸黄門光圀公、伊豆守へ仰せらるゝは、今度貴殿の申條にて、鍋島信濃守父子門を閉ぢらるゝ事、以の外不了簡なり。原の城は、甲斐守が働に依る。當世無雙の勇將と覺えたり。いかなる儀にて、閉門をば申付けられたるやとの御尋なり。伊豆守申さるゝは、法は天下の法なり。御軍法相定まり申さぬ時は、重ねて御下知軍令調ひ難し。之に依て斯の如く御沙汰に及び候なり。尤將軍家へも伺ひ奉るなり。光圀公御意に、近頃心得ざる事に候。都て功の疑はしきは是重く、罪の疑はしきは是輕くすといふ。是は戰國の詞にして、治世は賞罰只當分なるべし。罰少し重き方もよからんなれども、今度鍋島家の功は山の如し。罪は僅に法令のみなり。一旦にして止むべき事なり。法令を破らざる親兄の類迄、門を閉ぢさする事、罰大に過ぎて、譬ふるに物なし。必貴殿の身の爲め宜しからず。早く將軍家へ願返し然る

べしと。其謂れは、今度の一揆、僅に島郡十萬石の所にて、島原懸けても十萬石に足らぬ所なり。其下の百姓共に、武士浪人等纔に五七人立交り、其外に百姓の悴を大將として、原の野城に立籠る。是にさへ當代の國風大きに騷動して、西國諸軍皆向ふに、猶落去せず。御名代板倉内膳正討死、其後貴殿と戶田左門發向致され、十八萬五千人餘の大勢卷詰めて、二年越にも落城せず。既に中國の勢を發し、紀伊大納言殿御出馬の沙汰迄あり。不思議に此度諸將の働に依つて落城に及ぶ。然るにいはれざる軍令の事を重く申立て、西國大名の望に背く時は、甚だ危き事ならずや。仄に聞く鍋島信濃守大きに立腹して、重ねての御沙汰を待つと聞く。若鍋島述懷止まずして、東國に事を計りなば、凡そ卅五萬石の家中一類、小城持等の諸城集りても、五十萬石あるべし。久しき家なれば、百姓は皆一味すべし。元祖龍造寺隆信以來、武勇の家なり。五百や千は究竟の勇士あるべし。軍役四五十萬人、百姓雜兵計るに卅萬人には餘るべし。此勢に、彼甲斐守先陣として、信濃守采配を取らば、天草の百姓にさへ、西國・中國の諸將にて足らずして、東國までも騷がすぞや。此變あらば御

名代衆の手際は、大方知れたり。必ず天下の軍卒を皆寄集め、將軍家自身御出馬なくては、落去なり難かるべし。然れども是も亦危き事なり。當代の御捌にては、其色目見ゆると、早彼漢の量錯が例に任せ、其元の首切つて、御詫言より外あるべからず。貴殿にも、身分の權威を重くすれば、將軍家の御爲とのみ心得たりとも、天下に一定の法ありて、權威も又々限あり。能く心得らるべしと仰せければ、さすがの伊豆守も大きに信伏し迷惑致され、早速願返され泰平に濟みぬ。されば深く我身の才、武門に叶はざる事を知つて、是より北條安房守を師として、習ひ勵まれけるに、元來天然と其器量生れ付かれけん、萬事卽時に功なつて、重ねて天下の隱賊由井正雪・丸橋忠彌が時には、此時を去つて十二年、慶安四年なれば、遠からぬ程なるに、此伊豆守天下の柱石となつて、一度見て丸橋が大惡を知り、風を聞きて正雪大きに恐れ、忽ち天下安し。其外河合又五郎池田家の一亂、伊豆守一人の取計らひ、中山の變・戸澤が隱謀、此人皆事に與かり、忽ち鎭めて、天下を泰山の安きに置く。海内の諸侯をして、小兒を扱ふ如し。伊豆守元來は微少の人なり。御代官にして、大河内金右

衛門といふ。（伊豆守幼少にして、大給の松平へ親しく引き居る。終に養子となる。秀忠公愛し給ふ。初めて御小性組へ出る。終に御意にて松平といふ。）御書院番へ立身の砌、御殿より急に飯の穂御用ありしに、夜中といひ、遠々まで仰渡さるゝ間もなかりしに、伊豆守疊を引起し、引裂きて飯を取り獻ぜらる。一年兩國橋御圖の時、反りぬる時は、長橋故朽堪へず、反を高くする時は、諸大名の往來なれば、氷れる時馬の歩み心元なしと、色々評定あるに、其形急に譬へ難し。時に伊豆守扇子を開き、是を立てゝ反の程を窺ふに、今少し高しとありければ、則扇子の兩方を一間づつ窄めて窺ふ。忽ち此事相濟み、此等の發明に、段々御前首尾よく、終に御老中の古老として、天下政事一身にあり。百萬石の諸侯も、膝を屈めて是を敬ひ、將軍の支族も、詞を下げて重んぜらる。然るに獨り加州の家中に、本多大夢のみ、いかなる殿中の儀式にても、大河内殿成人にて候といふ。是又本多の名家なればなるべし。伊豆守老年の時に至つては、天下此人を目當にして、唐朝の郭子儀が思をなす。一魚飛龍と化して、勢當るべからず。信綱死年六十八歲、（後には信州といふ、）寛文二年壬寅三月十七日なり。子孫連綿として、世々錄七萬二千石、居城上州高崎なり。代々の當主天下の老中とし

て、皆々才高く。近頃京都所司代となる事は、慶安に出す。

南島變亂記第廿九畢

南島變亂記第三十

諸家說の事并東都月旦の事

斯くて松平伊豆守、早速執奏申されける。加賀中納言殿・水戶光圀公御詞を揃へられ候により、先鍋島家差控へ御免の上、憤を宥められんが爲にや、忽ち肥前佐賀へ上使下向ありて、今度遠慮仰付けられし事、天下の法令を立てらるゝ爲の計らひなり。甲斐守原の城始終勇を振ひ、一番乘の働神妙に思召し候。速に落城せし事は、全く甲斐守一人の手柄なり。有難き上意時服御鷹等を拜領ありて、甲斐守殿へ御感狀、急ぎ參府仕候へとの上意なり。信濃守父子大きに喜び、追付參勤千萬首尾よく、此節の儀吉例となり、鍋島家には御鷹拜領の事ありとかや。甲斐守直澄は、別に新地五萬三千石、同國蓮池にて下し置かれ、本家の後見として、本家に世繼絕ゆる時は、

家督に代り相續して、武名天下に雙ぶ人なし。本家は西海威勢森然として、誠に異國變戎の押へ、磐石の堅めなり。甲斐守殿の勇功、全く乳母一念隨身に依つて斯の如しとて、瀧尾大明神の末社に祀ひ込めらるゝと聞えし。此一件、遠慮閉門の間、金澤中將光高公より、段々厚意の事多し。是に依つて鍋島より、以來天下に事あらば、西國にて一番に同心たるべきの誓言ありといふ。俗說に、此後鍋島甲斐守、加州光高公へ、鯰の帽子を進上ありし。魚の皮を製したる者と見えて、何といふ事を知らず。蠻國より渡りし物と聞ゆ。是を冠るに、尾は脊中より帶迄下り、一の鰭、人の兩眼を掩うて、甚だ勇壯の形なり。其色は黑し。故に一年東武大火の節、增上寺も火燒に及ぶの時、加賀守光高公、御預りの御魂屋へ御出ありしに、其日此鯰の帽子を召されたるに、火の中を馬にて過ぎ給ふに、火氣近付かず。面に涼しく、煙に咽ぶといふ事なし。寺門の燒上る下を過ぎ給ふ事ありしに、左右の鯰の鰭振ひ立ち、水氣面に懸る。帽子今日加州の府庫にありといふ。且亦同時に榊原飛驒守父子、是又鍋島の仰渡されの通りにて御免あり。子息左衞門佐儀、今若年、御奉公にも出でざる中、

勇武の心懸、感じ思召の由にて、新地として七千石を下し置かる。父子の喜び、君が代千秋と祝ふと聞えし。爰に北條安房守、今度の軍功大きに秀でたれば、今度二萬石御加增あるべき御內證にて、三萬石の領主一城預けらるべきの御內評、水戶公にも、兼て北條御贔屓の御事、智謀御信仰の上は、今度の御吹擧といひ、旁首尾御滿足あらんと、則黃門公へ此趣を御內談ありし所、光圀公御聞き、以ての外制し給ひ、夫れ天下の事、信ずるも道あり、報ずるも道あり。東照宮既に御詞を殘し、北條は大身にすべからず。鉢程なる城持たせなば、恐ろしき者なりと仰ありし。是亦名言ならん。只々少し計り御加增ありて、格式を重く敬ひ、御懇なる上意のみにして、二千石計り御加增然るべしとて、是に極まり給ひける。されば代々北條安房守といひて、皆是才明の名あり。此等の事、慶安の書に委し。且先御名代板倉內膳正世繼の子息には、德丸成人して重矩といふ。段々出頭して、又七千石御加增ありければ、感狀記に曰、板倉重矩は重昌の嫡子なり。瘂面瞎目短少なれ共才智ありて、大坂加番より、擧げられて家綱の執事となり、加祿二萬石、本地合せて四萬石。人を使ふに、古の楠正

成に似たり。段々引上げて、鎌十人を抱へて、是より後に逼迫の時、能き士十人に暇を出す。皆耶蘇の賊の砌、成功の者なり。人怪しむ。重矩曰く、彼は早速德あり。俄に仕へては立身遠し。只出して無用の者、我れ捨つるに忍びずといひ、士を使ふ事斯くの如し。されば世々祿を傳へて四萬六千石、備中庭瀨居城、今奥州福島城主なり。扨松倉豐後守重次は、今度御改易なり。其趣、長門守勝家と申すは、武勇の人にして、則太閤秀吉公の御代、二萬石を領し、關ヶ原の時は御當家へ忠を盡し、一萬石の加增にて、伊賀名張の領主となり、其後又御加增にて、島原の領主四萬八千石になつて入部の後、高久の城を築く故、此に居館して、榮を子孫に殘し、段々武邊實體の家にて、六萬石となる。然るに當主豐後守、利欲深く奢に長じ、領分の民をせぶり取りて、仕置正しからず。百姓の恨積りて一揆を起す。依つて今度の落去に御吟味の上、作州へ謫せられ、森美作守(内記といふ)に御預け、嫡子右近は、始め豐後守不行跡段々長じて、原の城攻にも、自分の一大事に及ぶに、諸人に抽んでたる働なく、武を穢す事多き故、召返されて切腹仰付けられしなり。子息右近事は御免にて、保科肥後守

に仰付けられしに、無念に存候か、切腹して死したり。是も彼の一揆の靈故か、亂氣せしともいふ。實にも一揆の恨にや、一族殘らず亡び果てたり。寺澤兵庫頭も、今度滅亡なり。古寺澤志摩守は、天草唐津の城主にて、十二萬三千石なり。每日寅の刻に起きて、卯に必ず政事を聞く。夜食を好まず。天草は變所なり、我も又麥飯を喰ひ木綿服を着て、士と共に武を力めて、公儀の法を謹み守る、律義なる家なり。此家に池田市郎兵衞とて名士あり。首供養二度仕りたる者なり。池田浪人の內、寺澤志摩守客分として、四百石の儘役なしに與へらる。黑田・細川等の家より、三千石に招かるゝ。池田行かず。志摩守仄に聞き、三千石與ふべしといふに、池田市郎兵衞曰く、御家の一老三宅・平野は千石なり。我武功、彼が下に非ず、一萬石下されても、十分には非ず。然れども今此小扶持を甘んじ申すは義なり。君の士を愛し給ふ所を重んじて、祿を重んぜず。只此儘に打捨て置かるべしといふ。池田或時退口の合戰に、人を助けて通る事あり。黑田長政大きに感じ、寺澤志摩守も大勇力士なりと譽むる。市郎兵衞曰く、我も聲かけられし時、甚だ難儀に思ひ、打捨てゝ歸らんと思

ひしか共、今我も早後なりと思へ共、又我より後に人ありて、助け歸りし時は、我等が男は立ち申さずと思ひて、止む事を得ず助け歸るといふ。其物を隱さゞる事、諸人名士と稱す。平生眠るに鎧を離さず、鎗を枕の上に、糸を付けて下る。急なる時起上るに、糸切れて觸る事なし。平生武の心懸此の如し。古志摩守殿の代に朝鮮へ渡り、武名を轟せる家なれども、當主兵庫頭堅高の世に、武備衰へ奢のみ多く、池田・平野如き人もなく、終に百姓一揆起りて、三宅藤兵衞と家中相嫉み、一揆の起るより家を亡すに至る。此三宅藤兵衞は、明智光秀が甥にて、廣高慕うて家老とす。然るに藤兵衞權威に誇り、終に我身も亡し、寺澤家も斷絕す。亂終つて後に、三宅藤右衞門忠を度々なす事上聞に達し、松倉と同じとはいひ乍ら、親薩摩守が律義と、三宅藤右衞門が働に免じられ、天草領のみ召上げられ、唐津領七萬三千石、相違なく下し置かれ、目出度歸城ありけるが、其後或日兵庫頭、庭の面を眺められしに、忽ち庭木築山むく〳〵と高くなり、次第に城迄も顯れ、彼の原城となる。此時何ぞ來ると覺えて、兵庫頭悶絕し給ふ。三宅・原田が輩、聲かけて鎗を打ちぬれば、山も消え、兵庫頭

も平生の如くなりしに、後は晝夜共に變ありしが、是より亂氣して、終に自害せられけるが故に、其跡斷絶なり。家中も散々になりしが、三宅藤右衞門事は、方々より招く人も多かりしが、一族なれば、細川越中守殿に仕へ、三千石を賜はり、今に榮ゆ。此人名前違にて、討死と聞きし人多きにや。或時江戸細川殿屋敷、堀崩れたる事あり。此人普請奉行して居られしに、往來の諸武士是を見て、三宅は島原にて討死と聞きしが、存命なりとて、怪しみ通る人多かりしと、落穗集に見ゆ。鍋島殿事濟みて、御老中諸大名旗本衆へ、禮謝に參られけるに、江戸中の男女是を見て、今度一揆を退治せられし一番乘の卒忽人歸らるゝと、珍しからぬ鍋島に、見物山の如しといふ。又曰く、十五年五月十二日、伊豆守・左門江府歸參には、登城しけると雖も、今日は日柄宜しからず。明日御前へ召出さるべき旨、同十三日黑書院に於て御禮過ぎて、御勝手より御太刀猩々緋五卷是を進上。次に松平甲斐守・戸田淡路守・三郎四郎、一同に御禮申上る。同日高力攝津守、島原へ御加恩にて仰付けられ、十四日山崎甲斐守、天草へ御加增にて、國替仰付けらる。同十六日夜、九州より太田備中守歸參、其日御

目見えなり。又其頃の記に曰く、大久保彦左衞門は、安部四郎五郎の騷動後は、氣輕く方々歩行しけるが、松平伊豆守へは、心安く出入せられぬ。伊豆守島原出陣の折柄、大久保は古戰に馴れたる者なれば、尋ねて意見を聞かばやと、彦左衞門に、軍事もあらば敎へらるべしとあり。彦左衞門曰く、何事もあるべからず。例の算盤にて彈き立て〳〵、軍勢を割付け〳〵、御合戰候へといふ。伊豆守曰、左樣におどけ口あるべからず。是は天下の事なり。何にても心得になる事、承り度こそ候へとある。彦左衞門曰く、軍は時に依つて轉化するものなり。爰より極めて行くべきものにあらず。行當りて機に從ひ給ふべし。されども一つ申したき事あり。其故は、敵は鎌鍬の一揆共なりと、必ず思ふべからず。只此が天下分目の軍なりと思ひ給ふが、凡て軍の肝要に候といふ。伊豆守大きに喜び、誠の古老の詞にて候。能き賜物にて候とて、打立たれしとなり。又或時に曰く、池田家の家中に、遠山才兵衞といふ者あり。松平宮內少輔忠雄、歩士の健なる者八人を選まるゝ一人なり。遠山は江戶の長屋の中に取籠り、惡徒を兩度迄搦捕る故、振能かりし程に取上げ、祿百五十石を賜はり、

其後忠雄公逝去ありて、嗣子松平相模守光仲新太郎殿ことなりに至り、因幡・伯耆に國替あり、耶蘇一揆起る時、湊五郎左衞門・遠山才兵衞兩使として、有馬城へ下り居る。此時に陣中に於て、板倉内膳正、是より向の柵迄、何十間あらんと尋ねらる。遠山聞いて、つと立ちて、何の慮もなく走り出で、靜に歩を數へて、何十間と申上る。板倉内膳正、黃羅沙の陣羽織を給ふ。歸りて後、湊五郎左衞門に二百石、遠山へ五十石加增なり。遠山曰、武士戰場にて、利慾申すべきに非ずと雖も、是はもだし難しとて出奔す。江戶上野邊に浪人す。此後盜人を討つて手柄あり。後に保科肥後守聞及んで、毘沙門堂門跡を賴みて、松平相模守殿へ斷り、五百石に、足輕廿人を預けて抱へける。其後又相模守、二度目の上使伊豆守・左門の時、佐分利九之丞・石丸七兵衞を兩使として下さる。佐分利は二月廿八日、地雷火の爲に死す。石丸七兵衞一番乘兵士の中なり。能き首一つ取つて、振能かりし程に、本知四百石の上に、三百石加增を下さる。石丸辭して受けず。臣さすが功なし。今度榊原飛驒守殿の手にあるに依りて、一番乘の內なれども、城中より轉ばす石に當り伏し、又起直つて乘入る時は、早後より人も

續きて、臣が功にも非ず。討取る首も土百姓なり。其上誰ぞ鎗付けたる跡見え候。是程の事は、男やうに候へば、宍勝高名とも申立て難しと、堅く辭して受けず。池田殿も、加祿猶輕きかとて、彼遠山才兵衞に懲りて、懇に尋ねられけれども、更に納む理なし。是に依つて、重ねて永々在陣の勞なりとて、餘事に寄せて加恩あり。終に受くるといふ。遠山とは志大きに變れり。將の士を働かし、兵を使ふ心得あるべき事なり。されば諸國大方兩使立ちたり。一説には、松平新太郎殿の兩使、一人は戰に臨み、一人は戰に出でず。此事家中色々と沙汰あり。戰はざる者いふは、御使を報じ奉りて、歸つて命を述ぶる。是今日當職なり。戰ふ事には非ずといふ。此事を、臣、新太郎殿に尋ぬる所、新太郎殿、何の返答もなく、米を磨ぎて飯にするは、水を何といふぞと計り答へられし。是白水といふ事なりとて、家中の評判となり、戰ふ事に非ずといひし者は、竊に滅亡するといふ。されば加賀利常公より使命ありし一人は、山崎小右衞門、（小右衞門大やく手あらの人、大男にて肩厚一尺二寸、二間の鎗を片手にて振ひ、みやうなかきかへ小右衞門といふ、）一人は武部久左衞門、目附として堀江加左衞門なりし。何れも手に合ひて、首一つづつ取りし。皆打捨て

歸る。内一人、松平伊豆守の本陣に訴へ、首帳に付けて歸る。歸國の後、加增等夫々品あり。此時使者の節、諸國に事多き故略之。島原の松倉長門守、身上果てヽ浪人多し。凡そ立退く人百七十餘人、能き士多し。大方は倍知行にて、方々へ有付く。内に油川孫左衞門・瀨戸七郎左衞門・隱部小兵衞三人は、二重を願ひ、島原に浪人して終るといふ。其中に飯村助兵衞といふ士、浪人して廣島へ來る。皆々島原の城攻の事尋ぬるに、飯村一々いふ。天野半之助在合ひしが、一言問うて曰、島原の原城を攻むる事數月の中、一揆の方より、松倉の手へ夜討は出さゞるにや。二月六日は、夜軍の類なり。一手切の夜討なき事は不思議なり。若し松倉の陣、城中へ遠くありしかと尋ねければ、飯村聞いて、中々松倉の陣、敵の城門へ向うて、近々と備へたれども、夜中は、雲火を設け外聞を出して、中々夜討など討たする事にてはなしといふ。半之助嘲笑ひ、松倉家、末になりたるよな。潰れたるもさる事なり。古兵あらばさやうはあるまじ。夜討も討たすやうにしてこそ、大利はあるべきなれ。左樣の仕方は、松倉の家、皆々臆病より生ずる故なり。主愚にして、家士に其許の如き者計りな

れば、亡びずといふ事あるべからずと、手を叩いて大言せしに、飯村助兵衞赤面し、返答なく座を立つ。故に淺野家奉公望を止めて、廣島へ來らざりしと。此天野半之助が始の名中根左源太夫、大坂軍道明寺にて、鎗を合せて高名あり。淺野但馬守長昌へ、二千石にて出づる。安藝守殿代迄奉公なり。是時は戰國の勇士なり。岡野左内は、上杉景勝の內にて、奇代の勇猛の士、百五十萬石の家中にて二と下らず。梁川陣に、伊達政宗と鎗を合せ、天下に名高し。上杉小身になりて後、左內、子へ讓りの外、金子多く主人へ奉り病死す。子息左衞門尉一萬石にて、猪苗代に差置かれ、其孫源太郎に至り、切支丹宗門に依つて浪人なり。世上へは、轉び候樣に咄しけれども、終に變ぜず。左內は、一身の重寶は、角榮螺の甲なり。是は伴天連しゆはかんといふ者、送る音信なり。奇妙の物とて、今は紀伊大納言殿へ上りて、御寶物となる。左內、常に黃金を多く貯へて、樂しみしといふは、則此吉利支丹宗門故なり。是死する時、日頃傍輩へ、取交したる證文を燒捨てゝ、又四萬金兩を公儀へ上る。此等の事、予が書記す慶長濃闇錄に見えたり。切支丹宗の黃金、幾千か溜めて歸つて、日本の

要用となす。其外器財の珍具數へ難し。されば惡むべき計りの者にあらじ。細川幽齋・同三齋などは、日本にての高士、文武の君子なり。然るに耶蘇宗門を尊む。伴天連に參ずる事多し。其後は、男伊達のやうにもなりしが、寛永十八年の頃、加州金澤に、又此宗旨とて、江戶御吟味ありし。其人々は、津田勘兵衛・猪子九郎右衛門・横田彌五兵衛、幷金瘡の醫師不亂坊・宮腰達摩寺不互坊、其外足輕二人なり。是等こんたつを持ちし故おゆる。江戶湯島の町にして、慶安四年五月二十日津田翁死す。是等の事は、慶安の變に詳し。記したれば之に略す。加州の諸士松尾・靑地、ほのぎき書の實記に、可觀小說といふ物あり。此中に曰、慶安以來迄、江戶諸場奉行などに、名達の人多し。其中に加はりたるは、井上新左衛門といふ御祐筆にて、名譽なる口利ありし。終に勘定頭となり、或時何方よりか、初鱈の獻上を取次ぎける時、松平伊豆守殿見屆けられ、此初鱈に塵付き候とて、役人を大音にて叱り申され候。事久しく濟まず。井上新左衛門見兼ねて申されけるは、いや左程に御叱りも無用に候。鱈は塵のつくものにて候と申す。伊豆守殿、何と鱈は許し申す事候や。それは何の中、

誰が申候と申され候へば、新左衞門曰く、或三番の謠に承り候。ちりやたらと謠ひ申候と申され候へば、伊豆守も笑ひて、新左衞門が又おどけ申されたりとて濟みぬ。伊豆守殿は、性にしつこなる所候故、諷諫の心にも聞えし。其後の事にてありし、勘定方に不念ありて、伊豆守殿、新左衞門を呼出し、散々に叱らる。後に新左衞門申さるゝは、いや物に餘り念を入れ過ぎ候へば、却て身の非事になり申候間、我等如きの分は、大方にして置き申事に御座候。夫故不念に及び候となり。伊豆守不審打つて、是は替りたる事に候。念入れて惡しと申す儀、如何なる譯にて候ぞ。夫を御申候へと責めらる。新左衞門曰く、昔楊貴妃の謠の講釋承り候。則貴君の御宅にて御座候。其砌、方士蓬萊宮迄搜し候事は、大きなる手柄に候。玉の簪を印(しるし)に取りて歸り候へば、夫れにて能く候所、方士念を入過ぎて、此簪は、彼の中に類あるべければ、人の知らず、私語を望みし故に、止む事を得ず、貴妃も七夕の夜の誓をいひければ、歸りて玄宗へ申上る。初は御機嫌なりしが、遂に玄宗能く思廻らし、方士前廉楊貴妃と密通せしなるべしとて、彼方士は殺されけると承る。念入過ぎて、身の非常になりた

るにて候と申しければ、伊豆守殿、大きに笑ひ立たれしが、其後程久しくして、天草の亂起りて、伊豆守殿を遣され、天草落去して歸國に及び、頓て登城なり。右新右衞門を初め大勢、御城にて迎に出づる。御無難御歸り目出度候所に、伊豆守申されけるは、新左に話し申度事あり候。只今御前へ出で申す間、退出の時分話し申すべし。夫迄是に待ち申されよとて、御前へ出で、稍ありて退出なり。扨新左衞門待居られし所、着座致され、御近習の衆、皆々是へ御出候へとて、大勢の中にて申されけるは、新左此以前楊貴妃の謠を引出物に、念を入過ぎたるを惡きと申す事を御申候ひしが、覺え居らるゝやとあり。新左衞門、いかさま左樣の事も候ひしにやと申上る。伊豆守申さるゝは、其詞、今度ひしと思當りて候。先づ天草へ行き、惣軍へ申談じ候が、我等陣所を本陣と定め、人數を寄せ候が、又急なる事有之候時分には、本陣にて釣鐘を撞き申すべき間、夫を相圖に早々出申され候やうにと申談じぬ。扨大きなる釣鐘を取寄せ、陣屋に釣り申候。其後に存候は、いかさまの溢者ありて、撞き申すまじきものにもあらず。又敵方より忍びの者を入れて、撞き申すべきも計り難し。さあれば

大きなる騷動なりと思ひ、兎角撞木を、我枕元へ取寄せ置けばよしと、引取り置きしが、又思ふは、必ず撞木計にあらじ。鐵炮の臺などにて撞き申す儀も之あるべしと、中々安心なり難く、心濟み申さぬ故、其後鐘の上を菰にて厚く包ませ置申候て、何ぞ申す節は、菰を切解き申すに、手間も入るまじく思ひ侍りしが、又存候は、溢者、菰を切つて撞くまじきにも非ず。兎角鐘を地に下し置き、釣鐘に繩を附け置き、急なる時は、卽時に釣上げ申すべき樣に仕るべくと存じ、斯くの如くして、少し安氣致候。然る時頓て城中より夜討を駈け申候故、此時ぞ鐘撞けと申候へば、俄に先づ繩を切るに、急に解けず。引上げの繩間違ひ、物に懸る内に、合戰は疾く始り、鐘は間に合ひ申さず候ひし。爰にて思合せ候は、念入過ぎて、却て害に相成申す事、能く合點致し、扨も新左衞門が、斯くいはれしものをと、幾度も存じ出し申すと申され候ひし。伊豆守信綱、原の城にて仕損じを隱し申されず、井上新左衞門が善言を被ひ申されざるを、皆々感心仕候。天草の馬印より、其咄はさすが伊豆守殿器量快豁の所、人及ぶべき。治世の能者と申す程の人にて御座候と、加州儒臣室新助直淸より書來り記

せり。是にて其實を知らるゝなり。されば此書も、悉く虚にはあるべからず。此外東武の評判、山の如く多しと雖も、多くは慶安の事蹟に交りて、外書にもあり。此書談は、諸家聞書・鍋島家の物語・細川の庵中抄、或は落穗集・談海拔粹・天草通說、及び加州の聞書などを寄せて記す。全く田丸常山が口眞似に似たれども、其意皆違ふ。多く書を寄すれば、皆是我佛尊しにて、事々矛盾せる事最も多し。故に其聞きて面白なるに付けと、事實は論せず。是只秋雨一夜の長きを、一碗の茶の友とする無盡藏、外に用なし。時に天明二年千秋の佳節に、湯醪の醉に任せて、樗下の眠を覺させんと、北嶺の流れに注げりといふ。

南島變亂記第三十大尾

大正三年十月十二日印刷
大正三年十月十五日發行

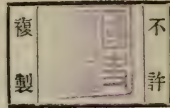
國史叢書 古今武家盛衰記二 南島變亂記全

定價金一圓

不許複製

編者 黑川眞道

發行者 國史研究會
右代表者 小瀧淳
東京市本鄕區駒込林町二二四番地

印刷者 楢山定吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地

印刷所 友文社
東京市神田區三崎町三丁目一番地

發行所 國史研究會
東京市本鄕區駒込林町二百廿四番地
振替貯金口座東京二七〇二四番